

# ルツケンスの三男坊

康頼

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしも天剣授受者であるサヴァリスに、もう一人弟がいたら……

\*第一話から加筆修正を行っていきますのでご注意ください。

# 目次

第十二話	181
第十一話	162
第十話	145
第九話	133
第八話	121
第七話	103
第六話	88
第五話	74
第四話	54
第三話	37
第二話	21
第一話	1

第十三話	196
第十四話	209
第十五話	236
第十六話	246
第十七話	262
第十八話	279
第十九話	297
第二十話	314
第二十一話	332
第二十二話	354
第二十三話	372
第二十四話	388
第二十五話	402

第三十八話  
第三十七話  
第三十六話  
第三十五話  
第三十四話  
第三十三話  
第三十二話  
第三十一話  
第三十話  
第二十九話  
第二十八話  
第二十七話  
第二十六話

605 591 572 559 546 528 515 500 484 469 447 431 414

第四十四話  
第四十三話  
第四十二話  
第四十一話  
第四十話  
第三十九話

688 675 661 646 634 619

# 第一話

槍殻都市・グレンダン。

数多にある移動都市の中でも、武芸者達なら一度は耳にするだろう武芸都市である。

武芸の本場とも呼ばれるほど、グレンダンでは武芸が盛んであり、大小合わせれば年間五十回以上の武芸大会が行われ、それに比例するように都市には百を超える武門が存在している。

都市が抱えている武芸者の数とその質を考えると、まさしく他の都市を圧倒する最強都市の名に相応しく、月二回以上という頻度の汚染獣襲来にも生き残っているのもそう呼ばれる要因かもしれない。

しかし、その常識からかけ離れた汚染獣との遭遇率から、都市がわざと汚染獣を狙って襲っているようにも見え、電子精霊が狂った都市、最狂都市とも言われている。

汚染獣すら恐れる都市、グレンダン。

そんな最強都市には、少し他の都市とは違った風習がある。

十二人の至高の武芸者。

王家から認められ、民から崇められる絶対的強者。

その強さは、並の武芸者が千人いたとしても敵わないだろうと言われている。

都市の守護者たる彼らには、グレンダンに伝わる秘奥にして最高の錬金鋼『天劍』が与えられ、その勇ましい姿から、都市に住む人々に『天劍授受者』と呼ばれ、尊敬された。

一騎当千の猛者である、十二人の怪物集団の一人に、サヴァリス・クオルラフィン・ルツケンスという名の男がいる。

若干十五才で、天劍『クオルラフィン』を与えられ、グレンダンの数ある武門の中でも名門の一つ『ルツケンス』家の長男という、まさに天才の名に相応しい男である。

そんなサヴァリスだが、巷では戦鬪狂と呼ばれるほどの大の戦鬪好きで、一度はグレンダンを統べる女王陛下アルシェイラに暗殺という名の喧嘩を売りに行ったほどの馬鹿野郎でもある。

そんなある意味人間として終わっているサヴァリスには、二人の弟がいる。

一人はゴルネオ・ルツケンス。

兄であるサヴァリスと違い、常識があり、礼儀も備わった、極めて善良な人間である。

一般的な武芸者思考の持ち主であるゴルネオだが、武芸の腕は兄サヴァリスに比べると雲泥の差であり、そのことがコンプレックスとなり、現在は遠く離れた学園都市ツェルニに席を置いている。

そして、もう一人。

サヴァリスから十以上も歳の離れた末弟である彼は、次男のゴルネオと違い、天劍授受者であるサヴァリスに優るとも劣らない武芸の才を持っていた。

この物語は、そんな彼、ルツケンスの三男坊が思うがままに楽しく、のびのびと、自由に、他人を振りまわして暴れまわる、青春学園物語である。

・  
・  
・  
・

グレンダンの都市の中央に聳え立つ王宮から、数キロ離れた市街地の外れ。

人気の少ないこの場所に現在、溢れんばかりの大勢の人間が集まり、目の前の光景に歓声と野次を上げていた。

その熱気は、武芸大会に匹敵するほどのもので、そんな人々の視線の先では、二人の男達がじりじりと視線を交えていた。

一人は、天劍授受者である乱闘大好きな青年、サヴァリス。

流れるように風で靡く銀髪に構うことはなく、目の前の獲物に好戦的な笑みを浮かべながら、熱い視線を送り続けている。

視線には、鬨気や殺気など様々なものが混ざり合っており、並の武芸者なら震えあがるところだが、視線浴びる少年は、目の前のサヴァリスと同様の笑みを浮かべていた。

その光景は、まさしく目の前のサヴァリスの写し絵のようだった。

無論、笑みを浮かべていることだけではなく、髪の色に、瞳の光、顔つきなどの容姿に身している服装と、全てがサヴァリスに瓜二つであり、唯一の違いを上げるとするならば、兄と違い銀髪の後ろ髪が肩の辺りで切り揃えられていることと、背丈などの身体つきが一回りほどサヴァリスより小柄であること、顔にまだ幼さが残っていることくらいだろう。

少年の名はセヴァドス・ルツケンス。

サヴァリスの歳の離れた弟である。

そんな瓜二つの兄弟だが、彼等はただひたすら視線を交わし続けているだけで動こうとしなかった。

無論、彼らがやっていることはにらめっこなどではなく、日課となっている楽しい――真剣――な稽古である。



互いに見合い、隙を探す彼等は、観客から時間すら止まっているようにも見えた。永遠に続くような沈黙——がそれはすぐに崩れることとなる。

観客の誰かが息を呑んだ——その瞬間、

二人は弾かれたように動き出す。

外力系衝剄の変化、剛昇弾。

互いに向けられて放たれた衝剄の砲弾は、二人の対する間でぶつかり、爆音を立てて弾けた。

その際に発生した衝撃の波が、周囲にいた観客に襲いかかるが、当の本人達は、全く気にする様子もなく、目の前の相手に向かって拳をぶつけ合う。

「くふ、はははは!! 楽しいな、セヴァっ!! また腕を上げたのかい?!」

「成長期ですからねっ!! 身長と共に日々成長していますよっ」と

「へえ……その疾風迅雷の型、随分と様になつているよ。もしかすると道場の中でも一番筋が良いかもしれないね、つと」

「ぐっ」

弟の成長に上機嫌に笑うサヴァリスは余裕に満ちた様子で、木々をへし折るほどのセヴァドスの蹴りを受け止めると、そのままお返しとばかりに凄まじい速さの蹴りを、可愛い弟の横腹に向かって放った。

それをセヴァードスは紙一重で受け止めるが、余りの威力に、遙か上空へと打ち上げられた。

痺れる腕を抑えながら、頭上に向かって球体状の衝剄を放つと、その上に飛び乗った——正確には重力に反した逆さまという状態なのだ。がら足の裏に球体を乗せていることになる。

そのまま頭上——地面の方に視線を向け、こちらに迫ってくるサヴァリスを確認すると、それを迎撃するために足元の球体を蹴った。

内力系活剄の変化、旋剄。

活剄により踏み出されたセヴァードスの足は、爆発的な加速を生み、迫るサヴァリスに詰め寄ると、一瞬のうちにサヴァリスを地面へと叩き落とした。

——が、不覚の一撃を受けたとはいえ、天劍授受者である。

サヴァリスは、地面に叩きつけられる前に体勢を立て直すと、凄まじい音を立てながら着地をした。

その際、周囲に土砂が飛び交い、観客に悲鳴が上がるが、サヴァリスの興味は唯一人であった。

ゆつくりと降りてきたセヴァードスに向かって、サヴァリスは近くにあつた石を拾い、

——投擲した。

所詮は石ころ。

しかし、超人であるサヴァリスが投げれば、銃弾の速度を越え、殺人兵器と化す。風を切り裂きながら迫る石礫の弾丸を、セヴァドスは、何でもないように叩き落とした。

まるで蚊を叩き落としたような動作と冷静な反応に、投擲したサヴァリスは力強い拍手を送った。

「うん、良い反応だね」

「ありがとうございます。ですが、いずれは兄上を越えるつもりですから」

「ははははっ、うれしいことを言ってくれるね。セヴァのそういうところ、僕は好きだよ」

「私も兄上の強きは大好きです」

互いに褒め称え、笑みを浮かべながら、二人は互いに向かって走り出す。

駆ける二人の全身には、青く眩いくらいに発光した剉が流れ、その姿はまさに閃光である。

「へえ、この速さにもついてこれるのかい？」

「はい。もう少し速くても問題ないですよ？」

「ははは、全く楽しいねっ!!」

加速していく二人は、ピンポールのように弾け、周囲の建物を足場として、拳や蹴りを交え合う。

頬を掠め、横腹を抉り、衣服を血で染める二人の表情は、一向に変わることもなく、大声で笑いながら、周囲を無視した大技の衝剄を放つ。

「うえ、やばいぞっ!! 屋根が降ってきやがったっ!」

「馬鹿、そつちに逃げるなっ!! 巻き込まれるぞっ!!」

「ちよっ、誰か人を呼んで来いっ!!」

「誰を呼ぶんだよっ!!」

楽しげな兄弟と違い、巻き込まれた観客にとつて、もはや災害であり、この場は死地と化していた。

先程まで上げていた歓声は、全てへと悲鳴に変わっており、人々は必死に逃げ惑う。

だが、当の本人達は全く気にすることなく、寧ろ熱を帯びたように過激になっていく。

「楽しいなっ!! お互い錬金鋼は使つてないけど、どうする? 使つてみようか?」

サヴァリスは、素手での手合わせでは満足できないのか、腰に下げた錬金鋼を使うことを提案する。

無論、錬金鋼を使うことにより、先程とは比べ物にならないほどの被害が被るようになるのだが、完全に気分に乗ったサヴァリスにはそんなことはどうでもいい話であつ

た。

しかしその提案は、以外にもセヴァドスにより却下された。

「流石に、それは無謀ですよ。天剣に普通の錬金鋼が、勝てるわけないじゃないですか」

セヴァドスの言い分は最もである。

天剣授受者の資格というのは、技量などの強さをだけではない。

膨大な剋量を持ち、通常の錬金鋼では許容量を超えてしまうために力を発揮できないことも含まれている。

つまり、サヴァリスと同等の膨大な剋を持つセヴァドスでは、普通の錬金鋼は足枷となっているのだ。

そのことを知っているサヴァリスは、残念そうに肩を落としていたが、ふと何か思いついたかのように口を開く。

「それならセヴァ、今度天剣継承戦に出てみないかい？　今ならレイフオンの天剣が余っているからさ」

一年程前に、地位を剥奪されたために担い手がなくなつた天剣『ヴォルフシュテイン』。

唯一の所有者のいない天剣の存在を思い出したサヴァリスは、明日の晩御飯を決める

かのような気軽さで勧めてくるが、天剣を得るということはそう簡単ではない。

天剣はこのグレンダンにとって重要かつ、名誉のあることであった。

それ故に、グレンダンに腕自慢がその地位を欲するために、日夜鍛錬に汗を流しているのである。

つまり天剣を持つということは、槍殻都市グレンダンの猛者達を倒して、その頂点に君臨しなければならないのだ。

確かに担い手のいない天剣を得るのは、サヴァリスなどの現役の天剣授受者から奪うよりは比較的簡単な方法かもしれないが、それでもその道のりは険しいの一言では表せないほどであった。

無論、名門ルツケンスに生まれ、天剣授受者の兄を持つセヴァドスは、流石にそのことを理解していたようで、少し困ったようにセヴァドスは、兄の申し出に先程と同様に断った。

「出ませんよ。私が天剣を取ってしまうと、兄上とのキャラ被りが深刻じゃないですか?」

訂正。

非常識なのは、サヴァリスだけではなかった。

さすがは戦闘狂の弟。

かなりぶつ飛んだ思考の持ち主である。

だが当の本人には、その問題は大変深刻だったようでしきりに頷きながら考えていた。

しかし、強ちおかしな理由ではないかもしれない。

顔などの容姿は、双子のように似通っており、武芸に関しても、ルツケンスという同門でその才覚も同等。

好きな食べ物も、着る服のセンスも、同じという奇跡のシンクロもあり、思春期？まつ盛りのセヴァアロス少年なら、そういうコンプレックスを抱いてもおかしくないはずだ。故に天剣を持ってしまうと、持っている錬金鋼も同じになってしまう。

そのことはセヴァアロスにとって我慢できないことである。

しかし、武芸者の高みを目指す者として、天剣に興味がないはずがない。

「それに、天剣を得るなら兄上から奪う方が気持ちよさそうです」

「そうかい？ それならどのみち僕は戦えるから、別にいいかな」

虎視眈々と自身の座を狙っているセヴァアロスに満足したのか、サヴァリスは、嬉しそうに頷くと、話は終わりと云わんばかりに拳を固める。

その姿にセヴァアロスも笑みを深めると、迫りくるサヴァリスに向かって拳を振り抜いた。

再び、戦闘という災害が発生しようとした——その時、突如、空から降り注いだ巨大な光に、二人は為すすべなく飲み込まれた。

・  
・  
・  
・

「全く、アンタ達は懲りずに毎日、毎日……人の迷惑を考えなさいよ」  
グレンダン王家の王宮にある謁見の間。

様々な調度品が納められた間の玉座には、都市を統べる女王陛下——アルシエイラが座っていた。

普段は、王座も影武者に座らせている彼女だが、今日は違っており、大変めんどくさそうに溜息をついていた。

そんなアルシエイラの前には、丸焦げになっている二つの物体が転がっていた。  
先程まで場外乱闘していたルツケンス兄弟である。

二人は、アルシエイラが放った勁弾により倒れ、此処まで連行されてきたのだ。

その時の攻撃により、二人の身体は包帯まみれとなっており、明らかに常人なら確実



にベットの上的の住人になる程の大怪我である。

そんな重症患者の二人だが、全く懲りていない様子で顔をあげると、笑みを浮かべたまま口を開く。

「いえいえ、それは陛下もじゃないですか？ この前、カナリスさんが嘆いてましたよ」

「そう言えば、幾ら陛下とは言え、一般人の女性の方の胸を人が行き交う往来で揉むのはいかがなものかと思えますが？」

反省どころか、天下無敵の女王様に向かって思うがままに口を開いていた。

その姿に、笑みを浮かべたまま青筋を立てていたアルシエイラは、指先から衝刺を放ってセヴァアドス達を吹き飛ばした。

短い悲鳴を上げながら壁に叩きつけられる二人に向かって、アルシエイラはがあつと吠えた。

「あーもう、うるさいわねっ!! 私は女王、そんな些細なことは許されるのよっ!!」

それはそれでどうかと思う発言をするアルシエイラに対し、攻撃を受けたサヴァリスとセヴァアドスは、震える足を抑えながらゆっくりと立ち上がり、楽しげに笑い声を上げる。

「ふふふふ、やはり陛下は最高だ……また今度、反逆してもいいですか？」

「なるほど、では今回は私も参戦してもいいですか？」

「駄目に決まっているでしょうが、今度やったら二人とも打ち首にしてやるからね」  
首元を切るジェスチャーをするアルシエイラを見て、セヴァドスは眉を下げながら残念そうに呟く。

「ふむ……それは残念ですね」

「なら、セヴァ。今度一緒にリントンスさんに喧嘩でも売りに行かないかい？」

「兄上、それは魅力的な提案ですね」

「あんたら二人、リンにでも切り刻まれてきなさい」

グレンダン最強が駄目なら、天剣最強に喧嘩を売りに行く。

ここまで来ると、怒りを通り越し、さらに呆れを通り越して、思わず感心してしまうほどである。

が、それが何度も続けば疲労へと変わる。

グレンダンの非常識であるアルシエイラですら、二人の変人を相手するのは些か疲れてきた。

それ故に、アルシエイラは前々から考えていたことを実行することにした。

「アンタ達は、いいかげん暴れすぎだから、罰を与えることにしたわ」  
罰。

今まで制裁とばかりに殴り飛ばしてきたが、この二人にはまったく無意味であることはアルシエイラは痛いほどに理解していた。

そこで、今回は少し変えてみることにしたのだ。

そのことを知らないサヴァリス達は、笑みを浮かべて身体を動かし始める。

「罰ですか？ では準備運動を念入りにおこななければなりませんね」

「前は、二人で十秒も持ちませんでしたから、とりあえず今回は、十秒越えを狙いましょうか？」

勘違いをし、準備運動を始める二人を見て、アルシエイラはニヤリと悪どい笑みを浮かべる。

「まずは、サヴァリス。アンタはこれから三ヶ月間、汚染獣戦及び争奪戦の参加を禁

止よ」

「え？」

突然下されたアルシエイラからの罰に、サヴァリスは珍しく顔を強張らせ、言葉を失ったように放心してしまう。

しかし、それも無理もないことである。

戦闘狂であるサヴァリスにとって、闘争とは呼吸に等しいほどの当たり前のことであり、一番の楽しみでもある。

特に老生体との命懸けの戦いは、最高の一時に違いはなかった。

それを奪うと言うことは、鳥から翼を奪うようなほどの残酷なことであった。

茫然とする兄に対し、隣の弟は清々しいほどの良い笑みを浮かべる。

サヴァリスが、当分戦場に出ないことにより、自分自身の汚染獣戦の時の獲物が増えると考えたからだ。

「あー」愁傷様です。 ですが兄上の分まで私が……」

「で、セヴァドス。 アンタは、グレンダンから期間内追放よ」

「え？」

だが、次にアルシエイラの口から飛び出した言葉に、セヴァドスも隣の兄同様、思わず言葉を失ってしまった。

天剣授受者と女王陛下がいる最強都市グレンダンで生まれ育ったセヴァドスにとって、他の都市なんて興味が湧く存在ではなく、魅力を感じるはずもなかった。

つまり追放勧告は、セヴァドスにとってハリネズミの針を剥ぎ取るほどの暴挙である。

「へ、陛下っ！ 私は別に追放されるほど悪いことなんてしていませんよっ！」

「いや、普通に考えて処断されてもおかしくない発言してるわよ、アンタら」

挙動不審な動きをして詰め寄ってくるセヴァドスを、アルシエイラは正論を吐きなが

ら蹴飛ばす。

無論、普通の人間がここまで暴拳を繰り返していたら、処断されることは間違いないだろう。

この措置は、アルシエイラの恩情というものかもしれない。

「も・ち・ろ・ん・断ればわかつているわよね？ この女王陛下のお・ね・が・い・を」  
断れば殺す。

圧倒的なほどまでの殺気を纏うアルシエイラに、ルツケンス兄弟は肩を落とすしかなかった。

・  
・  
・  
・

「という罰を与えられてしまったのですが、どうすればいいと思いますか？」

「素直に受ければいいと思いますが」

机の前で訴えるセヴァドスに対し、カナリスは机の上の書類を処理しながら、興味がないさそうに答える。

先程の混乱状態から冷静になったセヴァドスは、先程出された罰を撤回してもらった

めに、天劍授受者の一人であり、アルシエイラの右腕でもあるカナリスに相談を持ちかけていた。

だが、彼女の返答は予想通りのものである。

人一倍忠誠心のあるカナリスに、相談すること自体が間違いなのであるが、相談する人間がいなかったのである。

普段、セヴアドスが相談すると言ったら、アルシエイラとサヴァリス、祖父、祖母的存在のテイギリスとデルボネ、そしてしつかり者の姉的存在カナリスである。

アルシエイラとサヴァリスは当事者であり、デルボネは現在睡眠中、テイギリスは先日、彼の孫娘であるクララことクラリベルといつしよになって彼の住む屋敷で暴れまわったのである。

そのせいで温和なテイギリスが、鬼のように怒っており、当分会いに行くことは不可能となっていた。

つまりは、消去法でカナリスしか残っていなかったのである。

「そこを何とかお願いします。貴方の忠告なら陛下も聞いてくださいます」「陛下が私の忠告を聞いてくれたことなんてありませんでしたか？」

カナリスの自虐とも言える発言に、セヴアドスはなるほどと頷く他ない。

参謀、女王補佐とも言える彼女だが、一度もアルシエイラは彼女の忠告を聞いたこと

はない。

つまりは、期間追放は逃れることができないようだ。

その事実には肩を落とすセヴァドスを見て、カナリスは溜め息をつきながら、机の棚から二枚の書類を取り出す。

「せっかくですから、外の世界に出て色々なものでも見てくればいいでしょう」

「これは？」

手渡された書類をセヴァドスは受け取り、書類に目を向ける。

一枚目の書類には、学園都市のことが書かれており、二枚目はその学園都市の入学願書であった。

その書類に書かれていた学園都市の名は、聞き覚えがあった。

「ここなら、貴方も納得するんじゃないんですか？」

「ありがとうございます、カナリスさん」

カナリスの粋な計らいに、セヴァドスの先程の落ち込んでいた表情が一変、花が咲き誇るような満面の笑みに変わっていた。

「しかし、こうなると早めに出た方がいいですね」

「そういうと思って、既に放浪バスの券は取っていますよ」

「おお、流星はカナリスさん。このお礼はいつか」

カナリスの手際のいい手腕に、セヴァドスは感動しながら放浪バスのチケットを受け取ると、上機嫌でその場を後にした。

ゆえに気付かなかった。

カナリスの手際が良すぎることに。

まるで、事前にこの決定が決まっていたかのように準備がされていたことに。

「あんな笑みを向けられると、流石に罪悪感が湧きますね」

疲れたように溜め息をつきながら、カナリスは一枚の書類を再び机から取り出す。

その書類には、先日、カナリスがアルシエイラに提案した案が記入されていた。

それをもう一度だけ確認すると、カナリスは書類をクシャクシャに丸めて、部屋の隅のゴミ箱へと放り投げた。

「まあ、あの子なら問題ないですね」

純粹で、順応性のある弟分の旅路を祈りながら、カナリスは再び書類整理へと没頭した。



## 第二話

生まれて初めての放浪バスに乗り込み、揺られること約一カ月。

寝心地の悪いバスの座席の上ではしやぎ回ってみたり、窓から見えた汚染獣を見て軽く興奮したり、愛用の錬金鋼の手入れを行ったり、隣の席の人間にお菓子をもらったり、一時停泊したホテルを誤って半壊させたり、滞在した都市の犯罪組織を壊滅させたり、と様々なことを経験しながら、セヴァドス・ルツケンスは、学園都市ツエルニの大地に立った。

片手で背負う程度の手荷物を持ち、身軽な動きで放浪バスから降りると、興味深そうに周囲を見渡す。

「ふむ、停留所だけでも結構違うものですね」

グレンダンは、都市の財政の貧しさから全体的に質素な造りで、放浪バスの聖地であるヨルテムの停留場は、清潔感が保たれており、何より数多の都市を繋ぐために通常の都市よりも巨大な造りになっていた。

それに対しツエルニは、グレンダンほど質素な造りではなかったが、周囲に人の姿のない寂しい光景が広がっていた。

周囲で確認できるのも都市間を行き来するキャラバンの者とその彼らが所有する放浪バスくらいで、学生の姿は殆ど見当たらなかった。

一か月前の入学時期であれば、恐らくこの場も生徒達で溢れかえっていたはずであったが、今は入学時期から外れている。

セヴァドスのような転入生は、この移動都市の傾向上そう多くないだろう。

「さて、いつまでもこんなところにおいても意味がありませんし、上に昇ってみましょうか？」

キャラバンの人達が忙しく商品を運搬する姿に見飽きたセヴァドスは、軽やかな歩みで停留場を後にする。

都市上部へと続く階段を昇りきったセヴァドスを迎えたのは、青く広がる空と、それを囲むように聳え立ったビル達。

「これが学園都市ですか」

初めての学園都市を興味深そうに周囲を見渡すセヴァドス。

無論、学園都市というものには興味があつたが、やはりセヴァドスが一番に興味を示すのは人間——正確には、武芸者である。

先程から擦れ違う人を吟味するように視線を動かしていたが、やはりここは学生都市、セヴァドスの期待に応えるものが現れることはなかった。

武芸の本場であるグレンダンの歴戦の武芸者ですら、セヴァドスには遠く及ばなかったのだから、未熟者が集まる学園都市では満足できるはずもないだろう。

元々そちらのことに対しては期待をしていなかったセヴァドスにとつてお目当てはと聞かれると一人しかない。

レイフォン・アルセイフ。

天剣『ヴォルフシュテイン』を得た天才少年であったが、一年前に起きた天剣争奪戦後の事件により天剣の地位を剥奪された者であった。

だがそう言った理由で天剣を失ったとはいえ、それでもその実力は天剣級であることには変わりはなかった。

同じくグレンダンを追われる身となったセヴァドスの興味を引く都市は、レイフォンがいるこのツエルニしかありえなかった。

「しかし、本当に楽しみです。かれこれ彼とは一年以上じやれ合っていないからね……久しぶりに本気で殺し合えると嬉しいのですが」

レイフォンとの再会に思わず、心を躍らせていたセヴァドスは思わず含み笑いをしてしまうと、周囲の学生達は気味が悪そうに彼の周囲から離れていく。

だが、ご機嫌なセヴァドスがそんなことに気付くこともなく、軽やかな足取りで都市内を散策することにした。

何れはレイフオンに会うことになるのだから、今はこの都市でも楽しもう、そう考えたからである。

思い立ったら即行動の信条を持つセヴァードスは、微かな空腹感を満たすために近くのレストランへと足を運んだ。

・  
・  
・  
・

自身の性格を一言で言うならば、臆病。

そう、メイシエン・トリンデンは自分自身を評価していた。

武芸者であり、芯のある強さを秘めた女性であるナルキと、明るく元気で行動力の塊であるミイフィという存在がいたからこそ、メイシエンは故郷から遠く離れたツエルニに留学を決意することができたのである。

もしも彼女達に出会わなければ、自分がどうなっていたかなんてわからないほどで、それだけメイシエンは二人を頼りにしていた。

普段は三人で行動をしているメイシエンだが、いつも一緒というわけにもいかない。

マイフィは新聞社、ナルキは都市警察と、自身の夢を叶えるために就労を行っており、メイシエンも同様に自身が誇れる唯一と言っているほどの特技である料理の腕と自身の密かな夢であるケーキ屋を開くためにツエルニのケーキ屋で働いているのであった。

つまりは、このケーキ屋で働いているときだけは、メイシエンはたった一人なのである。

だからこそ、こういう時の対応には困っていた。

「ねえ、今度デートしてよ」

「ええっ!?!」

食事をしてきた男性客が、メイシエンにナンパを仕掛けてきたのだ。

人見知りか激しいメイシエンだが、特に男性は苦手であり、何の気概もなく話すことができるのは父親くらいである。

故に、ナンパの断り方なんて知るわけもなく、ただオロオロとメイシエンはその場で立ち尽くしていた。

そんな彼女の様子に、男はたたみ掛けるように席から立ち上がると、メイシエンに笑いかける。

「え、駄目なの?」

「そ、その……」

メイシエンの困っている姿は、まさに小動物のようで、恵まれた容姿も合わさって実に可愛らしかった。

その姿に、男は興が乗ったようで笑みを浮かべたまま言葉を捲し立ててメイシエンを口説き始める。

「実はさ、俺って君のファンなんだよね。結構この店通っているって君目的なんだよね」

男の言っていることは本当で、メイシエンもこの男が常連ということは知っていた。柄が悪く、いつまでも店で屯っているため、あまり良い客ではないことも。

「彼氏とかいるの？ いないんなら一回くらいさ」

「い、いえ……わ、私は」

「ねえ？」

恐怖から後ろに下がったメイシエンを、逃がさないように男の右手が伸びる。

その行為に思わず、メイシエンが声を上げようとしたその時——

「すみません」

突然、メイシエンは後ろから声をかけられた。

メイシエンと男が声の方向に視線を向けると、そこに一人の男が立っており、こちら

に視線を送っていた。

銀色の髪を揺らす青年は、ニコニコと笑みを浮かべたまま、ケーキを自身の口へと運ぶと、ゆっくりと味わうように咀嚼する。

もぐもぐと口を動かし、呑み込むと再び口を開く。

「ちよつと聞きたいことがあるんですが」

目の前で女性が柄の悪い男に絡まれているにも関わらず、マイペースに尋ねる青年に対し、メイシエンは呆けたように口を開けて固まっていたが、突然話に割り込まれた男はそうもいかず、舌打ちをつくつと険しい表情で乱入者の青年に向けて口を開く。

「おい、状況わかってんの？ 今、この子と話しているのは俺だけけど？」

ナンパを妨害されて、気分を害したのだろう。

目を釣り上げて睨みつけると男は、乱入者の青年に向かって言葉をつき捨てた。

が、余程肝が据わっているのか、それとも空気が読めないのか、敵意をぶつけられても笑みを崩すことなく青年は男と視線を交える。

「ふむ、そうなのですか？ 私もこのケーキの上に乗っているソースのことで、お聞きしたいことがあるのですが？」

「そんなこと、他の人間に聞けやつ!!」

「じゃ、貴方、これなんだか分かりますか？」

「俺に聞くんじゃねえよっ!!」

端から見れば漫才のような会話だが、片方は首を傾げ、もう片方は怒り狂っていた。周囲にいた人達は避難を始める。

だが、争いの原因になったメイシエンは逃げることもできず、ただオロオロと二人の顔を見ていた。

「なら仕方ありませんね。ではやはりこの子に聞きますね」

「つてめえ……俺をおちよくつてんのか？」

巡り巡ってその結論に辿りついた青年に、男は遂に我慢ができなくなったのか、青年の襟元を掴み上げると、ドスの効いた声で脅した。

だが、目の前の青年は、脅しつけられても表情一つ崩すことなく首を傾げると、目の前で怒り狂う男に話しかけた。

「む、何ですか？ いきなり怒りだして、もしかして糖分が足りないのですか？ よければ一切れ差し上げましょうか？」

「つつつつ!!! ぶっ殺すっ!!!」

我慢の限界に達したのか、怒りに身を任せた男は、目の前の青年に殴りかかった。

活剏で強化されて放たれた一撃は、一般人なら脅威に値するだろう程の威力が込められており、メイシエンの目には辛うじて映ったほどである。



だが、それを青年は、いとも簡単にかわした。

「おっと、突然、いきなり殴りかかって危ないですよ」

「うるせえっ！ 人を散々おちよくりやがって」

避けられたことにより、怒りが増した男は再度、青年を殴りかかろうとするが、その前に青年から待ったの声が届く。

「わかりました。それなら一切れと言わず、このケーキを差し上げましょう」

そう言つて笑みを浮かべた青年が差し出されたのは、半分以上食べられてしまつているケーキである。

自信満々でそう言つてのける青年の頭の中は、全くもつてメイシエンには理解できないものだが、それで男の怒りを買うことは十分に理解できた。

「つつ!!」

言葉にならない怒りで、再び襲いかかつてくる男の一撃を、青年は易々とかわすと、そのまま皿に乗つてある残りのケーキを口へと運ぶ。

もぐもぐと口を動かしてそのまま呑み込んだ青年は、再び首を傾げるとひとり言のようになげ始めた。

「ふむ、何がどうなつていいのか理解できませんが、とりあえずは……」

「あ？ 何してんだ、てめえ？」

青年は、仕方がないと呟きながら近くのテーブルに空になった皿を置くと、右手を男に向かつて突き出した。

突然の行動に、今度は男の方が首を傾げる。

青年の右手の中指は、折りたたまれたような形で固定され、それを親指で抑える。

その手の先には、搔き上げられた髪から現れた男の額があり、照準はそこに絞られていた。

それはどこの誰が見ても、でこピンのフォームである。

「……おい、何のつもりだ？」

「おしおきです」

青年の言葉と同時に、親指による拘束が放たれた。

弧を描きながら空を斬る中指は、男の額を捉え――

「ふぎやもつ!!」

一回転、二回転と、男の身体を回転させながら壁へと吹き飛ばした。

その余りの衝撃映像に、その場にいた者達から言葉が失われ、一番目の前で見ていたメイシエンは恐怖のあまりプルプルと震えだした。

そんなメイシエンに気付くことなく、青年は笑みを浮かべたまま、もう一度尋ねてきた。

「ふう、これでようやく要件が聞けますね。店員さん、このソースってどういう果物を使用しているのですか？」

・  
・  
・  
・

冷静沈着で完璧な生徒会長。

そう称えられる半面、冷徹な面を併せ持つツエルニ第十三代目生徒会長——カリアン・ロスだが、今の彼の表情は何とも言えないほどに疲れ切っていた。

しかし、それは無理もないのかもしれない。

先日、このツエルニに汚染獣が襲来し、危うく滅亡の危機を迎えそうになったのだから、都市を束ねる者としての責任感が重く押し掛かったのだろう。

幸運なことにも滅びの運命から逃れることができたが、それでもツエルニに残された問題は多かった。

汚染獣襲来による爪痕の被害や、これからの汚染獣への対策計画の製作など、身体が三つ四つ欲しいほどの忙しさである。

だが、そんなことは目の前の問題に比べれば些細なことであると、カリアンは約一時間前に悟ってしまった。

「む、流石は生徒会長さんですね。良い茶菓子を使っています」

「ははは……それはどうもありがとう。こちらも君に満足してもらってうれしいよ」

図々しく高級茶菓子を食べる青年——セヴァドスの姿に、カリアンは苦笑いしかできなかった。

ようやく今日の分を終わらせ、帰宅をしようとしたカリアンに追い打ちをかけるように、問題が向こうから飛び込んできた。

「しかし、そのやりすぎだったのではないのかな?」

「ふむ……何の話ですか?」

「喫茶店での件と、その後の暴れまわった件についてだよ」

「ふむ、ですが、お店での件は軽いジョークみたいなものです。仮にも武芸者なんですからアレくらいでは死にはしませんよ。それにその後のことでしたら、軽く相手しただけですよ?」

「その軽くが問題なんだがね……」

報告によると、店内で目の前のセヴァドスと口論になったのは武芸科の四年生。

素行が悪く、そのせいで小隊になることはなかったが、実力は小隊クラスである。

そんな彼をでこピン一発で倒したことは脅威に値するが、その件は別に問題はなかった。

カリアンが、頭を抱えているのは、その後騒ぎに駆けつけた武芸者——ヴァンゼ・ハルデイを倒したからである。

ヴァンゼは、ツエルニ最強を誇る第一小隊の隊長で、武芸科の長を務めるほどのものである。

つまりツエルニを代表する武芸者が、余所から流れてきたルーキーに瞬殺されたということになるのだ。

この事実が都市に漏れれば、確実に今年の武芸大会への不安が爆発することになるだろう。

その危機を生徒会長であるカリアンが見逃すわけにはいかなかった。

「まあ、被害は被ったが、それに担う収穫は得たか」

目の前でお菓子を食べ尽くしているセヴァドスを見ながら、カリアンは執務机から一枚の書類を取り出す。

転入願書。

そこにはセヴァドス・ルツケンスという名が記され、出身都市にはグレンダンと書かれていた。

カリアンは、この書類を始めてみた時、どうするべきか考えていた。

テストなどの審査は特に問題はなく、寧ろ平均値を軽く上回るほどの優等生と言っていいだろう。

いや、寧ろ試験の結果は完璧と言っているほどの出来であった。

しかし、武芸者としての実力はカリアンでは測ることができず、同じ都市出身であり、ツエルニ最強のアタッカーとなったレイフオンに話を聞くつもりであったのが、その手間はなくなった。

そのレイフオンに聞く前に実力を知ることができ、間違いなくツエルニの一翼を担う戦力であったことを嬉しく思うべきなのか？

それともレイフオンと違い、爆弾のような彼を抱える災難を都市を愛する人間として悲しむべきなのか？

複雑な心境なカリアンだったが、この状況で取れる手段は一つである。

「セヴァドス・ルツケンス君。ツエルニは君を歓迎しよう」

それがいかなる毒であろうと、ツエルニ存続のためなら飲み干してみせる。

再び決意と覚悟を決め直したカリアンは、内面を隠すようににこやかに笑うと、右手を差し出した。

その行為に、セヴァドスはきよとんとカリアンの手を呆けたように見つめ、何か気付いたかのように、その手に自身の右手を重ねた。

——カリアンは数秒後にその行為を後悔する。

「よろしつ、た痛たたたつ!!」

「む、力比べではないのですか?」

ミシミシと骨が軋む右手に、思わず涙目で悲鳴を上げるカリアンに対し、セヴァドスは首を傾げながらズレた回答する。

友好の証で、自身の右腕を殺しかけたカリアンは、ゆるくなった拘束から離れた右手を庇うようにすると、目の前の問題児を睨みつける。

「普通に考えれば、握手じゃないのかい?」

「そうなのですか? 故郷ではよく兄上とこうやって遊んだものです」

「こっちは右手を潰されそうになったのだがね。全くどういいうお兄さんなんだい?」

「戦鬨狂で、よく周りから残念な人と言われています」

「私から見れば、君が残念そのものだよ」

痛みのあまりにカリアンは思わず、目の前のセヴァドスに刺すような視線で睨み、理不尽から言葉が毒気ついてしまう。

が、セヴァドスは何の気にもしない様子で頭を下げた。

「そうですね。武芸者ではない人間にはすることではないですね」

次回からは気をつけますよ、と微妙にずれた回答をするセヴァドスを見て、カリアンは思わず早まったのではないかと思ひ、ツエルニの未来を心配した。

その後、カリアンの執務机には常に胃薬が配備されたことは言うまでもないだろう。



## 第三話

故郷で『天劍授受者』という最強の武芸者の地位を得たレイフォン・アルセイフであったが、彼も人の子であり、幾つかの苦手なモノが存在する。

一つはニンジン。

生まれ育った孤児院が貧乏だったため、食べ物を残すと言う行為はしたことがないが、それでもニンジンの味は苦手であった。

できることなら食べたくないが、それでも嫌悪するほどのものではなかった。

一つは勉強。

幼い頃から武芸一筋で生きてきたレイフォン。

強ければ良い、というグレンダン主義の頂点であった天劍授受者の一角だったために、勉強の必要性がなかった。

しかし、この一年間、必死の勉強のおかげでなんとかつエルニに合格したのだが（正確にはカリアンがレイフォンの素性を知っていたために）、それでも勉強というものが大変苦手である。

ニンジンとは違い、生理的にも受け付けられないほどの苦手なものだが、武芸以外の道を見つげるために必要だと思い、日々努力を重ねている。

そして、もう一つ。

それは現在、教室の教卓の前に立っている男である。

「セヴァドス・ルツケンスです。諸事情により、入学が遅れてしまいました。こうして入学することが出来ました。皆さん、一年間よろしくお願ひします」

太陽のような明るい笑みを浮かべながら、セヴァドスは深々とお辞儀をする。

その様子に教室から歓声——特に女子生徒の黄色い声が教室内に響き渡っていた。

完全に好印象を得たセヴァドスを見て、レイフォンは複雑そうな表情で、彼を見ていた。

同郷の者なら知っているだろう、セヴァドス・ルツケンスの問題児さに。

場外乱闘を行って器物破損を繰り返すことなど朝飯前で、天劍授受者達の住む屋敷で暴れまわったり、都市を統べる女王に喧嘩を売るなど、その行動力はグレンダンでも一二を争うくらいである。

そして同時に知っている彼の実力を。

そうなると、レイフォンの頭に一つの疑問が浮かぶ。

何故、この都市に来たのか？

戦闘狂であるセヴァドスにとって、グレンダンは楽園そのものである。

そんな彼が何故ここにいるかは、レイフォンには解らなかったが、ただ一つ言えることがある。

本当に面倒なことになった、と――

・  
・  
・  
・

一限目を終えて、休憩時間となった教室の中央では、男女問わない人だかりができていた。

その人だかりの中心にいるのは勿論転校してきたセヴァドスである。

見た目が整い、丁寧口調の彼の第一印象は良く、最高のスタートを切った彼の周りに集まったクラスメートの質問にも、セヴァドスは笑顔で答えていた。

そんな転校生を遠く離れた場所から、レイフォン、ナルキ、メイシエン、ミイファイの

仲良し四人組はその光景を眺めていた。

「へえー、グレンダンからの転校生か。レイとん、知ってる人？」

「えっと、まあ……」

ミイファイの質問にレイフォンは消極的に頷き返す。

確かに知り合いで、何度も話したこともあるし、戦ったこともある。

別に嫌いというわけではないが、グレンダンでの日々を思い出すと、とりあえず距離を取りたいなーというのがレイフォンの正直な感想である。

「しかし、それなら良かったんじゃないのか？ 同郷の者がいるというのは心強いもの  
だろ？」

「そうだね……」

自分にはミイファイやメイシエンがいることだしな、と頷くナルキに対して、レイフォンは苦笑いを返す。

ナルキの言う通り、都市外への留学した際に、故郷の人間がいるということは頼りになるだろう。

だが目の前の男は、安心ではなく心労しか与えてくれなさそうである。

「やあ、レイフォン。久しぶりですね」

「何故、貴方がここにいらっしゃるんですか？」

人混みをかき分けて現れたセヴァドスに、レイフォンは思わず溜め息をついてしま  
う。

突然、転校生が一人の生徒に話しかけた。

その事実が、教室中の人の興味を引くのは無理もないことである。

隣にいるミイファイ達も気をつかつてか、会話に入ることはなく、こちらの会話を傍観  
していた。

完全に孤立した気分になり落ち込むレイフォンに対し、元凶であるセヴァドスは特に  
気にした様子もなく、親しく話しかけてくる。

「顔見知りがある。それだけで心の持ちようが違うというものですね」

ほっとした様子を見せるセヴァドス。

その姿とその発言は、周りの目から見ても違和感がなかった。

だが、レイフォンは思わず貴方がそれを言うか？ その似合わない台詞に突っ込みた  
くなるが、周囲の目があるためしぶしぶ諦めることとなる。

しかし、ある意味良かったのかもしれない。

何れはセヴァドスと話をしておいた方がいいだろう。

そう考えたレイフォンは、覚悟を決めたように顔を引き締めて口を開いた。

「校内の案内でもしようか？」

と発言して、教室を出たのだったが――

「どうしてこうなるのかな？」

「まあ、ミイだしな」

セヴァドスと楽しげに話しながら歩くミイファイを見て、レイフォンは肩の力が抜けたように項垂れた。

ナルキの言うとおり、ミイファイという好奇心の塊の少女が、グレンダンの転校生に興味がないはずがなかった。

「へえ、セヴァちゃんってそういう本も読んでるんだ」

「はい、知識はある方がいいと思いますから」

波長があつたのだろう、和気藹々と話をするミイファイとセヴァドス。

どうやら共通の趣味である読書の話に花が咲いているようで、先程からレイフォンには無縁の言葉が飛び交っていた。

そんな二人を眺めていたレイフォンは、これからどうするか考えていると、話を終えたのか、先頭を歩いていたミイファイとセヴァドスがこちらに振り返った。

「いや、セヴァちゃんって本当に面白いね。レイとんにこんな友人がいたとは意外だ

よ」

「いえ、私も色々勉強になりました。今度、その本貸してくれませんか？」  
「いいよ〜」

出会って一時間程なのに、凄まじい仲の良さを見せる二人に、レイフォンとナルキは顔を見合わせる。

「今、気づいたんだが、結構良い組み合わせじゃないか？」

「そう？ 僕は、混ぜるな危険、みたいな匂いしかしらないけど」

友人のミイファイの様子に、良い縁に恵まれたのではないかと解釈したナルキと違い、いやな予感しかしないレイフォンは、先程から冷や汗が止まらなかった。

「しかし、セヴァちゃんというのは、セヴァドスのあだ名か？」

「うん、結構すんなり決まったよ」

「私も気に入りました」

ミイファイに付けられたあだ名を喜んでいるセヴァドスだったが、ふと何か気づいたように口を開く。

「そういえば、レイフォンのあだ名はレイとんなのですか？」

「うん、私がつけたよ」

自信満々な様子で頷くミイファイを見て、セヴァドスは感心したように頷き返すと、レイフォンへと視線を向ける。

「なら、レイとんも私のことは、セヴァちゃんと呼んでください」

「呼びません」

食い気味に拒絶の言葉を返したレイフォンに、セヴァドスは一瞬眉を下げるが、再び笑顔で向けた。

「では、昔のようにセヴァと呼んでいただければ嬉しいのですが？」

「僕は、今まで貴方のことを親しげに呼んだことはない」

「では、私はレイとんと呼ばせて頂きましょう」

「聞けよ、おい」

相変わらず人の話を聞かないセヴァドスに、レイフォンの言葉が荒々しくなっている。く。

しかし、そんなことをセヴァドスが気にするわけはなく、何かに気づいたのかように突然声を上げる。

「む、そこにいるのは店員さんではありませんか？」

レイフォンを完全に無視したセヴァドスは、ゆっくりと歩き出しナルキの——背後に隠れていたメイシエンに声を掛ける。

その呼びかけにメイシエンは、体をピクリとさせると、そのまま恐る恐る頭を下げる。

「その……あの時はありがとうございます」



「いえ、私もあのソースの作り方を教えていただいて助かりました」

「どういう状況なんだ？」

「こつちに聞かれても解らないよ」

二人の会話のやり取りを聞いて、全く場面を想像できなかつたナルキは、隣のレイフォンに話しかける。

が、レイフォンがそんなことを知る由もなく、ただ首を傾げるしかなかつた。

ナルキとレイフォンと違い、好奇心の塊であり、新人雑誌編集者でもあるミイフィは、面白そうに口をはさむ。

「ねえ、何かあつたの？」

「ん？ いえ、彼女にケーキにかかつていた果汁ソースの作り方を聞いたのですよ」

「え、と……店で絡まれた時に助けてくれたの」

同時に発言した二人の言い分の違いに、流石のミイフィも首を傾げるしかなかつた。

「どういふこと？」

「恐らく、メイが正しいんだと思うよ」

基本的にズレた発言をするセヴァドスの事を、痛いほど知っていたレイフォンは、セヴァドスの言い分を話し半分聞いて解釈した。

「ということ、彼は暴漢を追い払つたことか？ 中々筋が通つてるじゃないか？」

正義感の強いナルキは、メイシエンの言葉だけを捉え過ぎて感心していたが、レイフオンは違うと思っていた。

恐らく暴漢を倒すつもりはなく、ただ暴漢という名の被害者が、セヴァドスという災難に巻き込まれたということだろう。

そうになると、その暴漢は運が悪かったね、とレイフオンは他人事のように考えていた。「へえ、やっぱりグレンダン出身の人って強いんだね」

レイフオンの説明にますます興味が惹かれたのか、ミイファイは何処からともなくメモ帳を取り出すと取材をするように目を煌かせて、セヴァドスに標的を絞っていた。

武芸の本場であるグレンダン出身であるレイフオンの凄まじいデビュー戦を見ていたせいで、彼も同様のスター選手になるのではないかと考えるのは無理もない話である。

それは武芸者のナルキも同様に関心があったようで、セヴァドスの頭のとっぺんから足のとつま先まで、隅々まで視線を動かしていた。

「グレンダンの留学生が皆強いかは知らないけど、彼は——セヴァドスは強いよ」  
そう言っと思い出すのは、セヴァドスの出た試合や戦闘についてである。

レイフオンが初めてセヴァドスのことを知り、戦ったのは天剣を得る前の試合——天剣授受戦だった。

結果はレイフォンの勝利であったが、どちらが勝ってもおかしくないほどの実力差である。

その後、何度か出会っただけで喧嘩を売られて戦ったが、その時の彼の成長具合は恐ろしいモノであった。

天剣という絶対的なアドバンテージが無ければ、レイフォンは敗北していたかもしれないと冷静な判断を下していた。

「おや、うれしいですね。レイフォンにそう言っていただけだと」

「ほうほう、レイとんが認める武芸者か……これは要チェック」

レイフォンの言葉が嬉しかったのか、いつも以上に良い笑みセヴァドスの隣では、ミイファイがメモ帳に何か必死に書きこんでいた。

二人を見て、レイフォンはこれから起こるだろう波乱をひしひしと感じていたのである。

・  
・  
・  
・

その後、授業は問題なく進み、レイフォンは安堵の息をついて昼食を迎えた。

凄まじい量の食べ物とデザートを食べるセヴァドスを見て、ミイファイ達が和むように目を向けていた。

そんな和やかな昼食を終えて、午後から行われるのは体術訓練の授業。

充てられた訓練場には、レイフォンとセヴァドス、そして同じ武芸科であるナルキの姿があった。

圧倒的な強さを誇るレイフォンの組み手を相手するのはナルキしかいなかったが、今日からはその傍にはセヴァドスがいた。

グレンダンVSグレンダン。

もしかすると起こるかも知れない対戦カードに、必然的に訓練場の視線はレイフォン達に集まっていた。

「よっ」と

「うわっ!!」

周りの期待には答えることはせず、レイフォンの相手をしているのはいつも通りのナルキであった。

セヴァドスは、その隣で何やら楽しそうに笑みを浮かべてその訓練風景を眺めていた。

「へえー、ナルキさん、中々筋がいいですね」

「うん、僕も今の動きは良かったと思うよ」

「そ、そうか？ 武芸の本場の者に褒められると嬉しいものだな」

セヴァドス、レイフォン、というグレンダン出身の二人に褒められて、ナルキも満更ではなさそうに嬉しそうな笑みを浮かべる。

実際にナルキの体術は、一年生の中でも中々卓越したものである。

ナルキいわく、衝刺が苦手なようだが、もしこの克服と全体のレベルアップが出来れば、小隊入りも夢ではないと二人は思っていた。

「きちんとした訓練を継続すれば、もっと上を目指せると思うよ」

「そうだ、私が訓練をつけましょうか」

「貴方は少し黙っている」

楽しんでナルキを鍛える師に立候補するセヴァドスを、レイフォンは冷たくあしらうと倒れていたナルキに手を差し出す。

「しかし、こども注目されるとやり辛いな」

「そうかな？」

「別に害はありませんから、気にすることではないですよ」

周りの視線を感じていたナルキは、疲れたようにそう溢すが、当の本人達は全く気に

した様子もなく首をかしげていた。

そんな三人に近付く者たちがいた。

「少し、いいかな？」

話しかけられたことにより、そちらに視線を向けてみるとそこには三人の男達が立っていた。

訓練着の肩についているラインの色からして彼等は恐らく三年生だろう。

その視線の色、感情は、レイフォンにとって見覚えのあるものである。

「なんですか」

「そっちの、十七小隊のエース殿に用があつてね」

挑戦的な視線に、レイフォンは少し呆れそうになるが、彼らの望みに答えることにした。

「三人でいいんですか」

「……大した自信だね」

傲慢とも言えるその台詞に、男達は気分を害したのか、顔を顰める。

男達の表情に怒気が混ざり、周囲が緊張感に包まれたその時、——沈黙を貫いていた男が動いた。

「少し良いですか」

笑みを浮かべたセヴァドスが、三年生の一人に話しかけた。

殺伐とした空気の中でも笑みを浮かべる一年に毒気が抜かれたのか、眉を顰めた三年生は、うっとしそうに口を開く。

「なにかな？」

「いえ、皆さん三年生なんですよね？」

「そうだが……」

当たり前のことを聞くセヴァドスに、一人を除いてこの場にいる人間が首を傾げていると、セヴァドスの口が再び開く。

「実は私は今日編入しまして、色々勉強したいと思っていたんです」

「……なるほど、腕試しというわけだな」

一人の三年生が好戦的な笑みを浮かべると、セヴァドスは笑みを浮かべたまま頷きかえす。

「それに私もグレンダン出身なんですよ。もし私を倒せば傲慢になりませんか？」

セヴァドスの安い挑発に、三年の目の色が変わる。

明らかに標的が変わった。

「いいだろう。上級生として胸を貸してやろう」

「ちよつ……」

「まあ、レイフォン。 いいじゃないですか、期待に応えるのも武芸者ですよ」  
生意気な一年生の鼻をへし折ってやろうと意気込む三年生を見て、レイフォンは慌て止めに入ろうとするが、やんわりとしたセヴァドスの制止の声に遮られる。  
そして、そのセヴァドスの余裕に満ちた声は、相手のプライドを傷つけた。

「後悔するなよ」

同時に襲いかかってきた三年生にセヴァドスは、ゆつくりと地面を蹴る。

——爆発音、ブチ抜かれた床。

「ぶばはっー」

閃光とかした右拳が、三年生の横腹を捉えた。

肉の潰れる音と骨が碎ける音。

そんな嫌な音を立てながら吹き飛ばされた三年生の一人は、一回、二回と、ピンポールのように地面に叩きつけられて、凄まじい速度で回転しながら訓練場の壁に突き刺さる。

力無く、言葉無く、倒れ伏せた三年生は、白眼を剥き、鼻や目、耳からから血を流し、全身を痙攣させるという無残な姿を晒した。

衝撃映像を間近で見た残りの二人の足が完全に止まった瞬間——セヴァドスは残る



二人の正面に現れた。

「油断大敵ですよ」

「あべしっ！」

「ひでぶっ！」

いやに明るい言葉とともに、弾かれた両手の中指の指先が二人の額を捉えた。

デコピンを食らった二人は、体を縦に一回転させながら地面に叩きつけられると、同様に体を痙攣させ始めた。

額から血を流す二人を見て、セヴァドスは首を傾げた。

「ふむ、鍛錬が足りないようですね。まずは基礎からやり直したほうがいいですよ」

童子のような笑みを浮かべるセヴァドスに、その場にいた全員がヒいていたのはいうまでもなかった。

## 第四話

学園生活において第一印象とは、極めて大事なものである。

印象が良ければその人の周りには人が集まることとなり、悪ければその逆となるだろう。

つまり、印象が良く人と接する回数が増えれば、それだけ友人を作る機会があるということだ。

無論、一人でいるのが楽しいという嗜好の持ち主もいるが、一般的に見れば人という生き物は誰かがいないと不安になる生き物である。

それは学園生活の中でも同じことであり、友人がいるからこそ、楽しい学園生活が迎えることができるという考えは決して間違っているのではないだろう。

そういう意味では、自分は運が良かった方だと、レイフォンは思っていた。

入学式で新入生の喧嘩を止めた時に、メイシエンを助けた行為の結果として彼女とその友人である、ナルキ、ミイファイという友人と知り合うことができた。

そのきっかけのおかげで、こうして友達になることができたのだから、その一連の流れ

れはまさしく幸運と言つていいものである。

事実レイフォン・アルセイフという人間は、幼馴染からすぐに他人と親しくなれないという有り難くない太鼓判を押しされている程の男だった。

もし、メイシエンを助けなければ、そして彼女達に出会っていなければ、いまだに親しい友達ができていなかったかもしれない。

そのことはレイフォン自身も薄々と自覚しており、だからこそ友達になったメイシエン達の有難みを人一倍噛みしめていたのであった。

……長々と説明して何が言いたいのかというところ、つまりレイフォンはツイていたのだ——ほんの昨日までは……

「ふむ……手加減というのは案外難しいものですね。今までそういうのは無縁でしたから中々苦労しましたよ」

手加減できてねえよ、とレイフォンは力いっぱいツッコミを入れたところだが、それをすると隣にいるコレが喜ぶので無視をすることにした。

いや、それ以上にセヴァドスが編入してきたおかげで、今までの楽しい学園生活が壊れるのではないか、という不安がレイフォンの心を絞めつける最中である。

「しかし、小隊ですか。ツエルニのエリート集団、実に興味がありません」

普段と変わらない笑みを浮かべるセヴァドスだが、彼は間違いなく学園デビューに失

敗っていた。

正確には、当初は成功していただろう。

基本的には明るい性格で、社交性は根暗なレイフオンを遥かに凌ぐため、特に問題なく初対面のクラスメート達とも親し気に話していた。

そのままいけば、間違いなく多くの友人ができただろう。

転校初日の今日起きた、ほんの数時間前に起きたあの恐怖の戦闘訓練がなければ……レイフオン達にちよつかいをかけようとした三人の三年生達は、そのまま笑顔を絶やさないうセヴァドスの手によって瞬殺された。

その後三人は、その場を取り仕切っていた先生役の六年生の手によって、すぐさま医療科の者が呼ばれ、そのまま病院へと搬送された。

あの傷からして当分復帰することは叶わないだろう。  
いや、もしかすると今回のことがトラウマとなり、武芸者としては既に死んでしまったかもしれない。

周りが確実にひいているのに対し、そんな惨状を起こした張本人は、鼻歌交じりに機嫌良さそうにナルキとレイフオンに話しかけたのである。

せつかくですから、続けましょうか？ と。

三人の先輩を潰したことを全く気にも止めていないセヴァドスの姿に、その場にいた

武芸科の人間は彼の技量と精神に恐れ、明らかに距離を取ってしまった。

先程まで比較的友好的に話をしていたナルキですら、明らかに警戒と嫌悪の目で睨みつけているほどにだ。

その後、その噂は瞬く間に広まって、最終的には彼に話しかける者は、レイフォン一人となつてしまったのである——半ばその役割を押し付けられるような形で。

グレンダンという同郷ゆえか、唯一の小隊員だったせいかは、レイフォンにはわからないが、貧乏くじを引いたことや今までの平穩の日々が過ぎ去つたということだけは、嫌なほどに理解はできた。

とりあえず隣の元凶をぶん殴つてやりたい衝動に駆られるが、ここで手を出せば、戦鬨狂—セヴァドス—を喜ばすだけであることも。

レイフォンは気持ちを落ち着かせながら、隣で上機嫌に鼻歌を歌うセヴァドスを見る。

本当なら、放課後の小隊訓練に彼を連れていくつもりはなかったが、どのみちセヴァドスの性格だと何れはここを訪れることになるだろう。

ならば面倒事は初日に終わらしておこう、前向きなのか後ろ向きなのかわからない結論に至つたレイフォンは、腹を括つてからセヴァドスに話しかけた。

「先に言っておきますけど、絶対に暴れまわらないように」

「わかっていきますよ。流石の私も一日目からは行動を起こす気はありません」

なら二日目以降はどうする気だ、とか、初日から大暴れしてるだろ、と再びツツコミを入れたくなるレイフォンだが、セヴァドスを相手にする場合、無視するのが一番被害が来ないということは今日一日で思い出していた。

ならば、このまま無視をしておこうと考えたレイフォンは、話しかけてくるセヴァドスに対して適当に返事を返し続けた。

・  
・  
・  
・

そんなレイフォンの気遣いに構うことのないセヴァドスは、ツエルニでの学園生活初日をそれなりに楽しんでいた。

グレンダン育ちで、グレンダンから出たことなかったセヴァドスにとって、他の武者達がどんなものかを経験することができた。

無論、ここにいるのは学生という未熟者の集まりであったが、それでも手合せできたことはセヴァドスにとって意味のあるものだった。

——とりあえずあれくらいの手加減をしておけば大丈夫ということですね。

自分自身の行動にうむうむと納得するセヴァードス。

もしも、レイフオンがその考えを聞いていたら、やりすぎです！と言っていたかも知れないが、不運なのかそれとも幸いなのか、レイフオンはセヴァードスの先を歩いており、セヴァードスの考えていることに気付くはずがなかった。

——それに、鍛えるというのも楽しそうですね。よくよく考えると、同世代だとレイフオンとクラリベールしか戦ったことありませんし。

それ以外だと、兄であるサヴァリスやその他の天剣授受者しか戦ったことのないセヴァードスは、これからの学園生活に夢を馳せていた。

そんなことを考えているセヴァードスだったが、その足は確実にツエルニのエリート武者達が集まる錬武館へと向かっていった。

初めての旅に、普通の学園生活。

好奇心が人一倍強いセヴァードスにとって、それらは良い刺激であったが、やはりその身は武者。

戦いこそ最上、そう掲げる兄のサヴァリスと同様に、セヴァードスも戦うことが一番好きなのである。

小隊というシステムは既に転入の際にカリアンから聞いていた。

エリートと聞いて、セヴァードスが一番に思い付いたのは、グレンダンの天剣授受者達

であった。

勿論、過度な期待はしていないつもりであったが、それでも期待に胸を膨らませていた。

「流石にさっきの三人みたいなのはなさそうですしね」

「？ 何か言いましたか？」

思わず言葉を漏らしたセヴアドスに、前を歩いていたレイフォンが振り返る。

そんなレイフォンにセヴアドスは笑みを浮かべたまま、ステップを踏むような上機嫌な様子でその横を抜けていく。

「いえ、なんでもありませんよ。 それより早く向かいましょう」

「わかりました」

再び先を歩くレイフォンの後を追うように錬武館に向かって歩き出した。

ほどなくして、錬武館へたどり着いたセヴアドスは興味深そうに、キョロキョロと周囲を見渡しながら、レイフォンの後を追って入館する。

レイフォンの後を追っていると、何度か館内で数人の武芸者とすれ違う。

そんな彼らを見て、セヴアドスは少しだけ落胆した。

その様子を見ていたレイフォンが首を傾げながら声をかけてきた。

「どうかしましたか？」



「いえ、擦れ違う武芸者達を見ても、そう変わらないな、と思ひましてね」  
確かに小隊員の方が剋量が多く、動きもマシであった。

だが、それは先程倒した三人の武芸者達に比べてである。

正直、エリートと聞いていたので、もう少し期待していたのだが、残念な結果になつてしまいセヴァドスは珍しくため息をついた。

「レイフオンは、どう思いますか？」

「どう、つて言われても……」

レイフオンの反応は間違いなくセヴァドスが感じたことと同じことを指していた。

しかし、レイフオンからは特に不満等は感じられず、セヴァドスは首を傾げる。

「ふむ、まあいいです。そういえばここは学園都市でしたね」

学園都市がそういう所だと事前に聞かされていたために、切り替えの早い性格のセヴァドスはすぐに普段通りの笑みを浮かべて何でもないように歩き始める。

そう、別にセヴァドスは、この学園都市の生徒が目的でこのツエルニに転入していなかった。

セヴァドスがここを決めた理由は、すでに隣にいるからである。

——レイフオンと戦えるなら、おつりが出るくらいですし、物足りなければ鍛えてみるのもいいかもしれませんね。

もしかすると、凄い才能を秘めた者もいるかもしれないね、と考えたセヴァードスは、不満に覚えたこの環境が悪くないように思っていた。

再び機嫌を戻したセヴァードスは上機嫌で、レイフォンの後をついていく中、ふと何か忘れていたような気がした。

小骨が喉に刺さった、何ともどこかしい感覚。

何かを忘れていたような気がする、とセヴァードスは首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「いえ、少し考え事をしていただけなのですが、まあ思い出さない程度のことですから」

思考を巡らせていたせいで、その場に立ち止まっていたセヴァードスに、レイフォンは不審そうに声をかける。

その呼びかけに、セヴァードスは何でもないように思考を切り替えると、再びレイフォンの後を歩き始めた――その忘れられた事実をセヴァードスを思い出すのは少し先の話であった。

そうこうしているうちに、廊下を歩いていたレイフォンの足が止まり、その先には『十七小隊』というネームプレートが掲げられていた扉があった。

ここが目的地なのだろう。

「へえ、( )ですか」

「はい、とりあえず入りますよ」

手慣れた手つきでレイフォンが扉を開くと、セヴアドスもその後が続いて部屋へと入る。

訓練場だけあって、それなりに広く頑丈な作りになっている室内をセヴアドスは見渡していると、部屋の隅にツナギを着た少年の姿が見えた。

いそいそと周囲に散らばっている器具を一つ一つ手に取ってチェックしていく少年に向かって、レイフォンが話しかける。

「こんにちは、ハーレイ先輩」

「あ、レイフォン。準備できているよ」

レイフォンの存在に気づいて立ち上がったツナギの少年——ハーレイは、器具を片手にこちらに歩いてきた。

「ごめんね。すぐ済ませるから。とりあえず、錬金鋼を貸してくれる？」

「わかりました」

レイフォンが腰の青石錬金鋼（サファイアタイト）を抜いて復元させると、ハーレイは手慣れた手つきでそれを受け取る。

そのまま錬金鋼に機器を取りつけて、手前のモニターで数値を見比べる光景をレイフォンは黙ってその場で待っていた。

その隣でセヴァドスも並び立つとぼつりと呟いた。

「ふむ、やっぱり剣を持つんですね」

「……もう持つ気はありませんから」

少し残念そうに呟くセヴァドスの言葉に、レイフオンは少しだけ声を詰まらせて答える。

レイフオンの武芸の根本は、サイハーデン刀争術という流派である。

その名の通り、剣ではなく刀を用いる武術であるが、セヴァドスはレイフオンが刀を持つているところを一度も見たことがなかった。

それゆえ刀を持ったレイフオンと一度は戦ってみたいとセヴァドスは常々思っていたが、今日までその願いが叶ったことはない。

「何の話って……アレ？ 君は」

突然の話に首を傾げていたハーレイだったが、ようやくセヴァドスの存在に気付いたように声を上げた。

余程作業に集中していたのか、来客の存在に気付かなかったことに気まずそうに頬を指で搔くハーレイに、全く気にした様子がないセヴァドスが笑顔のまま自己紹介を始める。

「ああ、申し遅れました。レイフオンの親友のセヴァドスです」

「ハーレイ先輩、彼の言うことは半分以上は聞き流した方がいいですよ」

明らかな誇張発言をするセヴァドスに対し、レイフォンはあしらうように冷たい口調で口を開く。

言葉に棘があるレイフォンの姿に、ハーレイは一瞬戸惑いを見せるが、ある程度の解釈をして頷いた。

「えっと、つまりレイフォンの知り合いというわけだね。僕はハーレイ・サットン。

この第十七小隊の錬金鋼の整備をしているよ」

「よろしくお願いします。しかし、なるほど……中々見事なものですね。その歳でそこまでの技術を持つ者はグレンダンでもそうはいませんよ」

ハーレイの計器などの器具を触る手つきを見て、セヴァドスは感心したように口を開く。

勿論、世辞など言わないセヴァドスの言葉は常に彼が思っていることである。

セヴァドス自身、天剣を目指す武芸者として錬金鋼の整備の大切さは身に染みており、彼自身その手入れを自分自身で行っていた。

故に、簡単そうに行うハーレイの動きに思わず、感心の声を上げてしまったのである。そんなセヴァドスから褒め言葉を受け取ったハーレイは、満更でもなさそうに少し顔を染めて照れてしまう。

「え？　そうかな？」

「はい、いつ頃から、ダイトメカニックに」

「ダイトメカニック？」

「グレンダンでは、錬金鋼を調整や修理するものをそう呼んでいるですよ」

「そうなんだ。　実は実家が錬金鋼技師……ああダイトメカニックでね、幼馴染とか

の錬金鋼を幼い頃から弄ってたんだよ」

笑顔を浮かべてハーレイとの会話を楽しむセヴァドスの隣で、一人話に入れないレイフォンはそういうえば、とグレンダンでの日々を思い出す。

戦闘狂の性質を持つセヴァドスだが、兄のサヴァリスと違い、別に戦いだけに興味を示しているわけではなかった。

その中でも武芸の次に夢中になっていたのが錬金鋼、つまりは錬金学である。

上を、天劍授受者を目指すセヴァドスにとって、錬金鋼は重要な存在であった。

そもそも、天劍授受者への挑戦は、圧倒的なまでに天劍授受者が有利である。

無論、才能や経験が他の武芸者と違い、ずば抜けている天劍授受者だが、もしも挑戦者がその強さに匹敵する時、勝敗を決めるのは自分自身の力を如何に最大限まで使うことができるか、である。

そうなると間違いなく天劍を持っていない挑戦者が不利となる。

故に錬金鋼を研究し、自分自身の力を引き出すことができる物が必要です、とセヴァドスが楽しそうに言っていたのをレイフォンは思い出していた。

もしかすると、貧乏なグレンダンより、このツエルニの方が錬金鋼の研究をしやすいのかもしれない。

そんなことをレイフォンが考えていると、突然訓練場の扉が開いた。

「お、ハーレイ。例の物、できているか？」

だるそうに欠伸をしながら歩いてくる青年。

一歩踏み出すたびに、背中から尻尾のような長い金髪が揺れる。

シャーニツド・エリプトン。

レイフォンの所属する十七小隊の狙撃手である。

シャーニツドは、初めて見るセヴァドスに一度は視線を向けるが、すぐに興味をなくしたように視線を反らし、ハーレイに近づいていく。

「あの方は誰ですか？」

「え、シャーニツド先輩だよ。四年生でこの十七小隊の狙撃手」

シャーニツドは興味を持たなかったが、セヴァドスの方が興味を持っていた。

セヴァドスの問いに、レイフォンは当り障りのないように伝えると、セヴァドスはシャーニツドの方に再び視線を見る。

何か、興味を引くことでもあったのだろうか？

じつとシャーニッドを見つめるセヴァドスに、レイフォンは不審そうに視線を向けていると、セヴァドスは案の定行動を開始した。

まるで挨拶代りに、と指先で剽弾を作つて放とうとしたセヴァドスに、レイフォンは一瞬の判断で腕を抑えた。

「言つていませんでしたか？ 暴れるなつて」

「別に暴れる気はありませんよ。少し反応が見たいだけです」

それが暴れるということだ、と悪そびれもなく言うセヴァドスに対し、レイフォンは呆れながら剽弾を握りつぶすと、そのままセヴァドスとシャーニッドの間に体を割つて入れた。

レイフォンの行動に、セヴァドスは楽しそうに笑みを浮かべるだけでそのままおとなしく引き下がった。

そんな物騒なやり取りをセヴァドスとしているレイフォンの目の前では、シャーニッドがハーレイから受け取つた鍊金鋼の感触を確かめるかのように、くるくると手のひらで回転させていた。

その様子を見ていたセヴァドスは、何かに気付いたかのようにシャーニッドに尋ねる。



「ところで、その錬金鋼は、黒鋼錬金鋼（クロムダイト）のようですが？」  
シャーニツドの手に持たれているのは、頑強さで定評がある黒鋼錬金鋼（クロムダイト）であった。

狙撃手——つまり、銃に最も適しているのは軽金錬金鋼（リチウムダイト）である。

黒鋼錬金鋼なら、頑強さを生かして鉄槌などの大型の武器に適しているのだが、とレイフォンが首を傾げていると、セヴァドスが何かに気づいたように笑みを見せた。

「もしかして銃衝術ですか？」

「おつ、よく知ってんな。って、ところでお前はどちらさん？」

「申し遅れました。私はセヴァドスと言いまして、レイフォンの……」

「先輩、銃衝術なんて使えたんですね」

二度目のセヴァドスの自己紹介に、レイフォンは途中で止めに入った。

そんなやり取りを不思議そうに見ていたシャーニツドは、セヴァドスの質問に答える。

「ああ、まあ、こんなの使うのはかつこつけたがりの馬鹿か、相当の達人かのどつちかだろうけどな」

にやりと笑うシャーニツドに、セヴァドスも負けじと満面の笑みを返す。

「なるほど、では貴方は達人というわけですか？」

「いいや、買ってくれるのはありがたいが、俺は馬鹿のほうだぜ?」

「そうでしょか? 確かに達人という段階には達してなさそうですが、馬鹿ではありませんよね?」

「ちよつと、すみません」

段々と笑みが深くなり、目を輝かせるセヴァドスの肩を、レイフォンは掴んでそのまま後ろへとひきづつていく。

そのままセヴァドスを部屋の隅まで引き摺ったレイフォンはその手を放す。

「貴方は馬鹿ですか? 人の話を聞いていないんですか?」

「少し味見をする程度ですよ。銃衝術という珍しい相手ですから、楽しめそうです」

「楽しいのは貴方だけです」

入学していつもより気が高ぶっているのだろうか、普段以上に面倒くさいセヴァドスに対し、レイフォンは思わずため息をついてしまう。

まさか、これから毎日コレと付き合わなければならぬのだろうか?

これからの六年間が不安でいっぱいになりそうなレイフォンに対し、セヴァドスはいつもの満面の笑みを返す。

「まあ、とりあえず今日は止めておきますよ。学園生活は始まったばかりですから」

「絶対に喧嘩売らないで下さいよ!! 貴方は昔から面倒事しか呼ばないんですか

ら

「ふう、レイフォン。怒ってばかりで疲れませんか？ 誰かが怒ることはエネルギーを消費するだけだと言っていました。もっと思うがままに生きてみてはどうですか？」

「貴方は少し遠慮を覚えてくださいっ!!」

全く話の噛み合わないセヴアドスに、レイフォンの口調は段々と激しくなっていく。このままだと、ぶん殴ってしまいそうだ、そんなことを考えてしまうレイフォンを救うかのように、再び訓練場の扉が開いた。

「……遅れました」

現れたのは、天使……ではなかった。

眠たげにとことと訓練場に入ってきた銀髪の少女に、真つ先にシャーニツドが声をかける。

「よっ、フェリちゃん。今日も可愛いね」

「それはどうも……」

シャーニツドの軽口を流すようにして歩く少女——フェリ・ロスにレイフォンも挨拶をする。

「こんにちは、フェリ先輩」

「こんにちは……」

レイフオンの挨拶に愛想のない返答を返すフェリ。

さらに挨拶をするハーレイに返事を返す、フェリの前にセヴァドスが躍り出た。

しまった、と慌ててセヴァドスを捕まえようとするレイフオンよりも、セヴァドスの方が行動が早かった。

「初めまして、お嬢様。 迷子かな？」

「は？」

何故か慈愛に満ちているセヴァドスは、流れるような動きでフェリの頭に撫でる。

そんな行動にレイフオンも、そして当人のフェリも動きを止めてしまった。

そして、セヴァドスはすぐさま次の行動に移す。

「ふふふ、怖がることはありませんよ。 私が貴女の母上を探してあげますよ」

まずは迷子センターへと向かいましょうか、真剣な声でされど笑みを絶やさないセヴァドスを見て、レイフオンは昔のことを思い出して現実逃避した。

そういえば、彼つて子供好きだったよね……

孤児院で子供たちと遊んでいるセヴァドスの姿を思い出し、フェリの念威端子が舞うのを見ていた。

その端子を操る念威線者——フェリからは大量の念威が漏れ出している。

念威線者つて感情をあまり出さないんだっけ、軽く意識が飛んでいるレイフオンの視線の先には、目を輝かせたセヴアドスの姿が見えた。

フェリの念威の才能は、天劍授受者のデルボネに匹敵するのではないか？

そんな才能を見て、興奮しているセヴアドスからレイフオンはゆつくりと距離を取った。

そしてそのまま流れるように、窓ガラスを突き破つて外へと飛び出した。

その瞬間、背後から爆発音が流れて世界は逆転した。

## 第五話

「ふう、びつくりしましたね」

訓練場を吹き飛ばすほどの念威爆雷を喰らっても傷一つ負わなかったセヴァアトスは、レイフオンに懇願されるように錬武館を追い出されてから、先程の出来事を思い出していた。

まさか、ツエルニに来てアレほどの念威操者に出会えるとセヴァアトスは夢にも思っていなかった。

「せっかくですから、グレンダンに誘ってみましょうか？ 陛下も喜びそうですし」  
女の子も大好きだからなおのこといいだろう、とグレンダンに帰った時に土産話が増えたこと、もしかすると、学園都市にはまだ出会ったこともない傑物がいるかもしれない、と期待で胸を膨らませたセヴァアトスは、まるでステップを踏むかのように軽やかな足取りで商業エリアの人波を避けていく。

既に辺りは暗くなっているため、流星に何処の店にも人が溢れかえっていた。  
夕食はどこで取りましようか？と周囲の店をキョロキョロ見渡していたセヴァアトスだったが、

「あれは……」

暗闇を照らすように光るライトとイルミネーションの下を歩くセヴァドスだったが、突然何かに気がついたように足を止める。

セヴァドスの視線の先には、見覚えのある女性が一人で立っていた。

ミイファイ・ロツテン。

転入初日にレイフォンから紹介された三人娘の一人である。

近づいていくセヴァドスの視線に、ミイファイも気がついたのか、笑みを浮かべたままこちらに向かって手を振る。

「おーい、セヴァちゃん」

「やはりミイファイさんでしたか」

笑みを浮かべて手を振り返すセヴァドスに、ミイファイは上機嫌な声で答えた。

「正解〜。ところで、どうだった小隊見学？」

レイフォンの後についていったので、セヴァドスがどこに行っていたのか知っているのだろう。

ミイファイの質問に、セヴァドスは素直に思ったことを答えることにした。

「ええ、中々楽しめましたよ」

元々学園都市ということもあり、レイフォン以外には期待を持っていなかったセヴァ

ドスだが、フェリという圧倒的なまでの才能に出会ったことは、セヴァドスのツエルニの株を急上昇させる要因となった。

「そう？ いや、セヴァちんつてかなり強いじゃん？ だから物足りないかなって」

「まあ、確かに物足りないところはありますが、楽しみだつてありますから」

レイフォンという好敵手に、フェリという未知なる才能、幸先よく彼らに巡り合ったセヴァドスは、まだまだ素晴らしい才能を秘めている者がいるのではないかと期待に胸を躍らせる。

それに、もしも楽しめなければ、楽しめるようにすればいい、そう考えていたセヴァドスの目の前で、ミイファイが突然目を光らせる。

「ふーん……ところで、どう？ 今、ひま？」

突然のミイファイの誘いに、セヴァドスはこれからの予定を思い出す。

今日はバイトの初日ではあるが、まだバイトまでに十分に時間はあった。

「ええ、特に予定はありませんよ」

「よしっ！ なら少しその店でも寄つて話でもしていこうよ」

セヴァドスの返答に、気分を良くしたミイファイが指差すのは、一軒のレストラン。

清潔感のある白い外観で、光り輝くイルミネーションが浮き上がって見える。

まるで光のアートだ、と幻想的な光景に目を奪われたセヴァドスの隣にミイファイが立



つと、メモ帳を片手に店の情報を口にする。

「この店、タウン誌で人気トップ10に入るくらいに人気なんだよね」

「へえ、それはすごいですね」

身ぶり手ぶり元気の良いミイフィの説明と先程の幻想的な光景に、好奇心旺盛なセヴァドスは興味深そうに頷くと、その反応を見ていたミイフィも、にやりと笑みを浮かべて、肩にかけてある鞆から雑誌を取り出した。

「でしょ？ それに、ほら」

「ん？ ——カップル特製ディナー、ですか」

ミイフィの手により開かれた雑誌のページには、目の前の店の特集が組まれており、様々な料理やデザートが紹介されていた。

その中でも特に目立ったサービスは、カップルで来たお客様に提供するスペシャルディナーコースである。

「うん、かなり豪華らしくて、まだうちの雑誌では取り扱ってないんだ。 というわけで、一緒についてきてくれる人を探していたわけ」

「なるほど、別にかまいませんよ」

「よっしゃっ、なら行くこうか」

意気揚々とレストランの中へと歩いていくミイフィの後を、セヴァドスは笑みを浮か

べたままついていく。

「お、中々いい感じだね」

ミイファイの言う通り、ややこじんまりとした店内だが、柔らかい光を放つ照明が暗い店内を照らしている。

店内の座席は満席となっており、その大半は、カップルだろう男女二人組の客で互いに仲睦まじげな空気を漂わせていた。

流石は人気店ですね、と感心していたセヴァドスの服の袖をミイファイが引つ張る。

ミイファイとともにウェイターに案内され、入口から一番奥の席に案内されると、メニューを渡されて簡単な説明を受けた。

説明といっても別段変わったことはなく、忙しそうに次のお客様を出迎えに行くウェイターを見送り、メニュー表を見る。

そこには様々な料理の写真と品数が並んでいたが、一番に目を引いたのはミイファイの言っていたカップル限定のディナーである。

六種類のメイン料理に六種類のサラダ、そして十種類のデザート、お好みのドリンクという構成のコースメニューとなっていた。

そのメニューをミイファイに向けると、ミイファイも同じ写真を指さしてにんまりと笑う。

「料理は選択して決めるんですね」

「うん。しかもこのディナーで作る料理は、カップル限定だから食べれない人も多いんだよね」

ミイファイはそう言つてメニューを楽しそうに見ているが、セヴァドスの周りにはカップルしかいなかった。

青春真っ盛りの学園都市だからと思つたが、もしかするとカップル以外は入りにくい店なのかもしれない。

では、レイフォンと一緒に来るのは難しそうですね、と微かに落胆しているセヴァドスに構うことなく、ミイファイは話しかける。

「ねえねえ、サラダはこのカリカリ芋のシーザーサラダにしようか？ 一番人気つて書いてるし」

「そうですね。メインとデザートは二つ頼めるようですか？」

「本当だ。じゃあさ、パスタを頼まない？ 前評判だところつてパスタが絶品らしいよ」

「そうなのですか？」

「うん、何でも生麺を一日寝かしたとかで、もちもちした触感が人気なんだつて」  
力説するミイファイの意見に習つて、セヴァドスは二種類のパスタに視線を向ける。

一つはチーズと卵が混ざり合ったトロトロのクリームソース系、もう一つはあっさりとした海鮮系の魚介パスタであった。

セヴァドスは、自分の好みであるクリームソース系——半熟卵と厚切りベーコンのカルボナーラを頼むことにした。

そんなセヴァドスを見て、ミイフィは何処か恨めしそうに呻く声を上げる。

「うえ、流石男の子だね。私はこつちの海鮮系にするよ。クリーム系は後で苦しむことになるし」

「? そうなのですか?」

武芸者のセヴァドスには、女性特有の問題を抱えるミイフィの言葉が理解できずに首を傾げている。

机の隅に備え付けてある呼び鈴でウェイターを呼ぶと、ミイフィが手早く料理を注文すると、二人は料理ができるまで世間話でもすることにした。

話の内容は、セヴァドスの暴走ともいえる奇抜な行動の数々で、ミイフィはその話を聞いて声をあげて笑っていた。

他にも映画や本などの娯楽的な話、学園での勉強の話など、話題は幅広く広がり、喋り手は交互に交代するほど話題は尽きなかった。

「——へえ、そんなことがあったんだ」

「ええ、ナルキさんからは完全にドン引きされてしまいました。何故でしょうか？」  
そして話題は、午後にセヴァドスが起こした訓練場の事件に切り替わる。

噂は広まり、簡易な内容はクラスどころか学園に流れつつあったが、ミイファイは詳しく知れたかつたらしく、興味深そうにセヴァドスの話を聞いていた。

「まあ、ナツキは真面目だからね……武芸者らしいっていうの？」

「そうですね。そこが彼女の良いところではありませんか？」

セヴァドスが友人であるナルキを褒めると、ミイファイは自分のことのように嬉しそうに頷いた。

「おつ、よく見てるね。何？もしかして気があつたりする？」

「はい、鍛えれば中々強くなれそうですから」

一年生でまだまだ未熟なナルキだが、伸びしろはあるとセヴァドスは睨んでいた。

無論、天剣になれるという並はずれた才ではないが、頑張れば小隊にはなれるのではないかというのが、セヴァドスの見解である。

そんなセヴァドスに対し、ミイファイの言葉の意図は少し違っていたようで苦笑いをしていた。

「あははは、そう意味じゃないんだけどな……」

「おや、どうやら料理の方が来たようですね」

そうこうしているうちに、料理ができたようで、ウェイターが料理を運んできた。テーブルに置かれたパスタから湯気が立ち込めており、それと同時に食欲が湧く臭いがしていた。

故郷のレストランよりも質が良さそうな料理を見て、セヴァドスは思わず関心してしまおう。

「へえ、これは期待できますね」

「そうだね。よし、食べようか?」

「そうですね。暖かい時に食べるのが一番おいしいものですから」

手を重ねて、目の前の料理に一礼すると、セヴァドスはパスタをフォークに絡めていく。

トロトロの半熟卵を潰し、真っ白なホワイトソースと混ぜ合わせると、そのまま口へと運ぶ。

味の方は、予想を上回るものであった。

料理の腕も悪くはないし、何より素材が良かった。

食糧難に陥ったことがあるグレンダンよりも、このツエルニに使われているものの方が、明らかに質が良い。

グレンダンでももう少し改善しないのでしょうか?と他人事のように考えるセヴァ

ドスだったが、目の前の料理の誘惑に勝てず、再び食べることに没頭していく。

ミイファイと違い、大盛りを頼んでいたセヴアドスだったが、普段の運動量もあり、次々に胃へと収めていく。

四分の三ほど食べ終えて、ふと顔をあげてみると、こちらの方を見ているミイファイと目があつた。

「少し食べますか？」

「え、いいの？」

「構いませんよ」

気になっていたのだろうか、身を乗り出しそうなくらいに喜んでいるミイファイに、セヴアドスは新しいフォークとスプーンを使って小皿に移していく。

「うん、ありがとう。私の少し分けるからね」

「ありがとうございます」

ミイファイから受け取ったペペロンチーノを口に運ぶと、セヴアドスは満足そうに頷いた。

向かい側に座るミイファイも、念願のカルボナーラを食べて満足したようで、鞆から取り出したメモ帳に感想や評価などを書きこんでいく。

その後会話も交えた食事は続き、デザートを食べ終えた後、ミイファイは苦しそうに

しながらも満足そうに口を開く。

「あーおいしかった。けど、明日体重計に乗るのが怖いかも」

「デザートを食べていた人間のいうセリフではありませんね」

「だってさ、セヴァちゃんがおいしそうに食べてたし」

「まあ、私はこの程度のエネルギーなら今日中にでも消費できますし」

武芸者ならこの程度の食事は何でもないのでセヴァドスは何でもないので口にする、それを聞いていたミイファイは少し恨めしそうにこちらを見る。

「まあいいか、そう何度も来れるところじゃないし」

「む？ お相手の方がいないからですか？」

「違いますー、そうだけ違いますー」

さらっと失礼なことを吐くセヴァドスに、ミイファイは特に不快感を浮かべることなく笑みを返す。

「まあ、セヴァちゃんの言ってることは最もだけど、それよりも、ここそれなりに値が張るところだしね」

ミイファイの言う通り、このレストランは通常の店より値段が少しばかり高めに設定されてきた。

もちろん、それに担うほどの質の料理であったが、学生が何度も足を運ぶことはでき



ないだろう。

だが、それは普通の学生である場合である。

「では、私が払いますね」

何でもないように伝票を取ったセヴァドスに、ミイファイは驚くように声を上げる。

「えっ？ いや、ここは私が払うよ。だってセヴァちゃんは、今日ここに来たばかりだし」

奢るつもりだったのだろう、先ほどまでの笑みを一転してミイファイの申し訳なさそうな声に、セヴァドスは一枚の書類を鞆から取り出す。

「問題ありませんよ。私は奨学金はAランクですし、バイトも決まっています」

「うえっ?! そうなのっ? って本当だ」

セヴァドスの手によりお机に置かれた書類には、しっかりとAランクの文字が書かれていた。

因みにこの評価は、生徒会長であるカリアンから交渉したわけでもなく、編入の際の論文の出来とテストの点数が極めて良かったためについた正当な評価である。

つまりこのランク差がレイフォンとの頭の出来の差である。

「それに武芸者の手当もありますから、この程度の出費は問題ありませんよ」

それ以外にも、実家から——正確にはサヴァリスからも仕送りもあるため、特にお金

に困る状況でもなかった。

「うーん。じゃあさ、私に頼みたいこと、とかってある?」

流星に奢られるだけでは悪いと思ったのか、交換条件を出すミイファイに、セヴァドスは少しだけ考えるように目を瞑る。

友人にご飯を奢るくらい何でもないことだが、どのみちミイファイに頼みたいことがあつたのでこの提案は丁度良かった。

「じゃあ、小隊に所属する全武芸者のデータとかつて集められますか?」

「え、別にいいけど何に使うの?」

「それは後のお楽しみということでお願ひします」

誤魔化すように楽しげに笑うセヴァドスの表情を見て、ミイファイは少しだけひいていたが、追及はしてこなかった。

小隊員のデータ——そんなものを使い道は一つである。

これからの未来に心を弾ませるセヴァドスに気付いた様子もなく、ミイファイは何か思いついたかのように口を開く。

「ところでセヴァちゃんって、バイトは何をするの?」

ミイファイの問いに、現実に戻されたセヴァドスは何でもないように答える。

「都市警察っていうものですよ。編入の際に聞いたら、これほどまでに武芸者とし

「この天職はないと思ひましてね」

この後、仕事です。と言ってセヴァードスは素敵な笑顔を浮かべる。セヴァードスの転校初日は、まだまだ終わらない。

## 第六話

鍊武館の後片づけを終え、ようやく家路に着くことができるレイフォンだったが、ただ彼にはやるべきことが残っていた。

空は暗く、辺りは昼間と違い静まっている頃、レイフォンはとあるビルの屋上からの夜景を眺めていた。

勿論、気分転換で夜風に当たっているわけではない。

いや、寧ろ今日の出来事を振り返れば、そんな行動も悪くない気がした。

だが、残念なことに今は頼み事を受けるためにここにいたのであった。

剣帯に刺さった鍊金鋼を抜いて感触を確かめるレイフォンの背後から——ナルキが声をかけた。

「すまんな」

「い、いよ」

隣に立って申し訳なさそうに頭を下げるナルキに、レイフォンは何でもないことであると笑みを返す。

レイフォンがここにいる理由——それはナルキから武芸の実力を買って仕事を頼

まれたからである。

仕事の内容は、データチップを盗んだキャラバンの人間の捕縛というものであった。何でもなような仕事内容にも聞こえ、ツエルニ最高アタッカーと名高いレイフォンが出る問題ではないが、実は中々厄介な仕事内容となっている。

盗人の正体が、普通の一般人などではなく、腕の良い武芸者が相手になると都市警察の人間だけでは荷が重たくなってくる。

こういう時、一般的にツエルニの中で優秀な部類な武芸者にあたる小隊員の者に頼むのが一番なのだが――

「本当に良かったのか？ 本当は小隊の人間がやるようなことじゃないんだ」  
ナルキの言うように、エリート志向でプライドの高い小隊員は、こういうネズミ捕りのような仕事を好まなかった。

都市の平和を守るのが武芸者の仕事の一つであるにもかかわらず、こういう時に力を発揮しないのはおかしい話だとレイフォンは思っていたが、現状、ツエルニではそういう風になっていた。

「うん、構わないよ。ナルキには日頃からお世話になっているし」  
特にそういう拘りもないレイフォンは、迷うことなく了承した。

友人の頼みを断る、というのはレイフォンにはできないことであつたし、何よりも今

回は少し気になっていることがある。

「それに彼を放置していた方が危ないし、ね」

「ああ……」

これから戦うことになるだろう武芸者達よりも今か今かと、出番を嬉しそうに待つている戦闘狂にレイフオンは注意を割いていた。

そんな心境のレイフオンを悟ったかのように、ナルキは同情の視線を向けながら肩を叩いた。

「レイとんは知らなかったのか？　彼が都市警察に入ろうとしていたことを」

「うん、そういう話はしなかったからね。でもよくよく考えてみると、似たようなことを故郷でしてた気がするよ」

レイフオンの脳裏に浮かぶのは、グレンダンにいた頃のことである。

凄腕の武芸者が多い都市とはいえ、犯罪が少なかったわけではない。

寧ろ、物資やお金などが無い貧困層が住まう場所では、頻繁に軽犯罪が多発していた。

勿論一般人が犯罪を起こすこともあったが、それ以上に武芸者がもめ事を起こすことが多かった。

武芸の本場とも謂われるグレンダンの武芸者のレベルは高く、そのような者が犯罪行為に及ぶと周りへの被害が大きくなるのは言うまでもない。

そういうときに活躍するのが天劍授受者という怪物達とセヴァドスのような達人級の武芸者達である。

立場などでなかなか動くことができない天劍授受者達に対し、比較的自由な人間のセヴァドスは、すぐに行動を起こして犯人逮捕に協力していた。

勿論、セヴァドスが平和を守るために動いたという殊勲な正義感を持っていたわけではなく、ただ犯罪を起こした武芸者と戦いたいがために手伝っていたことはグレンダンに在る者なら知っている常識であった。

つまりレイフォンがこの場にいる一番の理由は、これから取り押さええる犯罪者（ぶげいしや）ではなく、それを取り押さえようとする武芸者（セヴァドス）を止めるためである。

「まったく、都市警察の人間が面倒を起こすというのは、どうということなんだ」

「それは同感だけど、取り逃がすということはまずあり得ないと思うよ」

武芸者の潔癖さをもつナルキは少しだけ憤慨しているようだが、レイフォンはある意味いい人間を雇ったかもしれないと内心、感心するように頷いていた。

グレンダンでも驚異の逮捕率を誇るセヴァドスなら、ツエルニの治安を脅かす犯罪者を捕まえることは容易なことだろう。

「ってどうやら動いたみたいだな」

「あ、うん」

ナルキと話をしていると、いつも間にか作戦が始まろうとしていた。

作戦の手順として、まず初めに目標がいる宿泊施設に都市警察に人間が近づいて、相手に最終勧告としてデータチップの返還の交渉を持ちかける。

それに相手が応じれば、レイフォン達は御役目御免なのだが、そんなに簡単に済む話ならここまでの事態には陥っていないだろう。

相手も武芸者、それも力のある武芸者達である。

ひな鳥のようなツエルニの包囲なんぞ、強引に斬りぬけてくることは容易に想像できなかった。

その時がレイフォン達の仕事の始まりである

レイフォンとナルキが視線を宿泊施設の入り口に向けると、二人の交渉人が犯人たちに近づいていく。

交渉を開始しようと拡声器を手に持った次の瞬間、事態は一気に急変する。

扉が蹴破られると同時に現れた犯人達の手により、二人の交渉人達は一瞬の内に地面に転がされたのである。

現れたの武芸者の数は五人。

全員が淀みのない動きで、都市警察が敷いた包囲網を易々と突破していく。



「まずいね。 かなりの手練だ」

活剽で強化された視力で、レイフォンは武芸者達を見る。

武芸者達が流す剽の量とその質、身体の動きから、レイフォンは学生武芸者では荷が重い相手と判断すると瞬時にビルの屋上から飛び降りた。

迷いのない流れるような動きに近くにいたナルキが全く反応できない中で、そのレイフォンよりも早く動く人間がいた。

セヴァドス・ルツケンスである。

向かい側のビルにいたセヴァドスは、閃光のような疾さでレイフォンよりも先行すると武芸者達に向かって飛んでいく。

その後ろ姿を追いながらレイフォンは嫌な予感を感じつつもその足を速めた。

・  
・  
・  
・

様々なことを思い悩むレイフォンとは違い、セヴァドスの思考は単純明快。

実にシンプルな考えで満面の笑みを浮かべながら、ツエルニの空を駆ける。

右手には、愛用しているガントレット型の鍊金鋼ではなく、都市警察で支給される警棒の鍊金鋼が握られていた。

小隊ではない一年生のセヴァドスには、鍊金鋼を携帯許可は許されていない。そのため使い慣れていない得物で戦うことになるだろうが、セヴァドスにとつてその程度のことは問題ですらなく、クルクルと警棒を回して視線の先の獲物を見る。

学生武芸者を容易に蹴散らす五人の犯罪者。

——グレンダンにいたのよりも質は落ちそうですけど、学生相手よりは楽しめそうですね。

戦うこと。

それがセヴァドスの全てといつても過言ではなかった。

「そういえば、確か威嚇からでしたね。犯罪者とはいえ、先に攻撃を仕掛けることができないとは、全く面倒ですね」

そろそろ射程に入る時、セヴァドスは事前に教わっていたルールを思い出した。

都市警察という組織は、何でも先に警告をしなければならぬらしい。

確かグレンダンでもそんなことを言っていた気がしたが、実に面倒なことだと思う。

そもそも奇襲されるほうが悪いのではないだろうか？

「しかし、この状況下でそんな温い考えは命取りになりそうですけど、まあこれが学園

都市というものですかね」

歴戦の戦士でもあるセヴアドスのシビアな考えは的を得ているのだが、恐らく周りの者の意見を述べるとすれば、セヴアドスにはこれくらいの束縛があつたほうが都市のためであると、全員が口を揃えて言うだろう。

「さて、ではそろそろお仕事を始めましょうか」

思考を切り替え、目の前の武芸者を獣の如き鋭い視線で睨みつける。

戦闘態勢に移行したセヴアドスは、膨大な剄を練り、それと同時に大きく息を吸い込む。

内力系活剄の変化、戦声。

剄のこもった大声で、大気を振動させる威嚇術で、熟練者となれば振動した大気により金属片などを吹き飛ばして、相手を攻撃することができる技でもある。

セヴアドスは、その際に自身に漲る闘気を飛ばして、相手への挨拶代わりとしたのだが、ここで予想外なことが起きてしまう。

「おや」

セヴアドスの姿を見るや否や表情を強張らせた犯人達は、セヴアドスを恐れるように四方へと飛んでその場から逃げ出していく。

セヴアドスが放った剄量の異常さに気づき、自分では絶対に勝てない人間と瞬時に

悟ったのだろう。

恐れをなした犯人達であったが、そのことを瞬時に判断できるということは場数を踏んだ強者に違いはなかった。

しかし、彼らの取った行動は、セヴァドスにとって面白くないものである。

闘争を楽しみとするセヴァドスは、彼らの逃走を見逃すはずがなかった。

「ならば、鬼ごっこと行きましようか」

比較的逃げ遅れた男に、セヴァドスは爆発的な速度の旋回で、一瞬にして距離を詰め寄ると、膨大な力が纏わりついた警棒を振り下ろす。

技ですらない理不尽なまでの暴力だったが、目の前の犯人——A（仮名）を倒すには十分だった。

セヴァドスの一撃を反応すらできなかつた犯人Aは、背骨へのその一撃を受けて、蛙が潰れたかのような呻き声と共に、そのまま真下の建物の屋根を突き破って、地面に叩きつけられて沈黙した。

「む、一撃で壊れてしまいましたか？ やはり量産品はいけませんね。 まあ、私は、拳が一番ですから問題ありませんが」

ピクリとも動かない犯人Aへの関心を失ったセヴァドスは、破損した錬金鋼をその場で放り投げると、少し離れた場所にいた次の獲物の犯人Bの方へと跳んだ。

「っ!? お前何処からっ!!」

「今回は、趣を凝らして前に立ち塞がっていましたがどうでしょうか?」

気配を感じさせることなく、突然、セヴァドスは犯人Bの目の前に躍り出た。

その行動に犯人Bは驚きに満ちた表情で硬直し、それを見ていたセヴァドスは、余裕綽々といった様子で笑みを浮かべる。

「戦場でそんな隙を見せてもいいんですか?」

「——っちっ!!」

挑発的な言葉をぶつけるセヴァドスに、犯人Bの表情は驚きから怒りへと変化し、腰の錬金鋼を引き抜き復元させる。

復元された錬金鋼の形状、それは奇しくもレイフォンに良く似たものとなっていた。

「剣ですか……彼と戦う時の予行演習とさせてもらいましょうか」

「ぬかせっ!! 学生風情がっ!!」

旋到で一瞬のうちに距離を詰めてきた犯人Bは、怒りに満ちた一撃を振り下ろす。

怒りに囚われていたとはいえ、その剣筋は冷静そのもので、確実にセヴァドスの急所を狙っていた。

その躊躇いの無さは間違いなく戦場を知るもので、そんな場数の慣れた相手に、武芸の本場で鬼才と呼ばれたセヴァドスは楽しげに笑みを浮かべた。

「へえ、中々悪くないですよ。これなら都市警察へと入った甲斐がありますね」

「くつ、粹がるなよつ、小僧っ!!」

犯人Bの剣筋は、セヴァドスを確実に追い込んでいく。

もう少しで当たりそうなくらい、紙一重な剣撃にセヴァドスは後退する。

——だが、男の剣がセヴァドスを掠めることはなかった。

すでに五十回は剣を振るっただろう。

それでも一度もセヴァドスに傷を作ることはなかったし、セヴァドスから三センチ以上離れることもなかった。

振るう者は恐怖で表情が歪み、避けるものは花の咲いたような優しい笑みを浮かべる。

余りに異常なその光景に、犯人Bは恐怖に震えながら声を上げる。

「お、お前一体何者なんだよっ!!」

「そう言えば、そろそろ一分は経ちますね。貴方だけに構っている暇はありませんから」

男の問いに答えることはなく、セヴァドスは右手の人差指と中指に剉を込める。

そして、そのまま右手を弓を引くように下げると、矢のように右手を突き出した。

「タイムアップです」

外力系衝剄の変化、風花穿。

大気を切り裂き、一線の閃光の如き光を放った衝剄の槍は、犯人Bの右肩を貫き刺さると、そのまま貫通して男の右肩に真つ赤な花を咲かした。

「——ぐぎやああ、ああああ!!!」

「二応、加減はしましたよ。ではさようなら」

セヴアドスが腕を引き抜くと、犯人Bは悲鳴を上げながら錬金鋼を取り落とす。

そんな凄惨な光景を見ても、笑みを崩さないセヴアドスは男の後頭部を蹴り、隣の建物の中へと吹き飛ばした。

犯人Bの容体を確認することもなく、セヴアドスは次なる獲物を探しに空を舞う。

「さて、次は……おや、時間を掛け過ぎましたか」

セヴアドスの目に捉えたのは、逆方向へと逃げた二人の犯人達を蹴散らしたレイフオンの姿である。

そして、最後の一人である犯人Eに向かって剣を振り下ろそうとするレイフオンに向かって、微弱な衝剄の弾丸を放つ。

飛来する弾丸に、レイフオンは瞬時に反応すると、振り上げられた剣を一閃して叩き落とした。

「何をするんですか？」

「まあ、少し待ってください」

突然攻撃され、普段以上に殺気立った冷徹な眼つきでレイフォンが睨んでくるのに対し、セヴァドスはその横に立つと笑みを浮かべたまま世間話をするような気楽さで口を開く。

「私は、まだ二人しか倒していません」

セヴァドスが二人倒し、レイフォンが三人目を倒そうとした。

つまりは、獲物がほしいというわけである。

そんなセヴァドスの言い分を聞いて、レイフォンが呆れたように声を出す。

「それは貴方が遊んでいたからでしょう？」

「否定はしません」

「じゃ、さっさと倒してください」

特に犯人逮捕にこだわりのなかったレイフォンは、セヴァドスに最後のいけにえを譲った。

「しかし、そうなるとか譲られたみたいで嫌ですね。ふむ……一度逃がして二人

で追いかけるというのはどうでしょうか？」

「どうしてそんな意味のわからない提案ができるんですか……」

「いえ、レイフォンとも勝負ができて一石二鳥じゃないですか」



早く終わらしたいレイフォンに対し、遊び足りないセヴァドスの意見は平行線を辿り、話し合いの決着がつかなかった。

埒が明かないと判断したレイフォンとセヴァドスは、もう一人の当事者に聞くことにした。

「では、貴方に聞きましようか？ どっちと戦いたいですか？」

「へっ？」

レイフォンにより仲間が一瞬で潰されたため、腰を抜かしていた最後の一人である犯人Eに、セヴァドスは笑顔で尋ねる。

その問いは、武芸者Eにとって予想外で理解しがたい内容で、茫然と目の前のレイフォンを見ていた。

「こっちは仕事を早く終わらしたいので、早く決めてください」

「え？」

レイフォンから発する冷徹な視線を見て、犯人Eは自分ごときが敵う相手ではないと本能的に悟ってしまい、視線をそらしてしまう。

彷徨っていた視線は、その隣にいるセヴァドスにも向けられ、セヴァドスは笑顔のまま右手を振る。

右手を振った際に、右指に滴る血液が周りに飛び散り、妙にシユールで恐怖映像だつ

た。

前門に虎、後門に狼という生易しいものではなく、両門とも死神というのが適切な表現であつた。

故に、犯人Eが取れる手段は一つしかなかった。

「と、投降させてください、い」

鍊金鋼を遠くへ放り投げ、両手を掲げることだけが、犯人Eがこの場から逃げることのできる最後の抵抗手段であつた。

## 第七話

——巡る日々の中で、平穩という優しい時間を過ごすレイフオン。

だが——彼は知っていた。

この平穩は、常に死という危険に満ちた紙一重の存在であることを。

故に彼は、戦わなければならない。

ツエルニで出会った大切な人達を守るために。

——世界とは、死に満ちた狂ったモノだと、セヴァドスは幼い時から理解していた。

弱きものは死に、強き者だけが生きることが許されるこの世界で、生まれ落ちたその時から狂っていた。

狂った世界では、狂った人間が正常である、と。

故に彼は戦う。

死と生が重なる汚れた空の下で——

・  
・  
・  
・  
・

「じゃ、レイフォン。 また明日」

「お疲れ様です」

日が落ち、黄金色の光を放つ夕暮れ。

レイフォンはハーレイと入口で別れて練武館を出る。

最近の訓練は個人練習が多く、一七小隊員での隊の練習が殆どなくなっていた。

その原因の一番の理由は、小隊長である二ーナの不在である。

体調を崩したというわけではなく、朝の授業には休むことなく受けているのだが、放

課後の小隊練習のみ欠席を繰り返していた。

練習に不真面目なフェリとシャーニッドだけではまともな鍛錬をすることはできず、

そのまま解散という流れとなっていた。

レイフォンだけは、ハーレイの実験に手伝いをして練武館で汗を流していた。

——今日で一週間か。

武芸に積極的な方ではないとはいえ、流石に何度もこういう日が続くとレイフォンも二ーナのことを考えてしまう。

武芸者の見本とされるような熱意と真っ直ぐな姿勢は、レイフォンにとって眩しいも

のであった。

だからなのか、ニーナにはあのままでいてほしいと思つてしまうのは。

練武館を出てほどなく、考え事をしていたレイフォンだったが、前方で立ち止まつて  
いる人影に足を止める。

「フェリ先輩？」

そこにいたのは、レイフォンよりも早く帰宅したフェリであった。

彼女の手には買い物袋が握られており、生活感のあるその姿は少し浮世離れした容姿  
のフェリには不似合であった。

——料理とかしなさそうだし。

「——何か言いましたか？」

「いえ、特に何も」

妙に感の鋭いフェリに、レイフォンは慌てて首を横に振る。

その際、周囲を見渡してみたが念威端子などは飛んでいなかった。

「こんな時間まで練習ですか？」

「え、まあそうですね。ハーレイ先輩の頼みもありますから」

実際ハーレイの頼みもレイフォンには特に苦ではなかった。

稀に自分の研究成果を楽しそうに話すハーレイの話は、学のないレイフォンには苦痛

そのものだったが、今日は特にそういうこともなく、データのみ取り続けていた。

「まったく、お人好しですね」

「はあ」

「まあ、いいでしょう。 買い物は済みました、行きましょう」

そう言つて前方を歩き出したフェリにレイフォンは慌てて声をかける。

「えっ?! 行くつてどこへ?」

「ああ、そうでしたね」

伝え忘れました、と無表情のままフェリはこう答えた。

—— 兄が話があるようです ——

その言葉にレイフォンは思わず唾を飲み込んでしまう。

フェリの兄であるカリアンには、レイフォンは色々世話になつていた。

武芸科に無理やり入れられたりされてしまったが、特に嫌いというわけではなく、ただ苦手である——それがレイフォンの抱くカリアンへの印象である。

そんなカリアンに呼ばれたということは嫌な予感しかしなかつたが、行かなければ後々面倒なことになりそうだと、レイフォンは確信に近い予感を覚えていた。

先を歩くフェリを追うようにしてレイフォンも歩き出す。

進み始めた二人の間には沈黙のみ続いており、ほんの五分ほどでレイフォンはこの静

かすぎる空気が我慢が出来なくなってしまうた。

「そ、そういうえば最近隊長はどうしたんでしようね？」

出てきた会話は何処かわざとらしかった。

先輩であり、同隊員にあたるシャーニッドのような社交性などは、レイフォンの中  
は存在するはずもない。

精一杯のレイフォンの話題提供に対し、フェリの対応は冷たかった。

「さあ？」

「ええ……」

全く興味がありません、と謂わんばかりのフェリの反応にレイフォンは再度同じ質問を  
ぶつけた。

「でも心配じゃありませんか？」

流星に同じ小隊にいるのだから心配ではないか、と微かな希望を乗せたレイフォンの  
思いの返答は冷たい視線であった。

フェリは呆れたようにため息をつく。

「……はあ、何です？ 隊長の姿が見えないことがそんなに寂しいのですか？」

「そういうわけではないんですが」

小さな体から発する圧力（プレッシャー）にレイフォンは思わず後ずさりしてしまう。

そういうわけではない、レイフォンは思わずそう言ってしまったが、実際のところはやはり心配である。

幼性体が襲来した時、剣を取った理由は幼馴染であるリーリンの手紙に書かれていた言葉だったが、ニーナの眩しい程の志を絶やしたくないという気持ちがあったのも確かだ。

勿論、メイシエンやナルキ、ミイファイといった大切な友人を守りたいという気持ちを忘れたわけではないが、それでもニーナの言葉やあり方にレイフォンが行動したことは間違いなかった。

「人の心配するのはいいですが、自分のことを心配したほうがいいですよ」

「え、どういふ……」

「……喋り過ぎました。食材が傷んでしまいます」

何か言いかけたフェリは、そのまま口を閉ざして両足の歩みを進めた。

そんなフェリを見て、レイフォンは一つだけ言いたいことがあった。

「フェリ先輩、そんなに動かすと卵が割れてしまいますよ」

「あ」



目的地であるロス兄妹の住むマンションに辿り着いたレイフォンは買い物袋を片手にフェリの後に続く。

ロス兄妹の部屋は、レイフォンの住む寮とは違い、広々とした空間が広がっており、部屋には高級そうなインテリア家具が備えられていた。

確実な格差を見せられたレイフォンだったが、その後起こる出来事により全て吹き飛んでしまった。

宙を舞う歪なジャガイモの残骸、真つ二つに折られた皮付きニンジン、粉々の生卵。まるでそこは戦場のようであった——レイフォンは後にこの光景を振り返ってそう答えた。

やはり彼女は料理ができなかった。

それも間違いなく料理スキルがゼロでは取まらないほどで、むしろマイナスといつてもおかしくはなかった。

まるでキッチンの汚染獣ですね、と意味不明な納得をしたレイフォンは、ぎこちないフェリのぎこちない包丁捌きを後ろから見学——できなかつた。

歪なジャガイモの残骸は水洗いを行うとそのまま皮を切つて、沸騰した熱湯に放り込む。

折られたニンジンには包丁を滑らせて皮を剥き直すと、そのままスティック状に切つていく。

粉々の生卵は、綺麗なもののだけボールに移して殻だけ取り除くと、そのままフォークでかき混ぜておく。

グレンダんにいた頃から料理を手伝っていたレイフォンは、その手際のいい動きで死にかけていた食材達を甦らせると、フェリに鍋の火加減だけ見ってもらつてそのまま料理を仕上げていく。

その間、フェリから何とも言えない視線を受けていたのだが、とりあえず気づかないフリをする。

こうしてレイフォンの苦勞の末、なんとか形になった料理がテーブルに並べられた頃、ようやくカリアンが帰つて来た。

「うん、美味しいねえ。実は手料理というものにはとんと御無沙汰ぶりだね、故郷にいたことを思い出すして懐かしいよ」

レイフォンとフェリによる合作？の料理に、満足げに舌鼓するカリアンにレイフォンは苦笑いを返す。

その隣ではフェリが不機嫌そうに、自分の兄であるカリアン——ではなくその隣に座る人間を睨みつけていた。

「腕は落ちてませんね、私もかれこれ貴方の料理を食べるのは一年ぶりですよ」  
カリアンの隣で上機嫌に料理を口に運ぶ——セヴァドスに、フェリは無表情だが明らかに不機嫌そうな雰囲気を出して舌打ちを鳴らす。

そんな二人の様子を見て、レイフォンは思わず溜め息をついてしまう。  
セヴァドスがこの地に来て、早一週間。

その間に彼が起こす問題は、レイフォンの心労は溜めるものばかりである。

都市警察での大暴れ、喧嘩をする生徒への鉄拳制裁、窓から教室への侵入、昼休みの腕相撲大会、放課後のバンジージャンプ事件などなど、よくもまあ一週間でここまで問題を起こせるものだ、レイフォンはある意味感心していた。

「で、何で彼がここにいるんです」

いつにもなく刺々しいフェリの目線にも特に気分を害すこともなく、清々しい笑みを浮かべたセヴァドスが口を開く。

「それはロス会長に呼ばれたからですよ、妹さん」

「馴れ馴れしいですね。死んでください」

先日のセヴァドスの失礼な発言に余程頭にきていたのか、舌打ち一つして暴言を吐く

フェリ。

そんな二人の様子を見て、カリアンは呆れたようにため息をつく。

「フェリ、彼とは仲良くしてほしいのだがね、レイフォン君とまでもいかななくてもいいが、次の仕事を円滑に進めたいからね」

「?」 どういうことですか」

「まあ、とりあえずこれを見てくれないかい——ヴァンゼ」

「ああ」

カリアンとセヴァドスと共に来ていたのだが、完全に空気と化していた武芸長のヴァンゼが領いた。

何故かは知らないが、ヴァンゼの右腕はギブスで固定され、その上から包が巻かれていてという痛々しい姿だが、毅然と振る舞いながら一枚の写真を取り出し、それをテーブルの上に置いた。

「これは?」

「この間の汚染獣の襲撃から、遅まきながらも都市外への警戒が軽視していたと感じてね。当たり前のことだが外への警戒の対策を立てていたんだよ」

「いいことだと思います」

カリアンの言う通り、その程度のこととは他の都市ではごくごく当たり前である。

だが、それを認識できないほどにツエルニは平和だったと言えるのだろう。しかし、そのツエルニも先日の汚染獣の襲来によりその甘い認識を変える必要があった。

この世界は、やはり常に死が付き纏う怪物達に汚染された世界だと。

「これからは、経験者である君達に色々意見を聞くと思うけどよろしく頼むよ」

「カリアン、その話は後にしろ。今は呑気に話をしている場合ではない」

ヴァンゼの指摘により、カリアンは表情を引き締めて、本題へと入る。

「そうだね。で、これはその一環として試験的に飛ばした無人探査機から撮った映像だね——わかりづらいが、これはツエルニの進行方向500キロメートルほどのところにある山だ」

汚染物質が舞う世界で取られた画像の画質は最悪そのもので、微かに何かがあるように見える程度のものであった。

山と荒れ地が映し出された写真の中央には、黒い影のようなものが映っていた。その黒い影こそが、今回の問題である。

カリアンが指差す黒い影を見て、レイフォンも何度も確認するように視線を向けて、確信したように小さく頷いた。

「御懸念と通りかと」

「やはり、そうか。先にルツケンス君と話して予想はついていたのだけどね」  
レイフオンの肯定に、カリアンとヴァンゼの表情が暗くなる。

それを見ていたフェリは、不審そうに見つめると、机に置かれた写真へと視線を向ける。

「何の話です?」

「汚染獣ですよ」

なんでもないように言ったレイフオンの言葉に、フェリは慌てて顔を上げる。

念威繰者の彼女にも——いや、念威繰者だからこそ、汚染獣の怖さを人一倍知ってしまったのかもしれない。

同時に何故レイフオンにその写真を見せたのか、最近レイフオンがハーレイと研究している鍊金鋼のこと、それらの事実から出る答えは一つ。

それ故にフェリは思わずカリアンを睨みつけてしまう。

「兄さん、また、彼を利用するつもりですか?」

「実際、彼らに頼るしか生き延びる方法はないからね」

「っ! 何のための武芸科ですかっ!」

珍しく声を荒げるフェリの言葉に、ヴァンゼは耳が痛いな、と表情を曇らせて言葉を漏らす。

武芸長であるヴァンゼだからこそ、人一倍レイフォンに頼ることが心苦しく思っているのかもしれない。

だが、それは仕方ないことだとレイフォンは思う。

学生同士の武芸大会と汚染獣との戦いでは、危険度合いがまるで比較にもならないし、対人戦闘術は汚染獣に対してまるで意味がなさない。

ツエルニの武芸者達に、汚染獣と戦えというのは死ぬということと言っているようなものだった。

「私も、彼には武芸大会に専念してもらいたいと思っている。が、状況は待つてくれないことも確かだ。レイフォン君、この汚染獣についてわかったことは話してくれないか?」

「そうですね——恐らく、雄性体でしょう。何期の雄性体かはわかりませんが、隣に映っている山の大きさから比べてみても一期や二期の雄性体ではないと思います」

幼性体と比べて強さが格段に上がっている雄性体。

場合によっては、千の幼性体よりも手強い相手になるだろう。

だが、それは一般的な武芸者にとってであり、元・天剣授受者であるレイフォンの敵ではない。

奢りではなく、今までの経験からレイフォンにはそう言える自信があった。

「雄性体……すまないが私やヴァンゼの生まれた都市では、汚染獣との交戦記録が長い間無くてね、強さの感覚的に理解できていないのだよ。申し訳ないが説明してくれないか」

今まで汚染獣との戦いを経験していなかったのだろう。

武芸者でもないカリアンが詳しい方が驚きだが、都市を束ねる者して知っておいては損はないだろう。

そんなカリアンやヴァンゼ達に、レイフォンは簡単な説明を開始する。

「雄性体、一期や二期ではそう恐れるものではありませんよ。ただ凶暴性に生命力は幼性体と比べて段違いですが」

幼性体と違い、身体が大きいために都市への侵入を許すと面倒になるのはこの形態からである。

グレンダンでは、外縁部にすらたどり着かせることなく、確実に始末することができだが、学園都市などでは全滅も考えられるくらいの危険な存在である。

「ということとは、学園都市では十分脅威に値する存在ということだね」

「はい、被害を恐れなければ勝てるかもしれませんが」  
恐らく何十、何百という犠牲が必要となるだろう。

そう告げると、カリアンは明らかに表情を強張らせる。



カリアン自身が考えている以上に危険だと理解したのだろう。若干声を震わせてカリアンは口を開く。

「なるほどな。続けてくれ」

「ほとんどの汚染獣は、三期から五期の間に繁殖期を迎えます。それを雌性体と呼ばれるものです。これが先日、幼性体達と共にツエルニを襲ったものですね」

あの時は、運悪く汚染獣の巣穴に足を突っ込んでしまったためにそうなってしまうが、通常は幼生体達を生んだ雌性体は、生まれたばかりの幼生体達の餌となる一般的であったが、あの時は他に栄養源がいたのでそうはならなかった。

そう捕捉すると、カリアン達は顔を苦々しく歪めた。

カリアン達は運が悪いと嘆いていたが、レイフォンが思うにツエルニは運が良い方である。

今までツエルニが汚染獣と出会わなかったこともそうだが、前回レイフォンの力により生き延びることができた。

運が悪いというのなら、先日の襲来で確実に滅びていただろう。

そんなことを考えながらレイフォンは説明を続けていく。

「そして稀に繁殖期を迎えずに、雌性体にならないモノもいます。それが老生体と呼ばれる最悪の化け物です」

レイフオンほどの実力者に最悪といわせる存在にカリアン達は思わず息を呑む。

——老生体。

通常の都市なら半壊する覚悟があれば倒すことができるかもしれない化け物の中のバケモノ。

つまり、ツエルニのような学園都市では間違ひなく全滅、運が良ければ放浪バスに乗り込んで何とか生き延びる者達はいるかもしれない。

「老生体……レイフオン君は、それを倒したところがあるのかい？」

「三人がかりで、あの時は死ぬかと思いました」

「正確には、その時、倒したのは老生六期と呼ばれる本物の化け物ですよ」

カリアンの問いかけにレイフオンは苦笑いしながら答えると、それを捕捉するように先程までやけに静かだったセヴァドスが口を挟んできた。

その言葉に、その場にいた者の視線がレイフオンからセヴァドスへと移り変わる。

そんな視線にも、この都市への危機にも全く動じることなく、近くにあつたナプキンで口元を拭うセヴァドスに対し、ヴァンゼは顔を顰めて苦々しい口調で尋ねた。

「老生六期とはなんだ？」

「汚染獣は、老生体になっても成長します。老性一期というのは他の形態同様、皆、形が似ているのですが、それから進化した二期以降は様々な変化を遂げます。つまり

老生六期とは、六回の脱皮を繰り返し、そのたびに強さを得た本当の怪物です」

その進化の過程で生まれたのが、ベヒモトと呼ばれる名付き汚染獣である。

名付きというのは、グレンダンで一度戦い、殲滅されることなく逃げ切った汚染獣のことを指す。

敬意を表すためだと、どこかの誰が言っていたが、名前をつけるのはその汚染獣を区別するために必要だったということだろう。

つまり名付きとは、グレンダン最強の武芸者である天劍授受者が取り逃がした化け物の中の化け物の汚染獣のことである。

流石のグレンダンでも名付きの汚染獣——ベヒモトを殲滅するために、最年少天劍授受者であるレイフォンに、セヴァドスの兄であるサヴァリス、そして天劍授受者の中で最強と呼ばれるリントンスという豪華な面々で殲滅に当たることになった。

そんな超人三人と化け物の戦いは、三日三晩繰り返され、激闘の末にようやく倒すことができた。

「まだ未熟な私はその戦いに参加することができませんでしたが、その時のことはよく覚えています。あの死と生が一体化した完璧なる世界……そんな光景を見て思わず身震いしたものです。——というわけで聞きたい方がいれば、三日三晩のダイジェストでお話しますよ」

「結構だ。それよりも目の前の問題だが、どうする——カリアン？」  
妙なスイツチが入り、悦に浸っているセヴァドスの提案を、ヴァンゼは吐き捨てるよ  
うに断ると、この都市の最高責任者の判断を待つ。

「そうだね……」

その冷静な頭から導き出された結論をカリアンが口にしようとしたその時——レイ  
フォンがゆつくりとした口調で答える。

「そのことですが、僕一人で行かせてもらいます」

## 第八話

都市外用スーツを纏い、ヘルメットを頭に被る。

習慣染みたこの行動も、実は一年ぶりだということをふと気づいた。

ツエルニに来て、武芸は捨てるつもりであった。

新たな地で、新たなことを。

そう思い、辿りついたこの地でも、レイフォンは再び剣を取ることとなる。

カリアンのせいではない。

恐らくカリアンにレイフォンの存在がバレてなかったとしても、前回の襲来するときも最終的には剣を取ることとなっていただろう。

もし、故郷にいるリーリンがこのことを知ったら、何て言うだろうか？

人が良すぎると呆れてしまうかもしれない。

レイフォンらしいと笑ってくれるかもしれない。

そのことを確認する術は今はないが、それでも笑ってくれたら嬉しいとレイフォンは思う。

武芸以外の道を諦めたわけではない。

だが、それでもここで剣を手放すわけにはいかなかった。  
着替えを終えて、更衣室の扉に手をかける。  
と同時に気持ち切り替える。

レイフォン・アルセイフは今日も戦場へと出る。

・  
・  
・  
・

都市部よりも遥かに下に位置する都市の心臓部とされる機関部。

そこを通って、放浪バスの搬入口から大地に降り立ったレイフォンは、頭部を覆ったヘルメットの中で深呼吸をする。

フェイススコープに接続された念威端子から送られてくる映像は、濁った空と荒れ果てた大地以外は見ることができなかつた。

これが、人々が住む移動都市（レギオス）の領域から離れた世界。

汚染獣という絶対的な存在が闊歩する死に満ちた場所である。

無数の汚染物質が舞うこの場に、もしも生身で放り出されたとしたら、幾ら天劍授受者だったレイフォンでも、五分ほどで命を落とすことになるだろう。

人類には、理不尽なほどに厳しい世界の空の下で、レイフォンはランドローラーのアクセルを回す。

エンジン音を鳴らし、走り始めるランドローラーのサイドカーには、食料を始めとする物資と、今回のために作られたハーレイ達錬金科特製の錬金鋼——複合錬金鋼（アダマンドナイト）が乗っている。

レイフォンのために作られた錬金鋼。

ツエルニの錬金技術が結集したソレの担い手に、武芸者を辞めるつもりであったレイフォンが選ばれるのは、何とも因果めいたものを感じるが、今はそのことを素直に感謝していた。

都市外の戦闘は、万全の用意をしておかなければならない。

その中で最も注意しなければならないのが錬金鋼である。

特にレイフォンのような人間は、普通の錬金鋼では十分な力を発揮することができない。

天劍のようにまではいかないが、複合錬金鋼という一時的にでも力を発揮できる物は

ありがたかった。

ツエルニに住む人間の想いと願いを背負い、レイフォンはランドローラーを走らせていると、ヘルメットに搭載された念威端子からは突然、声が聞こえた。

『全く、貴方には呆れてしまいます』

呆れた声でヘルメットの中を響かせるのは、レイフォンと同じ小隊に所属するフェリの端子である。

念威操者であるフェリが、今回の戦闘に現地参加することはないが、その能力はレイフォンにとって心強い存在である。

グレンダン時代は特に思うことはなかったが、念威操者の存在のありがたみをレイフォンは前回の襲来の際に身に染みていた。

幾らレイフォンが圧倒的な武芸の力を持つていたとしても、肝心の索敵などを行う目が必要ければ、どうしようもないのである。

特に今回のような都市外戦闘の場合、念威操者に命を預けているといってもおかしくはないのだ。

相棒とも言えるフェリは、どうやらレイフォンの判断に呆れている様子で先程から溜め息が聞こえてくる。

確かに武芸を捨てようとする人間が、再び命がけて汚染獣と戦おうとしているのは矛



盾でしかない。

そのことはレイフォン本人も、十分に理解しており、先程から苦笑いしかできない。

「けど、誰かがしなきゃいけないことですから」

『それなら、ヴァンゼ武芸長が言ったように都市が近づいてから、皆で倒す方が安全だったんじゃないですか？』

一人で戦う——というレイフォンの主張に、ツエルニの武芸者代表である武芸長のヴァンゼは真つ先に反対した。

武芸科とは都市を守るために存在するのだ——というヴァンゼの主張は、この世界では正しく、当たり前前で、真つ当な武芸者らしい言葉である。

だが、汚染獣と戦うにはツエルニの武芸者はあまりにも未熟過ぎた。

「そうすれば無駄に犠牲者が増えます。それに都市付近で叩けば、少なからず都市への被害が出ますよ。せつかくこの前の襲来からやつと復興の目的がたつてきたんですから、その努力を無駄にはしたくありません」

都市に住まう者達が懸命に築きあげてきたモノを、汚染獣に壊されたくない。

故に、レイフォンは危険を冒してまで、都市外へと行くことを決意した。

『格好良い発言ですね。まさしく英雄（ヒーロー）です』

「そんなんじゃないですよ」

『わかっていきます。貴方はそんな格好良いモノじゃありませんから』

「厳しいですね」

フェリの言葉は、切り捨てるような無感情にも聞こえた。

だがレイフォンには、自分のために怒ってくれたり、心配してくれているようにも聞こえて、少しだけ嬉しくなった。

「ふむ、今までの話から察すると、妹さんはレイフォンに気があるというわけですね」  
和やかな空気が一変した、レイフォンは額から冷や汗を流す。

レイフォン達の会話に、全く空気を読まずに入ってきたのは空気を読まないことに定評がある——セヴァドスという男であった。

セヴァドスは、先ほどからレイフォンの走らせるランドローラーの隣を並走するよう  
に、ランドローラーを走らせてレイフォン達の話を静かに聞いていた。

今回のレイフォンの戦闘における唯一の同行者だった。

ツエルニの武芸者達と違い、セヴァドスは汚染獣との過酷な戦場を既に経験している  
ツエルニ最大戦力の一人に数えられ、そのためにレイフォンはセヴァドスの参加に特に  
反対はしなかった。

むしろ、セヴァドスの参戦に最も反応したのが、念威探索を務めるフェリである。

ファーストコンタクトの際に言ったセヴァドスの発言が、フェリの中での彼の評価を

最底辺にしたことは間違いなかった。

レイフォンと話していた時とは違い、明らかに苛ついたように舌打ちをつくと辛辣な口調でセヴァドスに向けて言葉を吐き捨てる。

『どこをどう聞けばそういう解釈になるんですか？ その能天気な頭は』

「ふふふ、知ってますよ、貴方のようなことをツンデレって言うんですよね？」

フェリの言葉を受けても全く揺るぐことなく、いつも通りのマイペースを維持するセヴァドスに、フェリは遂に行動を起こした。

『死んでください』

「おや？ いきなり視界が真っ暗に……」

フェリの凍るような声色と同時に、突然セヴァドスのハンドルが曲がる。

明らかに前が見えておらず、セヴァドスは右へ左へと蛇行運転をし始める。

その光景にレイフォンは血の気が引きながら慌てて口を挟む。

「ちよっ!! フェリ先輩、流石にそれはやめてあげてくださいっ!!」

恐らくセヴァドスのフェイススコープの接続された端子を切ったのだろう。

流石にフェリ本人もやり過ぎと思ったのか、再び舌打ちをすると少しの沈黙の後、わかりました、と苛立った声を上げた。

その後、視界が見えてきたのだろう。

運転をどうにか持ちなおしたセヴァドスが、突然何処か楽しげに笑い声をあげ始める。

「ふう、流石に初体験でした。都市外で念威線者に裏切られるのは」

「自業自得ですよ。ていうか、こっちも初めてですよ。都市外で念威線者に喧嘩を売る馬鹿を見たのは」

「え？ 私は喧嘩なんて売ってませんよ？」

本当に驚いたように声を上げるセヴァドスに、フェリも相手をするのが馬鹿らしくなったのか、呆れたように言葉を漏らす。

『レイフォン、放っておきなさい。話していると貴方まで変態が移りますよ』

「はあ……」

「しかし、ここまで離れたのも初体験です。ここでスーツが破れてしまったらそのままあの世行きは確定ですね」

そう言っていくつと笑うセヴァドスの心境を、レイフォンには一理解はできないだろうと思った。

だが普段通りのセヴァドスに、レイフォンは少しだけ頼もしさを感じながら安心から肩の力が抜けた。

『こんなところで死なないで下さい。死ぬなら囿になるか、汚染獣を倒した後自

分でスーツを破いて勝手に死んでください』

「はははは、だそうですよ、レイフォン」

「えっ?! 何故、ここで僕に振るんですか」

緊張感のかけらもない他愛もない会話。

普段なら、流石のレイフォンと言えど、戦闘への緊張により言葉数が減るのだが、セヴァドスのおかげで調子が狂ったままである。

だが、明らかに緊張していたフェリが、いつもの調子を取り戻しているのだから、その件に関してはレイフォンは感謝していた。

・  
・  
・  
・

ツエルニを出て、丸一日が経った頃。

レイフォン達は、今まで汚染獣に出会うことなくここまで来ることができた。

フェリの念威端子により、逐一近辺の汚染獣の居場所が報告されて無駄な交戦を避けるべく、そのたびにレイフォン達は気配を殺して汚染獣達をやり過ごした。

セヴァドスは、戦いたそうに汚染獣がいる方に視線を向けていたが、外での戦闘は少しの消耗でも命取りになることを知っていたため、流石に汚染獣に襲い掛かることはなかった。

そんな中、レイフォン達はある奇妙な光景に出くわしていた。

周囲の風景は変わり映えのない荒地のみが広がっていた——ただ一点を除いて。

『……これは？』

「汚染獣ですね。正確にはだったものですか」

それを見つけたのは、全くの偶然であった。

一度ランドローラーを止めて、休憩を取ろうと岩陰に止まった時に、偶然フェリが見つけたものだった。

岩陰に隠れたように積み残されている汚染獣の残骸をレイフォンが手にとってみる。

表面はネチャつと気持ち悪い感触がしたが、どうもつい最近死んだ汚染獣ではないようだ。

通常の汚染獣は死んだとしても、別の汚染獣が捕食し、滅多に遺骸が残ることはないのだが、こうしてここに残っていることに、レイフォンは微かな違和感を覚えた。

「まるで餌箱のようですね」

『え？』

汚染獣の遺骸を確認するセヴァードスの言葉に、レイフォンも同意するように頷いてしまふ。

「まず、これは明らかに人が倒したものではありませんね」

セヴァードスが遺骸の一つを持ち上げて、傷口らしき部分を指さす。

そこには、剣などで斬った時のような真つ直ぐな傷口ではなく、むしろ凄まじい力で引き千切られたようになっていた。

さらに遺骸について円形の傷口も銃弾の後ではなく、巨大な牙が突き刺さったような歪な穴となっていた。

つまりこの汚染獣達を倒したものは、人間などではなく、汚染獣の可能性が高いということになる。

だが同時に、レイフォンの中に疑問が残る。

「しかし、妙なのはこの汚染獣の遺骸ですね。汚染獣としてはやはりおかしい」

『?』先程の見解で汚染獣の仕業だということになったのではないのですか?』

「ふむ、ならば何故——遺骸が残っているのでしょうか?」

レイフォンの疑問はセヴァードスの言う通り、何故汚染獣の遺骸が残っているのか、だ。この汚染獣を倒したのは、間違いなく汚染獣の仕業だろう。

しかし、汚染獣が倒したというならば、何故その遺骸を喰らわなかったのか。

栄養源となる遺骸を残すのは、汚染獣の本能からしてやはり違和感を感じる。

——まるで、その汚染獣がわざと残しているかのようなのだ。

ゆえにセヴアドスの言った餌箱は、この状況そのものと言える。

「色々興味が引かれるものですが、今はこうしているわけにもいきませんからね」  
名残惜しそうに遺骸から離れたセヴアドスが、自分のランドローラーへと跨るとアクセルを吹かす。

確かにレイフォン達にはやるべきことが残っていた。

携帯用ゼリーを飲み込むと、レイフォンもセヴアドスに続くようにランドローラーを走らせる。

微かに過る一抹の不安を覚えながら。



## 第九話

汚染獣の死骸を見つけた場所から出発して、半日ほどが経った頃。

レイフォン達は、遂に目的の地付近まで辿りついた。

近くの岩場にランドローラーを隠したレイフォン達は、汚染獣がいると思われる場所へと歩き出した。

「しかし、遠くまで来ましたね」

先を歩くレイフォンに対して、セヴアドスが背後から話しかけてくる。

「まあ、一日ほど走ってききましたからね」

周囲には汚染獣の反応はない。

それでも警戒を怠ることもせず、レイフォンは当り障りのない返答をする。

「そう、つまりは今ここは私達二人だけということになりますね」

「何か、止めてほしいですね。その気持ち悪い言い方」

『ええ、二人して何気持ち悪い会話しているんですか？』

念威越しのやけに冷たいフェリの声に、僕は関係ないですよね？とレイフォンは理不尽さを感じてしまう。

そんなレイフオンとフェリに気にすることなく、セヴァドスは話を続ける。

「お二人は学園生活は楽しいですか？」

マイペースに、それでいて心理の読めないセヴァドスの質問に、レイフオンとフェリは戸惑ったように口を開く。

「えつと……まあ楽しい、と思いますが？」

『私は特に』

「なるほど、私は楽しいですよ」

頭部を覆うヘルメットのせいで表情を確認することはできなかったが、恐らくセヴァドスは今笑みを浮かべているのだろう。

確かにレイフオンから見ても、セヴァドスは十分学園生活を満喫していた。

「ミイさんに、メイさんに、ナツキさん。レイフオンに妹さん、会長さん、とても愉快な人たちに出会いました」

セヴァドスの言葉に、レイフオン達は一番愉快なのはお前だろうとツツコミたかったが、話が続いたので断念する。

「グレンダンを出た時、あまり学園都市に期待をしていなかったのですが、思いの外新鮮で、色々刺激を受けることもありました」

レイフオンとフェリがセヴァドスの言葉に口を挟むことはなかった。

セヴアドスの言いたいこと、それが何となくだがわかってしまったからだ。

あのセヴアドスが、とレイフォンは少しだけグレンダン時代のことを思い出す。

その殆どが戦っていたり、笑っていたりという記憶しかない。

だが、思い返してみれば、セヴアドスが孤児院に遊びに来た時に子供達の面倒を見ていたことを思い出した。

セヴアドスは戦鬪狂であるが、思いやりのある心を持つ人間だということ。

「ツエルニでも学園生活も悪くはない、と思うのですよ」

セヴアドスは締めくくるように言った言葉に、レイフォンは小さく頷いた。

色々あつてこのツエルニに来ることになったレイフォンだったが、それでもここに来ることによって出会えた人達もいる。

それは決して悪いことではないのだろう。

とレイフォンが思っていると、まだセヴアドスの話は終わっていないかった。

「こうして誰にも邪魔されず、汚染獣と戦えるのもツエルニに来たからですからね。向こうじゃ兄上達には獲物は取られませし、陛下の許可がないと戦場にもいけませんからね」

ヘルメットを被つてなくてもレイフォンには、セヴアドスの表情が見えていた。

間違いない満面の笑みだ。

明らかに話を台無しにしたセヴアドスに、レイフォンは思い出す。

確かに根は純粹で、思いやりもあるだろう。

だが、セヴアドス・ルツケンスという人間は、戦鬪狂であるということを。

・  
・  
・  
・  
・

「写真で見ましたが、思った以上に大きいですね」  
歩きだして数分。

遂にフェイススコープ越しでも確認できるほどの位置までたどり着いたセヴアドス

の言葉に、レイフォンは隣で小さく頷いた。

やはり、遠方から飛ばしたカメラでは画像が荒く、汚染獣や周りの山の大きさがわからないものである。

汚染獣らしきモノは、昆虫の繭のような形で山の斜面にへばりつき、その強い存在感を現していた。

だが――

『動く気配がありませんね』

「死んでいるのか？」

「そうでしたら些か拍子抜けですな」

ゼリー状の携帯食を呑みながら、セヴァドスは残念そうに呟いた。

確かにここまで来たことが無駄にはなりそうだが、何か起こるよりもいいだろうとレイフォンは納得すると、再び目の前の汚染獣の様子を確認する。

視線の先の汚染獣は、身動き一つすることはなく、死んだようにその場で存在しているだけだった。

生きているのか、それとも死んでいるのか？

判断に迷うレイフォンに対し、セヴァドスは錬金鋼を復元すると、汚染獣に指を向けた。

「どうしましょうか？ とりあえず攻撃でも仕掛けてみますか？」

「いえ、その前に。——フェリ先輩、お願いできますか？」

『はい、わかりました』

楽しんで笑うセヴアドスの意見を却下したレイフォンは、フェリに念威を飛ばしてもらうことを頼むと、フェリの念威端子が汚染獣へ向けて飛んでいく。

『これは……』

念威端子と言えど、ここまで汚染獣に近付いたことは初めてだろう。

汚染獣の圧倒的なまでの巨大さと滲み出る存在感に、フェリが唾を呑みこむ音が念威端子越しに聞こえた。

幼性体が玩具にでも見えるほどの化け物、それがこの目の前の汚染獣である。

しかし、汚染獣は近くを飛来する念威端子に反応することもなくその場で不動を貫いていた。

ただ、レイフォンは何とも言えない奇妙な違和感を感じた。

根拠のない考え、だがレイフォンの長年培った戦闘勘がこう言っていた。

——この汚染獣は死んでいない。

その勘は隣にいたセヴアドスも同様に働いていた。

ただレイフォンと違い、その行動は早かった。

汚染獣に向けて、掌を翳すと衝剄を放った。

セヴァドスから放たれた衝剄の大玉は、汚染獣を易々と捉えるとへばりついていった岩場ごと地面へと落下させた。

突然のセヴァドスの行動に、レイフォンは一瞬、虚を突かれることになるがすぐに正気に戻り、セヴァドスの腕を掴む。

「何をしているんですか?!」

「レイフォン、貴方ももう気付いているんじゃないですか?」

レイフォンの問いに答えることなく、セヴァドスは拳を纏う錬金鋼に剄を纏う。

その早い行動に、レイフォンは舌打ちをつきながらも、腰に下げた二本の錬金鋼を引き抜く。

「……どうしてそう思ったんですか?」

「レイフォンだってわかっていたんでしょ? アレから発するこの圧迫感、いや存在感でしょうか。死んでいる汚染獣がそんなものを発するはずありませんからね」

セヴァドスの言う通り、汚染獣の存在感は健在であった。

あの腹の下を締め付けるような感覚、ソレは汚染獣と戦っていた時に感じたものと同じであった。

「しかし……なるほど、これはいい勉強になりました。我々はまんまと嵌められて

しまったというわけですね」

セヴァドスの言葉を最後に、落下をしていた汚染獣——の繭が、脈を打つように表面を波打つ。

微かに聞こえる鼓動音と共に、段々と存在感が増していく。

『つ!! ツエルニが進路方向を突然変えました』

フェリの悲痛な声の報告を聞きながら、レイフォンは複合錬金鋼を復元させる。

復元させた巨剣の重さを確認すると、レイフォンは握り具合を確かめる。

ハーレイ達は本当にいい仕事をした、と少しだけ安心感を覚えて、小さく息を吐き、整えた。

「なるほど、やはり仮死状態になってツエルニを騙していたんですね」

「知恵比べでは人間に軍配が上がると思っていました、中々汚染獣も侮れないものですね」

『ツエルニが進行方向を変えたんですね! 逃げてくださいつ!』

既にレイフォン達の行動も覚悟も決まっていた。

故に、フェリの声は彼らには届いたが、既に遅かった。

ここでレイフォン達が動かなければ——ツエルニに危険が及ぶだろう。

「そういうわけにはいきません。ここでこいつを逃したら間違い無くツエルニに襲



いかかる気です」

「妹さん、サポートをお願いしますよ」

レイフオンは全身に膨大な剉を流し込むとゆるりと構えを取る。

その行動に呼応するように、セヴァドスも拳同士を叩いて戦意を高めていく。

そして汚染獣も、繭を脈打つその速度が段々と早くなっていた。

徐々に繭が破け始めると、中からは刃物のような鋭い突起物が現れ、繭を引き裂いた。

そこから飛び出したのは巨大な真つ赤な目である。

目が現れると、その周辺に刀のように尖った手足が繭を貫き、そのまま引き裂いていく。

全身を覆う光沢のある鎧に、長い尾の先に鋭く刃。

数は優に百を越えるだろう強靱な歯先は、のこぎり状に尖っており、口元に、赤く窪

んだ三つの目、そして四つの足に、二本の腕と巨大な鋏。

その姿は、まさしく蠍そのものであった。

されど、目の前にいるのは間違いなく汚染獣。

だが、レイフオンには腑に落ちないことがあった。

それは隣のセヴァドスも同様で、微かに首を傾げて汚染獣を眺めていた。

「雄性体から進化するのは、老性一期になるはずでしたよね？」

「一般的には、ね」

しかし目の前に現れたのは明らかに老性一期ではなかった。

このような異形の姿の汚染獣をレイフォンは見たことはなかったが——知っていた。

その代表例とされるのがあのベヒモト、老性六期の真正銘の化け物である。

勿論、天劍三人でようやく倒すことができたベヒモトに比べると、目の前の汚染獣は易い存在なのかもしれない。

だが、今この場には天劍を持つている者はおらず、目の前の汚染獣は変わらず化け物である。

それでもレイフォン達のやることは変わらない。

「少し仮定的なものがありますが、聞きますか？」

「手短にお願ひします」

笑みを浮かべているかはわからないが、普段より真剣みの帯びたセヴァドスの声に、レイフォンは視線を汚染獣に向けたまま、小さく頷いた。

「汚染獣とは、一期繰り上がるたびに脱皮して成長すると、再び栄養を補給し、脱皮をします」

セヴァドスの言っていることは既にレイフォンも知っていることであつた

だが、セヴァドスの言いたいことがこのことではないことにも気づいていたので、口に挟むことなく話の続きを待つ。

「ですが、脱皮二回分の栄養を確保できれば、殻から出る必要はないんじゃないんですか？」

セヴァドスの考えに、レイフオンはなるほどと思わず感心してしまった。

普段は戦闘狂で、奇行が目立つセヴァドスだが、頭のキレはレイフオンの数段上をいく。

確かに確証のない意見だが、鼻で笑うほどの外れたものではない。

特に「栄養」というものにレイフオンも少し心当たりがあった。

ここに来るまでにあった汚染獣達の残骸。

死んでいたのは、幼性体のような小さいものではなく、雄性三期ほどのものである。

単純に考えれば、あれを全部喰らったのは、明らかにそれらよりも上の存在ということになる。

「つまりは」

「アレは、あの殻の中で二回脱皮しているということじゃないのですか？」

雄性体数体分のエネルギーがあれば、二度の脱皮も問題ないかもしれない。

そんなことは可能なのか、だとかはこの際どうでもいいだろう。

現実には、その汚染獣はレイフオン達の目の前に存在しているのだから。そもそも、汚染獣とは何か、と語れるものはこの世界には存在しない。そうでなければ、このような世界にはならなかっただろう。

「二期以降と戦うのは初めてですね」

「僕も天剣なしで、戦うのは初めてかもしれない」

老性二期。

都市を壊滅させるほどの化け物が、レイフオン達に牙を剥いた。

## 第十話

腹に響く重音が一步踏み出すだけで辺りに響く。

皮膚をピリピリと刺すような痛みが微かに奔る。

黒い光沢が光る六本の足で、汚染獣は大地の上に降り立った。

幼性体、雄性体、雌性体。

それら全ての脅威がまるでお遊びに思えてしまうような圧倒的ともいえる存在感。

背筋に這い上がる圧迫感に、セヴァドスは微かに体を震わせる。

恐怖心？

そんな殊勝な感情はセヴァドスの中に存在しなかった。

この感情を表す言葉は、まさしく歓喜の一言である。

老性二期。

グレンダンでは、主にこの段階から、天剣授受者以外の武芸者の参加が制限されている。

この措置は、不要な犠牲を生まないために作られており、グレンダンの武芸者が弱いからでは決してない。

老性二期以上の汚染獣がそれ以上に化け物過ぎるからである。

通常の都市なら間違いなく半壊、学園都市なら確実に全滅するだろう完璧なる化け物。

化け物に対抗できるのは同じ天劍授受者（化け物）だけ。

セヴァドスはその化け物と戦ってみたかった。

兄であるサヴァリスや友人であるレイフォン達と戦う姿を、いつも念威の向こうから歯痒く見ていたのである。

故にセヴァドスは笑いを堪えることができなかつた。

『何を笑っているんですか？ 気持ち悪い』

「いえ、すみません。ただこの場にいることに幸福を感じていたので」

ヘルメットで表情が隠れているセヴァドスを、唯一見ることができるフェリが暴言を吐く。

だが、それでもセヴァドスは笑うことを止めない。

この感情を抑えることができないからだ。

全身に剄を流し、ゆつたりとした構えを取る。

その瞬間、突然セヴァドスの視界が一瞬暗くなり——そして辺りに轟音を響かせた。

まるで爆発物が炸裂したかのように、荒廃した大地が容易に抉られ、周囲にはその衝撃で石つぶてが舞う。

その一つ一つの飛来物をかわしながらセヴァドスは後方へと跳ぶ。

内力系活剱の変化、旋剱。

重濃度の剱で高められた脚力で、セヴァドスはその場から距離を取る。

視線の先の汚染獣を警戒しながら、その向こう側に立つレイフォンの姿を確認すると、セヴァドスは口を開く。

「一応確認しておきますが、何か考えとかはありますか？」

「別に、ないですよ」

「そうですねか……なら戦況に身を任せるとしましょうか？」

フェリの念威を通じて、レイフォンとの簡単な打ち合わせを終えると——最初にセヴァドスは動いた。

外力系衝剄の変化、衝断爪。

右手の指先から伸びる衝剄の刃は、右腕が振られるとともに風を切り裂き、烈風とともに五つの剄の刃となって放たれる。

弧を描きながら飛来する風の爪を、汚染獣——老性二期はやすやすと両手のハサミで弾き落とした。

まるで効果がない、その光景を見ても、セヴァドスは口元の笑みを隠そうとはしない。内力系活剄の変化、旋剄。

老性二期の意識がセヴァドスに向いたその時——もう一人のこの戦場の主役となるレイフォンが一気に距離を詰めるように老性二期に向けて飛来する。

複合錬金鋼により形成された巨剣は、剄の光を眩く発すると、剣先が汚染獣に向けて振り下ろされた。

ただの振り下ろしによる一撃。

だが、レイフォンが行えば必殺の一撃と化す。

しかしそれは、当たっていればの話である。

老性二期は六本の足を巧みに動かし、横へスライドするようにして跳ぶと、レイフォンの一撃をかわした。

「へえ、中々素早いですね。汚染獣では中々いないタイプですよ」



その一連の動作を見ていたセヴァドスは、感心したように声を上げる。今のレイフオンの一撃は、決して易々と回避できるものでもない。

恐らくセヴァドスでも同様の状況なら、十回のうち三回は喰らっているだろうほどのものである。

人型のセヴァドス以上にその巨体から老性二期が避けることは困難だろう。

だがそれでも老生二期は避け切った。

つまり、目の前の汚染獣は、ほぼレイフオンやセヴァドスと同等の俊敏さを備えているということになる

「厄介な相手だ」

この状況を心の底から楽しんでるセヴァドスと違い、攻撃を躲されたレイフオンの表情は険しかった。

破壊力（パワー）と大きさ（サイズ）では、汚染獣に圧倒的に劣る人類が唯一勝るものが小回りの早さと俊敏性である。

確かに目の前の老性二期は、大きさで言えば幼生体より少し大きいくらいのため、一撃の重さは、老性一期よりも劣るようだが、その欠点を大いに上回る俊敏性を目の前の化け物は得ている。

もし、この汚染獣と都市内で戦った場合、破壊力が無い分、都市の損害は軽微に抑え

られるかもしれない。

だがここは、汚染された死の世界。

体に纏う都市外戦闘スーツが少しでも破れば、その時点で死を意味する。

セヴァドス達の前に立ちふさがる汚染獣。

間違いなくこの状況下では最悪の敵であるといつていいだろう。

「良いじゃないですか？　これほどのスリルはそうそう味わえるものではないですよ」

「僕はもう結構です」

レイフオンと軽口を叩きながらも、セヴァドスは警戒心を高めていく。

確かにスリルを楽しんでいるつもりだが、別に死にたいわけではない。

死んでしまったら、もう楽しいことは何もできないのだから。

「さて、どうしましょうか？　本当にノープランでいきますか？」

目の前の強敵に神経を集中させながら、この場の戦友にセヴァドスは話しかけた。

本来、セヴァドスもレイフオンも、連携を必要とする武芸者ではなかった。

圧倒的な戦闘能力を持つ者にとって、周りに人がいると技の威力で巻き込みかねないからだ。

ゆえに、セヴァドスは戦場に置いて誰かと手を合わせることは無かったし、レイフオ

ンもベヒモトと戦ったとき以来、共闘は行っていない。

だが、そうも言っていない状況ではなかった。

「……前衛と後衛を決めましょう。二人同時に近接戦闘に持ち込んでも同士討ちする可能性があります」

レイフオンの言う通り、セヴァドスとレイフオンが二人で戦って、お互いの技に巻き込まれたら、間抜けそのものである。

無論、易々とあたるほどセヴァドス達は温くはないが、それでも容易に回避できるほど甘い攻撃を放つつもりはない。

ゆえに囷という前衛と、牽制をしかける後衛。

そして、隙あらば互いに必殺の一撃を放つという作戦とは言い辛い答えに行き着くのだった。

その場だけの薄っぺらい作戦。

だが、レイフオンとセヴァドスにとって最優の策と化す。

「では、私が後衛をしましょう」

「いいんですか？」

「ええ、現状の火力を見ても、貴方の方が高いようですし。私にはコレがあります」

レストレーション。

腰に下げている二本目の錬金鋼を引き抜くと、セヴァドスは復元させる。

しなやかに弧を描き、白銀の糸を張る——それは、

「弓、ですか？」

「貴方がリントンテンスさんに鋼糸を習っているのに触発されましたね、私もティグリスさんに弓の手解きを受けたのですよ」

弓を引く姿はレイフォンには今まで見せたことがなかったが、セヴァドスにとって引き慣れたものである。

元々、ルツケンスの武術のみに拘りがなかったセヴァドスは、色々な武門に赴いた。

その中には、天剣の一人であるカルヴァーンの武門ミッドノットや好敵手であるレイフォンの原点であるサイハーデン刀争術を見学したこともあった。

そして、数ある武の中でセヴァドスが、特に興味が惹かれたのが、不動の天剣と言われるティグリスの弓術である。

力強く弓を引く不動の姿。

的を確実に撃ち抜くその精密であり芸術的な射に、セヴァドスは心の底から感動を覚えた。

「まあ、教えていただいたのは本当に基礎だけです」

「なるほど……」

弓を興味深そうに見ていたレイフォンには悪いが、セヴァドスは早く目の前の獲物と戦いたかった。

「さて、そうと決まれば——」

『上ですっ!!』

「っ!!」

「つと」

フェリの警告と冴えわたる感覚により、セヴァドス達は瞬時に後方へと跳んだ。

その瞬間、セヴァドス達が先程までいた場所に老性二期が落下をしてきた。

セヴァドス達の警戒を掻い潜って、隙をついたのだろう。

その素早い動きに、セヴァドス達の表情に緊張がはしる。

そして、地響きに共鳴するように吠える老性二期は、ひび割れた大地を砕きながら、再びセヴァドス達に迫る。

常人には目にも捉える事ができない高速移動を、セヴァドスは確実に視界に捉えながら、不敵な眼差しでいつもの笑みを浮かべる。

「は、はははははっ!! 悪くない、悪くないですよ、この展開っ!!」

「貴方は下がってください」

気分が良すぎて、作戦をすぐに潰すことになる接近戦を挑もうとしたセヴァドスに対

し、レイフォンが冷静に止めながら剣を振りかざす。

内力系活剱の変化、旋剱。

「ふっ!!」

レイフォンが選んだ手段は、力押しである。

先程の攻防で、目の前の汚染獣が通常の老性体よりも力が劣っていると判断したからだ。

高速移動型の汚染獣に、都市外でその戦法を挑むのは無謀であるが、流石は元、天劍授受者。

迫る汚染獣のハサミと尾針の刺突の連撃を体を反らして回避すると、そのまま巨大な剣を振り抜いた。

幼生体は勿論、雄性体すら一撃で葬ることができらるだろう一撃を、老性二期は足を止めて両手のハサミで受け止めた。

防がれる一撃。

だが、それはレイフォンの狙い通りだった。

外力系衝剱の化鍊変化、鬼火。

上空に放たれ、弧を描きながら飛来する紅い閃光が、老性二期の尾の根元部分に突き刺さる。

そして、その瞬間——辺りに轟音が響きわたる。

爆発し、炎上する老性二期をみながら、セヴァドスは弓を射る。

「しっ!!」

放たれるの三度の衝剄の矢。

老性二期の目を狙った射撃は、ハサミにより防がれる。

「なるほど、目はやはり弱点ですか」

本能的に弱い部分を守ったのだろう。

だが、しかしハサミや背を覆う外皮の殻は、驚異の強度を誇っているようだ。

レイフォンの一撃に、セヴァドスが放った鬼火にも、傷一つつけることはなかった。

「殺す気ですか?」

「いえ、貴方なら避けると信じていましたから」

普段以上に無愛想な言葉が、フェリの念威を通して聞こえてきた。

老性二期の傍には、レイフォンの姿はなく、反応からして反対側にいるようであった。

セヴァドスが、ティグリスの剄技を見て、考案した弓技・鬼火。

焔を纏った矢は対象物に突き刺さると、爆発するという、間違いなく都市内では使用できない荒業である。

実際、今回の状況でもそこにいたのがレイフォンでなかったら、確実に巻き込んでいただろう。

しかし、セヴァドスにはある種の確信があった。

レイフォン・アルセイフがこの程度の一撃を食らうはずがない、と。

「しかし、厄介な相手ですね」

「力がないから、外皮の殻も柔らかいと思いましたが、そうでもないですね」

流石は老性二期である、とレイフォンとセヴァドスは感心していた。

だが、同時に厄介な相手であるということが再認識できた。

セヴァドスが放った鬼火は、弓の剽技では最も破壊力のあるものである。

幼生体なら容易に貫通し、雄性体なら頭を吹き飛ばすくらいの威力があるのは既に検証済みである。

つまり、セヴァドスの弓技では老性二期に致命傷を与えるのは難しいということだが、それでもセヴァドスの笑みが消えることはなかった。

「いいですね。久しぶりに血が騒ぎそうです」

指を鳴らし好戦的な笑みを浮かべながら、セヴァドスは再び弓を射る。

質より量。

というわけではないが、鬼火よりも遥かに劣る威力を捨て、速射性の衝刺の矢が汚染



獣に降り注ぐ。

無論、この程度の攻撃で老性二期を倒せるわけがなく、老性二期はハサミを自身の顔の前に置き、セヴァドスの弾幕を防ぎながら、一步一步足を踏み出していた。

自身の衝刺の矢の嵐が易々と弾かれる光景を見て、セヴァドスは動じることなく、再び弓に剉を込める。

外力系衝刺の化鍊変化、鬼火。

弓から放たれた紅蓮の矢は、再び緩やかなカーブを描きながら、老性二期に迫る。

そして、着弾。

同時に爆発音が響き、大地を砕き、——汚染獣の体を少し浮かせた。

セヴァドスの狙いは、老性二期の体ではなく、その下の大地である。

比較的小柄な目の前の老性二期なら、体を浮かせることも不可能ではない、と判断したセヴァドスは見事狙い通り老性二期の足場を崩したのである。

幾ら高速移動型の汚染獣と言えど、その身は大地を踏みしめていた。

つまり、それを崩したということは、一時的とはいえ汚染獣の動きを止めたことになる。

だが、少し計算外れたようで、流石に汚染獣の体を浮かすことは不可能だったようだ。老性二期の前足を浮かせて、微かに腹を見せる程度に効果は終わる。

が、それは許容範囲内のものである。

内力系活剄の変化、旋剄。

風を纏った一陣の刃が戦場を駆け抜ける。

外力系衝剄の変化、斬月。

複合錬金鋼という巨大な剣を振るった斬撃から、三日月状の衝剄が放たれた。

「お見事です」

前足が浮いたことにより、露わになった腹をレイフオンの斬撃が切り裂く。

青々しい血が吹き出るその光景にセヴァドスは、弓を構える。

全身に返り血を浴び、剣を振るって血を飛ばすと、レイフオンはその場から離れる。

外力系衝剄の化錬変化、鬼火。

セヴァドスの放った紅蓮の矢は、汚染獣の傷口を見事射貫いた。

爆発とともに、汚染獣の血が辺りに舞い散る。

その姿に、セヴァドスは油断なく弓を構え、レイフオンは再び戦場を駆ける。

戦いはまだ終わらない。

ニーナ・アントークにとつて、レイフォン・アルセイフとは何だと聞かれれば、彼女は迷うことなく仲間と答えるだろう。

だからこそ、彼が黙って汚染獣の元へ向かったことには憤りに近い感情を抱き、自分の力の無さに悔しさを感じた。

身体を壊し、不調の自分に何ができるかはわからない。

それでもじつとしていられるわけにはいかない。

それがニーナという武芸者である。

「しっかし、まあ、アイツも無茶をするぜ。 化け物退治に一人で向かうなんてな」

「二人ではない。 二人だ」

ランドローラーを走らせるシャーニツドの軽口に、ニーナは面白くなさそうに呟く。

レイフォンが、パートナーとして選んだ人間が、同じ小隊の人間ではないことは、ニーナにとつては不機嫌にさせる内容だった。

直接戦闘に加わるのは無理でも、フォローなら私達でもできるのではないのか？

そう思ってしまうのだ。

「そうカリカリすんなよ。後輩が取られて悔しいのは何となくわかるけどよ」

「そんなことを言っているのではないっ！」

「まあ、仕方ないと思うがね。なんとたつてカリアンの旦那の推薦なんだぜ？」

全く悔しがる姿を見せないシャーニッドの態度は、ニーナを苛立たせるものでしかなかった。

その彼にニーナが瞞みつこうとしたその時、

『静かにしてください』

念威端子越しにフェリの冷静な声が聞こえる。

その声色には、若干怒りのような感情も含まれており、ここに来るまで殆ど喋りかけてこなかったのも恐らくそういうことなのだろう。

『レイフォンからの伝言です。ここからは近づかないでくださいとのことです』

その言葉と同時にニーナの耳に響いたのは、この世のモノとは思えない唸り声と何かが崩れる音だった。

その轟音にニーナは反射的に動いてしまった。

フェリの制止を振り切って。

「これは……」

ランドローラーを飛び降り、目の前の崖へと向かったニーナの目に信じられない光景が飛び込んできた。

彼女が目にしたもの、それは高速で動き回る化け物に果敢に戦う二人の武芸者の姿だった。

## 第十一話

汚染獣——老生二期との戦いが始まって丸一日程が経過した頃。

未だ戦場では、一つのミスすら許されない生死を賭けたまさに死闘が繰り広げられていた。

並みの武芸者なら、汚染獣を前にして丸一日戦い続けることは絶対に行わないことだろう。

しかし、レイフォンとセヴァドスは未だ疲れを見せることなく、老生二期という化物を相手取っていた。

「ははははははっ!! 空は濁り、風は腐り、大地は荒れ果てている。まさに戦い日和ですね、今日というこの日はっ!!」

『うるさいですね。そんな騒ぐ暇があつたらさっさと倒してください』

振り下ろされる老生二期の尾を潜るようにして躲すと、セヴァドスは右腕を振り抜き、その巨体を殴りつける。

一度のミスが死を招く戦場でも、彼は——セヴァドス・ルッケンスはいつものようにワラツていた。

そんな彼を見るフェリの表情はまさに気味が悪いものを見ていようなものだろう、とレイフォン自身もよくここまでこの状況で騒げるものだと感心してしまった。

恐らくこの状況を楽しむ変態は、世界中を見渡してもルツケンス兄弟ぐらいだろう。

だが、頭の中が狂っていたとしても武芸の腕前は天劍級と謳われるぐらいに確かなもので、状況判断、戦闘勘には狂いがなかった。

「動きを止めます。狙ってください」

「わかりました、っと」

少ない言葉から意味を読み取り、大地を駆けるセヴァドスは、この状況においては最高のパートナーと言っているレイフォンは、巧みに無数の鋼糸を操り、汚染獣の六本の足

現在援護側に回っているレイフォンは、巧みに無数の鋼糸を操り、汚染獣の六本の足に絡ませる。

鋼糸の師に当たるリテンズならば、老生二期の動きを完全に止めることは可能だっただろうが、レイフォンには一瞬程の隙を作るしかできなかった。

だが、その一瞬の隙さえあれば問題は無い。

旋回により距離を詰めたセヴァドスは、老生二期の二対のハサミの内の一つに狙いを定めると両手に剄を巡らせる。

外力系衝剄の変化、剛力徹破、咬牙。

名門武門ルッケンスの技の一つで、強力な衝剄と徹し剄によって対象物を内外から破壊する秘技は、老性二期の強固なハサミにクモの巣状のヒビを入れ、衝撃とともに付け根部分ごとハサミを吹き飛ばした。

片方のハサミを吹き飛ばされ、悲鳴と流血が吹き出る老性二期に対して、今度はレイフォンが頭上から迫る。

外力系衝剄の変化、針剄。

剣先から振るわれた衝剄は、鋭い槍となり、汚染獣の片目を貫いた。

動きが停止しつつある老性二期に向けて、セヴァドスが巨大な衝剄の砲弾を放つ。

外力系衝剄の変化、剛昇弾。

放たれた衝剄弾は寸分の狂いもなく老性二期の顔面を捉えると、その巨体を後方へと仰け反けた。

老性二期は、全身の至る所に傷を負っており、最初の頃の敏捷性は見る影もなかった。しかし、そんな姿を見てもレイフォンとセヴァドスは気を抜くことはなかった。

一撃でも食らえばこちらが負けるといふ条件が変わったわけではない。

「ふむ、老性二期にして少し物足りない気がしますが……まあ、いいでしょう。そろそろ飽きてきました」

体中から鮮血を噴き出す汚染獣を見て、セヴァドスはつまらなそうに呟く。



物足りないと言いはれ、意見はレイフォンには理解できないものだが、早く仕留めることだけは意見が一致している。

倒れるときには倒す。

それが戦場の基本であり、守るべきルールである。

もし、手を抜き反撃をされでもすれば、こちらの命を失いかねない状況となる。

「油断はしないでください。仮にも老生体です」

「わかっていきます。幼性体だろうと手を抜くつもりはありませんから」

レイフォンの警告に領きながら、セヴァドスは破損した錬金鋼を投げ捨て、四個目の錬金鋼を弓に復元させる。

油断のない鋭い目つきで目標を捉えると、弓を射った。

弓から放たれた無数の勁弾は汚染獣を包みこむようにして捉えると土砂を巻き込みながら爆裂した。

幼性体なら数十は吹き飛ばすその威力のせいで、辺りには砂埃が舞い上がり、汚染獣の姿を見失う。

その瞬間、レイフォン達は突然、横へと飛ぶ。

その半秒後、そこに振り下ろされたのは汚染獣の尾である。

常人なら間違はなく直撃のタイミングを、レイフォンは前に踏み込むようにして躲

す。

「はっ!!」

汚染獣の尾を避けたレイフォンは、躲し際にそのまま老生二期の傷だらけの尾を斬り裂いた。

悲鳴を上げる老生二期からレイフォンが距離を取るように後方へ飛ぶと、頭上からセヴァドスの衝刺の矢が降り注ぐ。

必殺の一撃を誇るほどの威力はあったが、それでも老生二期は歩みを止めない。

だが確実に老生二期は弱っていた。

段々と動きが鈍くなった老生二期を見て、レイフォン達はここが決め時だと長年の戦闘から判断した。

とどめを刺そうと剣に剄を流したその時、フェリの声が聞こえた。

『レイフォン、隊長が此方に向かっていると、そう伝えましたよね?』

「え? そうでしたか?」

フェリにそう言われて、レイフォンは思考を巡らせる。

確かにそういうことは聞いていた気がするが、こちらも極限の状態だったため、どうフェリに答えたかまでは思い出せなかった。

『貴方は、後方に下がれと言っていました』

「えっと、そんなことを言った気がしますね」

レイフォンがフェリと会話をしていると、突然、セヴァドスが珍しく大声を上げた。

「レイフォンっ!!」

「っ!?! ちっ!!」

その呼びかけに咄嗟に反応し旋刃で横へと跳ぶと、その寸前のところを老性二期の体が通過した。

着地と同時に戦闘へと集中すると、傷だらけの老性二期が宙に浮いていた。

——その背に巨大な羽をつけて、

「羽?」

背から伸びる翅は、全部で四枚。

半透明なソレは、昇る朝日の光に乱反射し、不気味に輝いていた。

ハサミに尻尾と、様々な武器を破壊したことにより、老性二期も最後の武器を取り出したのだろう。

突然の変貌に一瞬、虚を突かれることとなったレイフォンだったが、やるべきことに変わりはない。

「なら、その羽を斬り飛ばしてやる」

刃を錬金鋼へと流し込んだその時——レイフォンの視界の端にそれは現れた。

前方にそびえ立つ崖の上から現れたのは、間違ひなく人影であった。

そして、その人影はレイフォンには見覚えがある。

ニーナだ。

何故、隊長がここにいる、レイフォンの思考が一瞬停止し、同時に隣には同小隊員のシャーニッドが何かに魅入られたように固まっていた。

「フェリ先輩つ!!」

『わかつていますっ』

思考停止状態から復帰したレイフォンの言葉よりも早く、フェリが動き、そしてそれ以上に汚染獣が崖の上にいる獲物の存在に気がついた。

標的をレイフォンからニーナに変えた老性二期は、素早く翅を使って空へと舞い上がると、そのまま一直線に崖の上のニーナへと向かう。

内力系活動の変化、旋廻。

瞬時にレイフォンもその後を追うが、距離の差から老生二期の方がニーナへと辿りつくのが早かった。

目の前の餌を捕食するために、老生二期は大きく口を開ける。

その光景にレイフォンは、右手に握る複合錬金鋼に向けて壊れる寸前までの莫大な劉を流し込むと、そのまま飛来する老性二期に向かって——投擲した。

「何をやっているんですかっ!？」

「レイフォンっ!」

凄まじい速度で放たれた大剣が、宙を舞う老生二期の身体に突き刺さりその巨体を吹き飛ばすと、その間にレイフォンは、ニーナのいる崖の上へと駆け上がり、ニーナとの近くにいたシャーニッドを抱きかかえてその場から距離を取る。

レイフォンの機転により、ニーナとシャーニッドを救うことができたが、その代償は決して小さなものではない。

複合錬金鋼は汚染獣に突き刺さったままで、レイフォンの攻撃手段は、腰に差さった青石錬金鋼の鋼糸のみとなってしまうた。

「フェリ先輩、彼は、セヴァドスはどこにいますか？」

『彼は、現在汚染獣と交戦中です』

「錬金鋼は？」

『先程、汚染獣により破壊されているのを確認しました』

「おいつ!! 聞いているのか、レイフォンっ!」

フェリとの会話に割り込んでくるように入って来たニーナに、流石にレイフォンも声を荒げてしまう。

「何ですか? 今は戦闘中ですっ!」

「わかっているっ！」

自分達に黙って戦場に出かけたレイフォンに対してニーナは怒っているようだが、レイフォンからしても忠告を無視して危険な場所に現れたニーナの能天気さには苛だちが隠せなかった。

「まあ、落ちつけて」

そんな二人の間に仲裁に入る者がいた。

シャーニッドである。

「ニーナ、今はそんなこと言ってる場合じゃねえだろ？」

「……わかっている」

「ふう、こいつもお前が心配だったんだ。いくらお前が馬鹿強えてもな」

「はい……」

珍しく真面目なシャーニッドの言葉に二人とも思うところがあったのだろう。

バツが悪そうに顔を上げると、互いに目が合い――

「すまなかった」

「いえ、こちらこそすみません」

互いに頭下げることにより、この場は落ち着くことになった。

だが、危機的状况は今だ打破できてはいない。

武器を失くした以上、汚染獣の撃破が難しくなった。  
どうするべきか？

鋼糸では、あの老生二期を倒すことはできないだろう。

そうになると、セヴアドスが主体となって、レイフォンが援護するという方法しかない。  
だが、セヴアドスも手持ちの錬金鋼を幾つも潰しているため、レイフォンと同様に錬金鋼を失う可能性がある。

この決断をするには当人との話が必要である。

レイフォンがフェリにセヴアドスを呼んでもらおうと、声を出そうとした時——頭上から黒い影が降ってきた。

「ふう、流石に老生体を一人で相手するのは疲れましたね」

・  
・  
・  
・

「倒したのですか?」

「いえ、戦っていると突然、何処かへ飛んでいきましたよ。ツエルニのいる方向とは真逆だったので追い打ちはしないでおきましたか?」

疲労した体をほぐす様に体を動かしていると、レイフォンが近寄ってきた。

その手には、巨大な複合錬金鋼はない。

先程破壊されたのをセヴァドスは確認していたが、やはり勿体無いと思ってしまうた。

天劍授受者ではなかったセヴァドスだが、保有している剽量も天劍級と言っているらしいだろう。

故に自分自身の全ての力を振うことができない通常の錬金鋼では微かな不満を覚えていたのだ。

そのため、ハーレイ達が開発している複合錬金鋼について強い興味を抱いていた。

『確かに、進行方向はツエルニの逆方向ですね』

端子を飛ばして確認したのだろう。

フェリの言葉に、レイフォンも肩の力を抜き、大きく息を吐いた。

流星のレイフォンも疲れたのだろう。

とはいえ、セヴァドスの体にも疲労が溜まっていた。



ここまで命がけで戦ったのは、長い人生においても数回しかないだろう。

セヴアドス自身はまだまだ戦えるつもりだが、汚染獣が引いてくれたことは有難かったかもしれない。

この戦闘で白金錬金鋼を四つも破壊しており、現在持っているものが最後の五個目であるため、これ以上の戦闘は死を意味する。

戦闘狂と呼ばれるセヴアドスだが、別に死にたがり屋でもなく、武器がない状況で戦うという命知らずな考えも持つてはいない。

それにだ、いくら傷を負ったとはいえ、戦っていたのは老性二期である。

レイフオンが万全であれば、追撃をしてもよかったかもしれないが、流星にこの状況下で一人で戦うにはリスクが大きすぎる。

そんな蛮勇で命を失う気はない。

死んでしまえば、もう二度と戦うことができないのだから。

帰還したら、ハーレイさんに私用の錬金鋼を作ってもらいましょう。

そんなことを考えるセヴアドスの隣では、シャーニツドが緊張からか地面に腰を下ろした。

「やれやれ、一時はどうなるかと思っただぜ」

『それならこんなところに来ないでください。』

お荷物』

「むぐっ」

フェリの辛辣な言葉にニーナ達は顔を引き攣らせるのを、セヴァドスは隣で眺めていた。

シャーニツドはこの前練武館で顔合わせを行っていたが、隣にいる女性と会うのは初めてだった。

セヴァドスが見た限り、明らかに彼女は本調子ではなさそうだったが、こんな所まで来ているを見て、物好きな人ですねーと考えていると、騒いでいる三人（一人は念威端子越しだが）の会話を聞いていると、ふと、レイフォンが疑問を口にする。

「しかし、汚染獣は何処に行ったのでしょうかね？」

レイフォンの疑問は最もなことであった。

何故、老性二期はこの場から逃げるようにして立ち去ったのか？

向こう側からしてみれば、脱皮をして腹を空かし、傷を負って栄養の補給が絶対に必要なはずなのに、目の前の餌を放置して逃げだした。

もしセヴァドス自身が汚染獣ならば、ここでの後退はあり得ない。

この場で栄養の補給をしなければ、間違いなくあの消耗なら近いうちに命を失うことになるだろう。

老生二期の行動に微かな違和感を覚えたセヴァドスは、自分よりも汚染獣戦の経験が

あるレイフォンの方に視線を向けてみる。

するとレイフォンも同じように考えていたのか、首を横に振って答えた。

「わかりません。 フェリ先輩、何かわかりませんか」

『ちよつと待つてください。 ……これはっ』

深刻そうな声を上げたフェリに、その場にいた全員の警戒が高まる。

その沈黙の中、レイフォンが代表して尋ねた。

「何かわかったんですか、フェリ先輩？」

『汚染獣の進行方向に放浪バスが確認されました』

「なんだってっ!!」

フェリの言葉に、一番驚き反応したのはニーナである。

それとは対照的にセヴァドスと、レイフォンの表情は冷静だった。

これから起こりうるだろう惨状すらも全て理解して。

「なるほど、ツエルニの捕食は諦めて、近くにいた餌へと向かいましたか」

餌を前にしてこの場から逃げるような形で見逃した理由、それは近くに大量の餌が

あったからである。

その答えを知ったセヴァドスは、なるほど、と疑問が解消されたことに小さく頷いた。

・  
・  
・  
・

感心したように、そして他人事のように。

冷静な声色でそう言ったセヴァドスの姿に、ニーナは怒りを覚えた。

「何を呑気なことを言っているっ!! 早く追わなければ!!」

「ふむ……何故です?」

全く焦ることなく、不思議そうに首を傾げるセヴァドスの返答が、ニーナには一瞬理解できなかつた。

この男は何を言っているんだ、と。

目の前で危険に晒されている人間がいるのなら、助けるのが人として、武芸者として当たり前のことである。

「何故だどっ!! 汚染獣が放浪バスに乗っている人達を襲おうとしているのだぞっ

!!」

「そうですね。確かに汚染獣に補給されれば面倒です」

早くここを逃げるべきですね——とセヴァドスの言葉は、ニーナが考える信念とはまるで別物でだった。

「っ！ 貴様っ!!」

冷徹に、ただ状況を述べるセヴァドスに怒りのあまり、ニーナは右手を伸ばす。

「落ちていくください、隊長」

セヴァドスの首元を掴もうとしたニーナの手を止めたのは、同僚であり部下であるレイフォンである。

「レイフォン、お前も何か言ってる……」

「追うのは不可能です」

レイフォンなら——こいつならわかってくれる。

そう抱いたニーナの希望は、レイフォン本人によつて打ち砕かれる。

レイフォンが考え抜いて出した結論もセヴァドスと同じであるということに、ニーナはその時初めて気がついた。

ただ、違う点を上げるとするならば悔しそうに歪める表情だけである。

『あの汚染獣の速度から換算すると、私達が追いついた頃には、もう……』

その発言に同意するようにフェリのいつも以上に感情のない声が端子越しに響く。

「元々、外の世界は大地が荒れ果てているうえ、この辺りは、崖や谷などの高低差がありすぎます。ランドローラーを走らせるには不向きですし、もし追うなら自分の足で追いつくしかありません」

「そうなればこちらの消耗は免れませんし、ランドローラーも置き去りにしなければなりませんね。それにレイフォンの錬金鋼が壊れている状態で戦うのは無謀ですよ？」

レイフォンとセヴァドスの二人の説明を聞いて、ニーナはこの状況がようやく理解でき始めた。

周りを見渡すと、今までニーナが過ごしてきた中で一番と言っているいい劣悪な環境で、恐らく自分では追いつくことすらできない、ということ痛いほど理解してしまった。

頼れる部下も、ニーナ自身のせいで武器を失い、戦うことすらままならない状況に追い込んでしまった。

感情に反して、ニーナはそのことは理解してしまったのだ。

ただ、生き様が、在り方が、その結論を許容できない。

ゆえに吐き捨てるようにありきたりな言葉を吐くことしかできなかった。

「つなら、どうするんだっ？」

「老生二期が獲物を食っている間に、私達はツエルニに向かいますよ。あのダ

メージからしてすぐに追ってくるということはしなさそうですから」

「獲物だと？ 貴様、人の命を何だと思っているっ!？」

セヴァドスの言いように、ニーナは思わず睨みつけてしまう。

だが、目の前にいる男はニーナの激情の一片すら感じさせないほど、顔を顰めて溜め息をつく。

「その議論に意味があるのですか？ 汚染獣が向こうに行つたといえ、あんまりのんびりしていると追いつかれますよ？」

再び声を上げようとしたニーナは、全身を刺すようなセヴァドスの鋭い眼光に言葉を失う。

「それに貴方、何か勘違いしていませんか？ 編入した私がロス会長から言われたこと、それはツエルニを守れということです。決して汚染獣を倒せや見知らぬ人のために命を賭けるというわけではありません。それとも私に老性二期に単独で仕掛けると言っているのですか？」

「っ!?! 私は別にそんなつもりでは……」

「別に私は構いませんよ、貴方にそれを私に命令できる権限があるかは別にして。

ただ、私が追って汚染獣を倒したとしても、どのみち放浪バスの中の人達を救うことは不可能ですよ？」

セヴァドスの言葉がニーナの心に突き刺さる。

そして同時に理解してしまう。

ニーナ・アントークよりも、セヴァドス・ルツケンスの方がツエルニのことを考えている、と。

ニーナのせいで、勝機を失い、そのせいで犠牲を生むことになった。

さらに自分自身の言葉が、この場にいる仲間を危険な目に合わせようとしている。

『それ以上は近づくな。もつと後方へ退避しろ、だそうです』

レイフオンの言葉が今になって痛い程に理解ができた。

ニーナは無力で、弱くて、足手まといだ。

見捨てたくなかった。

だが、見捨てなければならぬ。

自分自身が、あの時から成長していないことを痛感し、ニーナは悔しさのあまりに声を詰まらせ――

そして、慟哭の声をあげた。

――それでも悲劇が変わることはなかった。



## 第十二話

先日の汚染獣——老性二期との戦いから一週間ほど過ぎた頃。

死神すら裸足で逃げ出すだろう過酷な戦場で主役の一人を務めたセヴアドス・ルツケンスは、現在、学生寮の自室にて至福の時を過ごしていた。

ベットに寝そべる体勢で、ペラペラと手に持った文庫書をめくりながら、傍らのテーブルの上に置かれた飲みかけのジュースに手をつける。

他にもスナック菓子や色とりどりの野菜が挟まれたサンドイッチなどが机の上に並べられ、誰がどう見ても寛ぎ過ぎていると言えるだろう。

「ふむ……何故、人質を取られたからって武器を放ってしまうのでしょうかね、この主人公は」

武器を捨てては駄目でしょう、と思わず本の感想を呟きながら、セヴアドスは本にしおりを差し込む。

ベットから身体を起こすと、手に持った本をテーブルの上において、代わりにテーブルのサンドイッチを掴んで口へと運ぶ。

「さて、と次は何を読みましようか？」

もぐもぐと、サンドイツチを頬張りながら、セヴァドスは部屋の隅にある本棚から新しい本を物色し始めた。

その光景は、戦闘狂と名高いセヴァドスには似合わないように見えるだろう。

それなりに付き合ひのあるレイフォンですら、この光景を物珍しそうに眼を丸くすることもしない。

だがセヴァドスは、兄であるサヴァリスのように戦闘や力だけに興味、固執を示しているわけではない。

ケーキなどの料理の食べ歩きを頻繁に行い、月に二回は映画館に赴き、放課後の空いた時間には図書館などにも通っている。

本と言つてもセヴァドスが読む物は様々であり、歴代の卒業生の論文から、遠い過去の偉人の残した研究書、先程まで読んでいたミイファイお勧めの娯楽小説など様々の分野の書物を読むほどの本好きである。

勿論、武芸者としての本質も忘れることなく、有名な武芸者の剽技書や、武芸者の大敵である汚染獣のことを記した研究書、武芸者の生命線とも言える鍊金鋼についての鍊金学の書物にも目を通してゐる。

最近では、ツエルニに来て集団戦闘というものにも興味を示しており、様々な戦術書なども読み漁っているくらいだ。

これらの事実から、セヴァドス・ルツケンスという人間は、好奇心が旺盛な人間ということである。

「そういえば、さつき書かれていた技つて中々格好良かったですね。今度試してみましようか？」

空想作品のとんでもない技を挑戦しようとする変態であることには変わりはないが。

そんな平穏なセヴァドスの一時は、突如、鳴り響いた音楽により中断されることになる。

軽快でポップな音楽を鳴り響かせる携帯端末に手を伸ばすと通話ボタンを押した。

「おや、もうこんな時間ですか……もしもし」

『遅い、遅いよっセヴァちゃんっ！』

携帯を耳に当てると受話器の向こうから聞こえたのは、友人のミイこと——ミイフィの声である。

「やあ、こんにちはミイさん。実は今、貴方のお勧めの小説を読んでいます」

『えっ？ ああ、『愛憎のトライアングル』？』

「いえ、そちらの方はもう読みましたよ。中々最後の終わりは衝撃的でしたね。

恋愛とはあれ程までに恐ろしいモノなんだと再認識しました」

『いや、アレを恋愛のスタンダードにしちゃったら普通に駄目でしょ？』

セヴァちゃんは普通じゃないけどね、と感心したようにしみじみと頷くセヴァドスに、ミイフィの受話器越しのツツコミが入る。

ちなみに本の内容を簡単に言うと、題名通り女と男の関係のドロドロさ現わした淡い恋心を抱いているメイシエンなどには見せれない作品となっている。

「へえ、そうなのですか?」

『そうなのです。で、何を読んでいたの?』

「『聖騎士アルト・スロット物語』ですよ。中々興味深い内容ですね」

『聖騎士アルト・スロット物語』

とある都市の有名な物書きが晩年に書いたもので、数十年前の作品と言え、根強い人気を誇る小説である。

グレンダン育ちのセヴァドスは知らなかったが、交通都市ヨルテムでは爆発的人気を誇ったらしい。

『それ面白いでしょ? 悪女に仕える誇り高き騎士。様々な苦難が彼を襲おうとも、ただ一途に主である悪女のために生きた男の物語、特にラストと言ったら……』

「ふむ、そういう話だったんですか? 私はこの話に登場する魔獣というものに興味が惹かれたのですが」

『はははは、セヴァちゃんはそういうの大好きだよね?』

「武芸者ならそう思うのが当たり前だと思えますか？」

『私の周りには、そんなバトルマニアはセヴァちんくらいだね』

だんだんとセヴァドスという人間がわかってきたのだろう、あつさりと笑って話を流すミイファイに対し、セヴァドスは何か思い出したように口を開く。

「そう言えば、要件は何ですか？」

『つああつ!! もうすぐ今日の第一試合が始まるしっ!! セヴァちんダツシユっ！

遅れたらジューズ奢りだから!!』

「わかりました。すぐに行きますね」

焦るミイファイと違い、いつもの様子でセヴァドスは慌てることなく電話を切ると、部屋の開かれた窓に足を掛ける。

内力系活剽の変化、旋剽。

爆発的な剽により高まった脚力により、セヴァドスはツエルニの空を駆ける。

およそ一分後につくであろう試合会場に向けて、一陣の風が周囲の屋根を砕いていく。

・  
・  
・  
・

「へえ、思っていたより面白いですね」

目の前で行われる試合を眺めながら、セヴァドスは口の中にポップコーンを放り込む。

その隣にいたナルキも同様にセヴァドスの持つポップコーンの箱に手を伸ばすとそのまま中身を口へと放り込むと、意外だ、と声を上げる。

「そうか？ グレンダン出身のセヴァならレベルが低いって言うかと思っただけ」

「まあ、レベルが高いとはお世辞でも言えませんね。動きに無駄があり過ぎますし、剋技の完成度も低くて、剋息も稚拙です」

「そ、そうか……」

「ですが、楽しむというのと強いというのは別物ですよ」

弱い試合に、そういう試合なりに面白いところはある、とセヴァドスはポップコーン

を食べながら考えていた。

勿論、実際に戦うなら強い者と戦う方が断然楽しめるが、観戦に関しては戦っているのが絶対に強者でなければならぬというわけではない。

観戦というのは、セヴァドスにとって映画を見ているような感覚である。

気楽にそう言うセヴァドスに対し、ナルキとは反対側に座っていたミイファイが、セヴァドスのポップコーンに手を伸ばす。

そのままポップコーンを口に放り込んだミイファイは笑いを堪えるように口を開く。

「うわっ、言うね。一応、ランキングが上位の試合だったんだけどなあ」

「そうなのですか？」

ミイファイの言葉を聞き、セヴァドスは再び目の前の試合を、娯楽ではなく武芸として見てみる。

稚拙な技に、微量な熱量、周囲の黄色い声援に応えるように誇らしげに手を振る武芸者達。

まるで道化じゃないですか？

グレンダンで生まれ、武芸に明け暮れたセヴァドスには、これが武芸とは到底思えなかった。

だが、これがある意味、正常なのかもしれない。

危機感がないというのは問題であるが、通常の都市ならば汚染獣を避けていくため、グレンダンのように毎週汚染獣と戦っているはずがない。

つまり、異常なのはグレンダンであり、汚染獣に襲い掛かる狂った都市のほうだろう。しかし、それでもセヴァドスにとつて、グレンダンは愛すべき故郷であり、グレンダン以上に心躍る場所はないと思っている。

「セヴァドスくん……大丈夫？」

「む？　何がですか？」

「いや、なんかさ……その笑みが怖かったって言うか……」

「そうですか？　怖がらせて申し訳ございません」

目の前の試合をただ黙々と見ていたセヴァドスを見かねてか、ミイフィを挟んだ位置に座るメイシエンが話しかけてくる。

その隣では、珍しく顔を引き攣らせているミイフィの言葉に、セヴァドスは首を傾げながらも、とりあえず謝るしかなかった。

それを見て、ミイフィは一度喉を鳴らすと、気を取り直したように笑みを浮かべる。

「うん、そう言えば……はい、これ」

「これ……」

「うん、それはこの前セヴァちゃんに頼まれたやつだよ」



「ミイファイが鞆から取り出したのは、学園の売店で売られているどこにでもあるノート。」

「ただノートの表紙には、？とミイファイの字が書かれていた。」

「ノートを受け取ったセヴァドスは、表紙から一枚一枚ページを捲り確認していく。」

「そこには、このツエルニに所属する武芸者のデータが書かれており、誕生日や出身都市、武器の種類など個人のデータから、対抗戦の勝率などの小隊のデータもそこには記されていた。」

「つい先日頼んだにも関わらず、ここまでの豊富な情報量を調べてきたミイファイに思わず、セヴァドスも感心したように声を上げる。」

「これは、本当に素晴らしい。ありがとうございます、ミイファイさん」

「ノートにはミイファイの努力が鮮明に分かるほど記されており、セヴァドスはそんなミイファイに対して後日のお礼しようと考えた。」

「そう言ってもらえるとこちらも嬉しいね」

「何が書いてあるんだ？」

「二人だけが話が進み、話に取り残されるようになったナルキが、ノートを気にしたように呟くと、セヴァドスは適当にページを開いた。」

「全小隊のメンバー表ですよ。先日、ミイファイさん頼みましたね」

「ふふふふ、短期間だったから、まだ改良の余地ありだけど、中々の出来だったりするんだよね」

「ミイ、凄いい……」

感心したように呟くメイシエンに、ミイフィは胸を反らすようにして自慢げに笑いを浮かべる。

そんな二人に、セヴァドスは笑みを浮かべながら、セヴァドス本人も満足げにノートをペラペラとめくっていく。

ノートのページをめくるセヴァドスの指が突然、とあるページで止まった。

「おや、これは」

「あ、そうそう。このこと聞きたかったんだけど、この五年のゴルネオ先輩ってセヴァちゃんと同じ名前だよな？ 関係者か何か？」

セヴァドスの開いたページを見ながらミイフィが尋ねてくる。

開かれたページは、ツエルニの『第五小隊』のことについて書かれたものであり、その小隊の隊長にはゴルネオ・ルッケンスと記されていた。

セヴァドスは何でもないように軽い口調でミイフィの質問に答えた。

「ええ、私の兄ですよ」

「兄っ?! おい、初耳だぞ」

「私も兄さんがここにいることに、今初めて気付きました」

「いや、おかしいだろう。普通に考えて」

セヴァドス本人も全く知らなかった事實に、ナルキは呆れたように溜め息をついた。普通、兄がいる都市くらい覚えておらず、確かにゴルネオは五年前にグレンダンを出て、何処かの都市に留学したとまでは聞いていたが、まさかこの地にいるとは考えてもいなかった。

「そういえば、兄さんとは全く連絡とか取っていませんでしたね」

まさかこんな所で兄と会えると思わず、若干浮かれ気味のセヴァドスに、メイシエンは心配するように口を開く。

「仲、悪かったりするの?」

「いえ、仲良しですよ。グレンダンではいつも遊んでくれました」

思い出すのは、グレンダンでのゴルネオとの日々である。

自分と外見も性格もよく似ている長男のサヴァリスと同様に、次男のゴルネオともよく組み手をして腕を競い合った。

天剣授受者となったサヴァリスと違い、天賦の武芸の才はゴルネオにはなかったが、それでもセヴァドスにとって大切な兄の一人には違いがなかった。

——そう言えば小さい頃はよく本を読んでくれましたつけ、と思い出に浸っているセヴァドスを見て、ナルキは呆れたように目を細める。

「ならやつぱり気付くだろ？　ゴルネオ先輩は、セヴァにいうのは何だが、このツエル二屈指の武芸者の一人だぞ？」

「うーん、そこはほら、それは私はここに來て日が浅いですから」

セヴァドスがこの地に來て約二週間。

その間、セヴァドスは興味が赴くままにツエルニを探索していた。

時にはナルキと仕事で、犯罪者や違反者を捕獲したり、時にはミイファイと街へ出かけて、カラオケやシヨツピングを楽しんだり、時にはメイシエンの働く店で、ケーキを満腹になるまで食べたり、時にはレイフォンにへばり付くようにして授業を受けたりと、かなり濃密な時間を過ごしてきた。

思えば、戦うこと以外にこんなに時間を割いたのは生まれて初めてかもしれない。初めて都市を離れたせいで、セヴァドスは少し浮かれていたようである。

そういうこともあり、セヴァドスは兄のゴルネオの存在に今まで気づかなかつた。

「じゃあさ、あとで兄さんにも会ってくればいいじゃん」

「そうですね。この五年でどれくらい強くなつたかも気になりますし」

「それなら丁度いいかもしれないぞ。今日のレイとんの隊の対戦相手は、ゴルネオ

先輩率いる第五小隊だからな」

ナルキにそう言われて試合の予定表を見ると、そこには『第五小隊VS第十七小隊』とデカデカと書かれていた。

「本当ですね。しかも次の試合じゃないですか？」

「あ、本当だ。どっちが勝つかかな？」

「んー、部隊の完成度なら第五小隊だろうがな……」

ナルキの言う通り、ツエルニトップクラスの第五小隊の錬度に張り合えるのは、最強の小隊である第一小隊くらいだろう。

だがセヴァドスは、それを赤子のように潰す存在が十七小隊にいることを知っていた。

しかし、レイフオンはどのみち本気を出せないから、順当に第五小隊が勝つというのがセヴァドスの予想である。

会場が一瞬、湧いたように声上がる。

視線を上げてみると、そこにはレイフオンのいる十七小隊の面々とゴルネオが率いる第五小隊が姿を現していた。

遠くから見てもその姿を見間違えることはなく、ゴルネオ本人であり、兄弟で唯一似ていないその容姿も変わっていなかった。

「うらやましいですね。兄さんはレイフォンと戦えて」

レイフォンに視線を向けるゴルネオを、観客席と言う遠い場所からセヴァドスは羨ましく見ていた。

勿論、素手同士なら授業の際にやれないこともないが、剣を持ったレイフォンと戦う機会はそうそうないモノである。

実際、セヴァドスはツエルニに来てからレイフォンと一度も戦ったことがない。

「そうか？ 私は、セヴァとレイとんが組み手しているの見てみると、怖くて心が折れそうになるんだが」

「大丈夫ですよ。そのうち、恐怖が楽しみに変わっていきますから」

「それって、大丈夫じゃないだろう」

「しつ、二人とも、もうすぐ始まるから」

変態の仲間入りだろ、と返したナルキに割り込むように、マイフィは口を挟む。

フィールドでは、両小隊が配置につき、開始の合図を待っていた。

その様子に見てメイシエンは心配そうに呟いていく。

「レイとん、怪我しないといいけど……」

「大丈夫ですよ。それがだんだん楽しくなっていますから」

「お前は少し黙ってろ」

ミイファイとナルキの声に重なるように、試合開始のサイレンが鳴り響いた。

## 第十三話

試合のサイレンが鳴り響くと囃役であるレイフォンが、フィールド中央部分の辺りが開けた場所に現れる。

そして、そのレイフォンに対し、後を追うようにして二つの人影が林のエリアから飛び出してきた。

一人は第五小隊の隊長を務めるゴルネオ・ルツケンス。

その卓越された体術は、このツエルニでもトップクラスであり、ツエルニを代表する武芸者の一人としてと呼び声が高い。

そして、もう一人は燃えるような赤髪をした少女——シャンテ・ライテ。

森海都市・エルパの出身の武芸者であり、森の奥で獣に育てられた野生児である彼女から繰り出される変幻自在の槍技は、まさに獣の如き本能の為せる技である。

本能のシャンテ、理性のゴルネオ。

ツエルニ最高コンビと称されるゴルネオ達に挑むのは、この数週間で新星の如く現れた期待の新人であるレイフォン。アルセイフである。

ツエルニ最強ではないかと噂されるレイフォン・アルセイフと現武芸科の長を務める



ヴァンゼすら抑え込むゴルネオとシャンテの黄金コンビが対峙した瞬間、観客の歓声が上がリ、会場のボルテージが一気に高まっていく。

熱気に包まれる観客席でたった一人だけ目の前の試合を冷めた眼つきで見下ろす者がいた。

セヴァドス・ルッケンス、自称レイフォンの親友であり、ゴルネオの実弟である。

思った以上につまらないですね、と呟きながら。

試合を成り立たせるために本来の力を半分程度しか出してはいないレイフォンについては別に問題ない。

生徒会長のカリアンから、そういう指示があるのは知っていたし、レイフォンが本気を出せば試合が成り立たないこともわかってる。

確かに、圧倒的なまでの瞬殺劇を見るのも喜劇を見るようで面白いが、レイフォンが上手く加減をして試合を成り立たせる技術を見るのも、それができないセヴァドスにとっては十分に勉強になることだった。

シャンテ・ライトもまだいい。

学園都市と言えど、流石に五年生だけあって、他の小隊の者達よりも身体のキレが良く、セオリーのない攻撃は見ていて中々面白いものである。

レイフォンやグレンダンの武芸者達と比べると、些か物足りないところはあがるが、こ

のツエルニの中では十分に興味を持つてゐる人材である。

レイフォンにシャンテ、彼らはセヴァドスを不快にさせる要因ではなかった。セヴァドスを不快にさせる要因、それは兄のゴルネオのことであつた。

確かに、小隊長を務めるだけあつて他の小隊の人間よりも劉や技の質が高い。

同隊員のシャンテであつても、ゴルネオに勝つことはできないだろう。

ゴルネオがツエルニの中で最高レベルの武芸者であることは認めよう。

だが、それだけだつた。

グレンダンにいた時から殆ど進歩がない。

セヴァドスは、ナルキ達に言つたように先程のレベルの低い試合を見ても楽しめる戦

闘狂である。

だが、身内の脆弱さを楽しめるほど、兄弟に無関心ではない。

「全く、兄さんはこの五年間、いったい何をしていたのでしようね」

あまりにも不出来な兄の姿にセヴァドスは溜め息をつくしかかない。

程なくして試合終了の合図のサイレンが会場に響く。

結果は十七小隊の勝利——というわけではなく、第五小隊の辛勝であつた。

どうやら、レイフォンがゴルネオ達を倒す前に、十七小隊の隊長が敗北したらしい。

だが、セヴァドスにはそんな試合結果なんてどうでもよかつた。

セヴァドスの瞳には、顔を顰め、レイフォンを睨みつけることしかできないゴルネオしか見えていなかった。

・  
・  
・  
・

自身が率いる小隊が勝利したにも関わらず、ゴルネオの表情は明るくはなかった。確かに試合には勝ったが、向こうのエースであるレイフォンには手も足も出なかった。

相棒のシャンテの手を借りても、だ。

「流石は元、天剣授受者というわけか」

全く腹立たしい、と毒気づくゴルネオは、自身の小隊メンバーが待つ控室の扉を開いた。

「へえ、君ってゴルネオ隊長の弟さんなんだ」

「はい、セヴァドスと言います。いつも兄がお世話になっています」

そこには小隊の仲間達以外に、異物と言える者が存在した。

親しげに小隊メンバーと話すその姿を確認して、ゴルネオは唾を飲み込み、後ずさりしてしまふ。

その行動に気付いたように、こちらに振り返り笑みを深める。

「あ、お久しぶりですね。兄さん、お元気でしたか?」

人懐っこい笑みを浮かべる弟——セヴァドスに、ゴルネオはようやくの口の奥底から声を捻りだす。

「あ、ああ。五年ぶりだな、セヴァ」

「最近、編入してきたのでご挨拶が遅れて申し訳ございませんでした」

「お? 流石はゴルネオ隊長の弟さん、やっぱり礼儀正しくて凜としている。やつ

ぱり隊長の弟さんですね」

「あ、ああ」

深々と頭を下げるセヴァドスを見て、小隊の一人が感心したように声を上げる。

しかし、ゴルネオは動揺のあまりその言葉対し曖昧な返事しかできなかった。

「なあ、五年も会ってないんなら積もる話もあるんだろう? 隊長とゆつくりと話

ていけよ」

「それもそうだな、じゃあ、隊長お疲れ様です」

「ありがとうございます」

氣を利かしてか、先に帰る小隊のメンバーにセヴァドスは笑顔で見送る。

扉が閉まったのを確認すると、セヴァドスはこちらに振り返った。

「お久しぶりですね、兄さん。実は今日、試合を見に来たんですよ」

「そうなのか？ ならありがとうと、言っておくべきか」

「別に気にしなくていいですよ。来ていた友達も皆、レイフォンの小隊を応援して

いましたしね」

セヴァドスが何でもないようにレイフォンの名を親しく呼んだ時、ゴルネオは思わず眉を顰めてしまう。

そのことに気付いているのか気づいていないのか、セヴァドスは特に表情を変えることなく周囲を見渡し、壁際に置いてあるベンチを指差して提案した。

「五年も会ってなかったんですから、ベンチに座って話でもしませんか」

「わかった」

セヴァドスの提案に、ゴルネオも特に気にすることなく頷いて、セヴァドスの座ったベンチに並んで座る。

機嫌の良さそうな笑みを浮かべるセヴァドスは、五年前と全く変わらない姿だったため、ゴルネオはグレンダンで日々を思い出し、懐かしさを感じてしまう。

だが、同時に思い出すのは、若干十歳の少年が天剣授受者であるサヴァリスと殴り合

い、額から血を流し、右腕を折られても楽しげに笑う異常な光景であった。

その時、ゴルネオは悟った。

兄であるサヴァリスは勿論のこと、五つ下の弟のセヴァドスにも自分は敵わないということを。

才があるのは知っていた。

だが、サヴァリスとセヴァドスは、他の人間とは違う何かを持っていた。

それは同時に、先程戦ったレイフォン・アルセイフにも当てはまることである。

思わず思考の渦に入りかけたゴルネオを止めたのは、隣にいるセヴァドスの楽しげな声である。

「しかし、兄さんってツエルニにいたんですね。連絡とかが来ないから気付きませ

んでしたよ」

「父上には定期的に連絡はしていたはずだが？」

「そうですね、私はそんなことを一度も聞かされたことはないですね」

何でもないようセヴァドスは言うが、ゴルネオにはそのことが不審に感じた。

確かにグレンダンを出るときは、色々と忙しかったせいで伝えることはできなかったかもしれない。

だが、ツエルニに着いてからは、実家には最低でも一年に一回は手紙を出していた。

その中には、セヴァドス宛てのものも含まれており、こちらの事情等も書いて送つてある。

確かに父親や兄のサヴァリスからは返信が来たのに対し、セヴァドスだけは一度も返信が帰つてこなかったため、気分屋であるセヴァドスだから忘れているのだろう、とゴルネオは思つて諦めていた。

だからこそ、ゴルネオはサヴァリス以上にセヴァドスが扱いにくいと感じているのかもしれない。

色々和不審な部分があつたが、当のセヴァドスは何でもないうように会話を再開させていた。

「しかし学園都市というのは、グレンダンと違う意味で、中々面白いところですね」

「ああ、そうだな」

「ご飯も美味しいですし、娯楽もたくさんあります」

「そうだな」

セヴァドスが言っていることは、ゴルネオも初めてこの地に踏み入れた時にそう思つた。

汚染獣を知らない世界。

ゴルネオもその恐怖と対峙したことはないが、念威からその戦鬪を何度も見たことが

ある。

故に汚染獣との戦いは避けられないものだと思ったのだが、どうやらグレンダンの環境が特殊すぎたのだとツエルニに暮らしてみても気がついてしまった。

汚染獣と戦ったことのないツエルニの環境は、グレンダンの武芸者達からは温い環境だと言われるかもしれない。

それでもゴルネオにとって、ツエルニは安らぎを覚えた第二の故郷であった。

「しかし、そのツエルニも崖っぷち、今回の武芸大会に負ければ、滅びを迎えるというわけです」

「それは、俺の不甲斐なさを言っているのか」

五年間も在籍して何をやっている、とそう言われた気がしたが、セヴァドスがそんなつもりでいつているつもりが無いことは百も承知であった。

失礼しましたと、頭を下げるセヴァドスに、ゴルネオもバツが悪そうに顔を逸らす。

「別に武芸者一人の問題ではありませんよ。学生が行う戦争とはいえ、たった一人の武芸者でひっくり返すことができるほど甘くはありません。まあ、レイフォンなら、それでもありませんが」

何でもないようにレイフォンの名を呼ぶセヴァドスに、ゴルネオは思わず口を挟んでしまう。



「レイフォン・アルセイフか……セヴァ、何故お前はそんなに気安くアイツと話ができる?」

レイフォン・ヴァルフシュテイン・アルセイフ。

ツエルニにいたゴルネオですら、彼の活躍は耳にしていた。

そして、レイフォンが起こした最後の事件についても。

だからこそ、目の前の弟であるセヴァドスが何でもないようにその名を呼ぶことが信じられなかった。

怒りが疼くゴルネオの心境を知ってか知らずか、セヴァドスは当たり前のように口を開く。

「ふむ、友達だからですよ」

「何をわけのわからないことを言っているっ!! わかっているのか? アイツは俺達兄弟の大恩人のガハルドさんを斬った男だぞっ!!」

セヴァドスの言葉に思わず、座っていたベンチをゴルネオは殴ってしまふ。

だが、その感情は正しいモノだとゴルネオは理解していた。

ゆえに弟のセヴァドスが、何でもないように友達と言えることが理解できなかつた。

「闇試合で多額の金を巻き上げる金の亡者に、ガハルドさんは斬られたっ!! お前は理解しているのかっ!」

「知っていますよ。あの試合会場に私もいましたから……確かに私も、アレにはびっくりしました」

「なら——」

笑みを消すセヴァドスに、ゴルネオはほっとした様子で息を吐く。

だが、セヴァドスの言葉は、ゴルネオの期待していたモノとは反するものだった。

「開始一秒も待たずして斬り伏せられるなんて、ね、思わず笑ってしまいましたよ」

冷徹な表情で笑い声を上げるセヴァドスの姿に、ゴルネオを怒りを忘れて思わず唾を呑んでしまう。

「……何を言っている?」

「やけに自信満々でしたが、あの程度の実力と浅はかな考えで、本当にレイフオンに勝てると思っていましたでしょうか? もしそう思っていたのなら、本当の道化というものです。天剣を舐め過ぎてますね」

呆れたように溜め息をつくセヴァドスの姿に、怒りが頂点に達したゴルネオは、右腕を振り上げる。

衝刺を纏った一撃にベンチが破壊されると、破片が周囲に飛び散る。

ゴルネオが立ちあがると、部屋の中央には既にセヴァドスがいた。

着地し、互いに向き合う。

「っ!! ガハルドさんはアイツに口封じされようとして斬られたんだぞ?! そして武者として戦うこともできなくなってしまうっ!!」

「まあ、それに関しては気の毒ですね。私も、もし戦うことができないう身体になつてしまつたら、惨め過ぎて死にたくなりそうです」

「セヴァドスッ!!」

目の前の弟が許せなかった。

兄のようで優しかったガハルドを葬つた悪魔を友と呼ぶセヴァドスが。

「っ!!?」

怒りのあまりにセヴァドスの襟首を掴みあげようとしたゴルネオの右手が停止する。

喉の水分が一瞬で蒸発し、額から血の気がなくなる感覚。

行き場をなくし、宙を漂う右手の先が微かに震えてしまう。

「兄さん——お互い五年間も会わなかつたのですから話したいことは山ほどあるでしょう。ですから、少し広いところで話をしませんか?」

笑みを浮かべるセヴァドスの周りには膨大な剄の余波からか、風が渦巻いて発する闘気と混ざり合う。

恐れも油断もないその堂々とした立ち姿は、天劍授受者である兄のサヴァリスを彷彿させるものであった。

ゴルネオは、この時初めて気がついた。  
目の前にいるセヴァドスが、怒っていることに。

## 第十四話

何度、倒れただろうか？

口の中には出血したせいで鉄の臭いが充満し、全身を刺すような痛みから地面に倒れ伏せる。

地面に倒れたゴルネオの視線の先には、呆れたように溜め息をつくセヴァドスの姿が見えた。

「兄さん、この五年間、いったい何をしていたんですか？」

明らかに落胆しているセヴァドスに、ゴルネオは悔しきの余りに歯を食いしばらせる。

この五年間、ゴルネオなりに必死になつて鍛えてきたつもりである。

だが、その血の滲むような努力を目の前の鬼才は容易に砕いていく。

圧倒的な力の差。

同門ゆえにわかつてしまうのだ。

技の一つの質、早さ、錬度。

全てが上に行かれて、そして手加減をされる。

「うおおおおおおおおおつ！！！！」

外力系衝剄の変化、剛昇弾。

全身の痛みを振り払うように吠えたゴルネオは、目の前の構えすら取っていないセヴアドスに向けて叩きつけるように放つ。

「ふむ、この程度ですか」

外力系衝剄の変化、剛昇弾。

だが、セヴアドスが瞬時に放った剛昇弾によりゴルネオの放った衝弾は相殺され、あまりの呆気なさにゴルネオの足が止まる。

その一瞬の間をついて、ゴルネオの視界からセヴアドスが消え去る。

「戦闘中に集中を途切れさせては駄目ですよ」

声が聞こえた方に瞬時に振り返ると、そこには全身を剄で纏うセヴアドスの姿があった。

外力系衝剄の変化、裂空牙。

しなる右足が振り抜かれた衝剄の刃は、空間を切り裂いてゴルネオを吹き飛ばした。

受け身を取ることすら許されず、地面に叩きつけられて、そのままの勢いで壁に叩きつけられたゴルネオの肺からは溜まった空気とともに吐瀉物すら残っていない胃液とともに吐き出る。

勝てるはずがない。

満身創痍で弱気になるゴルネオの頭にその言葉が響く。

身体能力も劣り、剋量も比べるまでもない。

リーチはゴルネオが若干勝っているが、破壊力にスピードと全てがセヴァドスに劣っている。

五年早く生まれた経験ですら、グレンダンで戦い続けた男には無意味であり、全てにおいて勝負になるはずがなかった。

勝利のない戦い。

だが、それでもゴルネオは膝を折るわけにはいかなかった。

ここで折れれば、ガハルドの無念を晴らせなくなる気がしたからだ。

「早く立つてください。まさかこの程度で終わるはずがないですよね？」

「当……然、だ」

余裕に満ちた冷笑を浮かべるセヴァドスを睨みつけながら立ち上がると、両足の立ち位置の幅を開いて構える。

攻撃の型でもなく、防御の型でもない。

ただ、倒れにくくなる——それだけの構え。

「なるほど、ではいきますよ」





脳髓へと響く雷撃の迅痛は、意識を無くすことすら許されなかった。

「さて、第二ラウンドです」

笑顔で拳を振るうセヴァドスの姿に、ゴルネオは初めて弟の異常性を理解した。

・  
・  
・  
・

「ふう、言葉を口にする元気もないのですか？」

セヴァドスの言葉に、ゴルネオは立つことすら出来ずに地面に這いつくばっていた。

ゴルネオの体は全身殴打されたために体中に青あざが無数にできていた。

満身創痍で痛々しい姿となっているが、致命傷には至っていない。

無論、この惨状はセヴァドスの仕業であり、本人にとってできるだけ手加減をした結果である。

ゴルネオにとって、この戦いは譲れない何かだったかもしれないが、セヴァドスにとって所詮は話し合いの間、意識を失って来ては困るのだ。

「ふむ、では手助けをしましょうか？」

セヴァドスが不意に右手を上に向かって振ると、ゴルネオの体が引つ張られたように浮き上がる。

化鍊剽・粘糸。

通常のルツケンスの技で使う剽の糸とは違い、粘糸は頑丈で柔軟性があり、なにより千切れないゴムのような糸というのが分かりやすいだろう。

天劍授受者・カルヴァーンの『刃鎧』を元に考えたセヴァドスの独自の技であり、その特性や使いやすさからセヴァドスも気に入ってる剽技の一つである。

粘糸に捉えられたものは逃げられない。

「兄さん、ルツケンスの基本をよく勉強していると思いますよ。——ですが、私に対しては無意味です」

粘糸により引つ張られたゴルネオは、引きづられるように宙を舞う。

そして、セヴァドスの衝剽に叩きつけられる。

「私からすれば疑問なんですよ。何故ルツケンスだけ極めようとするのか？ 兄さんもガハルドも」

ルツケンスは決して弱い武門ではない。

それは初代ルツケンスの天劍授受者と今代の天劍授受者のサヴァリスが証明してい

る。

だが、同時にルッケンスを極めれば最強になれるわけでもない。

劉量や才能、それらは確かに必要かもしれないが努力も必要なのである。

まさに血がにじむような努力を。

「そもそも、兄上に遥かに技量の劣るルッケンスの担い手であるガハルドが、兄上と同じ天劍授受者のレイフォンに勝てるわけないでしょう」

あの程度の実力に満足したガハルドが天劍に届くはずがない。

そしてそのことを、ゴルネオには理解できないのだろう。

今もこうしてガハルドを馬鹿にされたことにより、必死に体に鞭を打つてでも立ち上がろうとしているのだから。

「はあはあはあ……黙れ、ガハルドさんが口だけなはずがない。あの人は、天劍争奪

戦に選ばれる程の実力者で、そしてあんなことにならなければ」

ゴルネオの目に再び力がこもる。

その意思是、セヴァドスから見ても心地の良いもので、恐らくこんな状況でなければセヴァドスは目を輝かしていただろう。

だからこそ健気で愚かしい姿にゴルネオの姿にセヴァドスは遂に堪え切れなくなつた。



を——」

「許せなかつたですか？　ふふふ、兄さんは本当に素直でいい人ですね。ですから知っていましたか？」

——その弱みに付け込んで、レイフオンから天剣を奪おうとしたことを。

「ば、馬鹿な……何を言っているんだ？」

セヴァドスの発した真実に、ゴルネオの動きが止まる。

自身が信頼する恩人の悪事を突然聞かされるのは衝撃の大きいことだろう。

だが、セヴァドスは容赦することもなく、追いつちの言葉をゴルネオに向ける。

「ええ、ですから、ガハルド・バレーンは、レイフオンの弱みを握り、それを用以て天剣に至ろうとし、無様に返り討ちにあつた愚か者です」

故に、武芸者の恥だ。

セヴァドスが吐き捨てる鋭い言葉に、ゴルネオは幼子が怒られたような弱弱しい姿で首を横に振る。

「ば、馬鹿な……ガハルドさんが、そんなことを——」

「したんですよ。だからこそガハルド・バレーンは愚か者であり、自身の力すら理解できない弱者ですよ」

別にガハルドに怒りを覚えているわけではない。

確かにセヴァードスが憧れる天剣すら冒流したが、その過程に飽きれ返ってしまったため怒りすらない。

だが、ガハルドの行いにより自身の楽しみが一つ消えたことはセヴァードスにとって、そのことだけは面白いものではなかった。

そして、同時に感情的になり頭の回転が鈍っている兄のゴルネオにもあきれ果てていた。

「それに兄さん、気がつきませんでしたか？ おかしいと思いませんか？ 何故、女王陛下がこのことに気付いていなかったのか？」

このことはゴルネオだけではなく、グレンダンに住む人々にも言えることだった。

いくら、業務を影武者であるカナリスに託しているとはいえ、都市を統べるアルシエイラ陛下がそれなりの規模で行われる闘試合に気付かないはずがない。

都市部を全てを見ることができる最高の念威操者であるデルボネがいる時点で、陛下達が闘試合に気づかないということはありえないということになる。

そして何より、闘試合が行われる闘技場が今まで存在するということに。

「さっき少しだけ話しましたよね？ ここは——ツエルニはいいところだ、と」  
ツエルニ。

この地にセヴァドスが来て、一番に目がついたのが、この豊かさである。

無論、ヨルテムのような有名な移動都市と比べるとやはり学園都市ということもあり劣る部分もあるだろう。

だが、それでもツエルニの豊かさは、グレンダンよりも遥かに上ということには違いなかった。

「学園都市は、その特色から学園都市連盟という組織などからある程度の支援を受けています。まあ、これに関しては当たり前ですね。学生というまだまだ未熟な若者だけで都市を経営することができるはずがありませんから」

確かにツエルニの生徒会長カリアン・ロスは優秀な人間だろう。

頭の回転もいいが、何よりこの学園の危うさを一番始めに気がつき、色々な手を打っていたほどである。

だが、何百万人の大勢の人間が住む都市をカリアン達だけで支えることはできないだろう。

ゆえに、学園都市はスポンサーとなる都市から支援を受けて運営しているのだ。

「ですが他の都市は違います。工業系都市は、都市で作られた工作物を売って財を為す。農業系都市は、都市で出来た農作物を売って財を為す」

無論、都市経営がこんな簡単な方法でできるはずがない。

工業系都市と言っても、他の産業に手をつけているだろうし、農業系も同様である。

「なら、武芸の本場と謂われるグレンダンでは何を売ればいいのでしょうか？」

「……武芸か？」

少しだけ冷静になったのか、落ち着いた口調で答えたゴルネオの回答に、セヴァドスは満足げに頷いた。

「そうです。武芸、つまりは本場の武芸者達の戦いを見せるということですね。

そういう意味では武芸大会や試合というのはうってつけのイベントということですよ。

つまり、グレンダンで行われる試合は別にグレンダンに住む者達だけが見るわけでは  
ありません。より高度な戦闘を見るために他都市から訪れる方もいるのです。こ

こまで言えば理解できますよね？」

「まさか、ありえない……」

「闘試合とは、本当に命がけの戦いを見ることができるといえる一種のショーです。ソレを  
好む観客やギャンブルとして売り出そうとするものもいるということですね」

そもそもギャンブルにおいてはこのツエルニでも行われているものである。

小隊対抗戦に、お金をかけて楽しむ観客の学生達。

程度の違いがあれど、ツエルニでも黙認されていることだ。

「……武芸とそんなものでは、そんなことに使うために……」



「まあ、正論では腹が膨れないというわけですね。名家に生まれた私達には無縁の話ですが、それにすがる者もいるというわけです」

だからアルシェイラは、摘発しなかったのだ。

その悪もグレンダンを運営する上で必要なことであるから。

正しく育てられたゴルネオは、そのことに気付かなかったのだろう。

故郷の歪みを直視し、震える唇で未だに仇敵の恨み言を吐く。

「だが、それでも奴がやったことが正当化されるわけではない」

「ええ。別に私はレイフォンの行ったことを庇うつもりも同情する気もありません。勿論その行為が正しいことだと思っ

だが、貶すつもりもなかった。

レイフォンの戦う理由もある程度は知っていたが、そのことがセヴァドスの心に響くこともない。

それでも興味があった。

レイフォンの強さの秘密。

そして、そのルーツを。

だが、それはグレンダンを追い出されたことにより確認できなくなった。

「私が言えるとしたら一つ。ガハルドを殺さなかったレイフォンの甘さが全ての原

因ですわね」

「セヴァ、ドスっ!!」

再び怒りが込み上げてきたのか、体中に剄を流したゴルネオがこちらに向かって走り出す。

変化すらつけない面白みのない直線的な動きに、セヴァドスは内心落胆を隠せなかつた。

遅すぎる攻撃に悠々と構えをとつたセヴァドスは、余裕に満ちた動きで迎撃する。

外力系剄の化鍊変化、蛇流。

細い化鍊剄の糸を相手に張り付けて、その糸を通じて拳打の衝撃を与える技である。

ゴルネオの全身に向かって張り巡らされた剄の糸を三十もの衝撃が奔る。

「怒りだけで戦闘に勝てるわけがありませんよ」

「がはっ……」

三十の拳打を受けたことに相当する衝撃に、ゴルネオの巨体は容易に吹き飛び、壁へと叩きつけられる。

痛みにより体の感覚が麻痺し、全身が痙攣するゴルネオだったが、その目は未だにセヴァドスを睨んでいた。

その執念ともいえる目の光に、セヴァドスは思わず感心してしまう。

そして、同時に疑問に思うことがある。

「しかし、わかりませんね。なぜガハルドのようなものを兄のように慕うのかを？」  
ガハルドを兄のように慕う——そのことがセヴァドスにとってこの場で一番理解の  
できないことである。

セヴァドスにとつて兄とは、好敵手であり目標でもあるサヴァリスと、優しく真面目  
なゴルネオだけである。

ガハルドのような半端者を、兄と慕うゴルネオの神経を疑ってしまうほどに。

「決まって……いる。ガハルド、さんは、……迷う俺の肩を叩き、笑い、怒り、共感  
し、導いてくれた、恩人だ……。それは、セヴァ……お前も同じだろう？」

よろよろと立ちあがるゴルネオ。

感情が極まったのか、眼元には微かな涙が浮かんでいた。

その涙と言葉に、セヴァドスは、ようやく自身の間違いに気がついた。

「ふむ、なるほど。ようやく違和感の正体がわかりました。要は私と兄さんの認  
識の差だったようですね」

——ガハルド・バレーンは私のことを疎ましく思っていたようです。

「馬鹿な……ガハル……ドさんが、お前の……ことを嫌うはずが……」

「原因は何だったのでしょうか？ 五年前の天剣授受戦で、レイフォンに負けたこと

でしょうか？ それとも、門下生の前でねじ伏せたのがいけなかったのでしょうか？  
まあ、既にどうでもいい話ですが」

「セヴァ……」

手加減したとはいえ、幾度もセヴァアドスの拳打を受けたゴルネオは既に限界が近かったのだろう。

声が途絶え途絶えになりつつも、それでもゴルネオは、セヴァアドスの言葉を否定しようとしていた。

その姿にはセヴァアドスも感心することはなく、ただ憐れみを持って倒れ伏せた兄の姿を眺めていた。

「ふむ。話が随分回り道しましたが、要は兄さんがガハルドのことをどう思うかは兄さんの勝手で、私がレイフォンにどういう感情を抱くのも勝手、そういうことですよ」  
討論の末の答えに、セヴァアドスは微かな落胆を覚えていたが、所詮は二の次のことである。

戦いはまだ終わっていないのだから。

「それより、さっさと続きをはじめませんか？ 話は終わりですが、まだ戦いは始まったばかりですよ」

余計なことを考えず、戦うことができることに、思わずセヴァアドスは好戦的な笑みを

浮かべてしまった。

・  
・  
・  
・

自分の中で何かが折れた気がした。

目の前のセヴァドスはまだ戦う気があるようだが、ゴルネオにはそんな気力はとうに尽きてしまっていた。

戦うための腕が折れたわけでもなく、立ち上がるための足が折れたわけでもない。

ただ自分自身が信じていた理想が崩れただけである。

恩人であるガハルドが行った行為。

恐らく、他人から聞かされていたのなら、信じることもせず鼻で笑うことができただろう。

だが、そう言ったのはあのセヴァドスである。

このような詰まらない嘘をつく弟ではない。

何より、ガハルドがセヴァドスを嫌っているという節は、ゴルネオにも覚えがある。鍛練中にセヴァドスの方を見て睨みつけるガハルドの姿を――

同じ時間帯で鍛錬をする二人の姿を見なかったことを――

兄・サヴァリスを見るガハルドの眼は、執念や妄執に囚われた歪んだものだったことを――

本当は気付きたくなかったのかもかもしれない。

だから見ないふりをしたのだ。

そして、それがこの結果である。

自身の不甲斐なさにゴルネオは、笑うしかない。

ガハルドを慕う理由。

それは自分自身を良くしてくれたことや色々なことを教えてくれた師のような存在だったからだ。だがそれだけではないのだ。

本当の兄弟であるサヴァリスとセヴァドスの二人が怖かったのである。ルッケンスの次男坊として生まれたゴルネオ。

兄であるサヴァリスは、最高の武芸者の称号でもある天剣へと昇りつめた天才。

五つ下の弟であるセヴァドスは、その兄を越えるのではないかと言われる程の鬼才。

そんな二人に対し、ゴルネオ自身は良く秀才、もしくは凡才と言ったところだろう。二人と肩を並べる道場での訓練は、ゴルネオにとって重荷にしかならなかった。

何故、自分に剋脈を与えたのだらうと、いるはずもない神に怒りを覚えた。

もしも、ゴルネオ自身に剋脈がなければ、こんな思いは抱かなかったかもしれない。

武芸者ではなく、普通の人間として生まれていれば、兄やセヴアドスと蟠りもなく接することができたかもしれない。

当主である父親から、ツエルニへの留学を勧められた時、思わず転機だと思った。

それと同時に、自分はルツケンスには要らない存在だと気づくことになった。

逃げ出したその場所で、ゴルネオは、死に物狂いに鍛錬を行い、居場所を掴もうとした。

一年、二年と遠くなるような日々を過ごし、そして遂に第五小隊の隊長という地位を勝ち取ったのである。

その事實は、ゴルネオにとって代え難きものだった。

ようやく、自分自身の武芸を誰かが認めてくれた気がしたから。

だからこそ、ゴルネオはツエルニと守護者として、より一層の鍛錬に励んでいたが、その価値も簡単に失われた。

幼性体の襲来とレイフォン・アルセイフの存在によって。

汚染獣との戦闘経験がなかったゴルネオは、幼性体という存在に危うく命を失いそうになるほどに苦戦を強いられた。

だがそんな危機もレイフォン・アルセイフは容易に救って見せた。

―圧倒的な力量と格の違いを見せて。

その理不尽さに恐怖を抱き、そして兄弟子の敵に救われたという事実により怒りがこみ上げた。

しかし、その感情は都市の平和にとって無意味なもので、同時にゴルネオが今日まで積み上げてきた五年間が無意味だったことを証明した。

元天剣授受者のレイフォンと一流の武芸者であるセヴァドスがいれば、ツエルニは安全てセルニウム鉱山を賭けた武芸大会も安泰と行ってよかった。

もう、ゴルネオの戦いは終わったのだ。

「ふむ、余裕ですね。ならこっちから仕掛けるとしましょうか」

物思いに更けていたゴルネオを待たずして、セヴァドスは嬉々とした表情で手を天へと翳す。

寒気がするような圧倒的な剋量で形成された衝剋の弾。

その剋技をゴルネオは見たことはなかったが、容易にこの身を砕くことができるのは想像できた。



「いきますよ」

軽い口調でセヴァドスは衝剄の大球を放とうとした瞬間、突然、訓練場の扉が開く音がした。

「ゴルツを、虐めるなっ!!」

「おっと」

叫びと共に赤い槍が飛来するのを、セヴァドスは容易に弾き返すとそのまま後方へと下がる。

そして来訪者は膝をつくゴルネオの前に現れた。

小さい体躯を纏うように荒々しい剄が流れる赤の少女。

ゴルネオの相棒であるシヤンテ・ライアの姿を見間違えるはずがなかった。

「確か、貴方はシヤンテさんでしたね?」

セヴァドスもシヤンテのことを知っていたのだろう。

シヤンテの姿を見て、笑みが一層深まるセヴァドスに、ゴルネオは嫌な予感がした。

「何で、ゴルの弟がゴルを虐めるんだっ!!」

そのことにシヤンテは気付くはずもなく、怒りに満ちたその姿で、周囲に衝剄を放つ。だが、セヴァドスは放たれる衝剄の波に怯むことなく、悠然とした姿で一步一步近づいてくる。

その姿はまさに不吉な死神である。

「シヤンテ、やめろ……」

「ゴルネオは震える足で立ち上がると、懸命にシヤンテに向かって手を伸ばす。

——がその手は空を掴み事となる。

シヤンテは既に目の前の怪物に向かって、足を踏み出していた。

俊敏なシヤンテの最速の一步から踏み出された最高の刺突。

だが、それはセヴァドスに触れることもなく、空を切る。

「ふむ……今の中々良かったですよ」

「うるさいっ!! ゴルを虐める奴は、弟だろうがぶっ飛ばしてやるっ!!」

セヴァドスの発言に、シヤンテの怒りが増す。

その怒りは、化鍊剄により発生した炎となり、セヴァドスを襲う。

そして同時に刺突の連打をシヤンテは、炎に包まれつつあるセヴァドスに向かって放つ。

必勝の攻撃方法。

シヤンテの良さがかみ合ったコンビネーションだが、目の前の相手には通用しなかった。

セヴァドスは迫る炎の目の前で両手を叩く。

部屋中に響く音と共に、衝刺の風が現れて、シャンテの炎を掻き消す。

それだけでセヴアドスの行動は終わることなく、迫るシャンテの刺突を回避すると、そのまま槍を掴む。

目のも止まらぬ槍捌きを一瞬で止まられたシャンテの身体に、一瞬の硬直が発生した。

それを逃すセヴアドスではない。

「ふふふ、いいですね。今の感じ、少し興が乗ってきましたよっ！」

活刺の籠もった左拳。

ただそれだけの行為で、必殺の一撃と化す。

足を滑らせ、体重移動を行ったセヴアドスは決るように左拳をシャンテの横腹に埋める。

「ぐえっ」

両足が浮き、そのまま真横に吹き飛ばされたシャンテは、地面に体中を叩きつけながら壁をぶち抜いた。

血反吐を撒き散らし、倒れ伏せるシャンテ。

今の一撃は間違いなくあばら骨を砕き、内臓を破壊した。

華麗に舞う蝶が羽をもがれた様に、動きに精彩が欠けたシャンテの姿に、ゴルネオは

思わず立ち上がり駆け寄ろうとする。

だが、その足もシャンテから十メルほど離れたところで停止を余儀なくされる。そこにはセヴァドスという名の越えることのできない壁が存在した。

動きの止まり、見るからに戦意を失ったシャンテにセヴァドスはゆつくりと距離を縮める。

その右手には、段々と剷が流れていく。

「やめろっ！ セヴァアつ、もうやめてくれっ!!」

「そう言っても彼女は、まだやる気ですよ」

進むこともできず、ゴルネオはただ懇願する。

だが、その願いはセヴァドスと、今にも倒れそうなシャンテによって叶わない。

活剷を纏うことすらできなかつたのだろう。

それでもシャンテは、自身の槍を杖代わりとし、その場に立っていた。

まるで最後の抵抗だと言わんばかりの表情で。

「ふむ、見事です。その執念に応えるべく、私も敬意を払いましょう」

外力系衝剷の変化、風花穿。

右手の人差指と中指に、剷を溜めて、その一点に衝剷を固める。

その剷の濃密さは間違いなく命を刈り取るほどのものである。

そして矛先は、相棒のシャンテに向けられていた。

「シャンテツ!!」

「では、いきますよ」

槍の如く鋭利な突きは、立っているだけのシャンテに向かって放たれた。

その光景がゴルネオにはコマ送りに見えた。

凄まじい狂気を纏い、笑みを浮かべるセヴァドス。

その姿は、ゴルネオにとって恐怖そのもので、越えることのできない壁である。

それに対するのは、命尽きようとするシャンテ。

だが、その表情は恐怖に歪んでいることもなく、ただ笑みを浮かべてこちらを見ていた。

その姿に、ゴルネオは息を呑んだ。

シャンテ・ライアは今ここで殺される。

弟であるセヴァドスの手によって。

ゴルネオは無力である。

ルッケンスから必要とされず、ツエルニの守護者としての役割も果たすことができなかった。

だが、それでも仲間一人守れないほど無力でいるわけではない!

その瞬間、ゴルネオの中で何か切れたような気がした。それが何だったのかゴルネオ自身よくわからなかったが、恐らく二度と戻ってこない大切なものだろう。

だがそれでも、よかった。

目の前のシヤンテを助けることができるなら。

「……ッ!!! セヴアドスッッッ!!!」

自分でも空を飛んでいるような軽さを感じた。

溢れだす到に比例し、踏み込んだその一步は爆発的な力を生む。

閃光の如き速度で、ゴルネオは一気にセヴアドスとの距離を詰めると必殺の拳を振るう。

目の前の敵を撲殺するために。

——そして、その一撃は見事、セヴアドスの頭部を捉えた——周囲に真つ赤な血を撒き散らして。

「ふふふ、兄さん。今のはよかったですよ」

額から血を流すセヴアドスは、いつものような笑顔でゴルネオを褒め称えた。

その右手の指先は、ゴルネオの腹に突き刺さり、真つ赤な血を滲ませていた。

「がは……」

「ゴルツ!!」

シャンテの叫びを聞きながら、ゴルネオはその場に膝をつく。

遠のく意識の中で見たセヴァドスの表情に狂気は見当たらず、弟として可愛がっていた頃のままである。

「ああ、そうかお前は昔から変わっていないなかったということか」

その表情に思わず、安堵の笑みを浮かべてゴルネオは意識を手放した。

良い夢が見れそうだ。

そんなことを呟きながら。

## 第十五話

『第五小隊長 ゴルネオ・ルツケンスと同隊副隊長 シヤンテ・ライア 緊急入院』  
ツエルニの報道雑誌の一つである『週刊ルツクン』のトップ記事を詰まらなそうに眺めるセヴァドスは、思わず溜め息をつく。

「ふむ、今週は四コマ漫画『移動都市つえるにくん』は休載ですか」

トップ記事のページ前の目次の中に自身のお気に入りコーナーがないことに気が付き、落胆した気分を隠せないでいた。

あのシジュールで下手すぎる絵と意味不明の内容の薄さが、何故かセヴァドスのツボを刺激した。

それ以来、『週刊ルツクン』を購入した際は欠かさずに読んでいたのだった。

「仕方がありませんね、とりあえずは、と……おや？ これはミイファイさんの書いた記事ですか？ ……ふむ、『これで決まりっ!! 今日から貴方は人気者』ですか？ 今度ドロン氏に教えてあげましょう」

クラスメートで、先日レイフォンと共に友人になった男のことを思い出しながら、内



容を覚え始める。

読書に耽るセヴァドスの周りには山積みになっていく本が、周囲を囲んでいた。総数五十以上のそれらは、一日でセヴァドスが全て読破したものである。

「ふむ……中々面白かったですね」

最後の書物だった『週刊ルツケン』を読み終えたセヴァドスは、本を閉じて書物の山の上に積むと、近くのベットへと身体を預ける。

書物という時間つぶしが無くなったせいで、完全に暇と化しているのだ。

ならば、外出でもしましょうか？と行って行動するのがセヴァドスだったが、現在にはそれは不可能である

そう、セヴァドス・ルツケンスは現在——

「ふむ……留置所に入るのは初めてですが、あまり面白いモノではありませんね」  
都市警察本部がある地下の留置場にて、拘束されてる身であった。

この状況に置かれることになった原因は、数時間前に起きた出来事によるものだ。

錬武館にてゴルネオを倒し、そのゴルネオの搬送のために病院への連絡をつけたセヴァドスはそのまま何事もなかったかのようには寮へと戻ったのだが、寮の前で待ち構えていた都市警察の人間に連行されたのである。

常識的に考えて、この対応は当たり前のことだ。

ツエルニの武芸者達の中で優秀な人間で構成された小隊員を相手に訓練だと言ってもあれほどの怪我を被わせれば捕まるのは当たり前だろう。

だが、悲しいことに拘束された当の本人はまるで反省していなかった。

「ふむ……そろそろ脱獄に挑戦してみましようか」

六時間の留置所生活を満喫し、ややこの退屈な現状に飽き始めたセヴァドスは、この閉鎖された空間から逃れるためにベットから跳ね起きた。

そもそも行動力と好奇心と非常識が人一倍強いセヴァドスが、この空間で大人しくいること自体不可能に近いのだ。

セヴァドスが鉄格子に手を掛けようとしたその時、突然薄暗かった部屋に光が差し込んだ。そして頭上に設置された蛍光灯に光が灯ると、かつかつと足音を鳴らして部屋の中へと入ってきた。

「セヴァ、大人しくしているか？ 暴れていないだろうな？」

赤い髪のスラリとした長身の女性、ナルキ・ゲルニ。

友人でもあり、共に同じ職場で働いて——いた仲間であり、セヴァドスを捕まえた張本人でもある。

ナルキの登場に、セヴァドスは先程まで退屈そうにしていた表情を輝かせた。

「はい、勿論ですよ、ナルキさん。ところで、そろそろ脱獄しようと思いますので、

少しそこをどいてくれませんか？」

活判により、微かに身体が光るセヴァドスは、目の前の鉄格子を握りしめる。

その非常識な行動に、ナルキは呆れたように溜め息をつく。

彼女自身もセヴァドスの奇行に慣れてきたおかげだろう、ナルキは面倒くさそうに口を開く。

「それは、世間一般的に暴れると言う行為なんだがな……とにかく脱獄はやめてくれ。本を持ってきただろう？」

そう言つてナルキは山積みになつた本を指差す。

しかし、ナルキは忘れていた。

セヴァドスは、字のごとく『天才と馬鹿は紙一重』という存在だということに。

「アレですか？　もう既に読み終えましたよ」

「何？　この短時間でか？」

「はい、よろしければ全部、説明しましょうか？」

「いや、悪いが遠慮させてもらう」

何の気負いもなく当たり前のように言つてのけるセヴァドスの提案を、ナルキは顔を少し青くさせながら丁重に断つた。

ナルキ自身、頭を使うより身体を動かす方が性に合つてる上、目の前に積んでいる書

物は些か難解すぎるものがある。

錬金学で使う教材らしいが、明らかに一年生の読むものではない。

そんな専門知識を語られてもナルキにとって苦痛と言っても過言ではない。

「しかし、同じグレンダンの出身の武芸者とはいえ、随分と頭の違いがあるんだな」

感心したように本をパラパラとめくり、すぐに理解することを諦めて本を閉じたナルキは、目の前のセヴァドスの非常識さに感心しながらも、もう一人のグレンダン出身の友達であるレイフォンのことを思い出す。

同じ都市で、武芸の天才と謂える二人だが、学力の面では大きく違っていた。

方や転入の際に学年問わずツエルニで学力トップの点数を叩き出したセヴァドスに対し、方や入学試験の奨励金Dランクでナルキ以上に勉強が苦手で、脳筋の称号を得た程の豪の者であるレイフォン。

余りの頭の出来に、ナルキはレイフォンに思わず同情した。

そのことを知っているセヴァドスの笑みに少しだけ苦みが出る。

「レイフォンは勉強が苦手ですからね。それに私はこう見えて勉強は得意ですから」

「その代わりに常識がないがな」

今まで起こしてきた問題を思い出しながら、ナルキはセヴァドスの言葉を冷たく切り

捨てる。

事実、現在進行形で牢に入っている人間にとって耳の痛い言葉だったが、セヴァドスには通じることなく、笑顔を返される。

「グレンダンの武芸者に常識を説かないでください」

「その言葉を信じるなら、私は絶対にグレンダンに行きたくないな」

セヴァドスの言い分に、ナルキは話半分に聞いて、呆れたように呟く。だが、ある意味セヴァドスの言葉は正しい。

確実にセヴァドス以上の変わり者は、両手の指の数以上に存在しているのだから。

ナルキのつれない返答を聞き、少し残念そうに思っていたセヴァドスは、突然、何か思い出したように口を開く。

「あ、でも、メイシエンさんは、行ってみたいんじゃないのですか？」

「気付いていたのか？」

セヴァドスの言葉に、ナルキは心底驚いたように目を丸くする。

ナルキの親友の一人であるメイシエン・トリンデンは、現在、レイフォン・アルセイフに恋をしている。

親友であるナルキ達には分かりやすいほどの反応をしているが、悲しいことに当のレイフォンには全く気付かれていなかった。

そのため、レイフォン以上に空気の読めないセヴァドスがそのことに気付いていることは、ナルキにとつて驚愕の事実と言つていいだろう。

驚くナルキを見て、セヴァドスは得意げに鼻を鳴らすと、一冊の本を差し出した。

「ええ、この本に書いてある症状を見て、そうだと気付きましたよ」

『愛憎のトライアングル2』……なんか嫌だな……その気付き方は」

「しかも、ミイの奴が持つてた続編だぞ……」と顔を青くさせながら呟くナルキを見ながら、セヴァドスは思つた以上に時間が経つていくことに気付き、中断された脱獄の準備のため、鉄格子に再び力を込め始める。

だが、セヴァドスの脱獄を再び遮る者が現れた。

「入るぞつて……何だ、ナルキもいたのか？」

扉を開き、入室してきたのは、ナルキの上司に当たるフォーメッドである。

ナルキの存在に気付いて首を傾げるフォーメッドに、セヴァドスは愛想の良い笑みを向ける。

「はい、暇でしたから世間話をしてもらつていました」

「そうか、なら喜べ、釈放だ」

フォーメッドの突如の宣告に、ナルキは目を細めて一度だけセヴァドスを見ると、再び視線を上司の方に戻して尋ねた。

「釈放ですか……？ 確か反省を兼ねて、一夜はここで過ごしてもらおうのでは」

「だったんだがな、会長命令だそうさ。何でも至急、頼みたい用があるそうさ」

カードキーを指し込み、鉄格子が開かれるとセヴァドスは嬉々とした様子で肩を回しながら、牢の外へを出る。

フォーメッドから返却された錬金鋼を、腰に巻いたベルトに挟むと、武芸科の制服の上着に袖を通す。

「ふむ、トラブルですか……ということは退屈はしなさそうですね」

楽しそうな事が起こりそうさ、という予感にセヴァドスはひと際頬を釣り上げた笑みを浮かべると留置室から出る。

そんなセヴァドスの後ろ姿を見送る二人はその場で思い思いに呟く。

「血生臭くなければいい、と思う私は、少し毒されたのだからのでしょうか」

「俺はこいつが自分の部下じゃなくなつて、かなり嬉しいがな」

セヴァドス・ルッケンス。

彼は現在、無職である。

・  
・  
・  
・

生徒会室。

学園都市ツエルニを経営、そして各部門を統括する生徒会の長——カリアンは、目の前の報告書類を見て思わず溜め息をついてしまう。

幼性体の襲来、そして先日のお生体の遭遇、そして今回と、何故今年はこうも問題があるのだろうかと山積みの問題に、思わず痛む頭を手で押さえてしまう。

ただでさえ、所有するセルニウム鉱山が残り一つという崖っぷちという現状だ。

もう少し穏便にならないものかと弱音を吐いても、目の前の問題が消えることはなかった。

だが、同時に思いがけない幸運にも恵まれ、レイフォン・アルセイフという剣を得た。

レイフォンの存在は間違いなくツエルニの救世主になるだろうと、カリアンは自身の運が最悪ではないことに感謝した。

しかし、最近では運は悪いのではないかと密かに思っている。

「彼の場合は少し複雑だね……」

手に持っていた書類を机の隅に置くと、その隣に置いてある書類に目をおとす。

セヴァドス・ルッケンス。



そして彼が起こした数々の問題がずらりと記載されていた。

通常なら退学処分でも可笑しくないほどの問題児だが、その反面、恐ろしく優秀な人材であることは確かだ。

武芸の面では、ツエルニ最強であるレイフォンと並ぶ実力の持ち主であり、学力面では学年トップクラスの成績を修めている。

無論功績はそれだけではなく、錬金科の研究室にまで顔を出して、新型錬金鋼の開発に貢献しているという事実も存在する。

そんな人間を、この危機的状況下で手放せるほどカリアンの神経は太くなかった。

「まあ、今回のような任の際は、彼みたいな人間がいた方が心強いだらうしね」

テーブルの隅に置かれた書類にはこう書かれていた。

『ツエルニ進行方向に、不審な都市アリ』

再びツエルニの前に暗雲が立ち込めていることに、カリアンは微かな不安を感じた。

## 第十六話

重々しい音とともに解放されたゲートの先には、死に満ちた広大な世界が待ち構えていた。

人類が生きること許されない領域に、セヴァドスは学園都市に来て二回目の都市外任務に就くことになる。

一回目は老性二期との戦闘、そして今回は何が起こるのだろうか、セヴァドスは隠しようがないほどに心を踊らせていた。

「全く、学園都市も捨てたものではありませんね」

グレンダンでも都市外戦闘は数えきれないほど行ってきた。

だが、強者揃いのグレンダンとひよつこの集まりであるツエルニトでは、危険度がまるで違いすぎるのだ。

まさしく、生きるか、死ぬか——の危険な任務にセヴァドスは思わず自身の胸の高鳴りを抑えることができなかつた。

ヘルメットなどの都市外スーツを纏ったセヴァドスは、隣で停車していたランドローラーのサイドカーへと飛び乗る。

そして、隣の運転手に気持ちの良いほど透き通る声で挨拶を交わした。

「では兄さん、今回はよろしくお願ひしますね」

「ああ」

ランドローラーに跨る人物——セヴァドスの兄であり、第五小隊隊長ゴルネオ・ルツケンスだった。

先日ようやく病院から退院できたゴルネオの挨拶は、やはり無愛想で固かった。外へ出るためへの緊張か、それとも隣のセヴァドスへの感情か？

だが、それはセヴァドスが考えることではない。

特にゴルネオの様子を気にすることもなくセヴァドスは、そのままゴルネオの——背後の座席シートに捕まっているシャンテに話しかけた。

「シャンテさんもよろしくお願ひします」

「じゃあ!!」

「ふふふ、いつも元気ですね」

セヴァドスの挨拶とともに差し出された右手は、動物が威嚇するような唸り声を上げるシャンテの手により叩き落とされた。

もしも、ヘルメットをかぶっていなかったら嘔みつこうとしていたのではないか？

それほどの剣幕で威嚇するシャンテに、セヴァドスは気分を害すこともなくただ笑み

を浮かべていた。

そんな二人に、ゴルネオは呆れた様子で溜め息をつく。

これから行われるのは、第五小隊と第十七小隊の合同探索任務である。

ツエルニが所有するセルニウム鉱山の前を陣取る廃都市内の探索で、カリアンの推薦の元、第十七小隊と第五小隊が選ばれた。

カリアン曰く、都市外スーツの数からこの二つの小隊が選ばれた、と言っていたが恐らく特記戦力とされるレイフォンとフェリがいることが十七小隊が選ばれた理由で、そして、第五小隊が選ばれた理由はもう一人の最強武芸者、セヴァドス・ルツケンスの兄がいるゴルネオが隊長を務めているからだろう。

そのことを悟っていたゴルネオは、目の前で騒いでいる二人を見てると先を思いやられる気持ちだった。

「二人とも、時間だ」

「うっ」

「わかりました」

ゴルネオは二人の賑やかな会話に割って入ると、徐々にランドローラーのアクセルを吹かし始める。

少し離れた場所では、既に準備万端なのか、第十七小隊の面々ランドローラーに乗り

込んでこちらの様子を眺めていた。

無論、そこにはレイフォンとフェリの姿があり、セヴァドスはその姿を確認すると右手を振ってみた。

そんな行動の返答は、視線を逸らして無視されるというものと、端子越しに舌打ちを響かせられるという結果に終わった。

その対応に少しだけ悲しい気分になったセヴァドスが大人しくサイドカーの座席に座ると、ゴルネオはアクセルを回し、エンジン音とともに発進した。

タイヤの擦れる音を響かせながらセヴァドスの乗るランドローラーは、汚染された大地へと着地するとそのまま止まることなく先頭を走り始める。

「先導は第五小隊が行う。十七小隊は後方を頼む」

『わかりました』

ゴルネオが指示を出すと、十七小隊の念威線者であるフェリの声が端子越しに響く。

その言葉を第十七小隊の総意と考えたゴルネオは、ランドローラーを走らせ、先頭に躍り出る。

砂埃を上げて進む先は、広大な大地。

巻きあがる砂利が、ヘルメットを叩く音を聞きながら、サイドカーに乗るセヴァドスは眩く。

「ふむ……都市外スーツがなければ風を感じて、さぞ気持ちいいんでしょね」

「だが、そうなると五分であの世行きだな」

「確かに、では諦めるしかありませんね」

冷静なゴルネオの態度に、セヴァドスはおや、と内心軽い驚きを覚えていた。

先日、訓練で打ちのめしたせいで、よそよそしい態度や無視をしてくるのではないかと思っていたため、ゴルネオの気負いを感じさせない普段通りの態度は意外であり、その態度は懐かしくもあつた。

その姿は幼い頃、よく面倒を見てくれた兄の姿を思い出させるもので、ゴルネオの顔は何処か吹っ切れているようにも見えた。

「そういえば、兄さん。大通りの近くにあるケーキ屋に行ったことはありますか？」

「いや、それがどうしたのか？」

「実は知り合いが働いていまして、中々そのケーキが絶品なんですよ。今度行ってみませんか？」

「ああ、構わない。来週、時間を開けておく」

「はい、お願いします」

セヴァドスの振る世間話にゴルネオは、特に気にした様子もなく返答を返す。

その光景は、完全に蚊帳の外で見ていたシャンテにはまるで理解できなかった。

シャンテとゴルネオは、三日程前にセヴァドスに病院送りにされている。しかし、ゴルネオは自然体そのものだった。

「基本的にツエルニの武芸者は、まだまだ基礎が出来ていないですね。ムラがあつたり、効率が悪すぎます。汚染獣と戦つた時、極度な疲労を感じませんでしたか？」

「ああ、数体の幼性体を倒した時、異常な身体の重さを感じたな。全く不甲斐ない話だが」

「では、まずは技ではなく基礎を鍛え直すべきでしょう。実際鍛えられた拳で、雄性体の頭も一撃で吹き飛ばせますしね」

「それは無理だろう？」

「無理ではありませんよ。実際、兄さんが少し基礎を鍛え直すだけで、幼性体に苦戦することはなくなるでしょう」

「本当か？」

「ええ、実際、兄さんは才能あると思いますよ。ルッケンスの門下でもそうそういな程度の、ね」

「天才のお前を見ているとそうは思えないのだがな」

「否定はしません。私と兄上が天才なら、兄さんは秀才といったところでしょう」

「この前、才能がないと潰しに来た奴が言つて良い台詞とは思えないな」

「はい。今のは冗談です。　　つて何を落ち込んでいるんですか？　　確かに昨日の手合わせは駄目駄目の最悪と呼べるモノでしたが、最後の一撃は中々、目に瞠るモノでしたよ」

「あれか……俺もよくあの時のことを覚えていないのだがな」

「雑念が飛んだからじゃないんですか？　　そもそも兄さんは色々考えすぎなんですよ」

「……耳が痛い話だな」

時には控え目な笑い声を上げ、時には呆れたように溜め息をつき、時には落ち込みように肩を落とす。

それでも二人は、楽しそうだった。

特にゴルネオのその姿は、長い付き合いになるシャンテですら、そう見ることができないもので、まるで重い荷を下ろしたかのような自然な表情で――

「ゴルが笑っている……けど、何故か寂しいな」

二人に聞こえないように、シャンテは小さく呟く。

その声色は、少し悔しそうで、嬉しそうだった。



・  
・  
・  
・

ランドローラーを走らせること半日。

そこでセヴァードス達を待ち構えていたものは、巨大で脚の部分がへし折れ、朽ちた廃都市であった。

肉眼で確認できるほど所々の外装が破損し、地面に跪くような形で存在する廃都市を、セヴァードス達は見上げるようにして眺めていると、同様にその光景を眺めていたシャーニツドが呟く。

「汚染獣にでも襲われたか？」

外壁や脚などの損傷具合から、汚染獣の仕業以外には考えつかなかった。

「恐らく……そうだと思います」

いつも以上に真剣味のあるシャーニツドの言葉に、この中でも最も経験を積んでいるレイフオンが肯定の言葉を返すと、その場には重苦しい空気が流れた。

移動都市の死。

それは誰もが目を背けるほどの悲惨な光景で、他人事ではない身近にある恐怖だった。

特にツエルニは今、所有している鉱山は一つ。

次に戦争に負けでもすれば、この廃都市のようにツエルニも同じ道を辿ることになるかもしれない。

「まあ、弱肉強食の世界ですからね」

誰もが口を開くことなく、そのことを考えている中、ただ一人だけ空気を読むことなく、セヴァドスがいつもの調子で口を開く。

セヴァドスにとって、この都市の滅びの経緯などに興味はなく、ツエルニの行く末を心配する気はない。

それよりも、これから行われる廃都市探索という任務の方にセヴァドスの気持ちは向いていた。

だが、その考え方はある意味、的を得ている。

いつまでもこの場で立ち止まっているわけにもいかない。

死んだ他都市より、生きているツエルニの安全確保のほうが大切だ。

そう割り切ったゴルネオは都市上空を指差す。

「エアールフィルターは生きているようだな」

この場所からでも、都市を覆うように存在する空気膜を確認することは容易なことだった。

それ以外にも、都市部にまだ青々しい木々が存在したことから、都市のシステムは完全には死んではないことが推測できる。

「探索がしやすくて助かりますね」

息苦しいヘルメットを脱げることに喜びながらセヴァドスに、隣のフェリに話しかける。

「さて、妹さん。念威端子を飛ばして上の様子を確認してください」

「何故、私に聞くんですか？ 念威線者は私以外にもいるはずですが？」

しかし、返ってきた答は冷水のような視線とともに取り繕う暇もない拒絶の混じった言葉だった。

だが、そんな辛辣な返答にもめげず、セヴァドスは何でもないように口を開く。

「え？ だって友達じゃないですか」

「何を寝ぼけたことを言っているんですか？ 戦い過ぎて遂に頭がイカレましたか？」

セヴァドスの発言に心底嫌そうにフェリは答えると、そのまま鬱憤を晴らすかのよう

に罵倒を叩きつけるが——向けた相手が悪かった。

相手はツエルニ屈指の変態である。

「はははは、これは手厳しいです。ねえ、レイフォン」

「だから、僕に振らないでくださいっ！」

何でもないように笑うセヴァドスは、同意を求めるように隣にいたレイフォンに話を振る。

楽しそうなセヴァドスとは反対に、レイフォンは巻き込まれたことに思わず大声を上げてしまう。

「妹さん、レイフォンもこうして反省しているのです。許してやってはいけません

か？」

「え？ 僕が悪いのっ!？」

「レイフォン、いきなり叫ばないでください。 端子越しても響きます」

「なんて、理不尽っ!!」

珍しく大声を上げるレイフォンの姿を見て、シャーニッド達は何処か悲しそうな視線を送っていた。

「はあ……頼む」

呑気とも言える会話を聞いていたゴルネオは、呆れ返った様子で見えていたがいつまで

もここで暇を潰しているわけにもいかず、自分の隊の念威線者に向かって状況を尋ねた。

「はい……私の探索した範囲では生命反応は確認できませんでした」

「こちらと同じです」

「なら、探索はもういいんじゃないか？」

二人の念威線者の報告を聞き、シャーニッドが面倒そうに答える。

第五小隊の念威線者はツエルニでも優秀な者だが、それ以上に念威の天才であるフェリの探索能力なら、この場から都市の中を調べることは造作もないことだった。

だが、シャーニッドの提案が採用されることはなかった。

「そういうわけにもいくまい。念威線者を疑うわけではないが、自分達の目でも確認しておいた方が良さだろう」

「私も兄さんの意見に賛成ですね。何よりこのまま帰るのは、実につまらない選択です」

「貴方の意見は最終的にそうなるんですね」

平常運転のセヴァドスの言い分に、レイフォンが思わずツツコミをいれていると、ふと自分達を見る強い視線を感じた。

視線の先には、十七小隊隊長を務めるニーナの姿があった。

ニーナはこちらに気付くことなく、ただ一転——正確には、フェリと会話を行うセヴァドスの方を見ていた。

ここ最近はまだで覇気がなく、ぼつとしていたことの多いニーナだが、セヴァドスを見る視線の強さは異常と言つていいほどに熱が帯びていた。

ニーナらしからぬ、異常な様子にレイフォンは心配からか、思わずニーナに声をかける。

「隊長？」

「うん？ ああ……そうだな。私も確認するべきだと思う」

その声色は普段通りのものだったが、やはり出会った当初のあの眩しい意志は感じられなかった。

変わり果てたニーナの姿はレイフォンは嫌な予感がしたが、今専念するべきことがある。

ニーナのことはツエルニに帰ってから考えようと、レイフォンは現問題に集中すべく、ニーナのことを思考の隅へと追いやった。

「決まりだな。まずは別れた方が効率がいい。そうだな……十七小隊はここからあの折れた脚を使って上に昇ってくれ、俺達第五小隊は向こうの出来ている亀裂の穴から潜り込んで都市の下部から探索しよう」

ゴルネオの指差したところには、汚染獣の爪痕なのか、人が容易に潜ることができ  
程の亀裂が出来ていた。

本来ならここから反対側の方から回る方が良かったが、流石に都市を半周するの時間  
を浪費し、骨が折れる行動である。

故に、上と下からの同時探索をゴルネオは提案した。

「別れるのかよ？ 確かに効率はいいかもしれねえが、危険じゃねえか？」

「ホラー映画のようにながぶりといくんじゃねえ？」とからかうように笑うシャーニツ  
ドの意見だが、その考えは決して的外れなものではない。

都市外での任務は危険そのもので、一歩間違えば、死の大地に放り出されるとい  
うことである。

そして、何よりそれを行うのは学園都市のいう未熟な武芸者達、戦力の分散は下策で  
はないか？というのがシャーニツドの見解だろう。

しかし、ゴルネオの提案した同時探索の場合、確かに危険度は上がるかもしれないが、  
探索速度が二倍になるため、この廃都市での滞在時間が短縮できるといふ利点があっ  
た。

そして何よりゴルネオには、危険から身を守る護衛という意味での戦力にはアテがあ  
る。

「なるほど……別れたところを化け物が襲っていくというやつですね？　ますます楽しみです」

「やべえ……俺、こいつ苦手だわ」

何故か楽しそうに目を輝かせるセヴァドスに対し、シャーニツドは顔を引き攣らせてセヴァドスから距離を取る。

シャーニツドの感想は十分理解できるが、悲しきことにその目の前の男こそがアテの一つである。

「とりあえず、探索を開始するぞ。　来い、セヴァ」

「分かりました」

ゴルネオと呼ばれてその後をについていくセヴァドスの姿に、シャーニツドは不思議そうに首を傾げる。

「ん？　ゴルネオさんよ。　そいつはそっちに付いていくのか？　人数的にはこっちの方が明らかに人少ないんだがな」

シャーニツドの言う通り、十七小隊はフェリを入れて四人。

対する第五小隊は、念威繰者を入れて六人、セヴァドスを入れると七人にもなる。

つまりは第五小隊の方が三人も多くなり、念威繰者を除く戦闘員は倍違うことになる。



そう——数——ではそうなるのだ。

シャーニツドの指摘に、ゴルネオは当たり前のように口を開く。

「簡単なことだ。戦力では同等だろうか？」

ゴルネオはそれだけ言うと、一度だけレイフォンに向けて視線を送る。

レイフォンとセヴアドス。この二人さえ分かれてさえいれば戦力は同等。

数の問題は二の次になる。

そのことは、やはりゴルネオにとって、無視できない感情が湧きあがってくることになるが、それでもそれが現在取ることができると最善の方法と言える。

「行くぞ」

一瞬レイフォンの方に視線を向け、セヴアドスを引き連れて廃都市の中に入っていく。ゴルネオの後をシャンテを含む第五小隊の隊員は追いかける。

「行っちゃったか。まあ、いつまでもここに居るわけにも行かないわな」

「そうだな、私達も別の所から入ってみよう」

視線を受けたレイフォンを始めとする十七小隊の面々は、ゴルネオの反応に首を傾げながら廃都市に向かって行だした。

こうして第五小隊と第一七小隊合同の廃都市探索任務が開始した。

## 第一七話

第十七小隊と別れ、廃都市に侵入するために亀裂の中へと潜り込んだセヴァドスと第五小隊の面々は、薄暗い通路の中を念威端子の光を目印に歩いていく。

通路には、セヴァドス達の歩いた時に聞こえる足音と通路を奔るすき間風の音以外になにも聞こえなかった。

機関部特有の金属音が響くこともなく、セヴァドス達がいなければ、ここでは風の音しか聞こえないところだったかもしれない。

いつから、この都市がこんな風になってしまったのかはわからないが、ただこの廃都市を見てセヴァドスも寂しさを感じた。

——少し昔のことを思い出しそうですね、と。

そんな柄にもない感傷を振り払うように、セヴァドスは隣のゴルネオに話しかける。

「しかし、兄さん意外と冷静でしたね」

「何の話だ」

「レイフォンですよ。もう少し睨みつけたりするかと思っていました」

からかうようにセヴァドスは口を開くと、ゴルネオはヘルメットの中で渋い顔を作

る。

先日、この件でセヴァドスとゴルネオは揉めていたのにも関わらず、この場でこんな話をするセヴァドスの空気の読めないところに他の小隊員は固唾を飲んで見守っていた。

そんな中、ゴルネオは重々しく、ゆっくりと口調で自身の心情を話し始めた。

「……確かに蟠りはある。ガハルドさんが俺にとって恩人であり、奴がその敵であることも変わらない。だが……」

ガハルド・バーレンは、ゴルネオにとって、セヴァドスの言うようなどうでもいい存在ではなかったのは間違いない。

ゴルネオも、ガハルドのことを全て知っていたわけではなく、それでもガハルドが、ゴルネオの支えであったことには違いなかった。

そう胸中を漏らすゴルネオに、セヴァドスはなるほど、と小さく頷き返した。人が人のことをどう思うかなんて、それこそ人の自由である。

レイフォンがセヴァドスにとって恨みの対象にならないように、ゴルネオにとってガハルドは恩人だったということだ。

「それでいいんじゃないんですか？ ガハルドもあの世で嬉しく思ってますよ」

「勝手に殺すな……まあ、いつかガハルドさんが起きた時、いろいろ話してみようと思

う

憑きものが取れたような笑みを浮かべるゴルネオに、セヴァドスは満足そうに頷いた。

「そうですか……今の兄さんなら少しは楽しめそうですね」

先日の手合わせは、セヴァドスにとって満足とは言えないもので、確かに最後の一撃は悪くはなかったかもしれないが、それ以外は話にならないほどの酷いモノだと言える。

今のゴルネオなら、少しは満足させてくれるのではないかと、挑戦的な視線をセヴァドスは考えたのだが、当のゴルネオは、先程まで笑っていた笑みを強張らせ、表情を青くさせる。

「そ、それはまた今度にしないか？　今は任務に集中するべきだろう」

「ふむ、確かにそうですね」

ゴルネオの言う通り、今は探索中である。

やるべきことはまだまだあるだろうし、折角の廃都市探索任務という珍しいことを楽しまないのは損だろう。

いつ足場が崩れるかもわからない廃都市でやり合っても満足に戦えないだろうし、何より当のゴルネオは退院をしたとはいえ、まだまだ本調子ではない。

ならば、と。

「では、帰って少しゆっくりしましたら、思う存分に戦いましょうか？　せつかく兄さんと久しぶりに戦えるんですから、ルッケンスの秘奥も使ってみたいですしね」

軽い言葉でセヴアドスがそう言うのと、ゴルネオは顔を青くさせたまま息を呑む。

逃れられない運命を悟ったのか、ゴルネオは一度だけ小さく頷いた。

「お手柔らかに頼む」

「はい、最近手加減というものを覚えましたので、安心してください」

ゴルネオにとって全く信用のない言葉を吐きながら、セヴアドスは集団の先頭を歩き始める。

話を終え、静まり返った面々は、順調に探索をしていく。

汚染獣のような外敵も見つからず、やはり生存者もいない。

ただ、そこには沈黙が存在するだけである。

特に異変のない光景に、セヴアドスは言いようのない違和感を感じた。

しかし、違和感は解消されることもなく、ただセヴアドスは目の前の現状を調べていく。

「どれだけ歩いただろうか、機関部の半分ほど探索を終えた頃、先頭を歩いていたセヴアドスの足が止まった。」

「おかしいですね」

「何がだ？」

足を止めて、セヴアドスは目の前の壁を触る。

そこには、剣で斬ったかのような斬痕が残っており、足元には人間の血のような黒いシミが残っていた。

汚染獣に襲われて滅んだ廃都市。

そういう見解だったが、そうなると少しだけ腑に落ちないことがあった。

セヴアドスはその場にしゃがみ、注意深く調べ始めると、背後のゴルネオに向かって疑問を口を開いた。

「先から人の遺体らしきものが見当たりません」

これが先程まで感じていた違和感の正体だった。

血痕などは先程から幾つか確認できたが、そこに人間の遺体は存在しなかった。

「それは、襲撃した汚染獣が喰らったのではないか？」

「それなら、食べ残しがあるはずですよ」

幼性体でも人よりも巨大な汚染獣の口は、人を食いちぎった際に、手や足を残すことがある。

ゴルネオの言う通り、汚染獣に丸呑みされたということになれば、この都市で死んだ

全ての人間がそうだったということになる。

つまりは、少なくとも食べ残しなどが残っていてもおかしくないはずだ。

微かに香る臭気からして、骨が腐ってなくなるほどの長い時間は経過していないように思えた。

「しかし、その食べ残しも見当たりません。まるで誰かが片付けたようです」

「馬鹿な、それこそありえない。誰がそんなことをする？」

「さあ、何処かの掃除好きの妖精が片付けたんじゃないですか？」

ゴルネオの疑問にセヴァドスはこの少ない情報量で答えを出すのは難しかったようだ。

冗談交じりにそうは言ってみるが、この不可解な状況からして妙な信憑性がある答えに思えた。

「とにかく、ところどころ血の痕がありますが、そう荒れた様子はありません」

稀に壁が抉れたり、傷が入ったりしていたが、恐らく武芸者が戦った際にできた戦痕だろう。

「ここでの情報収集は終わったとっていい。」

「上に登りませんか？ レイフォンたちの班達と情報を共有して都市部の搜索に移った方がいいと思います」

「確かに機関部にはそう異常は見られないようだな。 なら行こう」  
ゴルネオの号令とともに第五小隊の面々は頷き、そのあとに続いた。

・  
・  
・  
・

機関部の探索を切り上げ、念威操者を通してレイフォン達と情報交換を終えたセヴァ  
ドス達は都市部へと昇ると、そのままレイフォン達と反対側の都市部を調べ始める。

だが、そこでも人の遺体らしきものは発見できず、ただ不気味な雰囲気だけが都市部  
を包んでいた。

「向こうの話ではシエルター内にも生存者および遺体などは存在しなかったようだ」  
「へ、向こうの調べるのが下手糞なだけじゃないか」



「いえ、そんなヘマはしませんよ」

レイフォンと、そして何故かフェリが気に入らないシヤンテは、ゴルネオの肩に乗ってそう毒づくが、流石にそんなミスをするはずがなかった。

何より、フェリが本気で念威を行えば都市中を隅々まで確認できる力を持っていることをセヴァドスは知っている。

「となると放浪バスで逃げた、かだな」

「まあ、確かに逃げたものもいるはずでしょうが、普通に考えれば定員オーバーですね。それに常識的に考えて一人の遺体すらないというのは奇妙な話です」

実際は奇妙どころではない。

間違いなくホラーな話である。

再びその場に嫌な空気が流れ始めると、ゴルネオは気疲れしたように肩を落とす。

「となると早い内に合流した方がよきそうだな」

「その方がいいと思いますよ。私もレイフォンと組めばある程度は守りながら戦えると思いますし」

ゴルネオの提案は、セヴァドスにとつても有り難いことだった。

ここで汚染獣が現れてもセヴァドスが倒すことは可能だが、被害を零に抑えるには余程の運が必要となる。

しかしセヴァドスの発言は、シャンテの癩に障ったらしい。

シャンテは、舌打ちをつくとそのまま怒鳴り声をあげる。

「つち、さつきからレイフォン、レイフォンって……お前はどつちの味方なんだっ!?」  
ゴルネオが相棒であり、友人であり、想い人であるシャンテには、先程からのセヴァドスの態度が許せなかったのだろう。

実際先日もそのことでセヴァドスに襲いかかったシャンテはゴルネオと一緒に病院送りにされていた。

今にも鍊金鋼を抜こうとする臨戦態勢のシャンテに対し、ゴルネオはシャンテの右肩を掴んで止める。

「シャンテ、やめろ」

「けどさ……」

激しくいきり立ったシャンテとは、対照的にセヴァドスは普段通りの笑顔を浮かべながらのんびりとした様子で当たり前のように答えた。

「ふむ……味方とそういうのではなくて、兄さんは兄さんで、レイフォンは友達なだけですよ」

「シャンテ、この話はある程度解決している。あとは俺が答えを出すだけだ」  
覚悟の決めたようなゴルネオの表情に、シャンテも怒りを収めるしかなかった。

だが、シャンテとセヴァドスが揉めたおかげで、第五小隊間の空気はギクシャクしたように沈黙が続く。

この状況見かねたゴルネオは、直ぐに十七小隊との合流を提案すると、その提案に対し反対することもなく、すぐに念威を使ってフェリとの連絡を取り始めた。

フェリ達が指定した合流地点は、都市中央部の領主館だった。

流石に、都市の権力者である領主の館は、遠くから見てもわかりやすいほどの大きなものであった。

セヴァドス達が、屋敷に辿り着くとそこには、シャーニツドが鍊金鋼を復元させて見張りを行っているのが見えた。

シャーニツドはこちらの存在に気がつくのと、肩の荷が下りたと言わんばかりに脱力し、呑気にこちらに手を振る。

「よっ、どうにかそっちも無事だったようだな」

「はい、残念ながら何もおきませんでした」

「そちらも問題なかったようだな」

セヴァドスを間に挟みつつ、シャーニツドはゴルネオとともに施設の中へ足を踏み入れる。

その後ろをセヴァドス、シャンテ、残りの第五小隊のメンバーが続いていく。

施設内は薄暗く、通路の端の方まで確認できないほどの暗さだったが、この都市の状況を考えると贅沢も言えない。

「電気が通つたのは助かったよな。下手すりゃレーションで晩飯を終える羽目になつてた」

シャーニツドの言葉に、ゴルネオ達第五小隊の面々の顔も綻ぶ。

元々、都市での行動についてそれほどまで重要視していなかつたツエルニのレーションは、はつきり言つて不味い。

こんな不気味な状況で不味いレーションでも食べていけば、その場のモチベーションも下がる一方だろう。

故に、普通の料理が食べれるということは、この状況下ではありがたいことである。

「部屋分けはどうする?」

「ああ、それはあとでニーナと話してくれよ。とりあえず今は飯の時間だけ」

先頭を歩くシャーニツドは、数多くの部屋の前を通り抜けると、その歩みを止めることなく目的地へ向かう。

その後をセヴァードス達が追いかけると、突然立ち止まつたシャーニツドの前の部屋の中から芳しい香りが漂っていた。

「うおっ！ すげえな、アイツ」

「へえー、相変わらず良い腕してますね」

部屋の中では、既にニーナとフェリが椅子に座って待機しており、台所の方ではレイフォンが包丁を握って料理をしていた。

シャーニツドの言葉に、料理に集中していたレイフォンがこちらへ振り返る。

「あ、料理の方は今終わりました」

エプロン姿が妙に様になっているレイフォンが、のほほんとした様子でテーブル中央に鍋を置くと、部屋中に食欲がそそられる美味しそうな臭いが漂い始めた。

鍋の中には魚や野菜、肉などが煮込まれており、ゴルネオ達はすでに食べ頃の鍋の香りに思わず唾を飲み込んだ。

「素晴らしいですね。ところで食材はどうしたのですか？」

「途中で家畜や魚を捕ってきました。都市の浄化システムが生きてたのはこちらとしましては嬉しい話です」

にこやかな笑みを浮かべながら椅子に座るセヴァドスに対し、レイフォンは忙しくレーションのパンなどを食器の上に盛り付けていく。

「なるほど、つまり盗品ということになりますか、兄さんはどうします？」

「それは嫌味か？ 作った料理を食べないのはもったいなさすぎるだろう」

ゴルネオの言う通り、ここで食材を捨てる方が罰が当たるといふものだろう。席に座るゴルネオに習うように、第五小隊の面々も座り始める。

「だな。よし、じゃあ暖かいうちに食おうぜ」

最後に座ったシャーニツドが、料理に手を伸ばしたことから、食事が開始される。第五小隊と第十七小隊の合同の食事会となったため、その場が段々と賑やかになっていく。

シャーニツドは、第五小隊の人間の楽しげに話を行い、フェリとニーナは黙々とレイフォン隣の席で料理を口に運ぶ。

セヴァドスも手に取った魚の串焼きを齧りつきながら頬を緩めて感想を漏らす。

「ふむ……やはりレイフォンの料理は美味しいですね」

セヴァドスの意見に同意見なのか、海鮮だしのスープを呑んでいたシャーニツドも上機嫌に頷く。

「だな。しかし、都市外に出てるのに、こんな料理が食えるのはありがたいよな。

流星は十七小隊のエースアタッカーだな」

「痛つ、痛いですよ、シャーニツド先輩」

「で、シャンテ先輩は食べないんですか」

バシバシとレイフォンの背中を叩くシャーニツドの隣では、唯一料理に手をつけてい

なかったシャンテにセヴァドスが話しかける。

食欲がないわけではないだろう。

先程から料理に視線を釘づけになっているシャンテが、唾を呑み込むとレイフォンを睨みつけた。

「誰が食べるかつ?!? こいつの料理なんてっ!!」

シャンテの明らかに敵意に満ちた視線に対し、何故そんな視線を向けられるか見に覚えのないレイフォンは首を傾げる。

そんなレイフォンに対し、セヴァドスは笑いながらとその肩を叩く。

「おや、凄く嫌われようですね」

「レイフォン、お前、何かしたのか」

「え、いや……」

椅子を蹴り飛ばし、威嚇するシャンテの反応に、先程まで楽しげに向こうで話していたシャーニッドがこちらに視線を向けていた。

シャーニッドだけではない。

フェリにニーナ、そして第五小隊員達の視線を集めることとなったレイフォンだが、当の本人もこの状況を理解できず、困惑の表情を浮かべるしかできない。

そんなレイフォンに、助け船を送る者がいた。

挙動不審なレイフオンに、隣にいたセヴアドスは何か思いついたのか、一度頷いてから自信満々の笑みを浮かべる。

「成程、流石レイフオン。貴方には、やはりロリータハンター、略してロリハンの称号を上げましょう」

「へ？」

セヴアドスの突拍子もない言葉に、レイフオンは思わず呆けた声を上げてしまう。だが、セヴアドスは分かっていますと言わんばかりの輝かしい笑顔でレイフオンに向けて力強く親指を立てる。

「分かっています。二号さんなんでしょう？ 全く、困った性癖ですが、私はそれくらいで友人を止めたりはしませんよ。こう見えて私は友人に対しては寛容な態度をとることが出来るんですよ」

「突然、何を言ってるんですか?!」  
助け船は、まさしく泥舟であった。

先程より收拾のきかない状況下に陥ったレイフオンに構うことなく、セヴアドスのエンジンがかかかっていく。

「大丈夫です。妹さんは一号さんですから」

「そろそろ頭でも吹き飛ばしましょうか？」



突然話に巻き込まれたフェリは、念威で髪を光らせるほどの怒りを露わす。

いつも以上に鋭い眼つき時のフェリに対し、セヴァドスはどこ吹く風といった様子で、この状況を楽しんでいた。

今にも大乱闘が始まりそうな雰囲気の中、ゴルネオは呆れたように溜め息をつく。

「セヴァドス、飯時に暴れるのはやめろ。ロス、弟が馬鹿なことを言つて悪かった」

「了解です。 兄さん」

「ちっ、ふんっ！」

「何でっ!!」

妙に聞きわけの良いセヴァドスに対し、振りあげた拳の降ろすところが見つからなかったフェリは、とりあえず隣のレイフォンの脛を蹴飛ばしたと、静かに着席しては再び食事の没頭する。

悲鳴を上げるレイフォンを尻目に、ゴルネオは隣のシャンテの席の前に料理の入った皿を置く。

「シャンテ、お前も食べる。 探査はまだ続くんだ。 食える時に食つて、腹を満たして

ておけ」

「わ、わかったよ、ゴル……」

有無を言わせない静かな圧力を放つゴルネオに、シャンテはしぶしぶ料理に手を付け

ると、一気に料理を掻きこんでいく。

ようやく収拾がついたことを確認するとゴルネオは、視線をレイフォンへと向ける。

「アルセイフ」

「……何ですか」

脛を抑えるレイフォンに、ゴルネオは自分の空になった皿を突き出すと、

「まだ、料理は残っているのか？」

固い表情のまま、御代わりを催促した。

## 第十八話

食事を終えたりビングでは、シャーニツドが椅子に座つて一人、自身の得物である双銃の点検を行つていた。

ダイトメカニツクであるハーレイのような専門知識や技術を持たないシャーニツドだが、流石に銃の簡単な点検くらいは武芸者なので行うことができる。

使わないことに越したことはないが、ここは都市外。

どのような危険がいつ起こるかわからない場所である。

シャーニツド自身、もしも不測の事態が起こつたとしても何かできるといふ希望的な考えは持ち合わせていないが、それでもこうして準備してしまうのは、武芸者の性というものかもしれない。

ある意味珍しいシャーニツドの勤勉な姿に、扉を開いて現れたゴルネオが声をかける。

「ほう、精が出ているな」

「まあな、意外だろ？ 結構マメなんだぜ」

冗談混じりの口調のシャーニツドに、ゴルネオはテーブルを挟んだ対面席に座ると仏

頂面を貼り付けたまま答える。

「だろうな。最近、夜に一人で鍛錬をしているようだしな」

「……知ってたのか」

柄にでもない行動を取っているとシャーニツド自身でも思っていたのだろうか。

自分でもここ最近の鍛錬の熱の入れようは、まるでニーナのようだ、と思わず苦笑を零してしまうほどである。

だが幼生体の襲来と老性体との遭遇と、ここ最近のツエルニの出来事を考えれば危機感を覚えない方が武芸者としておかしいだろう。

それはシャーニツドだけではなく、目の前にいるゴルネオもそうである。

ただゴルネオの場合、危機感以外にも理由があるのだが、ここで語る必要はない。

「別に悪いことではあるまい。元々武芸には勤勉なほうだろう？」

「……へえ。俺の事情も知ってるみたいだな」

何か含むようなゴルネオの言葉に、シャーニツドはなるほどと頷くしかない。

確かに古巣の第十小隊にいた時は、理想に燃えていたときもある。

理想の燃えカスは十七小隊に入っても消えることはなかったが、それでもあの頃に比べると、やはり衰えていることをシャーニツド自身自覚をしていた。

第十小隊に全く未練がないというわけではない。

もし、あの時にこうすれば、などと考えたことも何度かある。

だがそれでもシャーニツドは、あの時の選択だけは後悔していなかった。

いや、後悔をするわけにはいかなかった。

そんなシャーニツドの心中を知ってか、ゴルネオは眉間に皺を寄せると、声を洩らせたように呟く。

「……ああ、弟が調べたようで、な……」

その言葉にシャーニツドは、思わず顔を強張らせてしまう。

セヴァドス・ルツケンス。

ここ最近、シャーニツドがよく耳にするツエルニ期待のルーキーである。

男の名前を覚える趣味のないシャーニツドが、新入生の男子で名前を覚えているのは同じ小隊メンバーのレイフォンと件の男しかない。

ツエルニ最強のアタッカーとまで言われるレイフォンと同等の武芸の腕を持ち、学年トップクラスの頭脳に、容姿端麗の優男。

そんなハイスペック男に、シャーニツドは一時期、ツエルニの色男（自称）の座を奪われると危惧していたが、ここ最近では違う意味で危険視している。

——セヴァドス・ルツケンスは戦鬪狂である。

最近セヴァドスに何度か模擬戦を申し込まれているシャーニツドだったが、アレと対

峙する身の危険からどうにか避けられるように逃げているのだが、何れは捕まってしまうかもしれない。

そんなのは絶対に御免だと、未熟なシャーニッドでもセヴアドスの異常さの片鱗くらいは理解できた。

人の皮を被った化け物——それがシャーニッドのセヴアドスへの見解である。

「……なあ、ゴルネオさんよ。アンタの弟どうにかならねえか？」

「無理だ」

一縷の望みにかけてシャーニッドは、兄であるゴルネオに願いをこめて話しかけるが、返ってきた答えは無情なものであった。

それはそうだろう。

目の前のゴルネオもつい最近弟であるセヴアドスの手により病院送りにされている。寧ろ避けれる方法があるのならば、彼自身が知りたいはずである。

「二度、戦つてやれば付き纏われなくなるんじゃないか？」

「無理だな。絶対に死ぬ自信があるぜ」

力一杯恥ずかしげもなく言ったシャーニッドに対し、ゴルネオは憐れな者を見るような視線を向ける。

決してシャーニッドを馬鹿にや軽蔑しているわけではない。

まるで死にかけの子リスを見ているような慈悲の混ざった眼差しである。

シャーニツドは、そんな生暖かい視線から逃れるように上を向くと、ぼつりと小さな疑問を呟く。

「ほんとに一度で済むのか？」

シャーニツドの言葉に、突然ゴルネオは立ち上がると、そのまま窓際へと歩き出す。

そして窓枠に両手を乗せると、ゆつくりとした口調で話し出した。

「……この任務が終わったら、久しぶりに訓練をするそうだ」

誰と？　なんて野暮なことを聞くつもりはシャーニツドにはない。

ただ哀愁を帯びたゴルネオの背を、同情的な視線を送ることしかできなかった。

だが、いつまでもこうして凹んでいるわけにもいかず、気を取り直したシャーニツドとゴルネオは、セヴァドスの話は棚上げして、現状の状況を確認すべく椅子に座り直して情報交換を開始する。

「そちらもか」

「ああ、汚染獣の食い残しなんてなかったぜ。ただ、家や建物の中には血で彩られた

部屋がいくつかあった」

シャーニツドは、第十七小隊による探索の結果をゴルネオに報告する。

そして、第五小隊の探索の結果もよく似たものだった。

「やはり、そうか……何故死体がないのか」

「そうだな、うちのエースもそこが気になっていた」

セヴァドスとレイフォンという熟練の武芸者が不審に思ったのがこの点だ。

だが、確かにおかしなこともかもしれないが、それでも二人はこの事を気にしていた。

「誰かが、都市の人間の遺体を持ち出したとかどうだ？」

「それはホラーな話だな。セヴァのやつが喜びそうだ」

「ああ、なんか想像できるわ」

しかし、その仮定はあまりに現実的ではない。

この都市が汚染獣に襲撃されたことは間違いない。

そんな混乱の中で、死んだ人を運ぶことができるだろうか？

もしも、迫り来る汚染獣を撃退し、移動都市が破壊されたとして、人々は態々死んだ

者を放浪バスに乗せるだろうか？

シャーニツドなら絶対に乗せないだろうし、できたとしても土に埋めてやるくらいだ

ろう。

だが、それでも汚染獣に都市を破壊された後に、冷静にそんなことができるとは思え

ないだろうが。

「これ以上考えても意味はないかもしれないな」



「だな。残酷な話だが、俺達にそこまで考える余裕はないぜ」  
他所の都市を考えている暇はツエルニの武芸者にはなかった。

ツエルニのセルニウム鉱山の数はあと一つ。

次の武芸大会の成績次第では、ツエルニをこの都市のようにしてしまうかもしれないのだ。

再び、決意を新たに小さく頷いたシャーニツドに、ゴルネオは何かを探すように辺りを見渡す。

「ところで、アントークの奴はどうした？ 夕食後から見かけていないのだが？」

ゴルネオの言葉に、シャーニツドは、ああ、と頷き返す。

通常なら本来情報交換などは、隊長であるニーナが行うようなことだが、今回に限ってシャーニツドが代理で行っていた。

ここ最近、ニーナの様子がおかしい。

そのことがここ最近のシャーニツドの気がかりであった。

普段は誰以上に都市のことを考え、誰以上に氣勢を挙げていたニーナだが、最近何かと考え込む様子を見受けられた。

ニーナ自身も色々あるのだろう、と普段頑張りすぎる隊長ために、シャニツドは今回の情報交換の役目を買って出たのだった。

「ふう、互いに色々と苦勞をするな」

「まったくだ。これも上級生の役目かね」

ゴルネオの言葉は、少しだけ疲れていたシャーニツドに有り難いものだった。

・  
・  
・  
・

人々に見捨てられた都市の空の下で、ニーナ・アントークは一人、鉄鞭を振るう。

風を裂き、地面を踏みしめ、空を撃つ――

ただひたすらに――思い浮かぶ考えを消すかのように――自身から湧き出る感情に八つ当たりのように双鞭を振るう。

ただ一人の円舞ダンスを観客無き夜空の下で踊り続ける。

憐れなほどに悲しい円舞を――

ニーナは、仙鶯都市シユナイバルの武芸の名門であるアントーク家に生まれ、武芸の英才教育を受けた才女である。

武芸者たるものを幼い頃から叩きこまれたおかげで、シユナイバルを家出同然で出た後も、その思いに変わりはなかった。

いや——ツエルニに来て、ニーナにまた一つ新たな想いが生まれた。

幼く純粋な電子精霊——ツエルニに出会い、そして友となった彼女を、ニーナは心の底から守りたいと思った。

その思いに応えるように鍛錬に励んだニーナは、一年生で小隊入りという偉業を成し遂げてみせた。

努力が実を結んだのである。

ゆえにニーナは思った、これでツエルニを守ることができる、と。

しかし、現実は厳しく、残酷なモノであった。

ニーナが一年生の年に起きた武芸大会でツエルニは大敗ともいえる成績を残し、セルニウム鉱山を残り一つとしてしまう。

その結果、ツエルニは滅ぶ一步手前まで追い詰められることとなる。

その事実はニーナにとって耐えがたいモノであった。

変わらなければならない——そう思ったニーナは、その時所属していた第十四小隊を

脱退し、新たに新しい小隊を立ち上げることが決意する。

より、ツエルニを守ろうとするために。

だが、この世界の現状が、その些細な思いなニーナの思いすらは消し去ろうとした。絶対的な捕食者、汚染獣の来襲により、ツエルニに今までにない最悪の危機が訪れた。初めて経験する汚染獣との戦闘にニーナを始めとするツエルニの武芸者は、慣れない死地に苦戦し、そして一人、また一人と力尽きていく。

誰もが敗北を悟ったその時、救世主が現れた。

レイフォン・アルセイフ。

グレンダンの元天剣授受者という経歴を持つ彼は、その絶対的な力と才能で、ニーナ達が苦戦した汚染獣達を次々に討ち果たし、ものの数分で一掃してしまった。

その力にニーナは嫉妬し、そして羨望の目を向けた。

この力があれば、ツエルニを守ることができるのに、と。

だが実際に、ニーナが率いる第十七小隊に大きな矛を得たことは事実にはなかった。

故にそのことを素直に彼女は喜んだ。

しかしの甘い考えが、第二戦での敗北に繋がったのかもしれない。

古巣でもある第十四小隊の隊長であるシンとの戦いに固執してしまい、向こうの策に

絡みとられたという失態を犯してしまったのだ。

その時、ニーナは痛いほどに自身の勘違いと力の無さを思い知った。

最強の矛レイフオンを得たといえ、ニーナ本人が強くなつたわけではない、と。

そして、その力も十分に用いることができないほど、自分は指揮官として未熟であつた、と。

その日からニーナは一人鍛錬に明け暮れた。

ただひたすらに強くなるために。

レイフオン・アルセイフに追いつくために。

しかし、その努力も実ることはなかった。

劉脈疲労という武芸者として初歩的な事で、ニーナは倒れ、病院へと運ばれた。

目が覚めた時、見えたのは病院の白い天井と小隊仲間のレイフオンであった。

その光景に、ニーナは自身の努力が無駄で、死に物狂いの鍛錬は無意味の時間であつたと、悟ってしまった。

だからこそ、嬉しかったのかもしれない。

レイフオンが、自分のことを仲間と思つてくれて、頼りにしてくれている、と言つてくれたことに。

故に許せなかったのかもしれない。

レイフオンの隣にいるのが自分や十七小隊の人間でなかったことに。

ニーナ・アントークは嫉妬する。

レイフオン・アルセイフの隣に立つセヴァドス・ルツケンスという存在に。

・  
・  
・  
・

シャーニッドと別れた後、ゴルネオはレイフオンを探しに屋敷を出た。

街灯すらなく、初めて来た土地でレイフオン一人を探すのは困難に思えるが、事前に念威操者に頼んでいたため、レイフオンの居場所は既に掴んでいた。

拠点となった屋敷から少し離れた場所に位置する壊れた塔のような建造物の頂上で、レイフオン・アルセイフは静かに立ち尽くしていた。

念威操者を飛ばした時点で気づかれています。

いやそれ以前にゴルネオの実力で、レイフオンに気づかれないように近づくのは困難

である。

ゴルネオは構うことなくレイフォンに近づくと、レイフォンはすぐに後ろに振り返ると無言のまま立ち上がった。

互いに目が合った瞬間、ゴルネオの中に負の感情が芽生えていくが、ソレを表情に出すことなく、無言のままレイフォンに近づいていく。

そして、互いに数歩歩めば拳が届く距離まで近づくと——ゴルネオが先に口を開いた。

「寂しい光景だな」

塔の先から見える光景は、あまりにさびしいものだった。

廃都市となった今では光源は、ゴルネオ達が泊っている屋敷しか存在しなかった。

もし、塔が壊れてなくて、都市が死んでいなければ、それは美しい光景が広がっていたに違いない。

「そうですね」

ゴルネオ同様に目の前に広がる光景に視線を向けていたレイフォンが当たり障りのない返事を返す。

他愛もない話をする仲でもなく、する気もないので、ゴルネオは話を本題に入る。

「アルセイフ……俺はお前に言っておきたいことがある」

ゴルネオの言葉にレイフォンがこちらに振り返る。

明らかに空気の変わったがゴルネオは、レイフォンに視線を向けるとそのまま強い意志を持って睨みつける。

レイフォンの視線は、既に凍るような鋭さを秘めており、ゴルネオはその視線に押しきれそうになるが話の続きを口にした。

「お前はガハルドさんの敵だ」

ゴルネオが言った言葉。それは間違いなく事実だった。

ガハルドとレイフォンの間には様々なことがあり、色々な思惑もあったかもしれないが、それでもガハルドを斬ったのは目の前にいるレイフォンに違いはなかった。

そして、そのことを本人も誤魔化す気はない。

「そうですね。で、話はそれだけですか」

冷静に、そして冷徹な表情を浮かべたレイフォンの興味が無いという口調と態度に、ゴルネオは思わず眉を顰め拳を握りしめた。

ゴルネオにとって兄のような大切な存在は、レイフォンにとって路傍の石ころ程度にしか興味がなかった。

その事実は、ゴルネオにとって許し難きものだったが、ここで殴りかかるわけにはいかず、怒りをぶちまけるわけにもいかなかった。



「言うことはそれだけか？ 自身がやらかした過ちに詫びる気はないのか？」  
「詫びるつもりはないです」

レイフオンの感情の喪失した表情は、兄であるサヴァリスの笑みとよく似ていた。

「ガハルドさんが、お前を脅していたからか？」

ゴルネオの告げた言葉に、レイフオンは沈黙を貫く。

だが、それは間違いなく事実だったようで、微かにだがレイフオンの瞳が揺れ動いたことをゴルネオは見逃さなかった。

セヴァドスの言葉をゴルネオは信じていないわけではなかったが、それでも信じたかったゆえの最後の確認と言ってよかった。

「確かにガハルドさんの行ったことは武芸者として恥ずべきことだ。 だがな……それでも俺にとって恩人であることには変わりはない。 故に、俺はお前に怒りを覚えらる。 ガハルドさんの仇であるお前に、な」

セヴァドスによつて、ゴルネオは再びガハルドのことを思い返していた。

物心ついた頃から道場で汗を流し、ルッケンスの武芸を極めんとする彼の姿は、今でもゴルネオの脳裏に焼き付いている。

ゴルネオが、初めてルッケンスの技を習得した時、真つ先に誉めてくれたのがガハルドだった。

二人の兄弟に苦悩した時、支えてくれたのもガハルドであり、叱ってくれたりしたのも彼であった。

例え、彼が違法を犯したとしても、ゴルネオにとってガハルドは、やはり恩人に違いはなかった。

だからこそ、レイフォンには怒りを感じている。

その気持ちは、隠すつもりもないゴルネオ自身の本心であった。

無論、この行為には何の意味もないことはゴルネオは知っていたが、それでも告げなければいけなかった。

漸く辿りついた答えを示すために――

「だが、俺は……ツエルニの第五小隊隊長として、お前には感謝している」  
ルッケンスの自分としてではなく、ツエルニの第五小隊隊長――ゴルネオとしての答えを。

「アルセイフ。おまえがもし、この学園に入学しなかったら、今頃ツエルニは存在していなかっただろう」

レイフォンは、ツエルニの危機を救った。

その事実は、レイフォンがガハルドの仇であることが変わらないように、ツエルニを守ったことも間違いのない事実である。

たとえ、どのような罪状を抱えようと、レイフォン・アルセイフはツエルニに住む者達の命を救ったのだ。

だからこそ、ゴルネオは言いたかった。

レイフォンへの感謝の言葉を――

「お前は、俺の第二の故郷を救ってくれた恩人だ」

「僕は、別にそんなつもりはありません」

頭を下げたゴルネオに対し、レイフォンは何でもないように言ったが、表情に明らかに動揺が浮かんでいた。

その表情を確認したゴルネオは、嘔き出すように笑い声を上げてしまう。

セヴァドス曰く、レイフォンは正直すぎる、と。

考えてみれば解かることだった。

もしレイフォンが、狡猾な人間だったならば天剣の地位を剥奪されることもなかっただろう。

情のない非道な人間だったならば、孤児院の人間を見捨てて、稼いだ金で贅を尽くすこともできただろう。

目の前でこうして考えてみると、今まで悩んでいたことが馬鹿みたいに思えてくるのは不思議だと、ゴルネオは、少し肩透かしを喰らった気分で話を続ける。

「お前がツエルニをどういうつもりで救ってくれたのかは知らない。お前が今どんな葛藤を抱いて生きているかは、俺には永遠に解からないだろう。だが、それでも俺は感謝している。お前はツエルニを、この地に住む人々を助けてくれたのだから。

今だ、俺はお前を許すことは出来ない。だが、それでもこう思っている。俺達と共にツエルニのために戦ってほしい、と」

「……わかりました。僕もツエルニを潰す気はありませんから」

レイフォンの返答は素っ気ないものだったが、ゴルネオにとつてそれは満足のいくものであった。

「そうか、ありがとう。そしてこれからもよろしく頼む」

手を差し出したゴルネオに、レイフォンは目を丸くさせると、そのまま固くなった表情を緩ませる。

「ふ、ゴルネオさんって、真面目なんですね」

「妙な感性の兄と弟に挟まれたんだ。嫌でもこうなる」

「確かにそうかもしれないね」

ゴルネオの手にレイフォンの手が重なった。

こうして、ゴルネオの短くも長い葛藤の日々に決着がついたのである。

そう、ゴルネオの葛藤には――

## 第十九話

全身に軋むような痛みが、ニーナの動きを止める。

剽脈の疲労、そして筋力の疲労が、限界を越えたようである。ニーナはその場へと倒れた。

幸い地面は、塗装された固いアスファルトではなく、青々とした柔らかい芝生の上だったため体を打ち付けることはなかった。

首筋を柔らかい芝生が撫で、頬に冷ややかな風が流れる感触に、ニーナの火照る身体を冷ますことはできたが、内なる心が抱える想いを晴らすことはできなかった。

「馬鹿か、私は……」

自身の不甲斐なさから思わずニーナは、そう漏らしてしまった。

幾ら鍛錬に励んでも、幾らこの体を苛め抜いても、この感情が消えないことがないとをわかっていて。

そして——この感情が褒められるべきものでないことも。

嫉妬。

それはレイフォンの時の物よりも大きく、抑えきれないものであった。

「……戻るか。いつまでもここに居るわけにもいかないからな」

ニーナがどうしようが、この悩みが無くなることはない。

だが、それでも身体を動かしたおかげなのか、少しだけだが気持ちが悪くなった気がした。

夜風に当たったこともあり、頭が少し冷えたニーナは両手に握る錬金鋼を基礎状態へと戻し、立ちあがろうとしたその時。

「あれ？ 終わりですか？」

ふと、ニーナの耳に飛び込んできた声。

その聞き覚えのある声に、ニーナの中に抑えていた何か膨らんでいくのを感じた。

「……何の用だ？ セヴァドス・ルッケンス」

振り返ると、そこにはにこやかな笑みを浮かべたセヴァドスがいた。

屋敷の扉の上に座るような形で見下ろすように見ていたセヴァドスに、ニーナは思わず舌打ちをうつ。

女性が見れば誰もが一度は振り向きそうな端麗な顔つきをしているが、今のニーナには、その顔は見るだけで気分を害してしまうものだった。

思わず、両手の錬金鋼を握る力が強くなるニーナに対し、セヴァドスは世間話するよ  
うな気軽さで口を開く。

「すみません、別に用はありませんでした。窓の外から貴方が鍛錬するのが見えま

したので、えっと……確かニーナ・アントークさん？ でよろしかったですよね」

「ああ、そうだ」

「名前が当たっていてよかったです。アントークさん、鍛錬はもう終わりですか？」  
セヴァドスの発言に、ニーナは自分自身の鍛錬の様子を見られていたことを知り、同時にこの姿を一番見たくない奴に見られていたことに思わず顔を顰める。

ニーナは、嫉妬の件を抜きにしてもセヴァドスのことを好きにはなれなかった。

人当たりの良いその姿は人から見れば好印象にも見えるが、ニーナにはどこか軽薄に見えた。

同隊のシャーニツドも普段は軽薄そのものだが、いざという時は行動を起こすということはニーナは知っていた。

だが、目の前の男は自分が死のうとも、仲間が死のうとも笑っていそうな身勝手さを感じた。

何より、ただ強い者と戦いたいというセヴァドスの姿勢と、弱いものを守るというニーナの信念が重なることはないだろうと思っていた。

確かに腕を磨き、強きものと戦いたいという思いは、武芸者ならば少なからず誰もが持っていることだろう。

だが、セヴァドスのソレは間違いない度が過ぎていた。

強さを求めるためならば、間違いなく大切な何を斬り捨てるような——  
思考が段々逸れていることに気付いたニーナは、足早にこの場から去ろうと屋敷の方へと歩き出す。

「ああ。で、用がないなら私はもう行くぞ」

「まあ、待つてください。折角ですから聞いておきたいのですが、レイフォンが何処にいるか知りませんか？ 少し鍛錬に付き合ってもらいたいのですけど」

ニーナの反応に特に気にした様子のないセヴァドスは、レイフォンの所在を尋ねてくる。

しかし、さつきまで鍛錬をしていたニーナがそのことを知るはずもなかった。

「さあな、屋敷にいるんじゃないのか」

「いえ、妹さんやシャーニツドさんに聞いたたら、外に出ていると聞きましたので、念のため貴女にも確認させていただきました」

「念のため、か」

特に意識はしていないのだろう。

だがセヴァドスの口から発する一つ一つの言葉が、ニーナの感情を苛立たせていく。

——感情が抑えられないほどに。

「ふむ、ということは無駄足でしたか。兄さんも何故かいませんし、とりあえずまた



妹さんか、第五小隊の念威繰者さんに念威を飛ばして搜索を頼んでみましょうか」

要件は終わりだと、セヴァドスはニーナの方を見ることもなく振り返るとそのまま屋敷へと歩いていく。

その後ろ姿を見てニーナはもう少し風に当たっていようと後ろに振り替えると、後方の足音が突然途切れた。

「そう言えば、その鍛錬はあまり効果がないと思いますよ」

その言葉がニーナに向けて発せられたことに、ニーナが気付いたのは一瞬遅れてのことである。

ニーナが言葉を返すことなく、セヴァドスは口を開く。

「そんな状態で無理に訓練を続けたりすると剽脈を傷ついたり、最悪壊してしまうこともあります。 そうなってしまえば、成長の伸び代を無くすことになりですから、余程の被虐性質な持ち主以外は辞めるべきかと。 あと一応、武芸者として万全の状態に体を整えておくことは大事ですよ。 ここは安全な都市内ではなく、常に危険が伴う都市外なので。 まあ、レイフォンと私がいれば、あまり意味はありませんけど」

セヴァドスの言ったことは至って正論であった。

まさに、武芸者としての経験を踏まえた貴重な意見と言えるだろう。

だが、今のニーナにはその言葉の意味が届かなかった。

「……それは私達が無力、と言いたいのか？」

「ふむ——まあ、そういうことになりますか。 実際には汚染獣と戦う際は邪魔になると思いますし、レイフォンの思考を鈍らせてしまったら、前みたいなことになりかねませんからね」

「おい」

「はい？」

こちらに振り返ったセヴアドスに、ニーナは復元した鉄鞭を構えると、全身に剉を流し込む。

「鍛錬相手ならここにいてるぞ」

絶対的な強者に、自分の意志を突き立てたくなかった。

・  
・  
・  
・  
・

怒気が混ざる気合と共に一閃された鉄鞭を、セヴァドスはギリギリのところまで躲しなから思う。

——飽きてきましたね、と。

ニーナとの模擬戦が始まって約五分が経過した。

その短い間に、セヴァドスは完全にやる気を無くしていた。

元々、セヴァドスはニーナと戦う気なんてなかったし、乗り気でもなかった。

ニーナの実力は、小隊対抗戦で見ていると理解しており、圧倒的に鍛錬が足りない上に、経験不足。

同じ条件であるクラスメートのナルキと戦っている場合、指導という新しい経験を味わうことができ、楽しむことができたが、目の前のニーナに対してその楽しみは一切ない。

無論自他ともに認める戦闘好きのセヴァドスは、差し出されたものを食べないことはないが、それでも口の中に押し込まれたような現状の場合は、流石に不快な感情を芽生えてしまう。

普段なら一撃で潰すのだが、目の前のニーナはどうやらレイフオンのお気に入りらし

い。

誤つて潰してしまえば、レイフオンの怒りを買うことになるだろう。

そこから戦闘に発展するのならセヴァドスも大歓迎だが、逆に二度と戦わないと言われれば、ツエルニの唯一の楽しみを奪われることになる。

故にセヴァドスはある程度、時間を潰すかのように戦っていた。

ニーナの振り下ろしによる一撃をひらりと後方へと飛んで回避すると、セヴァドスは追撃の薙ぎ払いによる一撃を片手で受け止めると、そのまま力任せに後方に投げ飛ばす。

「ぐっ、舐めるなっ！」

「別に舐めていませんよっ」と

空中で態勢を立て直すニーナに向けて、セヴァドスは手をかざして衝剄を放つ。

点ではなく面で放った衝剄は、そのままニーナを捉え、そして後方へと大きく吹き飛ばした。

「ぐあっ」

「む、今のでは流石に意識は刈り取れませんでしたか」

地面に叩きつけられたニーナにはまだ意識があつた。

加減の具合が解らないゆえの面倒臭さに、セヴァドスはため息をついてしまう。

確かに小隊員で、しかも小隊長を務めるだけのこともあり、一般的なツエルニの学生  
武芸者よりは頑丈だった。

それは、ナルキ達クラスメートと比べても差は明らかだろう。

——だが、それは両者を比べてみての話である。

セヴァドスからしてみれば、小隊員も普通の武芸科の生徒もさほど大して変わらな  
い。

しかし、小隊員の中でも極めつけに頑強なニーナの加減は、セヴァドスにとって難し  
かった。

首元に手刀を入れて、首を刎ねてしまったら問題だろうし、鳩尾を撃ち抜いて貫通で  
もしてしまえば、レイフォンに怒られてしまうだろう。

「そう考えるとレイフォンの手加減は、一種の高等技術のようですね」

瞬殺よりも武芸を見せることが好まれる闘試合で戦っていたおかげか、レイフォンは  
絶妙なまでに手加減が上手かった。

実際ガハルドも、その力の差に気づくことなく、瞬殺されたことがある。

そんな微調整ができるレイフォンに対し、セヴァドスは、武芸の試合において瞬殺と  
いうのが一番多かった。

元々の気質のせいかな、力を吐き出すことが楽しく思えるセヴァドスに、手加減という

概念は存在しない。

武芸が盛んなグレンダンの医療技術は、他の都市以上に発達していたため、セヴァドスも安心して殴り飛ばすことができた。

そうになると、ツエルニは窮屈な場所だとセヴァドスは改めて思う。

全力で戦うこともできず、自由に動くこともできない。

退屈だからと生まれ故郷を捨てたリテンスの気持ち解らないでもない。

「ふう……そろそろやめませんか？ これ以上の手合わせは無意味ですよ」

グレンダンを懐かしく思い出していたセヴァドスの眼の前で、再びニーナが立ちあがった。

「はあはあはあ……うるさい、黙れ」

この試合の結果は火を見るよりも明らかである。

往生際が悪いと言えそうなるが——ある意味感心するほどの執念を燃やすニーナは、右足を踏み出して、一步一步こちらに向かって歩き出す。

その動きに当初の早さはなく、押せば倒れるほどの弱々しいものであった。

それでも戦おうとするニーナの姿を大勢の人が見れば、感動を覚えるかもしれない。

まるで強大な悪に立ち向かう正義の味方だと。

「ふむ、案外ハマリ役ですね」

「はあっ!!」

そんな想像に思わず納得していたセヴァドスの眼の前に鉄鞭が走る。

しかし、その一撃にもセヴァドスは避けることなく、その場で立ち——そして二ーナを再び後方に吹き飛ばした。

「がは……」

金剛剄。

天劍の一人、リヴァースの奥義であり、彼が最強の盾と言われる所以となった剄技である。

活剄による肉体強化、衝剄による反射を行うことで相手の攻撃を跳ね返す、一見簡易な剄技であるが、この技を強大な汚染獣に対して行えるのは、リヴァース本人くらいだろう。

剄の流れを読み取ることができない才を持つために、他人の剄技を模倣することができないレイフォンには劣るが、セヴァドスもルッケンスの鬼才と呼ばれた武芸者である。

兄サヴァリス以上の器用さで、弓技同様に取得することに成功した。

その際生じたリヴァースの彼女とされる天劍の一人、カウンティアとの戦闘はセヴァドスにとって忘れることができない大切な思い出である。

「しかし、この金剛剄はこの状況下ならかなり使えますね」

基本的には金剛剱は跳ね返しである。

つまり、セヴァドス自身が加減するよりも、ニーナ本人の一撃を返した方が安全だろう。

何よりも手加減など余計なことを考えなくて良いのが最高である。

自分の一撃を返されたことに、痛み以上に驚きが隠せなかったニーナは片膝をついたままセヴァドスの方を見ていた。

「さあ、どんだん来てください。私はここから動きませんから」

「ぐっ、舐めるなよ」

呼吸を荒くしながらも、今だ眼光の鋭さを失っていないニーナは、再びセヴァドスに向かつて駆け出すと、右手の鉄鞭を振り下ろした。

その光景をセヴァドスはただ見ているだけで、ニーナの体を後方へと吹き飛ばして地面の上を転がした。

確かに金剛剱のおかげで、手加減という問題は解決したが、同時にこのままではニーナの相手をする時間が延長したことに気づき、セヴァドスは思わず溜め息をつく。

ニーナはセヴァドスに対して何か思うことがあったかもしれないが、セヴァドスからすると、いつまでも付き合っていられないというのが本音であった。

「ふう、まだやるつもりですか？ もう理解をされたと思うのですが」



「黙っているつ、さあ行くぞっ!!」

再び立ち上がり、何度目になるか分からないニーナの突撃に対し、セヴァドスは先程と同様に迎撃の構えを取ることもなく、その場で相手の動きを待つ。

ニーナの力では、金剛剄を抜くことはできない。

ならば、セヴァドスはニーナが飽きるまで、金剛剄で吹き飛ばし続けなければならない。

振り下ろされた一撃は、再びニーナに向かって跳ね返される。

「がはっ」

「……む」

後方へと弾かれるように飛ばされたニーナに対し、セヴァドスは自身の足元に視線を落とす。

セヴァドスにダメージ等はなかったものの、立っていたその場から数センチだが後方に押されていた。

その事実には、セヴァドスは思わずニーナの方へと視線を向ける。

ニーナの力は既に見切っているつもりだった。

故にこの場から動くことなく、迎撃することが可能だったはずなのだが、実際のところセヴァドスの方も少しだけだが後方へと押しやられてしまった。

その事実と共に、セヴァドスの頭には幾つかの疑問が浮かんでいた。

まず一つ目だが、何故誰もこの場に来ないということである。

確かにこの場にはセヴァドスとニーナの二人しかいない。

だが、近くには小隊員が控えている屋敷があり、念威操者達の念威が周囲には張り巡らされていたはずだ。

二つ目は、目の前のニーナのことである。

よく考えれば可笑しなことだが、ニーナはセヴァドスに絡んでくる前から疲労困憊状態であった。

その状態で、幾ら相手の攻撃を跳ね返す金剛剱を使っているとはいえ、何度も自分自身の一撃を受け続けているニーナが立ち上がることは常識的に不可能と言える。

そして三つ目、これこそが現在セヴァドスが最も知りたい疑問である。

「ふむ、ニーナさん、貴女の後ろにいる山羊は何ですか？」

セヴァドスの視線の先には、ニーナの背に宙に浮くように現れた黄金色の山羊がいた。

正確には山羊のカタチをしたナニカ。

生物よりも、力と意思の固まりという表現がしっくりとくるだろう。

そして、その山羊の姿に気づいたその時から、目の前のニーナの剱量が桁違いに高まっていることにも気づいた。

「それと、これは悪意、でしようか？」

ニーナからセヴアドスに向けられていたのは嫉妬であったが、目の前の山羊のナニカからは明らかにセヴアドスに対する憎悪の感情が向けられていた。

今までの人生において、山羊にそこまで恨まれるようなことをした覚えはなかったセヴアドスだが、向こうはそんなことはお構いなしのようである。

まるで稲妻のようだ、地面を打ち砕いたニーナの一撃を見て、セヴアドスは後方に飛びながら考える。

明らかに今の動きはツエルニの学生武芸者ができるようなものではない見事なものだった。

「ふむ、どういう仕組みはわかりませんが、どうやら貴女の剋技ではなさそうですね」目の前にいるニーナが完全に意識を失っているのを見て判断した。

確かに似たような技を天劍の一人、カルヴァーンが使つてはいたが、明らかにあの山羊は剋技などではなく別物のような気がした。

そもそも力らしきものはセヴアドスには感じられるが、それが剋によるものなのかまでは判断がつかない。

レイフオンでもいれば、何かわかったかもしれないね、とセヴアドスは流れるような動きで、ニーナの猛攻を回避しながら観察を続ける。

動きそのものはニーナ本人のものであるが、出力と破壊力に関しては並みの武芸者の一撃を遙かに越えている。

流石のセヴァドスでも直撃を喰らってしまえば、掠り傷では済まないだろう。

突然起こった危機的状況に、セヴァドスは、歓喜の声を上げる。

「ははは、とりあえずこっちも仕掛けても問題ありませんよね?」

振り下ろされた鉄鞭を右拳で弾き飛ばすと、崩れた体勢のニーナに対し、セヴァドスは左拳を振り抜いた。

振り抜いた拳は、確実にニーナの横腹を捉え、剄技ではなかったが、セヴァドスの必殺の拳は骨を砕き容易にその身体を吹き飛ばす。

手応えはあった。

だが、ニーナは立つだろう、とセヴァドスは確信していた。

「いや、正確には立ったという表現もおかしいですね」

目の前のニーナに、既に意識はない。

まるで操り人形のように後方の山羊に操られているだけだ。

『怨敵ヲ討ツ。 覚悟セヨ』

ニーナの口から発せられた言葉は、ニーナのものではなかった。

怨霊、亡霊、そんな言葉がセヴァドスの頭を駆け巡り、そして一つの答えを導き出し

た。

「なるほど、これが『廃貴族』なのですね」

グレンダンを出るときにアルシエイラ陛下から、セヴァドスはある話を聞かされていた。

滅びた都市の電子精霊が暴走した存在『廃貴族』という存在を。

それはグレンダンが追い求めていたものの一つで、遂に手に入れることができなかつた禁忌の力。

力、そのものである。

「しかし、そうなるとやはり疑問が残りますね」

迫り来る廃貴族の一撃をかわしながら、セヴァドスは考える。

何故、私は廃貴族に恨まれているのだろうか？、と。

セヴァドスは一つの疑問を抱えたまま、戦場を舞い続ける。

廃都市の夜は、まだまだ明けそうにもなかつた。

## 第二十話

振り下ろされた一撃は、セヴァドスを捉えることなく、空を切る。

だが、その一撃は確実に地面を爆発させたかのように抉り、その衝撃により爆風が発する。

当たれば、並みの武芸者なら即戦闘不能。

運が悪ければ命を刈り取るほどの一撃を前にしても、セヴァドスは表情一つ変えることなく、ただいつもの笑みを浮かべていた。

ただその眼差しを捉えるのは、目の前にいる人智を超えた存在。

『廃貴族』

その存在についてセヴァドスが知っていることは、名前だけと言ってもいいほどの情報しか持ち合わせていない。

それがどうすれば、グレンダンに利を齎すのかは、セヴァドスにも解らないことだが、それでも一つだけ言えることがある。

目の前の存在は、セヴァドスを楽しませてくれる存在だ、ということ。

「ふふふ、これは中々奇妙な感覚ですね。汚染獣と戦っているわけでもなく、武芸者

と戦っているわけでもない。まるで未知の生物を相手にしているかのようです」  
廃貴族が操っているのはニーナと言う武芸者だが、その動きは間違いなくニーナの動きの範疇を超えていた。

両腕を砕いても怯むことなく、鉄鞭を握りしめ、こちらに向かって怯むことなく振り続けている。

痛みは感じないのだろうか、先程からこちらは何度かニーナに向けて拳を打ち込んでいるのだが、全くその歩みを止めようとはしない。

むしろニーナの足は早まる一方である。

風を鳴らせ、大地を削るように踏み込む。

廃貴族に憑かれたおかげで、常人離れた加速力を得ることになったニーナは、並みの武芸者では視界に収めることはできないだろう。

だが、対するセヴァドスは並みという言葉で収まるほど、甘い存在ではない。

振り下ろされた廃貴族の必殺の鉄槌に合わせるように、セヴァドスは右拳を迫る鉄塊に向かって振り抜く。

ニーナの左手に握る鉄鞭はセヴァドスの拳により弾かれたため、体勢を崩すことになったニーナだが、その後の彼女の動きは人間よりも動物に近かった。

強引に、それでいて変則的なまでに体を反ったままで、ニーナは右手の鉄鞭を薙ぎ払

う様に地面を滑らせた。

地面を削り、巻き上がる砂煙に、セヴアドスは一瞬視界を遮られることになるが、砂煙の向こうから迫りくる鉄鞭の一撃を、神懸かった反射神経で左拳をぶつけようと、剄を込める。

「む」

だが、次に取ったセヴアドスの行動は、左拳を振り抜くことではなく、両足に剄を流して後方へと飛ぶことだった。

——同時にセヴアドスの鼻先数十センチを廃貴族の振るった鉄鞭が通過する。

鉄鞭はセヴアドスを捉えることなく、空を切つてそのまま地面に叩きつけられ——足場を爆散させた。

セヴアドスを助けたのは、長年の修練の成果による勘であった。

砂煙が上がった際、鉄鞭がバチバチと火花を散らしていた光景に、セヴアドスは天剣の一人であるルイメイが使用していた剄技の一つを思い出し、回避という手段を取ったのだ。

勿論ルイメイに比べると、派手さにかける小規模な爆発ではあったが、それでも人間の頭部を捉えれば間違いなく首から上を吹き飛ばすことは容易だろう。

「今の剄技は貴方のオリジナルですか？」



間違いなく今のは危なかった。

目の前で起こった光景に、歓喜を隠すことができないセヴアドスは、興奮交じりな声で廃貴族に話しかけた。

ニーナの技ではないことから廃貴族の力であるということは理解していた。

廃貴族が使う劉技という、物珍しさにセヴアドスは興味に満ちた視線を向けるが、廃貴族が返答をすることはなかった。

しかし、代わりにと頭上に無数の劉弾を構成させていた。

「劉弾の構成ですか。狂った電子精霊と呼ばれる割には繊細な劉技ですね」  
数にして約三十。

廃貴族の頭上を覆う程の弾幕だが、セヴアドスからしてみれば避けるには容易なものである。

そう——追尾性がなければの話だが。

「威力は鉄鞭一撃分と、活劉と金剛劉を用いれば容易に防ぐことは可能ですが」  
後方に下がりながら追尾してくる劉弾を、セヴアドスは拳で打ち払っていく。

回避も防御も然程問題ではない。

問題は、相手の思い通りに動かされていることだった。

「ちっ！」

劉彈の弾幕の間を隠れるようにして、すり抜けてきた鉄鞭をセヴァドスは咄嗟に後転するように後方へと逃れて距離を取る。

「今のは流石に危なかったですね」

劉彈が切れ、攻勢が止んだかに思えたが、距離を取ったセヴァドスに追撃をかけるように、再び廃貴族の頭上を無数の劉彈が舞う。

その数は六十、先程の倍だ。

しかし、その光景にもセヴァドスは笑みを崩さない。

「ふむ、さつきと同じ技ですか」

廃貴族が指揮棒を振るう様に鉄鞭を振りかざした。

降り注ぐように迫る光弾に、セヴァドスの選択は迎撃であった。

無駄ないセヴァドスの劉息は、一瞬のうちに彼の全身を劉で纏わせた。

外力系衝劉の変化、剛昇弾。

セヴァドスの放った巨大な劉弾は、廃貴族の光弾幕を呑み込むように直進し、そのまま廃貴族すらも捉えんと突き進んでいく。

しかし、当たる寸前のところで廃貴族は上空へと逃げるように飛んだ。

左右のどちらかに飛ばせば、時間差で放たれた二発の剛昇弾に呑みこまれてしまっていただろう。

「ですが、どのみち私の射程距離ですよ」

三発の剛昇弾は——外れるのが前提で放たれていた。

そのことに廃貴族が気づいた時には、既にセヴァドスの左手には白金の弓が握られていた。

剽の矢を引くセヴァドスの全身からは、神々しいまでの剽が溢れ、夜空に浮かぶ月のように輝いていた。

外力系衝剽の変化、五月雨。

廃貴族の放っていた六十を遥かに超える百の剽の矢が、廃貴族に狙いを定めて放たれた。

数による暴力。

廃貴族を得たとはいえ、ニーナの体ではその圧倒的な力には抗うことができなかつた。

数十発はニーナにより弾かれ、外されたが、それでも残る矢は確実にニーナを捉えた。全身に刺すような痛みが走り、鮮血が巻き散る。

空中で撃ち落とされたニーナの体は、そのまま地面へと叩きつけられた。

手応えはあつた、しかし、それでもセヴァドスはまだ終わっていないと、一片の油断もすることなく、ニーナの動きを観察する。

程なくしてセヴァドスの読み通り、ニーナの体はゆっくりと立ち上がった。

廃貴族がとりついたとはいえ、身体自体はニーナのものである。

全身から血が流れ、至るところの骨が骨折をしている死に体だったが、それでも廃貴族の歩みは止まらない。

「全くタフですな。いや宿り主をかまうことにはないということでしょうかね？」

これ以上の戦闘は、ニーナの生死にも関わってくるだろう。

だが、それでもセヴァドスは拳を下ろすことはしない。

先に仕掛けたのは廃貴族の方だった。

廃貴族の放つ衝撃波は地面を抉りながら、セヴァドスに向かって迫る。

それに対し、セヴァドスはその場で足を地面に向かって踏み抜くようにして衝撃を放ち、迫る衝撃の波を相殺させると、一息に廃貴族の懐へと飛び込んで右拳を振り抜く。

その一撃は廃貴族の持つ双鞭によって防がれたが、威力を全て封殺できたわけではない。

後方に押し返されてよろめく廃貴族に向かって、セヴァドスは衝撃を纏った右足を振り抜いた。

外力系衝剄の変化、裂空牙。

斬撃波のような鋭さを秘めた衝剄は、廃貴族の操り人形と化したニーナの頸を刎ねん

とばかりに迫る。

その一撃に廃貴族は、紙一重で身体を剃るようにして必殺の刃をかわすと、そのままセヴァドスに向かって跳ぶ。

「いい判断ですね。その一撃は鉄鞭ごと首を刎ね落とす気で放ちましたから」

セヴァドスは先程の剽技により、一瞬だけ身体の体勢が崩れていたが、それでもセヴァドスの表情からは笑みが消えない。

振り下ろされた鉄鞭を左手で回転しながら打ち払うと、左足を地面に滑らせて、二ノ足の足を刈る。

水面蹴りを受けた二ノナは体勢を立て直そうとするが、既にその横腹にはセヴァドスの右手が添えられていた。

徹し剽。

セヴァドスの掌から流れた剽は、二ノナの腹部に浸透し、そして内臓に衝撃が走った。ゴホツと呻き声を上げ、血を吐きながら後退する二ノナの動きを見ながら、セヴァドスは静かに剽を纏い続けた。

「どうやらいくら宿主にとりついたとしても、動きそのものは宿主の癖通りになるようですね」

廃貴族は、獣じみた動きでセヴァドスを追い詰めようとしていたが、こちらが攻勢を

仕掛けて追い詰めてみれば、廃貴族は回避するためにその体に最も馴染んだ動き——ニーナの動きを行っていた。

実際は、廃貴族はブースターのような役割しか持たず、本体の性能により動きが制限されるといふことだろう。

セヴァドスは既にニーナの動きの呼吸は掴んでいる。

「幾ら力が強まろうとも、動きに早さを得ようとも、理解できればかわすことも容易です」

既に勝敗は決していた。

だが、それでも廃貴族は動くことを——セヴァドスを仕留めようとすることを止めようとしなない。

内力系活剷の変化、旋剷。

爆発的な速度を得て、禍々しい剷を纏ったニーナの鉄鞭は、間違いなく必殺の一撃といつていいだろう。

そのうえ、同時に突き刺さる濃密な殺意は、間違いなく熟練の武芸者ですら怯まえ、動きを止めることもできるかもしれない。

しかし、廃貴族の前に立つのは、グレンダンという化け物の巣窟で武を磨きあげたセヴァドス・ルツケンス。

悲しいことにこれが現実であった。

ニーナの一撃を鼻先を掠めるような紙一重で避けたセヴアドスは、相手が体勢を立て直す前にカウンターの右拳の一撃を繰り出す。

拳はニーナの頬を捉え、後方に廃貴族を退けると、セヴアドスは流れるような動きで右足を振り抜いた。

外力系衝剄の変化、裂空波。

先程放った衝剄の刃である裂空牙と違い、裂空波は広範囲を襲う波である。

膨大な衝剄の波が廃貴族を呑みこみ、後方の地面にニーナの体を叩きつけるだけで収まらず、その勢いでそのボロボロの体を遥か後方へと吹き飛ばした。

外力系衝剄の化鍊変化、粘糸。

セヴアドスの指先から伸びる細い糸が、ニーナの体を絡みとる。

剄により作られた糸は、セヴアドス特製の伸縮自在のゴムのようなものであり、切断は容易ではない代物である。

「さてと、会話は可能ですか？ 陛下のご命令で貴方をこのままグレンダンに持つていこうと思うのですが」

廃貴族の捕獲方法はアルシェイラから聞いている。

実態のない廃貴族本体を捕獲することは、天劍授受者や陛下ですら不可能であるが、

こうして宿主の中に入れてしまえば捕獲することができるのだ。

『……幾千ノ時モ待ツ。 時ガ来ルマデ』

「ふむ、個人的には恨まれる覚えがないのですが？ 確かについ最近レストランで鹿肉を食べた覚えはありますけど」

廃貴族の殺意は本物であり、セヴァドスもそのことだけは本当だと思っていたが、如何せん廃貴族に恨まれた覚えはない。

恐らくこの廃都市の電子精霊だと思いが、この地にゆかりはなんて持っていない。

そもそも、セヴァドスはグレンダンから出たことはなかったので、唯一縁があるとするならばツエルニくらいだろう

『何レ知ルコトニナル。 ソノ時ガ来レバ』

廃貴族は、セヴァドスの疑問に答えることなく——この場から消え去った。

その光景に思わず、セヴァドスは首を傾げる。

「む、消えましたか？ それとも、宿り主の中に入ってしまったんでしようか？」

宿主をコロコロと変えることができるのなら、アルシエイラから教えられた方法は使えないだろう。

それに、ニーナを連れて行ってしまえば、カリアンに酷く怒られてしまうだろう。

「まあ、それは今度話してみましようか。 それよりも今は、彼女をどうしましようか



？」

廃貴族が消えても、まだこの場には、セヴアドスとニーナの二人がいる。まだ、ニーナとの話は終わっていないかった。

.  
. . . . .

夢を見ているようだった。

自分自身が俯瞰的に見え、先程までの激情が消えさつていた。目の前にいるセヴアドスの姿も冷静に見ることができた。

だが、それでも――

「へえ……」

「まだ、だ。私はまだ倒れていない……」

ニーナはまだ眠りにつくことはできなかつた。

武芸者としての誇りか？

しかし、そんなものは先の醜態と先日の汚染獣戦で粉々に砕けていた。

自分が武芸者だと、セヴァドスの前でも言えなかった。

ならば、ニーナ自身を今もこうして立ち上がらせるのは何か？

それはニーナ本人すら理解ができなかった。

「ふむ、凄まじい執念と称賛すべきでしょうか？ それとも、呆れた精神力だと笑った方がいいですか？」

「どちらでもいい……だが、私はお前の前では膝をつかない」

セヴァドスの言葉に、ニーナは動かすのも億劫な口をゆつくりと開いて答えた。

「む、どうやら貴方は私のことが嫌いのようですね」

「嫌いか……ああ確かに好きではないな、だが」

今の自分自身程ではない。とニーナは言葉が続けた。

「なあ、私はどうすればよかったんだ？」

そう漏らしたニーナは自分が情けなかった。

自分がこれほどまでに弱いと実感したからだ。

嘆くニーナの姿を見て——セヴァドスは答えた。

「さあ？ そんなこと私が知るわけないじゃないですか」

ニーナの悩みは、セヴァドスにはどうでもいいことだった。

「人が生きる意味も考えも在り方も、全部その人が決めることです。たとえ惨たらしい死が待っているようにと」

天剣という地位に目が眩み、生き恥を晒すことになったガハルドのように、「こんなはずじゃない結果になろうと」

孤児院の仲間を守ろうとして、結果として故郷を追われたレイフォンのように、

「一度叩き落とされても、再び歩み始めたように」

尊敬するガハルドの本性を知り、レイフォンの事情を知ったゴルネオが自分なりの答えを出したように。

自分の道は自分自身で決めるべきだろう。

そもそも正解も間違いも、所詮は自分の自己満足でしかないのだから。

だから、セヴァドスは我儘で自由気ままに生きたいのだ。

セヴァドスの言葉に満足したのか、ニーナはゆっくりと頷いた。

「そう……かもしれない……な」

「隊長っ!!」

「セヴァッ!!」

ニーナが倒れ尽きたと時を同じくして、レイフォンとゴルネオが現れた。

そんな二人を見てセヴァドスはため息をついた。

「む、やつと来ましたか?」

やつと面倒ごとを押し付けられると、セヴァドスはこの場から速やかに去っていく。

「ちよつ! ま……」

「アルセイフ、放っておけ。それよりアントークの治療が先だ」

レイフオンの呼びかけに答えることなく去ったセヴァドスよりも、大怪我を負っているニーナの方が優先である。

治療の心得のある第五小隊員を探しに行くために走り出したゴルネオに、ニーナを任されたレイフオンは、そのボロボロの体をゆっくりと抱き上げた。

その時である。

閉じられていたニーナの目がゆっくりと開いた。

「レイフオンか……」

「はい、大丈夫ですかっ!」

弱々しいニーナの声に、レイフオンは心配そうに見つめる。

誰よりも力強く眩しかったニーナの姿が、消えそうな蠟燭の火のような弱々しいものへとなっていた。

「私は……無力なんだな……」

「隊長……」

レイフォンには、ニーナを救う言葉は解らなかった。

ニーナの苦悩も、激情や信念も、レイフォンには完全に理解することはできなかつたからだ。

しかし、レイフォンは思った。

「僕はそうは思いません」

だけど、これだけは言わなければならなかった。

「確かに幼生体の大群と戦った時も、老性体と戦った時も力不足を感じていたかもしれませんが」

幼生体の群れを討ち破ったのは、レイフォンとフェリである。

老性二期を退けたのは、レイフォンとセヴァドスだろう。

「ですが、間違いなくツエルニを守ってきたのは先輩達です」

汚染獣から命を救ったと言うことではない。

ツエルニに住む人々の期待を背負い、戦ってきたのはニーナやゴルネオ達だろう。

確かに彼らだけでは、ツエルニを救うことはできなかつただろう。

だが、それでもツエルニのために戦っていたのはニーナ達だ。

守るべきものは命だけではない。

心や誇りも守らなければならぬのだ。

レイフォンは、そのことに気づくことはできなかった。故に失敗をしてしまった。

「ツエルニに住む人は、皆ニーナ先輩のことを応援していました」

無論、危機感の薄いからこそ、試合会場は盛り上がりがあったのだろう。

だが、それでも声援があるということは、ニーナはそんな彼らの力になっていたのだろう。

それはレイフォンにもセヴアードスにもできないことだった。

「それは僕も同じです。だから十七小隊に入りました」

武芸の熱意を失ったレイフォンが、こうして錬金鋼を握っているのもニーナのおかげでもある。

真つ直ぐなまでの熱意に、馬鹿正直な正義感。

それらはレイフォンにはないものだった。

「そうか……」

ならば私の道は、間違いではなかったのだな。

そう漏らしてニーナは再び眠りについた。

その表情は、疲れきってはいたが、何処か重みが抜けた柔らかいものであった。

こうして、二人の悩みは廃都市の夜空へ消えていく。

新たな疑問と問題だけを残して。

翌日、レイフオン達はツエルニに無事帰還した。

## 第二十一話

試合の始まる意味をする音と共に、デイン・デューは戦場を駆けだした。

敵の狙撃手に捕まらぬように、念威操者から報告される情報を聞きながら、慎重かつ迅速に相手の陣へと攻めいる入る。

先頭を切るのは、相棒であり、第十小隊の副隊長を務めるダルシエナ・シエ・マテンナ。

突撃槍を構えて疾走するダルシエナは、ツエル二屈指の破壊力を誇る武芸者である。

そんなダルシエナの後に隊長のデインが続き、そして周囲に三人の小隊員がデイン達二人を守る。

彼らは盾であり、デインは援護と指揮。

そして先頭のダルシエナが、主攻となり標的である相手の旗を折る。

それが第十小隊の——現在の攻撃スタンスであった。

そんな彼らの相手は、勝率で同率三位の第十四小隊。

言ってみれば、この試合は絶対に負けることの許されない試合であった。

勢い果敢にデイン達は、十四小隊の陣へと入ろうとしたその時——ヤツが現れた。



「ふっふっふっ……よくここまでできたな」

倒れた丸太を椅子にして仰々しい言葉を使う男——セヴァドスに構うことなく、  
デインはダルシエナに突撃を命ずる。

外力系衝剄の変化、背浪剄。

背中から発せられた衝剄を推進力とし、そのまま加速したダルシエナは槍を突き出して、セヴァドスに迫る。

迫り来るダルシエナに対し、セヴァドスは右手を翳し、衝剄を放った。

ただ一発の衝剄により、ダルシエナの身体は容易に持ち上がると、そのまま後方へと吹き飛ばされて後方にデイン達の頭上を飛び越える。

地面に叩きつけられて、そのまま動きを止めたダルシエナをデイン達はただ呆然とした様子でみていることしかできなかった。

あつさりどダルシエナを戦闘不能に追い込んだ——セヴァドス・ルツケンスはゆっくりと翳した右手を下ろすと徐にポケットから一枚のカンニングペーパーを取り出した。

「ふむ、やはり口上の途中でしたね。この場合はどういう風にすればいいんでしょうか？　なんといいですか、とても意味不明な言葉が書かれていますので覚えにくいですね」

戦意を微塵に感じさせることもなく、ただ丸太に座っているセヴァドスに対し、デインを除く第十小隊の三人の小隊員が囲むように襲いかかる。

だが、それはまるで無意味であった。

セヴァドスが大きく右手を天へと突き翳すと、その際に生じた衝動により、三人の小隊員は上空へと弾き飛ばされ、そして地面へと叩きつけられた。

「ふむ、これは失敗ですね。仕方ありません、魔王系キャラの練習はこの試合を終わらしてからおこないましょうか」

お遊びは終わりだ、と立ち上がったセヴァドスに、デインは本能的に後方へと下がってしまった。

既にこの場にいるのはセヴァドスとデインの二人だけ。

しかし、第十四小隊員は誰一人脱落をしていなかった。

つまり、ここから劣勢を巻き返す手段は、第十小隊には存在しなかった。

圧倒的で理不尽なまでのセヴァドスの力に、デインは思わず歯を食いしばせる。

——何故、その力が俺になかったのか？

——何故、このようなふざけた者に、天は力を与えたのか？

己の無力さに、そして目の前の者に対し、憎悪を混じらせた嫉妬を抱いたデインの激情は、この場では無意味であった。

強いものが勝つ。

ただそれだけの話である。

こうして、デインは何もすることもできず、ものの数秒でセヴァドスの手により地面へと叩きつけられた。

試合終了のサイレンが鳴り響く。

それは第十四小隊の勝利を、第十小隊の敗北を意味することだった。

・  
・  
・  
・

「いやあ、流石はセヴァちんだね」

賭けに勝ち、ご満悦のミイフィの笑みは止まらないでいた。

そんな彼女の隣で、その行為を苦々しく思うナルキが思わずため息をつく。

「賭け試合とは、ね……」

「都市警察が認める正式な奴だからいいじゃん」

ミイフィの言う通り、小隊戦では大規模な賭けが行われている。

無論、法外的な金額などではなく、生徒達が娯楽感覚で賭けるほどの金額であったが、真面目なナルキが良い顔をするはずがなかった。

「認めてはいない。ただ取り締まっていないだけだ」

顔をしかめるナルキの言う通り、賭け自体は都市警察では取り締まっていない。

全てを取り締まってしまえば、生徒の不満を溜める結果になるということで、キャリアンからも止められていない。

節度を持って行え。

賭けをしていて、何をそんなと言いたくなるが、現状賭け事が大きな問題になることはなかった。

そんなナルキの複雑な心境を気にすることもなく、ミイフィは温かくなつた懐を叩きながら隣を歩くセヴァドスに笑みを向ける。

とても悪い笑みを。

「それはそれで同じじゃん。しかし本当に儲かったね、これもセヴァちゃんのおかげだよ」

「ふふふ、報酬はホールケーキ一個分で構いませんよ」

「ふふふ、お主も悪よの〜」

「ははは、貴方ほどではございませんよ」

コントのような掛け合いを繰り返すセヴァドスとミイファイはとても楽しそうに笑う。だが、そのそばで巻き込まれる形になったナルキからすると、まったく笑えない状況である。

馬鹿二人に対し、ツツコミは一人。

心労の絶えない状況下であった。

しかし、そんなナルキ以上に不運だったのが、今日の試合相手の第十小隊の面々でだろう。

「まったく……相手の小隊が不運だな」

「まあ、セヴァちゃんは一部で有名だったけど、レイとんの知名度には負けているからね」

戦慄デビューを果たしたレイフォンに対し、知名度は劣るセヴァドスだったが、実力は伯仲だということはミイファイ達は知っていた。

何より、セヴァドスはレイフォンと違い、最初から完全に相手を倒す気でいたため、レイフォンのようなハンディは抱えていない。

故に第十小隊は、開始三分でセヴァードスと遭遇し、そして遭遇から十秒ほどで敗北したのだった。

その光景は、ナルキにとって——いや武芸者にとって許容できない理不尽な光景に見えた。

絶対的な力、それがセヴァードス・ルツケンズの姿だった。

「新たな新鋭現るっ!! って、週刊ルツクン、売れるわよ〜」

「ミイちゃん、嬉しそう……」

そんな悩みは、一般人であるミイフィとメイシエンには無縁なもので、特にミイフィに至っては、完全にこの状況を楽しんでいた。

有り金全部をセヴァードスのいる第十四小隊にかけるのはどうかと思うが、それはミイフィのセヴァードスへと信頼と言ってもいい。

無論、強さへの信頼もあるが、友人への信頼もある。

だからこそ、ミイフィは全賭けを行い、ナルキはそれを止めようとはしなかった。

そう考えると少しだけ重荷が軽くなった気がしたナルキは、一つ気になっていることを尋ねることにした。

「しかし、セヴァ。お前はずっと第十四小隊にいるのか？」

「そうですね。隊長のシンさんが中々愉快な方ですから、退屈はしないですね。」

もう少しお世話になろうかと」

そう言つて笑うセヴァドスに、ナルキも思わず頷いてしまう。

確かに第十四小隊は、小隊特有の重々しい空気はない。

メンバー全員がのびのびと生き生きとしている唯一の小隊と言つてよかつた。

特に隊長であるシンは、中々愉快な方だとセヴァドスに気に入られた程のものであつた。

「とういことはいつかは辞める気か。他の武芸科の人間が聞いたら怒り狂いそうな話だな」

「そうですね？　確かにシンさん達と訓練するのは悪くはないですが、こうしてナルキさん達といつしよにいるのも楽しいですからね」

「……それはどうも」

小隊という名誉を簡単に手に入れ、そして簡単に捨てるセヴァドスの姿は、ツエルニの武芸者たちにとつて怒りを覚えるかもしれない。

だが、こうも嬉しいことを言ってくれるのは、実に友達甲斐のある奴だと、ナルキは思つた。

「しかし、メイさん、メイさん」

「えっと、どうしたの……セヴァくん？」

そんなナルキの考えを知るよしもなく、セヴァドスはミイフィの後ろを歩くメイシエンに話しかけた。

「レイフォンが来れなくて残念でしたね」

「ふあつ!!」

セヴァドスの興味の矛先を向けられた哀れな羊であるメイシエンが、上手く反撃もできず、想定通りの反応を見せた。

顔を赤く染める愛らしい姿に、ファンを抱えるほどのメイシエンだが、現時点で彼女と話せる男はツエルニにおいて二人しかいなかった。

そしてその一人がこのセヴァドスというのは、本当に悲しい話であった。

メイシエンの反応を楽しんでいるセヴァドスから、姫を救うべく騎士であるナルキが助け船を出す。

「あんまりからかうなよ、セヴァ」

「これは失礼しました。しかし関係を発展させるには攻めの一手も必要ですよ」

ニヤニヤと笑うセヴァドスの言葉に、メイシエンは顔をリングゴのように真っ赤に染める。

「か、関係……」

まるで湯気が出そうなくらいに顔を真っ赤に染めるメイシエンの足元がふらつき始



めると、ナルキが慌ててその肩を支えた。

「おい、メイ大丈夫か？ 本当に顔が真っ赤だぞ?!」

「けど、セヴァちゃんの言う通りかもね。 実際、レイとんは凄まじく鈍感だし」

メイシエンを支えるのをナルキに任せ、冷静に分析するミイファイの言う通り、レイフォンの女性に対する鈍感ぶりは病氣と言つていいほどであった。

そのことについては自称親友であるセヴァドスも心配に思つていた。

「そうですね、昔から彼はそういうところがありましたね」

「あー、やっぱりそうなんだ」

「はい、ある女の子からナイフを振りかざされるほどでした」

「刃傷沙汰?!」

ある女性とは、セヴァドスの友人であるクラリーベルのことであり、彼女自身も変わり者であったが、ある意味セヴァドスが言っていることも間違いではなかった。

真実ではなく、事の表向きだけを聞いたナルキは動揺を隠せない様子で言葉を続ける。

「つ、つまりは、レイフォンはモテるといふことだな」

「そういうことです。 ですからライバルが増える前に決着をつけるべきかと」

「なるほど、兵は神速を尊ぶっていうからな」

恋は戦争そのもの。

愛憎トライアングルで学んだセヴァドスの恋愛学が次なる一手を導き出していた。

「はい、ですから私は、レイフォンを落とすには色仕掛けを仕掛けるべきかと愚考します」

「色っ?!」

「おい、セヴァ。いきなり何を言っているんだ?」

「そう、セヴァちゃん——貴方もその結論に至ったんだね」

少し顔を赤くするナルキと対照的に、ミイフィの目は真剣そのもので笑み一つ浮かべることにはなかった。

そんなミイフィに釣られて、セヴァドスは笑みを消して、珍しいほどに真剣な眼差しで答える。

「ええ、性欲を刺激しましょう」

「人の三大欲求である食欲、睡眠欲に続く、性欲を攻めるんだね?」

「はい、レイフォンを落とすには性欲を刺激するしか方法はありません」  
妙に真剣な二人だったが、話している内容は最低だった。

寧ろ真剣なのがシュール過ぎて、笑えてくるほどである。

だが。それは第三者の話で、自分のことであるメイシエンは、今にも倒れそうなほど

にフラフラと身体が揺れており、武芸者らしい潔癖感のあるナルキの表情はだんだんと顔を林檎の如く真っ赤にさせていく。

「なるほどね、確かに理にはかなっているわ。いくら鈍感とはいえレイとんも男の子。故に性欲攻めを行うというわけね」

「ええ、性欲…「お前らさつきから性欲言いすぎだろっ!!!」

そんな下世話なキャッチボールを遮ったのは、遂に我慢の限界に達したナルキであったが、その声は間違いないく辺りに響き渡った。

そのことに気付いた時は既に遅し、ナルキに向かって無数の視線が突き刺さるよう飛んで来る。

視線を感じたナルキは、一瞬気遅れしてしまうように口を閉ざす。

「その……ナルキさん。 そんな大声で『性欲』って叫ぶのはどうかと思うな……」

「ナルキさんも女の子なんですから、恥じらいを持った方がいいですよ?」

ナルキから微妙に離れた位置で、他人事のようにこちらに視線を向けるセヴァドストミイフィに、ナルキは大声で叫んだ。

「だあああああつ!! それは私の台詞だよつ!! あとミイ、何でお前は私に対してさんづけしてんだよつ!! それにセヴァ、それこそ私がお前達に言いたいよつ!!」

「ナ、ナツキ……」

「ふむ、怒らせてしまいましたね」

「まあ、普通に考えたら怒るよね」

凄まじいほどの怒りを発するナルキに、メイシエンは少しだけ怯えと同情の視線を、セヴァドスとミイフィは呑気にいつの間にか購入していたアイスクリームを食べていた。

「はあはあはあ……」

「ごめんって、少しセヴァちゃんと二人で遊んでただけだよ」

少しだけ落ち着いてきたナルキに、ミイフィは買っていたアイスクリームを手渡す。

それを心底疲れた表情で受け取ったナルキは、ゆっくりとした手つきでアイスクリームを口へと運ぶ。

「もういい……しかし、セヴァ、お前ってそんなこという人間だったか？」

「ふふふ、それはあまりに甘い考えというものですよナルキさん。私は常に進化を

続けます……この『愛憎トライアングル3』とともにっ!!」

ナルキの言葉に、セヴァドスは自信に満ちた表情で懐から取り出した愛用書を天へと翳した。

「それは進化じゃないだろっ!! ってことはミイのせいだっ!!」

「ぐはっ!!」

怒りのあまりにナルキは手渡されたアイスクリームをミイフィの顔面にぶつけた。

そんな二人を呑気に眺めていたセヴアドスはアイスクリームを食べながら一言。

「とうわけでどうでしょうか、メイさん？」

「ここで私に振るの?!」

セヴアドスのあまりの無茶ぶりに、メイシエンは人生の中でも五指に入る大声を上げた。

愉快で痛快な日常。

それがセヴアドスの日常であり、グレンダンだろうとツエルニだろうとそれだけは変わらなかった。

だが、ツエルニでは新たな事件が起ころうとしていた。

・  
・  
・  
・

「んー、思った以上に楽しめなかったな」

ここはツエルニから遠く離れた地、グレンダン。

セヴァドスとレイフオンの故郷であり、最強都市と呼ばれる武芸都市である。

その都市の頂点に立つ女王から剣を与えられし十二人の天劍授受者の一、サヴァリス・クオルラフィン・ルツケンスは、余りの退屈さのため息一つ落として、目の前の残骸を一瞥する。

拳程度の肉塊、それがガハルド・バーレンの末路の姿であった。

ミクロサイズの老性体討伐のために、その触媒という名の生け贄とされたガハルドは、その身を人外と化し、唯一残った憎悪の感情と共にレイフオンの育った孤児院を襲ったものの、同門であるサヴァリスの手により、その一生を終えた。

そんな彼に対し、サヴァリスが思うことは一つもない。

強ければ生き、弱ければ死ぬ。

この世界ではありふれたことであり、ありふれた出来事であった。

故に、サヴァリスが今考えているのはガハルドという敗北者のことではなく、遠く離れた地に行ってしまった末の弟のことであった。

「セヴァがいなくなつて絡む相手がいなくなつたかな？ 陛下もリンテンスさんも全

然乗つてこないし、こうなるとリヴァースさんにもちよつかいを出して、カウンティアさんとやりあつてみようかな？」

最も気の合う相手である弟のセヴァドスがいけないことは、サヴァリスにとって落胆すべきことだった。

ガハルドのような紛い物ではなく、セヴァドスは間違いなく本物の武芸者であり、少ない拳を交えることができる存在だった。

だからこそ、サヴァリスは貴重な相手がいなくなったことに肩を落として落ち込むほどであった。

「それとも、僕もツエルニに行ってみようかな？ 向こうにはセヴァの他にもレイフォンもいることだし、もしかすると放浪バスを汚染獣とかが襲ってくれるかもしれないしね」

逆転の発想だ、とグレンダンからいなくなったセヴァドスとレイフォンを追いかけるのも面白いと考えた。

向こうでも確実に遊び相手が二人もいる上、グレンダンのように邪魔が入ることなく戦えるはずだ。

他にもゴルネオもいることだし、久々に鍛えてみてもいいかもしれないと考えたサヴァリスの背後に何かが着地した音が聞こえた。

「貴方は、さつきから何を言っているんですか？」

心底呆れたようにそう言ったのは、天剣の一人であるカナリスであった。

殺戮の名手であるカナリスに背後を取られたサヴァリスは、思わず顔をにやけてしま  
う。

「おや、珍しいですね、カナリスさん。もしかして僕に用事ですか？」

「不本意ながら、陛下がお呼びです」

楽しそうなサヴァリスとは対照的に、カナリスの反応は至って冷静であった。

勿論、カナリス本人が同僚のサヴァリスと仲良く挨拶を交わす仲ではないこともそう  
だが、今は陛下の命を優先すべきことだったため、カナリスはさつさとサヴァリスを連  
れていきたかった。

だが、サヴァリスはそんなカナリスの心境すら楽しんでいるのか、その場から動こう  
としない。

「陛下が？ 面白い話だと嬉しいんですけどね」

「無駄口を叩いてないで、早く行きなさい」

再度カナリスが警告紛いに伝えると、サヴァリスはようやく動き出した。

そしてその場から立ち去ろうとしたサヴァリスだったが、何か思い出したかのように  
カナリスに声をかけた。

「はいはい、つてそうだ。一つカナリスさんに聞いておきたいことがあったんです」

「何ですか？」



普段ならセヴァアリスの質問に答える気はないカナリスだが、現状、セヴァアリスがごねる時間すら惜しかった。

振りかえったカナリスにセヴァアリスは口を開く。

「——セヴァを見てどう思いました？」

「——貴方よりも素直でいい子だと思っっていますよ」

カナリスはセヴァアリスの問いかけに、交じりつ気のない本心で話す。

セヴァアリスは、セヴァアリスと同じく戦闘狂であるが、兄とは違い純粹さがあるセヴァアリスの方がカナリスは好ましく思っていた。

実際、自分を慕ってくれるセヴァアリスを、カナリスが気にかけているというのは嘘ではない。

しかし、そんなカナリスの答えはセヴァアリスの求めているものではなかったようで、首を傾げるセヴァアリスはもう一度口を開いた。

「ふむ、これは聞き方が悪かったようですね」

——セヴァアリス・ルッケンスはどう見えましたか？

その言葉にカナリスは、ようやくセヴァアリスの真意が理解できた。

それはセヴァアリスという存在の意味を指していた。

「——そうですね。はつきり言っただけで異常だと思えます」

「なるほどね。何故そうだと?」

「あの若さでという意味もありますが、そのこと自体はグレンダンでは珍しくありません」

実際に、カナリスは十七で、サヴァリスは今のセヴァドスと同じ年齢である十五歳で天剣を授かっている。

何よりレイフォンという歴代最年少で天剣を授かった天才もいる。

だが、それでもカナリスはセヴァドスを異常と言った。

そして、その答えは正解に近いものであった。

「まあ、その評価は正しいかな? 実際、セヴァはルツケンス史上最高の素質を

持っていると思うし」

「確かにそうかもしれませんが。あのレイフォンと争った最後の天剣の授受戦は見

事なものでした」

それは五年前の話であり、グレンダンでも歴史上初めてとなる十歳と十歳の武芸者による激闘。

試合時間は過去の天剣授受戦にて最長となる二時間。

それほどまでにセヴァドスとレイフォンの力は均衡していた。

「観客が総立ちになった死闘の末、勝ったのはレイフォンだったよ」

「どちらが天剣を得てもおかしくないほど、実力は伯仲でした」  
勝敗が別れた要因はサヴァリス達にも解らないほどであった。

もし何が左右したかと言えば、まさしく天が味方したのがレイフォンだったということだろう。

「そうだね。もしもあの時セヴァが勝つていれば、ルッケンスは二本の天剣を得る快挙になっていただろうね」

「——その割にはどうでもよさそうに話しますね」

セヴァドスが天剣を手に入れていたら、サヴァリスにとって最高の遊び相手を得ることになっていたはずだが、当のサヴァリス本人の反応は至って冷静であり、冷淡な一言であった。

そんなサヴァリスの反応にカナリスが不審な者を見るような眼を向けると、サヴァリスは苦笑いを溢す。

「僕は大歓迎だったんだけどね、親父殿は間違いなく反対するだろうね」

「何故です？ 天剣を二本を得るということはルッケンスにとって榮譽なことでは？」

天剣を同じ武門が同時に二本得たことは今までかつてない。

そもそも天剣級の人間が、同じ武門に、そして同じ時代に生まれたことはそうそう無

い話である。

だが、その榮譽すらルッケンスの現当主は望んでいなかった。

カナリスには、理由は分からなかったが、サヴァリスの様子からして何かあるに違いなかった。

そして、考えた末に一つ思い出したことがある。

「そう言えば、貴方の母上であるルマリア殿は……」

カナリスの脳裏に浮かぶのは、約十五年前に起きた悲劇である。

サヴァリスの生みの親であり、セヴァドスを生んでこの世を去った天才武芸者——  
ルマリア・ルッケンスのことである。

天剣を得ること間違いないと言われた武芸者は、武芸よりも家庭をとった規格外の人物。

カナリスも幼い頃に、敬意を払った人物の一人である。

「ははは、まったく、母上は凄まじい忘れ形見を産み落としたものだ」

「どういふことですか？」

サヴァリスの含みのある笑みに、カナリスは眉をひそめて答える。

「さあ？　ただ少し話し過ぎたようだね」

サヴァリスはカナリスの問いに答えることなく、その場から去っていく。

王宮の方へと飛んでいくサヴァリスの後ろ姿に、カナリスは少し嫌な予感を感じていた。

「少し調べてみますか……」

グレンダンのために、すべきことを。

真面目な天剣授受者は、都市のことを思い、敬愛する陛下のことを思い、可愛い弟分のことを心配しながらカナリスは、この場を後にした。

## 第二十二話

「つたく……本当に、無茶ばかりする隊長さんだぜ」

窓から差し込む夕日を背にシャーニッド・エリプトンは、この病室の住人であり、未だに眠り続けるニーナ・アントークを前にして呆れたように呟いた。

廃都市探索から数日。

それまでニーナは一度も目を覚ますことなく、死んだように眠り続けていた。

何故このようなことになったかなんてもんは、シャーニッドは勿論、その現場に駆けつけていたレイフォンやゴルネオすらも知らない。

そこで起こった事を知っているのは、眠り続けるニーナと対峙したセヴァドスだけが知っていた。

セヴァドスいわく、ニーナは廃貴族という力に魅入られたらしい。

廃貴族というものが何かは、シャーニッドが知るはずもなく、ただ理解していることはニーナが悩み苦しみ続け、そしてその結末がこの姿になってしまったということだ。

この結末は誰の責任なのか？

ニーナに嫉妬を抱かせたレイフォンか？

それとも、その嫉妬を燃えあがらせたセヴァドスのせいとか？

もしくは、生き急ぎすぎたニーナの自業自得か？

そして——そんな彼女を止めることもできず、ただ傍観者にすらなれなかったシャーニツドのせいとか？

しかしそれら全ては既に過ぎ去った後、ここで何を考えようとも既に終わってしまったことである。

故にこの葛藤には意味はないだろう。

だが、シャーニツドは思うのだ。

そんな過去に縛られるのが人間というものなのだろう、と。

「まあ、武芸者なら、焦っちゃまうよな」

ニーナの気持ちは、シャーニツドには少なからず理解できた。

レイフォンとセヴァドスという存在は、間違ひなくツエルニの希望の光であり、そして同時にツエルニの武芸者に対する毒であった。

鉱山が一つしかなく、既に後のないツエルニの武芸者にとって、その力とは最も欲するだろう。

そんな多くの武芸者達の一人がニーナというわけである。

彼女の真つ直ぐ過ぎる思いが、今回のような結末を生んでしまったと言える。

「負けたら終わり、か」

シャーニツドには、ニーナのような熱い武芸者の誇りを持ち合わせていない。だが、それでもシャーニツドの胸には、あの時の誓いという名の焔を宿している。親友と愛した人と誓ったあの日の約束。

あの時誓った約束全てを果たすことはもうできないだろう。

しかし、それでもシャーニツドにはまだ戦う手段があつた。

まだ、果たすべきことがあつた。

「まあ、隊長さん。少しの間、これを借りておくぜ」

シャーニツドは、ニーナの錬金鋼の一本を借り受けると、その場から背を向ける。

ニーナは何れ目を覚ますだろう。

その時、いつまでも不甲斐ない恰好をしているわけにはいかない。

先輩として、仲間として、そして一人の男として。

戦う覚悟は既にできた。

過去を乗り越え、未来へ踏み出す決意。

それらを胸にシャーニツドは病院を後にした。

後日、シャーニツドの元へ生徒会長からの辞令が下される。

『シャーニツド・エリプトン。第十七小隊の隊長代理に命ずる』



・  
・  
・  
・

第十四小隊戦後、デイン・デイーはある目的を果たす為に、ツエルニの夜を歩いていった。

時々すれ違う人に、顔を会わせることなく、ただ真つ直ぐに目的地へと向かう。

デイン・デイーには誓いがあった。

ツエルニを守るということを。

武芸大会に勝ち、ツエルニを去った恩人の願いを叶えるということだ。

しかし、その誓いは案外簡単に果たされることになるかもしれない。

レイフォン・アルセイフとセヴァドス・ルッケンスという二人の怪物の手によって。

カリアンは言った。

これがツエルニを守るための最善策だ、と。

そんな彼に対し、デインはふぎけるな、と大声で叫びたかった。

確かに都市を守るための選択としては最良の判断と言えるだろう。

都市を統べるものとしての判断としては正しいことこの上ないだろう。

しかし、ならば今まで血が滲むような努力と血反吐を吐くような思いをしてきた者達はどうなる？

ツエルニをこの危機的状況までに追い込んでしまった自分達に、その言葉を吐くことは許されないかもしれないが、それでも涙を吞んで去っていった先達者達の想いも誓いを踏みこじめるようなことは許すことができない。

都市への思いもなく、ただ情性的に武芸を続ける男と、本能が赴くままに暴れる無法者なんぞに、この尊き誓いを潰させるわけにはいかなかった。

「そうだつ……だから俺は」

デインはその誓いを守らなければならない。

一人は既にその誓いを忘れ、隊を離れてしまった。

だからこそ、デインは止まるわけにはいかなかった。

「デイン……」

背後から呼び掛けられた声に、デインの足が止まる。

その声はデインのよく知っている声で、そしてこの場では一番聞きたくなかった声であつた。

デインが振り返ると、そこには彼女がいた。

「……シエーナ」

ダルシエナ・シエ・マテンナ。

デインの相棒であり、苦楽を共にした一番の理解者。

そんな彼女だからこそ、今のデインの姿を見せたくなかつた。

言葉が続かないデインのかわりに、視線を落としたダルシエナが口を開く。

「何をしているんだ？」

「……気分転換だ。先の試合を引き摺るわけにはいかないからな」

思わず出た言葉は、自分自身でも笑えてくるほどのバレバレの嘘。

それでもデインは隠さなければならなかつた。

これから自分が行おうとする行為は決して誉められることではなく、彼女を汚してしまふからだ。

「嘘だな。お前が嘘をつく時は少しだけ言葉を詰まらせる。アイツと違つてお前

は嘘をつけないからな」

だが、デインの努力も空しく、既にダルシエナは気づいていた。いや、気づいてしまっただろう。

彼女は彼をずっと見ていたんだから。

「小隊員に配っていた薬はなんだ？」

「栄養剤だ。連戦になるからな。少しでも体を回復させておかなければならない」

デインは苦しい嘘をつく。

本当に栄養剤ならば、間違いなくチームで一番疲労するダルシエナに渡しているはずである。

無意識のうちに目を逸らしたデインに、ダルシエナは一步一步近づいてくる。

「なあデイン、私達の付き合いも長くなったものだ」

「ああ、そうだな」

「だからわかるんだよ。私がお前の変化を見逃すことなんてない」

「……そうか」

ダルシエナは気づいていた。

あの日、三人が二人になった日からチームの勢いが低下していることを。

それでも勝ち進めてきたのは、デインの作戦と戦術でどうにかやってきたからだ。

だが、先日遂にその限界を見せてしまった。

たった一人の化け物を前にして、凡人による戦術なんてものは意味をなさないということ。

第十小隊としての限界地点が見えてしまった。

「あれ、違法酒なんだろう？ 昔、故郷でその売買を取り締まった時に見たことがある」

「……そうだ。俺は武者として最低のことをしている」

だからこそ、デインは決して触れてはいけないものに手を伸ばしてしまった。

自分がすることが、あの時の誓いを汚すことになるかもしれないことも気づいている。

だが、それでもデインは誓いを叶えたかった。

「だが、それでも俺はっ！」

「デイン……」

デインの叫ぶその姿は、今までダルシエナが見てきたデインの姿の中で一番弱々しく小さく見えた。

誰よりも隊のためを考えて戦ってきたデイン。

そんな彼にダルシエナは助けられてきた。

だからこそ――

「頼む。今日のごことは忘れてくれないか？」

——この場を見逃すことはできなかった。

「忘れることなんてできないよ」

——忘れることなんてできるはずがなかった。

「私達は仲間だ。そうだろ、デイン」

ましてや、愛している人を見捨てることなど——ダルシエナには到底できることではなかった。

「シエーナ？」

「私も罪を被ろう。 思いを背負おう。 誓いをたてた時のように」

ダルシエナには誇りがあった。

いつか故郷で立派な騎士になりたい、と。

しかし、ダルシエナはツエルニで友や仲間と出会ったことで新たな誓いができた。

その誓いは、誇りよりもダルシエナの中で尊きものとなっていた。

ダルシエナとデインと覚悟を決めたその日。

同じツエルニの夜の下でこんなやり取りが行われていた。

「はあ、全くこんな奴らにいいように使われるなんてさー」

『それはお前のせいだ』

目の前に倒れ伏せた男達を前にして、自身の赤髪のをガリガリと掻く少年——ハイア・ライアは自身の迂闊さを仲間の念威操者にたしなめられていた。

ハイア達が受け持った仕事、それは多くの移動都市でも禁じられている違法酒ディジーの移送であつた。

普段なら、ハイア達サリンバン教導団は受けることもないのだが、前の仕事をしくじつたせいで資金難から目先の仕事に飛び付いてしまったからだ。

ゆえに事実を知り、契約料を頂いた段階で男達との付き合いは終了である。

彼らも用心棒として武芸者を揃えていたつもりだが、百戦錬磨の武芸者達がいるサリンバン教導団の敵ではなかつた。

サリンバン教導団の長を務め、団員内でも屈指の実力であるハイアの手により、こうして打ち倒されてしまっている。

圧倒的なまでの力の差を見せつけられた武芸者達は、全く動かなくなった身体と朦朧とする意識の中でただ恐怖を覚えていた。

しかし、当の本人であるハイアは、サリンバン教導団NO. 2であり、団全員の支援を行うことができる念威操者であるフェルマウスに呆れられてしまっていた

そんなフェルマウスの反応に対し、ハイアは頬を膨らませるといふ幼い仕草で誤魔化す。

「はあー俺たちが迂闊だった、そう言いたいんだらう？」

『わかっているなら、もう少し自重をするべきだ』

「わかっているさー、それにこういうセコい仕事もこれつきりさー、どうやら俺たちにも運が回ってきたようだし」

『廃貴族のことか？』

こうして騙されて受けてしまった仕事であったが、唯一良かったといえれば教導団が探し求めていた目標を見つけることができた。

廃貴族。

先代以前からも探してはいたが、まさかこんな場所で出会うことになるとは思ってい



なかった。

「日頃の行いがよかったのさー、しかも場所も学園都市、楽勝さー」

先日、このツエルニの調査隊が廃都市で探索を行った情報は既に得ている。

危機感のない学園都市なら、フェルマウスが念威を飛ばせば、その程度の情報を得ることは容易である。

最高にやり易い環境。

他の都市なら権力者や腕立ちの武芸者がいるため、これからハイア達が行うだろう行動の妨害をしてくるだろう。

上機嫌に口笛を鳴らすハイアの余裕の満ちた表情を見て、フェルマウスは苦言を飛ばす。

『ならば知っているか？ この地にはグレンダンの剣が二本あることを』

グレンダンの剣——その言葉が指すことは、二人の武芸者のことを意味しており、この学園都市で廃貴族の情報を得た際に同時に耳に入った情報であった。

そして、彼らの噂はグレンダンの地に訪れたこともないハイアですら耳にはしていません。

「剣、ねえ……元・天劍授受者と名家のボンボンのことだろ？ 寧ろ丁度いい、土産が

一つ増えるだけさー」

最年少天劍授受者と名門ルツケンスの子息。

誰もがその名を聞いた時には、感嘆の声や悲鳴を上げてしまうものだが、ハイアはたしいたことではないと言わんばかりに言葉を吐き捨てた。

だが、その表情に浮かぶ不満の色を消すことはできず、年齢相応の表情を見せたハイアに対し、フェルマウスは至って冷静に諭すように声をかける。

『油断をするなハイア。相手は、歴代最年少で天劍を得たの天才と天劍に最も近い男だ。サリンバン教導団団長であるお前でも一方だけで手に余る存在だ』

「それはこつちの台詞さフェルマウス。戦つてもいないのに尻尾巻いて逃げるのは負け犬がすることさー」

フェルマウスの言葉を遮るのはハイアの自信に満ちた声である。

この荒れ果てた大地を転々とし、様々な戦場と死地を潜り抜けてきたハイアは間違いなく一流の武芸者であった。

その経験がハイアの自信へと繋がっていた。

そして、ハイアの言っていることは強ち間違いでない。

相手の強さだけを聞いて、戦おうとしない武芸者は既に武芸者ではない。ただの臆病者である。

「俺達は獵犬。牙の抜けたふぬけた狼と血統犬に負けるはずがないさ」

才能だけの人間に、何度も死線を潜り抜けてきた自分が負けるはずがない。名家に生まれた人間に、泥水を被って生きてきた自分が負けるはずがない。

驕りとも油断とも取れる発言だが、ハイアにはその大言を吐くだけの力があり、その力はフェルマウスも認めている。

『そうか。ならば、証明してみるといい』

「ん？へえ……これは幸先がいいさ」

フェルマウスの言葉にハイアが振り返ると、そこには月光に照らされた剣士が一人。自身の肌を刺すような圧倒的な存在感に、ハイアは思わず口元を釣り上げる。

レイフォン・アルセイフ。

グレンダンで名誉ある地位と最強の剣を授かり、そして全てを失い故郷を追われた者であった。

・  
・  
・  
・

「動くな」

都市警察の仕事を受けて、密売者の後を追っていたレイフオンは血の臭いを嗅ぎ付けて、現場に急行する。

現場に辿り着き、そこにいた一人の若い男だった。

だが、その立ち振舞い、そして隙だらけに見えるが、一片の油断のないその姿にレイフオンはの鋭い声をかける。

レイフオンの言葉に釣られるように、振り返った男も腰の剣帯に差さった——鋼鉄錬金鋼に手をかける。

男の持っていたのは、剣ではなく刀。

珍しく、そして苦い想いのある武器に、レイフオンは油断なく青石錬金鋼を構える。と、相手からは殺気と闘気が混じりあったソレが鼻の奥を刺激するように突き刺さる。

「そう言われると動きたくなるさー」

次の瞬間——金属の弾けた音と火花が夜空に散る。

振るわれた刃の剣筋は互いに類似していた。

ただ両者の手に握られていたのは、剣と刀という大きな相違点が存在していた。

刀に振るわれた時の癖。

それらはレイフオンも覚えがあった。

内力系活剷の変化、旋剷。

青い剄を発したレイフオンの踏み込みからの一撃をかわすように、男は後方に下がりをしながら剄を溜める。

外力系衝剄の変化、渦剄。

体を回転させたハイアを起点に、衝剄がレイフオンに襲いかかる。

迫り来る衝剄の波をレイフオンは一振り縦に切り裂くと、再び爆発的な加速でハイアに向かって斬り込む。

「ふっ!!」

「惜しいや!!」

レイフオンに一撃はハイアの刀により防がれて、レイフオンはその場で、ハイアは弾き飛ばされて後方に滑りながら距離を取る。

再び攻めようとしたレイフオンに向かって、ハイアは刀を振るって牽制の衝剄が放つ。

足場であった建物の屋根の部分を削りながら迫り来る衝剄の刃に、レイフオンは横へと逃れるようにして回避すると剣を口にくわえて、空いた両手に剄を宿す。

外力系衝剄の変化、九乃。

両手から放たれた剄の弾丸はハイアに照準が向けられた。

迫りくる十の弾丸をハイアは、一発も当たることなく全て叩き落とした。

「はは、流石にいい動きさー、天劍授受者」

「っ！ グレンダンの者か？」

ハイアの言葉に一瞬だけ動揺したレイフォンだったが、平静を装いながらハイアに視線を向ける。

「そ、厳密には俺たちは違うんだけど、サリンバン教導団って知っているか？」

「……グレンダンの名を広めたと言われる流浪の集団のことか？」

グレンダンは、元々から武芸の都市であり、都市のあり方もかわりはない。

だが、基本的に有能な武芸者は理由でもない限り都市の外へと出ることはない。

ゆえに、グレンダンは数ある武芸都市の一つという認識でしかなかったが、数十年前に数ある移動都市でその武を示し続けていた集団がいた。

それが、サリンバン教導団であり、グレンダンを武芸の最高峰の地として名を売ったのは彼らである。

「流浪、ね……まあ、確かにそうさー。しかし、その実態は陛下の命の元ということ

は知らないだろう、天劍授受者」

「さつきから天劍授受者と言ってるけど、僕はもう天劍を持っていない」

「知っているさ。天劍を手放した阿呆ってことくらい」

「……未練はないよ。けど、お前ごときが語るほど軽くはない」

「はっ、噂通りのムカつくやつさ」

挑発を繰り返す男の表情は余裕に満ちてはいるが、常にこっちの動きに警戒し、そして反応すべくこちらを観察する。

その立ち振舞いに、レイフォンは頭の中にあつた考えを確信した。

「……サイハーデン刀争術か」

「そうさ。知らなかったのか？ サリンバン教導団の前団長はお前の師父の兄弟弟子さ」

男から与えられた情報は、レイフォンには初耳だった。

そもそもサリンバン教導団の情報を、レイフォンは多く知っているわけではなかった。

前団長がサイハーデン刀争術の使い手するとなら、目の前の男は——

「そう言えば名乗っていなかったさ。俺の名前はハイア、サリンバン教導団団長を務め、アンタを倒す男さ」

男——ハイアは不敵な眼差しを浮かべたまま、刃をこちらに向ける。

遠い地で二人の担い手はこの夜に出会ったのだった。

## 第二十三話

「こんにちわ」

「帰れ」

授業が終わり、学生達が放課後の街へと向かう中、セヴアドスは一人で、錬金科の研究室の一室を訪れていた。

そんな突然の来訪者に、部屋の主の一人であるキリクは、不機嫌を隠すこともしない表情でドアを閉めようとしたが、一瞬のうちに手を滑りこまされたセヴアドスにより、無情にもドアは再び開かれた。

「おおー、書物がいっぱいですね。む？ これは研究書……ですか？ 『多重錬金鋼複合理論』……ふむ、興味があるので貰っても大丈夫ですか？」

「人の話を聞け。おいハーレイ、こいつはお前の客だろ？」

「えっと、僕の客というわけではないんだけど……とりあえずその本は置いてくれる？ 一応、それ僕達の研究成果だから」

キリクの脇をすり抜けて、ずかずかと研究室に押し入るセヴアドスに対し、ハーレイは呆れた表情で押し止めた。



そんなハーレイの言葉にセヴァドスは残念そうに研究書を置いた。

「なるほど、残念です。む、こちらは試作の錬金鋼ですね？ 試してみたいですか？」

「おいつ!!」

「ちよつ、僕に怒鳴らないでよつ!! 基本的にこの子つて人の話を聞かないんだから！」

素直に研究書を諦めたセヴァドスだったが、既に興味は作業台の上に置かれた試作中の錬金鋼に向かっており、そんな彼を見て、キリクが普段では想像できないほどの怒鳴り声を上げてハーレイを睨みつける。

完全に八つ当たりであったが、それでもハーレイは何とかセヴァドスの前から錬金鋼を回収して奥の棚へと片付けた。

ハーレイはセヴァドスを大人しくする為に、冷蔵庫に取つてあつたケーキ（ハーレイの分）とドリנק、あと彼の好きそうな娯楽書籍を目の前において何とか椅子に座らせることに成功した。

速読を行い、満足そうにケーキを口へと運ぶセヴァドスの姿は何故か上品に見えて、レイフォンが言っていたグレンダンでの名家出ということを実感した。

「で、どうしたの？ 突然訪ねてきたけど」

特に親しくもないセヴァドスがわざわざ訪ねてくる理由に、ハーレイは特に思い当たることはなかったが、今までのセヴァドスの起こしてきた行動を顧みると、早い内に要件を聞いて追い出した方がいいだろう。

そう考えたハーレイの考えは決して間違いではなかったが、正解とは言えなかった。そもそも、こうして部屋に入れてしまった時点で、既にことに巻き込まれていることにはハーレイは気づかなかった。

ハーレイの問いかけに、セヴァドスは手に持ったフォークと書籍を置くと飲み物を口に含む。

そして、いつもの笑みを浮かべたセヴァドスはこう切り出した。

「あ、そうです。この前の老生体と戦ったときにレイフォンが使っていた錬金鋼を思い出しまして、私の分も作ってほしいです」

「本当に突然だっ!?!」

要件すらも突然なことに、ハーレイは思わず大声を上げながらつつこんでしまう。

突拍子のない無茶なお願いに対し、驚きをみせたハーレイとは対照的にキリクは至って平静を維持したままセヴァドスに視線を向けた。

「というわけでどうですかキリクさん。この私に錬金鋼を一つ作っていただけませんか?」

「死ぬ」

セヴアドスのお願いにキリクは非情な一言で切り返した。

カリアンですら、言葉一つでセヴアドスを切り捨てることができなのだから、ある意味キリクは剛の者と言つていいだろう。

だが、相手が悪かった。ここで始まるのがセヴアドスクオリティーであり、諦めない男セヴアドスである。

キリクから切り崩すのは難しいと判断したセヴアドスは、標的の矛先を変えた。

「……ふう、というわけですが、どうしましょうかトーマスさん？」

「何がっ?! というよりトーマスって誰?!」

突然、話を振られたトーマス改めハーレイは再び大声を上げる。

何故僕に聞くのとか、何故僕に相談するのか、とかいろいろ言いたいことがあるが、一番声を荒げて憤慨したのは自分の名前についてである。

基本的に影が薄く、稀にアイツ誰だっけ? とかは言われたことがあるハーレイだが、今までトーマスと自信満々に呼ばれたことはなかった。

あつているのは字数と『ー』の部分だけである。

そもそも、ハーレイとセヴアドスは、先程も言った通り何度か練武館にて会い、言葉も交わしたこともある。

一番腹が立ったのは、殆ど初対面のキリクの名前を憶えているのにも関わらず、間違わずに言えることだ。

いや、そもそも人を全然違う名前で自信満々に呼ぶ方がおかしいのでは、とハーレイが考えていると、何故か二、三度領いたセヴアドスが首を傾げながら訪ねた。

「ふむ、トーマス・ハーレイさんでしたよね？」

「そういうこと?! うん、惜しいっ! って違うからハーレイが名前だから!」

「ハーレイ・トーマスさん!」

「違うよ! ハーレイは合ってるけど、トーマスは要らないよ!!」

「では、何とお呼びすればいいですか?」

「ハーレイでいいよっ!!」

「では、ハーレイさん。私に私だけの錬金鋼を作って貰えないでしょうか?」

「うん?! 常識的に考えて、はい作りますとは言わないよね、普通」

普通とは何か?

セヴアドスと話していると、常識という基準値が解らなくなってきたハーレイを見て、キリクは舌打ちをつく。

「おい、漫才がしたいならさっさと出て行け」

「別に僕は漫才がしたいわけじゃないよっ!」

いつの間にか漫才の相方にされてしまったハーレイは声を高らかにあげる。ハーレイ・トーマス？ 彼はツツコミ属性を得た瞬間だった。

普段以上の存在感を現わしたハーレイの隣で、話を戻し始めたセヴァドスが口を開く。

「で、どうでしょうか？ 勿論、素材と研究費については私が出しますよ」

「そういう問題じゃない。そんな暇は俺達にはない」

正確には時間を作ることくらいはできるだろう。

ただ、キリクは目の前の男に自身の作品を渡す気はなかった。

キリクは、職人である。

自分が認めた相手にしか渡すつもりはない。

前回、レイフォンの使った複合錬金鋼も都市の危機のためだったからであり、決して

レイフォン自身を認めて作ったわけではないのだ。

レイフォンは武芸を捨てようとしていたが、セヴァドスは違う。

武芸を捨てることもなく、努力も惜しまない優等生だろう。

だが、その純粹すぎる固執をキリクは危険だと判断した。

キリクの答えを聞いて、セヴァドスは残念そうに眉を下げる。

「ふむ、そうですか、それは残念ですね。あの複合錬金鋼はとても良いものだったん

ですが。確かに重量等の問題はありましたが、それでも錬金鋼の特性の長所を繋ぎ合わせたコンセプトは、に私好みですが」

「うん、アレは作った自分でもなんだけど、面白い仕上がりになったと思うよ」

若干の苦手意識のあったセヴァドスからの賛辞であったが、ハーレイは満更でもなさそうに頬を赤く染めて笑みを浮かべる。

しかしちよろいハーレイと違い、キリクはセヴァドスの心理を知ろうと彼を睨みつけていた。

そんなキリクの視線すら、セヴァドスはいつもの笑みでかわしていく。

「そんな貴方達に作っていただきたいのです。私だけの錬金鋼を」

いつものように笑顔を浮かべたセヴァドスのその言葉だけはやけに真剣に聞こえた。遠く何かを見るセヴァドスの姿を見て、キリクは問わなければならなかった。

「そんなものを作ってどうする？ 現状、お前は間違いなくツエルニ最強には違いないはずだ」

ツエルニの武芸者達は勿論のこと、汚染獣も手持ちの錬金鋼で問題なく対処できるのをセヴァドスは証明している。

完成された状態で、試作型の錬金鋼を持つ方がよっぽど危険を伴うことになるだろう。

キリクの考えを、セヴァドスは肯定するように頷いて答えた。

「確かに現状において、あの代物が必要になる可能性は少ないでしょう」

「ならば——」

「故郷には、まだまだ私よりも強い人達が存在します」

キリクやハーレイは知らない。

セヴァドスの故郷であるグレンダンに至高の武芸者達がいることを。

彼らに並び立ち、そしていつか——

「私は彼らを倒してみたいんですよ」

ただ強くなりたい、強くありたい。

それがセヴァドス・ルツケンスを構成する根本的な思いであった。

・  
・  
・  
・

所々に街灯の光が点在する夜空の下で、甲高い金属音と炸裂音が辺りに響き渡る。

レイフォン・アルセイフとハイア・ライア。

グレンダンでも数少ないサイハーデンの担い手達が、遠いツエルニの地にて互いの立場からぶつかり合っていた。

「っは、どうしたヴォルフシュテインっ!!」

「……少し黙ってろ」

言葉とともに互いの斬撃がぶつかり合う。

剣と刀。

お互いに握った武器は違っていたが、その剣筋や動き、癖などはやはり酷似していた。

厄介だ、とレイフォンは内心でそう呟く。

刃を交えてみると、剉量を頼らない純粋な刀での戦い方だからこそ、剉量はそう多くないだろうと予想できた。

だが、剣の腕前は間違いなく達人級。

レイフォンと同等クラスの腕前であり、間違いなく剉量さえあればハイアは天剣を握ってもおかしくはない人間であった。

外力系衝剉の変化、針剉。

外力系衝剉の変化、渦剉。



レイフォンの放った衝剄の針状の刃は、ハイアの周囲に囲むように発せられた衝剄の壁により叩き落とされた。

お返しとばかりに、巻き上がった砂埃の中から現れたハイアの斬り上げるような斬撃に、レイフォンはその体を浮かせた。

「ぐっ」

「惜しいっさー！」

態勢の崩れたレイフォンに対して、ハイアは追撃の蹴りを放って、レイフォンの身体を後方へと追いやった。

態勢を崩したレイフォンの首筋に、ハイアの斬線が通り抜ける。

寸前のところで、屈んでよけることができたレイフォンの頭部に衝撃が走る。

ハイアの蹴りをまともに食らったレイフォンだったが、衝剄を纏った剣を振るって目の前にいたハイアの身体を後方へと吹き飛ばした。

右頭部から噴き出した血を拭うレイフォンに対し、ハイアは左頬の切り傷から溢れる血を拭って互いに相手の動きを見逃さないようににらみ合う。

相手の指一本の動きすら見逃さない、全神経を相手に向けたレイフォンに、ハイアは口元を釣り上げた。

「流石に天剣授受者、流石にやるさー。けど、いつまでそんなの使ってるんだ？」

「お前には関係ない」

ハイアの視線の先には、レイフオンの握る——剣であった。サイハーデン刀争術は、あくまで刀術であり、剣術ではない。故に小さな違いでも大きな違いを生むことになる。

「関係あるさー。天剣のことを抜きにしても、お前もサイハーデンの人間さー。

……そうされると手を抜かれている気分になる」

「事実、そうだとしたら？」

レイフオンの解り易い挑発に、ハイアの笑みが消える。

「死んでも後悔するなよ」

発した言葉と同時に濃密な殺意と怒気がハイアの体から剽と共に漏れ出した。

刀を腰元へと戻した構え——それはレイフオンも知っていた。

焰切り。

師父デルクに教えてもらい、幼い頃に習得した忘れることのできない思い出の中の剽技である。

無論、今のレイフオンでも使うことができる剽技ではあるが、レイフオンは焰切りを

——サイハーデン刀争術を封印している。

もしも、この場でレイフオンがサイハーデンの技を使えたとしても、ハイアに簡単に

勝てるとは思わなかった。

焰切りを放とうとするハイアに対抗すべく、レイフオンの手に握る剣には破裂寸前までの剽が流れる。

余計なことを考えず、目の前の不審者を倒す。

集中力の増したレイフオンを見て、対峙する——ハイアは笑う。

両者がぶつかろうとしたその時——突如、この場に発砲音が響き渡る。

同時に何人もの声と足音が辺りに響き渡る。

どうやら、都市警察の人間が集まってきたようだった。

『ハイア、時間切れだ』

「ち、未熟者が揃っても……だが、ここで暴れるのは得策ではないさー」

名残惜しそうに刀を腰へと戻すハイアは、突然、この場に現れた念威端子の指示通りに撤退し始める。

「じゃあな、ヴォルフシユティン」

「逃がすと思うのか？」

追われているハイアと違い、レイフオンは追う側の立場である。

逃げる理由のないレイフオンは、ハイアを追い詰めようとするが、ハイアの視線の先にあるものに動きを止める。

それは、上官の指示を仰ぐナルキの姿であった。

「別に構わないさ？ その様で追いかけてくれるならさ」

「つち！」

一瞬のレイフォンの動揺について、ハイアはこの場から消えるように離脱した。再び巻き起こる砂煙に、念威操者の支援のないレイフォンでは難しいだろう。

「ハイア……サリンバン教導団」

再び迫る脅威に、レイフォンは刃を置くことは許されなかった。

・  
・  
・  
・

『派手に暴れたな』

「別にこの程度は、簡単な挨拶さ」

都市警察の追跡を難なく逃げ切ったハイアは、飛来するフェルマウスの端子に話しか

ける。

その表情はいつもより明るく、そして機嫌がよかった。

レイフォン・アルセイフ。

確かに剣の腕は自分自身に匹敵するほどの実力者であった。

ハイア自身もあれほどの実力者達と斬り合ったことはそう多くはない。

だが、所詮はその程度であった。

簡単に勝てるとは思わないが、絶対に負けるとも思わない。

つまり、ハイアは天剣に届く力を持っていると証明されたのだった。

『ハイア、気を抜くなよ』

「わかっているさ。　　たたくフェルマウスは俺たちの父ちゃんか？」

『私はお前の父親ではない。　お前の父親はリュホウ、だからお前は』

「いらぬ詮索は無用さ。　俺はただあいつが気に入らないだけだ」

フェルマウスの忠告に耳を貸すことのないハイアは、聞く耳を持たない様子であったが次の言葉で動きを止める。

『そうか、ならば錬金鋼を新調しておくのだな。　それではもう使い物にはならない』

「っ！　……流石は天剣授受者さ」

戦闘による興奮か、自分自身の持つ錬金鋼の破損に気づかなかったハイアは、苦々し

くレイフォンのいるであろう方向を睨み付ける。

もしも、あのまま戦闘が続いていれば――

『ところでこれからどうする？ 一応、仕事を終えたわけだが』

「ん？ まあ、そうなるな。けど、折角のチャンスだから、さ」

このまま引き下がるわけにはいかなかった。

今度こそ決着をつけて、自分自身の実力を証明しなければならない。

『まあ、好きにするといい』

「へえ？ 止めないんさ？」

再戦に燃えるハイアを、フェルマウスを止めることはしなかった。

普段なら小言の一つでも言いそうなフェルマウスに、ハイアは不思議そうに首を傾げる。

『私も少し気になっていることがある』

「珍しいさ、フェルマウスが気にすることがあるなんて」

何なのさ？と念威端子に視線を向けたハイアに、フェルマウスは端子越しで答える。

『先程も言ったが、この都市にはもう一人天劍授受者級の武芸者がいる』

「知っているさー、グレンダンのボンボンだろ」

確かにレイフォンの後を追うようにグレンダンの武芸者が入ってきたことは知って

いる。

それが、あの名門のルッケンス出身で、レイフォンに匹敵するほどの武芸者というところも知っていた。

だが、名家というぬるま湯に浸かった武芸者に、ハイアは負ける気なんてさらさらなかった。

『悔るような発言は止めておいたほうがいい。はつきり言って、彼は異常だ』

「何さ、念威操者の勘ってやつか？」

フェルマウスのいつも通りの忠告を、ハイアは話半分で聞いていた。

フェルマウスの心配症はいつになっても変わらないからだ。

『さあな、ただここでのやるべきことを終えたなら、この移動都市から去った方がいいだろう』

「それを決めるのは団長であるこの俺さー」

レイフォンと決着をつける。

そして――

「天剣級を二本折つての凱旋は、いい手土産になるさー」

もう一人の武芸者を倒す。

不敵な自信に満ち溢れた表情でハイアは笑った。

## 第二十四話

喉の水分が失われていくのを感じた。

心臓を叩く鼓動音は、まるで音楽のビートを刻むように早くなり、コールタールに漬かったかもような動かない身体を無理やり起こすと、滝のように流れる額の汗を手にとったタオルで拭う。

ここまで我武者羅に鍛錬を行ったのはいつぶりだろうか？

親父があんな親父だったため、それなりに武芸の練習を幼い頃から積んできたつもりだったが、目指す目標は遥か遠く、焦りさえ生まれる感情に——アイツもこんな気持ちだったのだろうかと思り続ける小隊長に思いを向ける。

前に所属していた小隊を抜け、今の小隊に入ってから、何処か気が抜けていた気分になっていた。

ゆえに、汚染獣が襲いかかってきたあの日、無力で無様な姿を晒すことになったのだろう。

別にたった一人であの危機を救えると思っっているわけではない。

もし、自分がもう少し強ければ、アイツは……なんてヒーローめいた考えも持ち合わ



せていない。

だが、あの姿を——たった一人で数百の汚染獣を塵殺したレイフォン・アルセイフの姿を見て何も思わない——なんてことはなかった。

ツエルニ屈指の狙撃手と謳われていた安いプライドを折るには十分な光景をあの時目にした。

この世界が広いことも、このツエルニが未熟な学生達の集まりということも理解はしていた。

だが、それ以上に思い知らされたのは、武芸者としての都市の守護者である自分達の価値。

それはたった一人の新人武芸者よりも軽かった。

無様であり、格好悪すぎた。

だが、それでも武器を置くことなんてできやしない。

あの時の誓った約束も決して色褪せてなんかはいない。

レイフォンに追いつこうという無謀な考えは持ち合わせていない。

ただあの時の誓いを果たすため——そして本当の意味でツエルニを救うために銃を手に取ろう。

「さて、似合わねえ熱血でもしにいくとするか」

そう言つて——シャーニツド・エリプトンは決意し立ち上がる。普段通りの飄々とした表情で、胸に抱いた気持ちをも果たすために。

泥まみれになろうとも、自分ができるところをやるために。

そして眠り続ける後輩が背負い続けた武芸者としての責務を果たすために——シャーニツドが歩き出した足元には一枚のクシヤクシヤな書類が転がっていた。生徒会の印が押されたソレにはこう書かれていた。

『武芸科四年 シャーニツド・エリプトン 第十七小隊隊長に任命す』

・  
・  
・  
・

「さてと、これはここでいいですか？」

「うん、ありがとうね、セヴァちゃん」

買い物袋をテーブルの上に置いたセヴァドスに、飾りつけを行っていたミイファイが勞いの言葉をかける。

そんなミイファイを見て、セヴァドスも飾りつけの道具を手に取るとミイファイの隣で用意を始めた。

「レイフォン、喜んでくれるかな？」

「そうですね。きつと喜んでくれますよ」

今日、こうして集まったのは最近元氣のないレイフォンを元氣づけるために、ミイファイが開催したパーティーの準備のためである。

友人であるレイフォンのためにと、セヴァドスも食材の買い出しを行い、こうして今もミイファイ達の部屋に上がり込んでいる。

友人Aがこの話を聞くと後で怒り狂うだろう、女子の園に簡単に訪れたセヴァドスだが、当の本人は真剣な眼差しで飾りつけを行っていた。

そんなセヴァドスの様子を、隣で見ていたミイファイは笑いを抑えることができず、たまらず嘖き出した。

「む、どうしましたか？」

「いや、だつてさ、セヴァちゃん凄く真剣なんでもん。いや、私もふざけてるわけじゃないけどさ、セヴァちゃんがそんな真面目な顔して飾りつけしているんだもん」

授業の時、武芸の鍛錬の時、小隊員との練習の時でも笑みを浮かべているセヴァアロスが、真面目に、そして何処か緊張感のある表情を浮かべるのは珍しいとミイファイは思った。

「む、そうですね……実はこういうこと、パーティというものはあまり慣れていないので」

「へえそうなの？」

セヴァアロスの発言にミイファイは意外な一面を見た気がした。

騒ぐのが、というよりも、何の出来事でも彼が絡むと何でも大騒ぎになるお祭り男だとミイファイは思っていたのだが、セヴァアロスの表情から察するにどうやらそういうことらしい。

「でも、確かセヴァアちゃんの家ってお金持ちじゃなかったっけ？　ゴルネオ先輩も確かグレンダンの名家出身って聞いてたけど？」

レイフオンもセヴァアロスのことをグレンダンでも歴史のある由緒正しい家柄だと言っていたのをミイファイは聞いた覚えがあり、奇特定の行動が目立つセヴァアスだが、よく見ると確かに一つ一つの動きの所作は、どこか上品さを感じさせていた。

故に彼の性格も相まってパーティなんてお手のものだと思っていたのだが実際のところはそうではないらしい。

「確かに私の家は、ルッケンスというグレンダンでも名のある流派ですが、あまりそういうことをした覚えはありませんね」

皆、そういうことには疎かつたんだと思いますよ、と言ってセヴァアスは再び飾りつけを再開する。

そんなセヴァアスの隣でミイファイも両手の飾りをセヴァアスに渡して作業を続ける。

「そうなんだ。じゃあさ、今までセヴァアちゃんの歓迎会もちやんとできてなかったし、今日は楽しんでいってよ」

「はい、ありがとうございます。あ、そこは私がやりますよ」

「うん、よろしく」

こうして作業を続けるほど数十分。

キツチンの方からは、香ばしい匂いと甘い香りが混ざって、帰宅したナルキの鼻を刺激する。

「おお、いい香り」

「あ、ナツキおかえりっ!」

「ナルキさん、お邪魔してますよ」

帰ってきたナルキにセヴァアス達は一度作業を辞めて、疲れた表情を浮かべたナルキに労いの言葉をかける。

「ああ、ただいま。——そうか、セヴァも手伝ってくれてるんだな」

「そうなの、セヴァちゃんがいると助かるよ、重いものとか高いところとか簡単にやってくれるからさ」

「役割分担というやつですね」

こう見えて、私は料理は得意ではありませんから、とやけに自信満々に答えるセヴァドスに、ナルキは目を丸くさせる。

「そうなのか？ セヴァって何でも簡単にできそうな気がしたけど」

武芸に学問、専門科の知識量と、正直ナルキはセヴァドスに足りないのは常識だけで、ソレ以外は何でもこなせる器用な人間だと思っていた。

実際、前にメイシエンの店のケーキの作り方をやけに気にしていた一件でシロツプソースを作ったと言っていたので、料理もするものだと思っていたが、どうやらそういうことではないみたいだ。

「実際、グレンダンに居たときは、自分で作るより、そういう人が作ってくれた方が早いしおいしいですから、台所に立つ機会がないというのが正しいでしょうか？ まあ、武芸と一緒に何事も根気よく続けないと駄目ということですね」

作るより、食べる方が好きです、と言ったセヴァドスに、隣もミイファイも以下同文と飾りつけを再開し始めた。

「なるほど、ということとは料理はメイに任せっきりというわけか」  
「そういうことだねー」

ミイファイから手渡された紙の薔薇をセヴァドスは慎重な手つきで受け取り、脚立に上つて壁や天井にペタペタと張り付けていく。

二人の飾りつけの作業は、もう少しで終盤といったところで、ナルキが手伝うまでもないだろう。

「わかった、私が少し手伝つてくるよ。　ミイとセヴァは飾りつけの方を頼むよ」

「わかりました」

「はい」

飾りつけを二人に任したナルキは、一人で大量の下準備を行っているメイシエンの元へと向かう。

そんなナルキを見送ったセヴァドスは、意外そうな口ぶりでミイファイに話しかける。

「ナルキさんつて料理できたんですね」

「本人曰く、切つたり剥いたりだけらしいけどね」

それでもセヴァドスは、妹さんよりは全然マシということですね、と失礼なことを考えているとふと、気づいたことがある。

「ところでミイファイさんは？」

「うーん、切ったりすると凸凹になるかな？」

ミイフィの回答に、セヴアドスは小さく頷いた。

「なるほど、役割分担というわけですね」

・  
・  
・  
・

「というわけで俺たちも来てやったぜ」

「お邪魔します」

翌朝、ミイフィ達の部屋に追加で二人の人間が現れた。

休日なのに練武館にいたレイフォンを捕まえた際に、同様に練武館にいたシャーニツドとここに向かう途中に出会ったフェリの二人である。



気を利用かして飲み物を買ってきたシャーニッドと何故か食材を握りしめて現れたフェリを部屋へと通したミイファイとセヴァアドスの前で申し訳そうな表情を浮かべたレイフォンが立っていた。

「ごめん、ミイ。人が増えたみたいだ」

「あーまあ大丈夫だと思うよ。メイつちがかなりの料理を用意しているみたいだったし」

実際、メイシエンがかなり張り切って料理を作り過ぎていたのだから、丁度良かったのかもしれない。

シャーニッドとフェリが、そのままミイファイとレイフォンの脇を抜けていく中、既に部屋の中にいたセヴァアドスが友人に話しかけた。

「お久しぶりです、レイフォン」

「あ、うん」

レイフォンは、それだけ言葉を返すと、そのままセヴァアドスと目を会わすことなく、玄関脇を潜り抜けていく。

「……レイとんとセヴァちゃんって、何かあった？」

「さあ？ 私もよくわかりません」

セヴァアドスに対して、やけに余所余所しい態度を取るレイフォンに、思わずミイファイ

は隣の本人に声をかけてしまうが、当然セヴァドスに聞いてもわかるはずがなかった。

「お。これはすげえな」

飾り付けられた部屋の中で待つていたのは、豪勢な料理の山である。

その光景に、シャーニツドが感心したように頷き、隣のフェリは悔しそうにメイシエンの方に視線を向ける。

「レ、レイとん、ひ久しぶり……」

「レイとん、この前はありがとう」

フェリ達に続くように現れたレイフォンに、料理を完成させて待つていたメイシエンとナルキが声をかける。

「メイシエン、ナツキ、今日はありがとう」

レイフォンも頑張ってくれた二人に、笑みを浮かべてそう答えると空いていたクツシヨンの上に座る。

その隣にはメイシエンが、そして逆側にフェリが座ると、セヴァドスを引き連れたミイファイが現れた。

「お、レイとん。両手に花だね」

隣で顔を真っ赤にさせたメイシエンを見ながら、ミイファイはからかうようにレイフォンの肩に手を乗せる。

「何があつたかはわからないけど、セヴァちゃんも仲良くね」

今日の用意はセヴァちゃんも手伝ってくれたんだからと言ひ残すと、ミイフィはレイフォンの向かい側のセヴァアドスの隣へと座る。

その言葉を受け、レイフォンがセヴァアドスの方に視線を向けると、そこにはシャーニツドと談笑する彼の姿があつた。

あの時、確かにニーナを傷つけたのはセヴァアドスだつた。

だが、あの状態まで追い込んでしまい、最後まで気づくことができなかったのはレイフォンである。

自分には責めることはできない、だがそれでもセヴァアドスに今まで通り話すことができなくなつてしまつていた。

自分自身の感情と悩みに苦悩するレイフォンの気持ちを観察することなく、楽しみに笑うセヴァアドスにシャーニツドはため息をついて不満を漏らす。

「はあ……レイフォンの席はいいよなー変わつてもらいたいぜ」

シャーニツドの目の前では、甲斐甲斐しく料理をよそうメイシエンと何故か距離の近い所に座るフェリが並んでおり、まさに男なら喜ばしい状況だろう。

それに対し、シャーニツドの隣ではモキユモキユと料理を口に運ぶセヴァアドスである。

彼の隣にもミイファイが並び、楽しそうに談笑している。

「ははは、私が隣にいるじゃないですか」

思わず言葉を漏らしたシャーニツドの独り言に、隣のセヴァドスが反応した。

全然嬉しくねえよ、と言いたくなるのを押さえ、シャーニツドも料理に手を伸ばす。

料理は、前菜の色とりどりの野菜のサラダに、メインの牛肉のソテーが一口サイズに切られており、他にもパスタや鳥の唐揚げ、生ハムにチーズとテーブルの上にぎつしりと広がっていた。

酒でも飲めたらな、とシャーニツドは考えたが、この場にいるのは今年入学した一年に、一学年上のフェリというメンバーで酒盛りはできないだろう。

「ふむ、手が止まっているようですが、何か嫌いな食べ物でも？」

「いや、せつかくこんな豪華な料理が並んでんだ、ハーレイの奴でも呼んでおけばよかったです」

シャーニツドはそう言って切り揃えられた肉の塊を頬張る。

ニーナのことがあったせい、最近練武館にも姿を見せない錬金鋼技師の姿を見ていないシャーニツドは、連絡をつけようと立ち上がる。

「ああ、ハーレイさんなら今忙しいと思いますよ、キリクさんと新たな錬金鋼を開発している最中です」

「へえー、ってなんでお前がそんなことを知っているんだ？」  
なら今度差し入れでも入れてやろうと考えたシャーニッドは、ふとセヴアドスの言葉に疑問を抱き口にする。

同隊員でも知らなかった情報に、セヴアドスは一言だけ。

「完成してのお楽しみですよ」

そう言っついても通りの、いつも以上に楽しげな表情を浮かべた。

## 第二十五話

嫌なことは続くことだ。

シャーニツドは、一人観客席に座って目の前の試合を眺めていた。

今日試合を行っているのは、小隊の中でも中堅クラスの強さを持つ第六小隊とシャーニツドが第十七小隊に来る前に所属していた第十小隊の試合であった。

飛び抜けた強さを誇るエースがいない第六小隊だが、六年生である隊長の指揮の元、集団戦術を得意としているのに対し、第十小隊は、第六小隊と同様に集団戦闘を念頭においた布陣となっている。

チーム一の攻撃性と突破力を持つダルシエナの後ろを守るように、司令塔であり、隊長でもあるデインの指示の元、残る小隊員がその回りを囲む。

これこそが、第十小隊の戦術であり、シャーニツドのよく知っている姿であった。去年までなら狙撃手であるシャーニツドが彼らの進撃をサポートするようになっていたが、どうやら今はデインがその役割を兼ねているよう、ワイヤーを周囲に飛ばして牽制を行っている。

だが、それでも三人柱の一つを失ったことは大きく、第一小隊、第五小隊に次ぐ勢い

の合つた第十小隊は、明らかにその勢いは衰えていた。

しかし、それでも隊長であるデインの作戦と突破力に定評のあるダルシエナのチーム力は健在であり、何とか上位に食い込む成績を誇っていた。

ダルシエナを先頭に、相手陣地に迫る第十小隊の攻勢に、迎え打つ第六小隊の面々は、距離を取る布陣でソレを向かい撃つ。

剽弾や衝剽を放つて、ダルシエナの足を止めようとするが、デインのワイヤーがその迎撃を防ぐ。

それでも防ぐことができない攻撃は、周囲の小隊員がダルシエナの間に立つてその身を碎き、彼女の足を止めることを防ぐ。

そして、ダルシエナに詰められた第六小隊は、陣形を崩され、そしてデインのワイヤーにより分断されたのち、体勢が崩れたところを各個撃破されていく。

こうなつてしまえば、第六小隊が体勢を整えるのは難しい。  
隊長が先に討たれるか、本陣のフラグが折られるかのどちらかだろう。

旧友達の勝利に対し、シャーニツドの表情は珍しく険の色が見えていた。  
袂を分けたとはいえ、彼らはシャーニツドの同士であり、シャーニツドも道を違えど、

あの時の誓いを忘れたわけではない。

ゆえに彼らのことは、こうして見ているだけでわかつてしまうことがある。

あの時も、そしてこうしている今も。

馬鹿野郎、そうまでして誓いを守ろうとしたのか——  
違法酒デイジー。

彼らは、武芸者としてやってはいけないことに手を染めてしまった。

デインもダルシエナも他の面々も、前回の第十四小隊戦よりも剋量が増えてきている。

明らかにそれは昨日今日で成長し、増えた量ではなかった。

こうしてシャーニツドが気づいたということは、遅かれ早かれこの事実は明るみになることだろう。

いや、やり手のカリアンのことだ、もう既に情報をつかんで対策の一つでも立てておいてもおかしくない。

そして、事態を把握したカリアンは行動を起こすだろう。

この事実が明るみになれば、ツエル二の今年の都市対抗戦に間違いなく影響を及ぼすことになる。

そうなる前にカリアンはこの事実を揉み消そうとするに違いない。

その判断は決して責められるものではない、彼は生徒会長としての役目を果たすだけだ。



ならば、シャーニッドは急がなければならない。

もう残された時間はそう長くはないのだから。

試合終了のサイレンが響き渡り、観客からは声援が上がる。

砕かれた旗を眺めながら、シャーニッドはゆつくりと立ち上がった。

†

試合が終わり、控え室に戻るデイン達の第十小隊の面々に勝利に湧く笑顔は存在しなかった。

彼らの表情からは苦痛に歪んだ表情と微かな後悔、そして確かな決意だけだった。

自分達が小隊戦に勝ち上がり、そして隊長であるデインが指揮権を掴み取るために、武芸長であるヴァンゼは、確かに武芸者としての力は認めるが、総指揮官としての力は実に疑わしい。

事実、そういった面々が武芸長についたことにより、ツエルニはここまで追い詰められることとなった。

それに次ぐゴルネオも同様に、彼自身の小隊も二本のエースの戦闘力により勝ち上がっているが、戦略面としては期待はできない。

そして、ツエルニ最強の二枚看板となったレイフォンとセヴァドス、彼らは戦略家としても武芸者としても論外である。彼らに都市の命運を託すことなど到底思えない。一方はただ流されるように惰性的に、もう一方は欲望のままにその力を振るっている。

そんな人間をツエルニの人間として認めるわけにはいなかった。

だからこそ、デインは……

「トヨウ」

デイジーの影響か、全身に痺れるような痛みが発し、近くにいったベンチの上に腰を下ろしたデインに、彼はそうやって現れた。

見慣れた、そしてあの時と同じようなヘラヘラした笑みを浮かべて。

「——シャーニツド」

「調子は良さそうだな。今日の試合は完全にお前達が優勢のまま押し切ったみたいだしな」

試合を見ていたのか、今日の試合の様子を語るシャーニツドは、通路の端にある自販機に小銭を入れる。

手慣れた手つきで、飲み物を二つ購入したシャーニツドは、その一つをこちらに向かつて投げ渡す。

デインは、反射的にそれを受け取ってしまうが、それを口に運ぶことはなく、ベンチの上に置き、かつての戦友を睨みつけた。

「俺達の調子をチームメイトですらないお前が気にしてなんになる？」

「そんな冷たいことを言うなって、このツエルニを守る同じ武芸者だろう？」

シャーニツドはそう言って、デインの横のベンチに座る。

デインは、シャーニツドの隣には座れないとその場から立ち上がろうとしたが、太腿に巡るような針を刺すような痛みに、再びベンチへと腰を下ろした。

「……」

「つなんだ？」

「いや、疲れているところは悪いなーってな」

「ふん、土壇場で裏切った奴の台詞なんぞ信じる気にはなれん。もし心配する気があるんならさっさと俺の前から消えろ」

デインの強い怒気の籠もった言葉に、シャーニツドは怯むことなく飲み干した飲み物の缶を自販機の隣のゴミ箱に投げ捨てた。

「お、百発百中だな」と綺麗な放物線を描いた缶がゴミ箱に吸い込まれるのを見て、シャーニツドはベンチに向かって天井を仰ぐようにもたれかかった。

「はっはは、随分嫌われたな。まあ、今度お前のところと十七小隊と当たることになるから、隊長代理として偵察を兼ねて挨拶に来ただけだ」

「は、隊を我が儘で抜けたお前が、今度は隊を纏める立場になるとは、上の考えることは理解できんな」

「まあ、俺も自分が隊長なんて似合うとは思ってねえよ。隊長なんて役柄は責任感がある奴でないと、ニーナやお前みたいなやつみたいにな」

そう言つて気安く肩を叩こうとしたシャーニツドの右手を、デインは左手で払い除けると、気安い笑みを浮かべた隣人を睨みつける。

「ふん、アントークと一緒にするな。自分の体調も管理できずに自滅した者が隊長なんて務まるはずもない。隊を抜けたお前を真っ先に引き抜きにいったやつにな」

「そうか？ 俺はニーナは隊長に向いてると思うぜ、彼奴がいないと第十七小隊は作

ることもできなかつたし、俺がこうして再び銃を握ることができたしな」

ベンチから立ち上がったシャーニツドに、デインは見上げるように視線を上げる。

そこには、先ほどまでのふぎけたような笑みとは違い、こちらの考えを見通すかのような鋭い視線をシャーニツドはこちらに向けてきた。

「それにお前はさつき、上の考えていることは理解できないって言ってたけど、カリアンの旦那のことだ、俺達以上に何かを考えているはずさ」

「……何が言いたい？」

何かを知っているような素振りのシャーニツドにデインは思わず口にしてしまった。

いや、正確にはデインも既に気づいてしまったのかもしれない。

シャーニツドが、自分達第十小隊の過ちを既に感づいていることを。

「別に何も、ただお前がそういうのなら、何かあるんじゃないかねえの？」

「ふん、いつまでもお前の相手をしているわけにはいかない。シエーナ達が待つている」

そうなれば、こうしてシャーニツドと話しているわけにはいかない。

そう思いデインはベンチから立ち上がると、シャーニツドに一度も視線を向けずそのまま逃げるようにこの場をあとにしようとする。

「デイン、あの時の約束はそんなに大切だったものなのか？」

背を向けたデインに対し、シャーニッドは尋ねてきた。

その声はやけに真剣で、それでいて悲しんでいるようにも思えた。

だからなのか、立ち去ろうとしていたデインの足は、その場に根付くように動かなくなってしまうた。

「当たり前だ。だからこそ、俺は隊長を引き継いだ」

「そうか……けどな」

——それよりも大切なものがあつたんじやねえか？

その言葉を残したシャーニッドに対し、デインは答えることもできずにその場で立ち尽くしていた。

†

「今日もお疲れ様でした」

「あ、ああ……」

につこりと童のような純粋な笑みを浮かべるセヴァアドスに、付き合っていたゴルネオは力尽きるように床へと倒れ込んだ。

その光景は、セヴァアドス達が再会した時によく似ているが、あの時と違いゴルネオは傷の深さからではなく、単純に訓練による疲れで倒れ込んでしまった。

その周りにはゴルネオと同様に床にしゃがみ込んだ者やベンチの上でピクリとも動かない赤い野生娘などがいたが、誰一人声をあげることができなかった。

——地獄だ。

セヴァアドスの訓練に付き合わされた第五小隊の面々の脳裏に浮かぶのはその一言であつた。

訓練自体は至ってシンプルで、剋息を整える基礎的なモノを含めて、体捌きなどの簡単なものであつたが、第五小隊の面々には考えさせられる時間となつた。

そのあとのセヴァアドスの一言がなければ、有意義な時だつたと言える。

——それでは、今から手合わせと行きましようか？

まさか休日だつたとはいえ、八時間に及ぶ訓練の後、まさかのセヴァアドスの提案に第

五小隊の面々は顔を青くさせて耳を疑ったが、当の本人は普段の笑みを浮かべたまま、楽しげな足取りで準備を開始し始めた。

そこからの光景をゴルネオは思い出したくもなかった。

とりあえず、殆どの小隊員は今日食べた昼ご飯を戻したことはいうまでもない。

倒れた第五小隊員を医務室に運び終え、自宅への帰路を歩いていく。

今日の訓練で、息一つ切らすことなく、最後の模擬戦において一度も被弾しなかったセヴァアドスだったが、それでもその表情には充実感に満ちていた。

今日一日見ていて、兄であるゴルネオはまだまだ実力不足であり、セヴァアドスとまともに戦うまで時間がかかるだろう。

だが、それでもゴルネオの眼には力が戻ってきており、兄とこうして訓練に励むことがセヴァアドスにもやりがいを感じた。

「兄さんもそうですけど、シャンテさんも中々筋が良いかもしれませんね」

一つ楽しみが増えた、と普段以上の笑みを浮かべていたセヴァアドスは、ふと足を止めた。

「ふむ、先程まで兄さん達と訓練をしていたのですが、よければ貴方も如何でしょうか？」



「ああ、そいつは願ってもいない機会だな」

路地裏から現れた男——シャーニツドの言葉にセヴァドスは目を丸くして首を傾げた。

「頼む、セヴァドス・ルツケンス。この俺に鍛錬をつけてくれないか」

普段は飄々としていた狙撃手の目は熱い何かが宿っていた。

## 第二十六話

迫りくるのは無数の礫の雨。

小石と言えど、目の前に迫るソレは間違ひなく必殺の弾丸である。

大地を抉り、木々をへし折り、建物を穿つ。

もし一撃でもこの身に当たつてしまえば、間違ひなく病院行きだろう。

そんな地獄のような場所に立たされた男——シャーニツドの心中は唯一つの思いで構成されていた。

『早まった』と。

「へえ、少しづつですが回避に無駄が無くなってきましたね。もう少しテンポアツ

プしてみてくださいか？」

「だあああああ!!! 畜生つ、慣れねえ熱血なんてするんじやなかったぜつ!!」

憎たらしいほどの清々しい笑みを浮かべる好青年——セヴァドスは右手に握る小石を、シャーニツドに向けて投擲した。

投擲された小石は、空間を切り裂き、風切り音を発しながら、シャーニツドの耳元を掠めていく。

そのまま後方へと飛来した小石が木々のへし折れる音を耳にして、シャーニツドは顔を青くさせて唾を呑みこむが、この場でそのような余裕を出す暇は許されなかった。

一目散に後方へと全力疾走を開始するシャーニツドに向けて、セヴァドスは両手で握りしめた小石をその背中に向けて投げつけた。

再び迫る礫の群れに、シャーニツドは顔や髪が汚れすら気にしない無様な回避で何とか岩陰に滑り込むように隠れると、訓練場中央に陣取るセヴァドスの様子を見ながら、手に握りしめた鍊金鋼を起動させる。

握りしめたのは狙撃銃ではなく、短銃型の鍊金鋼である。

「あー、ニーナの訓練が懐かしく思えるぜ」

バリケードとなっている岩が小石によって碎けていく音を耳にして、シャーニツドは今無き十七小隊長の思い出しながら、軽く現実逃避していた。

ニーナは基本猪突猛進型で、熱の入った訓練をよく行っていたが、流石に命を懸けるような訓練は行っていなかった。

ニーナが復活したら、訓練には真面目に付き合ってやろう——そう心に決めたシャーニツドの安息の時はすぐに終わりを告げた。

段々と岩が削れ、恐らく数十秒ほどで岩のバリケードは破壊されることになるだろう。

ならば、仕掛けるのは今しかないということである。

「よつしやあ、さつきとこの訓練からオサラバしてやるぜ」  
バリエードに身を隠しながら、シャーニツドは両手の短銃をセヴアードに向けて、その引き金を引く。

剽の伝導率が高い軽金鍊金鋼の狙撃銃とは違い、頑強だが伝導率の悪い黒金鍊金鋼の短銃では、流石のシャーニツドでも精密射撃は不可能であり、その命中率を補うべく、短銃からは三十の勁弾がセヴアードに向けて放たれた。

だが、迫る弾幕にセヴアードは全く動じることなく、普段通りの笑みを浮かべて光り輝く青い剽を身体中に流す。

活剽衝剽混合変化、廻世界（かいてん）。

セヴアードスの目の前に迫る無数の弾丸が、セヴアードスの周囲に纏うように発せられた剽の層により、その威力が衰えてやがて停止をすると、独楽のように身体を高速回転させたセヴアードスが、弾丸をシャーニツドに向けて弾き返した。

「だああああ!! 絶対その技、反則じゃねえか!!」

「別にルールは破っていません。私は動いてませんから」

弾き返され、自身が放った威力以上になった弾丸から逃げるように、シャーニツドは頭を押さえてその場に屈むようにして、岩を貫通してきた弾丸を回避する。

あまりの恐怖と反則じみた技量に、シャーニッドは思わず叫びを上げるが、当のセヴアドスは何でもない様子で首を傾げて答える。

セヴアドスの言う通り、ルールは確かに破つてはいなかった。ただ、圧倒的に訓練の難易度が上がっただけである。

「ほら、私をこの円から追い出すか、身体に一撃でも当てればステータジクリアですよ」  
「……気軽に言ってくれるぜ、どんな無理ゲーだよ」

にこやかな笑みを浮かべるセヴアドスに対し、シャーニッドは思わず顔を顰めてしまう。

動けないセヴアドスから一発でも攻撃が当たれば、即終了の簡単なルールで、シャーニッドに有利な条件であることには違いはなかった。

だが、開始から約三時間。

その間、一度もこの訓練は終了していない。

つまりはシャーニッドの弾丸は、一度たりともセヴアドスの絶対防壁を貫くことができないでいた。

「そうですか？ 集中力、視野の広さに状況判断が身につく最適の訓練方法なのですか」  
「その代わりに命を擦り減らしている気がするがな」

のほほんと気楽に答えるセヴァドスと違い、シャーニツドは先程から心臓の鼓動音がやけに五月蠅く、全身からは冷や汗などが止まらなかった。

先の幼性体の襲来の時以上の危機感を感じているシャーニツドに対し、セヴァドスは何か考え込むように首を傾げる。

「極限状態の中で人は進化する。それが私の持論なので、時間がないシャーニツドさんには最適の訓練だと思ってるのですが？」

「その考えは強ち間違いないかもしれないかもしれねえが、初日から飛ばし過ぎだろ？」  
段階を踏んで確実に強くなるように訓練を頼んだはずが、いつの間にか死地を乗り越えて覚醒するという漫画染みた訓練になっていたことに、シャーニツドは思わず不満を漏らす。

しかし、それが一般的な考え方だろう。

セヴァドスの訓練で喜ぶのは戦闘狂か変態くらいだろう。

そして、セヴァドスは戦闘狂側の人間であり、シャーニツドは極々普通の武芸者である。

つまり、シャーニツドとセヴァドスの考えが一致することはなかった。

「そもそも二日、三日の鍛錬で人は大きく成長しません」

「……それは俺もわかってはいるが、この荒行の根本から播るがす発言だな、おい」

「この鍛錬で身につくとすれば、視野の広さを養うことと冷静な判断能力を身につけるくらいですね」

まあ、それでも二日、三日では難しいと思いますが、と言いながらも手に持った石を豪快に放り投げ続けるセヴアドスの言葉に、シャーニツドは内心そう感じていた。

だからこそ、ニーナは焦り、結果として倒れてしまったのだろう。

しかし、シャーニツドはそれでもこうして鍛錬を続けなければならない。

「やるしかねえってこつたな」

「そうですね。では続きといきますよ」

「軽いな、おいつ!!」

こうして、シャーニツドは一度も攻撃を当てることもなく、そして一撃も攻撃を喰らわないまま、自分自身の体力の限界までやらされることになり、その間、訓練室内には叫び声と悲鳴が途絶えることはなかった。

・  
・  
・  
・  
・

「あー死ぬかと思つたぜ」

鍛錬はクリアしてはいなかったが、それでも終わりを無事迎えることができ、地獄から解放されたかのように安堵の表情を浮かべるシャーニツドに向かつて、セヴァドスは訓練室の隅にあつた自動販売機からドリリンクを購入していた。

倒れているシャーニツドとは違い、全く疲れの見せないセヴァドスは購入した二本のドリリンクの一本をシャーニツドに投げ渡す。

「しかし、シャーニツドさん、中々目の見張る回避能力でしたよ。直撃はなかったじゃないですか」

「ありがとよ、ただ直撃してたら、今頃病院のベッドの上だな」

受け取つたドリリンクに口をつけるシャーニツドの横で、セヴァドスは先程の訓練でのシャーニツドの動きを思い出していた。

流星に石を全力で投げたわけではなく、岩のバリケードなども多く設置はしていたが、シャーニツドは良く回避していたと思う。

恐らく兄であるゴルネオでも恐らく被弾は免れなかつただろうと考えていたため、確実に避け切つたシャーニツドの視野の広さは悪くはない。



悲鳴を上げていたとは言え、こちらの動きをしつかりと見る冷静さと、次の行動への思考力もある。

もし、測量と経験、そして身体能力があれば、ツエルニでの最強も目指せたかもしれない。

そしてこの訓練はシャーニツドの素質を発見する以外にも、セヴァドスには得たものがあつた。

それはグレンダンにいた頃から考えており、ツエルニに来たことで暇になった時間を費やし、ようやく形になった防御系の剋技——廻世界である。

汚染獣との戦闘から武芸者の防御手段の基本は回避だが、対人戦闘ではそうはいかない。

天劍授受者にして最強の盾と言われるリヴァースの金剛剋のような人外技まではいかないが、防御手段は必要だと考えていたセヴァドスが考案したのが、あの技である。

化練剋により変化させた粘着性の剋の幕を周囲に展開すると、攻撃を受け止めるようにして捉える。

その後、回転と同時に発生した衝剋で攻撃を吹き飛ばすというのがこの技の詳細であり、リヴァースの金剛剋と同じく天劍授受者であるカルヴァーンの刃鎧から考案した剋技である。

一見、簡単そうにも見える剋技だが、化練剋の粘着性に強度が低かったら相手の攻撃を捉えることもできず、無防備のまま攻撃を喰らうことになるだろう。

その後の回転と同時に放つ衝剋が一瞬でもタイミングを遅らせてしまえば、この技は成立しない。

修得に半年ほどかかった咆剋殺や千人衝とは違い、完全に自分だけの剋技を考えたことに、セヴアドスが思わず頬を緩めていると、地面に座り込んでいたシャーニツドが口を開く。

「しかし、まさか本当に修行をつけられるとは思わなかったぜ」

「そうですか？ 強くなりたいという人と鍛錬することは嫌いではありませんよ。

それに貴方には最初から目をつけていましたし、何より私も得る物はありませんよ」

事実、シャーニツドとの鍛錬は楽しかったし、今度はゴルネオ達も誘って合同合宿なんていいとまで思っていた。

新剋技である廻世界の練習にも、シャーニツドとの鍛錬は大いに役に立った。

この練習を数回繰り返し返せばタイミングを掴むことができ、実戦でも投入しても問題はないだろう。

そうなれば、他の剋技と合わせても面白くなるかもしれないとセヴアドスが考えていると、ドリンクを呑み終えてたシャーニツドが口を開く。

「……なあ、お前つてき、何で戦つてんの？」

ただひたすらに強さを求めて、日々鍛錬に励むセヴァドスの戦う理由をシャーニツドは聞きたかった。

武芸者の誇りとツエルニの為に戦うニーナ、孤児院の子供を救うために手を汚したレイフォン、と人にはそれぞれの戦う理由がある。

それはシャーニツドも同様に抱えて、結果として第十小隊を離れることになったが、それでもこうして銃をおくことはしない。

だからこそ、現状に満足せず日々強くなろうとするセヴァドスの戦う理由を知りたかった。

シャーニツドの問いかけに、セヴァドスは特に考える素振りも見せずに自分の答えを口にする。

「楽しいからですよ。今以上に強くなり、更なる強者と戦いたいからです」  
ただ、その一言に尽きる。

武芸者に生まれ、きらやかな眩しい存在を知ってしまったセヴァドスが抱いた生き方（かんじよう）である。

その思いは、グレンダンでも、ツエルニにいたとしてもその意志には変わらなかった。その言葉に、シャーニツドは呆れたように首を振る。

「なんとというか、武芸者って奴だな」

「そうですか？　ありがとうございます。ところで、私もシャーニツドさんに一つ聞きたいことがあったんですよ」

セヴアドスはシャーニツドについて一つだけ聞きたいことがあった。

「ん？　何だ、女の口説き方でも教授してほしいのか」

「いえ特に興味はないです。それよりも何故第十小隊を脱退したのですか？」

正確には、セヴアドスの疑問ではなく、友人であるミイファイが呟いてたことだ。

去年の小隊對抗戦の途中に、三本柱の一人であるシャーニツドが小隊からの離脱した謎は、ツエルニでも噂になっていいる話である。

対抗戦成績も悪くはなく、第一小隊に迫る成績を収めていた第十小隊だが、狙撃手シャーニツドの脱退により、小隊はガタガタになってしまった。

何故、シャーニツドがそんな行動に出たのか、セヴアドスの問いかけに、目を細めたシャーニツドは何処か遠くを見るように顔を上げると、ゆっくりと語り始めた。

「そうだな……見ていられなかった、だな」

寂しげに語るのは後悔か？

それとも別の感情だったのかは、本人ではないセヴアドスには解らないことだが、シャーニツドにとってその決断はとても簡単なことではなかったのだろう。

その姿にセヴァドスは特に口を挟むことなく、話を続けるように促した。

シャーニツドも誰かに話しておきたかったのだろうか？

特に気にした様子もなく話を続けていく。

「黙っておけば良かったのかもしれないが、あの状態がいつまでも続くとは思えなかった」

「ふむ？ どういうことですか？」

「ん、つまりは全員が誓いの裏で別の感情を抱いていたってわけだ」

シャーニツド・エリプトンはダルシエナ・シエ・マテルナのことを想い、ダルシエナはデイン・デイーを想い、デインは卒業してしまった先代小隊長のことを想っていた。

そのボタンの掛け違いのような関係が、一瞬で壊れるのをシャーニツドは恐れてしまった。

だから、シャーニツドは他の二人が気づく前に自分の手で壊した。

それだけの話である。

「うん？ つまりは三角関係って奴ですか」

「まあ、そういうことだな」

「なるほど、兄さんといい、レイフォンといい、皆さん中々面倒臭いことを考えていますね」

セヴァドスには、その苦悩を理解することはできない。

様々な分野に興味を示すセヴァドスだが、武芸以上に心を奪われたものはなく、基本的には迷いという感情を抱くこともない。

しかし、最近になって交友関係が広がってきたセヴァドスには、シャーニツドの言っている意味も理解できた。

グレンダンを追い出されたレイフオン、想いが暴走したニーナ。

歪な思い、関係は何れ破綻するということなのだろう。

それでも身も蓋もない発言するセヴァドスに対し、シャーニツドは苦笑いを返す。

「そんなものだろ。しかし、よく理解できたな？ 正直お前さんはこういう話興味なさそうだし、当人の二人も多分気づいてねえぞ」

そっちの方面では間違いないポンコツだと思っていたセヴァドスの妙な鋭さに、シャーニツドは思わず感心したように声を上げた。

その賛辞にセヴァドスは誇るように頬を釣り上げて胸を反らす。

「こういうのは第三者の方が気付きやすいと本に書いてありました。しかし、なるほど……まさに『愛憎トライアングル』というわけですね」

「そこまで酷くねえよ……まあ、そういうことだ。いつか破綻しちまうんら自分で壊しちまえてな」

「そして、自分で悪役を買う……と。自身を想うデインさんの想いを振り切つてまで……」

中々できることではない、とセヴァドスも感心したように頷いているが、シャーニツドには見逃せない単語が入っていたような気がした。

気のせいではないか、と思っていたがもしもこれが本当なら、ここで絶対に否定しておかなければならない。

「今、何か可笑しなことを言わなかったか？」

シャーニツドの問いかけに、セヴァドスは先程口にした言葉を再び口にする。

「デインさんの想いを振り切つてまで、ですか？」

「ああ、何か嫌な予感がするんだが」

微かに顔を青ざめるシャーニツドに、セヴァドスは自身が導き出した答えを口にした。

「デインさんは、シャーニツドさんのことを想っているんでしょ？」

「想つてねえよ!! 何処でここまで話がこじれたっ!!」

「え、『シャ？ダル？デイ？シャ』のトライアングルじゃないんですか？」

突然、怒鳴るような大声を上げたシャーニツドに対し、セヴァドスは不思議そうに首を傾げていた。

セヴァドスにとってこの公式は、ミイファイと徹夜してまで考えた至高の三角形である。

だが、当人のシャーニッドからすれば、絶対に正さないといけない重大な間違いであった。

「違いよ!! デインの野郎を勝手に変態にするんじゃないやねえよ!!」

「ふむ……だつてあの人禿げてますよ?」

「剃つてんだよ!! そもそも禿げは変態の一種じゃねえよ!! デインは卒業した前の隊長のことが好きなんだよ!!」

「……その隊長が男なんですか?」

「女だよ!! 話の流れからしてそうだろうが!!」

流れるような会話で段々と興奮していたシャーニッドが突然、よろめくとそのまま地面に倒れ伏せた。

それを眺めていたセヴァドスの隣で、仰向けに倒れたシャーニッドがぼそりと呟く。

「——マジで疲れてきた……」

「(ここ)で寝ると風邪ひきますよ」

「やべえ、こいつ、マジでぶっ飛ばしたくなつてきた」

苛立ったように鍊金鋼を復元しそうになるシャーニッドを尻目に、セヴァドスは首を



傾げて尋ねる。

「で、シャーニツドさんはこれからどうするんですか？」

「あん？ ……まあ、とりあえず第十小隊戦であいつらと戦わなければならぬんだがな」

第十七小隊は現在、人数不足という危機に直面していた。

隊長であるニーナが治療のため隊を抜けているため、現在の隊員はシャーニツドを含めてレイフォン、フェリの三人しかない。

とりあえず、最低でもあと一人をチームに引き入れなければならぬのだが、中々その一人が見つからないでいた。

「なるほど、もしよろしければその件も、私がずばつと解決して差し上げますよ」

「いや、正直遠慮したいんだが」

シャーニツドは不安そうに口にするが、セヴァドスは真面目にこの問題について考え始めていた。

もし、第十七小隊が解散でもすれば、レイフォンの居場所がなくなり、武芸から離れる恐れがある。

それに第十七小隊には、目の前のシャーニツドを含めて、フェリという逸材もいるため、できればこの形を継続できれば望ましいと考えていた。

「とりあえず、戦力補強は私もお手伝いします。それよりも続きを始めることにしましょう」

「はあ？ どう考えても無理って、おいっ！ 手、手を離せっ!!」

寝転ぶシャーニツドの手を掴み、セヴァドスは再び訓練を再開した。

## 第二十七話

「話があるから来てほしい」

カリアンにそう言われ、レイフォンは生徒会室の扉を叩いた。

扉はほどなくして開かれ、秘書に案内されたレイフォンが部屋に入るとそこには

「っ!! お前は」

「いや、二日ぶりさ、ヴォルフシュテイン」

そこにいたのは、先日都市警の依頼で遭遇した武芸者。

サリンバン教導傭兵団の長を務めるハイア・ライアであった。

「何故、お前がここにいる？」

「そんなの決まっているさー、この部屋の主に呼ばれただけさ」

ニヤニヤと笑みを浮かべるハイアから視線を、窓の外を眺めていたカリアンに向ける。

「どういうことですか？」

「ふむ、それを説明する前に、レイフォン君もかけたまえ、君もだハイア君」

カリアンの言葉にレイフォンは来客用ソファに腰を落とすと、その向かい側にハイア

が座り、そして彼の隣にいた眼鏡をかけた少女も彼に続く。

レイフォンやハイア達が座ったことを確認すると、秘書の女性が全員分の紅茶を用意してそのまま部屋から退室する。

これでこの部屋にいるのは、レイフォンにカリアン、そしてハイア達の四人である。

「さて、二人ともどうやら紹介は必要なかったようだね」

「会長、どういうつもりですか？」

目の前に座るハイアは、先日の一件で指名手配されている人物である。

そんな人物を部屋に招き入れ、茶菓子を出すカリアンの考えが理解できなかった。

何より、目の前の男の危険さは、刃を交えたレイフォンが一番理解することができた。

「何、悲しい行き違いというわけさ。　どうやら彼らも運ばれた荷物の中身は知らな

かったようだ」

「まさか信じたわけではないですよね」

胡散臭いカリアンの笑いに、レイフォンは視線を鋭く睨み付ける。

しかし、睨み付けられたカリアンは何処吹く様子で、いつも通りの笑みを浮かべて飲

み物を口に含む。

「ああ、しかし彼らにこういうものを渡されてね」

「……それは？」

「読んでみるといい」

カリアンから投げ渡された冊子をレイフォンは一枚一枚めくっていく。数ページをめくり、レイフォンは漸くその意味を知ることができた。

「脅されたというわけですか？」

「正確には、お互い臭いものには蓋をしよう、ということになったわけだ」

購入名簿。

そこに書かれていたのは、違法酒である『デイジー』を購入した者の名前が記載されていた。

そして、その名前の人物達をレイフォンは知っている。

つまり、こういうことだろう。

この名簿の事実がツエルニに広がると、間違いなく武芸科の信頼は地に堕ちる。

いや、それ以上にこの事実が学園都市連盟にでも知れ渡ってしまえば、ツエルニの存続が危ぶまれることになるだろう。

レイフォンを無理やり武芸科に入れて、ツエルニの存続を目指すカリアンからすれば絶対に避けなければならない問題である。

そして、サリンバン教導傭兵団もこの事実を隠したいはずだ。

この世界でグレンダンの名を上げたのは間違いなくサリンバン教導傭兵団のおかげ

である。

故に名譽や武勲は計り知れないものであり、他の都市の武芸者達からも一目置かれる存在がこのような密売に加担したとされれば、間違ひなくその名譽に傷がつくだろう。

「私は彼らが持ち込んだことへの事実を目を瞑った代わりに、ツエルニの武芸者が違法酒を買ったとする事実の証拠を消してもらった」

「で、こつちはそのおかげでこうして堂々と歩けるといふわけさ」

余裕に満ちた表情で茶菓子を頬張るハイアに、レイフオンは視線を反らすように自分の飲み物を口にする。

レイフオン自身、ハイアの行動にもカリアンのやり方にも納得しているわけではなかったが、既にこの話は完結をしていた。

一学生であるレイフオンが口を挟む問題ではなかった。

「では、僕を呼んだ理由は？」

「それは第十小隊についてだ、この件にはまだ一つだけが残っている」

第十小隊、それはシャーニツドの古巣であり、彼の盟友であったティン・ディーが隊長を務める小隊。

そして、『『ディジー』』を購入した人物であった。

「彼らは、このディジーを既に服用している。この事実が知れ渡れば、ツエルニは都

市對抗戦を迎える前に終わってしまうだろう。だからこそ、内密に処理する必要がある」

「それは僕に彼らを殺せと……？」

「いや、そんなことは望んでいない。ただ彼らに静かに舞台から降りてもらおうと

いうわけさ」

カリアンは簡単にそう言ったが、レイフオンにはそれらしき手段は思い付かない。

実力で圧倒的なまでに蹴散らせばいいというわけではないだろう。

そんなレイフオンの疑問に答えたのが、話の流れを見守っていたハイアであった。

「そこで、元天劍授受者様、サイハーデンの担い手の出番というわけさ。使えるんだ

ろう？ 封心突さー」

「実はすでにハイア君から技の詳細は聞いている。この技ならば、彼らに大怪我を

負わすことなく、倒すことができる」

そうなれば後は私が彼らと話をつけよう、とカリアンが口にするが、そう簡単にいくものではない。

封心突——簡単に言えば全身を巡る剄路に針状の凝縮した衝剄を撃ち込み、剄路の働きを止めて神経や肉体に影響を与える技である。

つまり、相手の身体に正確に打ち込む技術が必要になるのだが、レイフオンにとって

それは問題ではない。

問題、それは――

「問題は、剣を使っている天劍授受者様に、サイハーデンの刀技が使えるかということ  
さ」

挑発めいたハイアの言葉に、レイフォンは苛立ちを隠せなかった。

「部外者は黙っている。もしくは用が済んだんならさっさと出ていけ」

「はあ、こっちは親切心で言っているだけさ。ただ俺たちもまだ要件は全部済んでないからここで待たせてもらおうさ」

ソファにどつぷりと座ったハイアは、隣の少女が挙動不審な様子なのにも気にすることなく、再び注がれた紅茶を口に運ぶ。

「おや、君との交渉は既に終わったと思っていたのだが？」

「それは今回の件だけさ。言ってみれば今度の話はサリンバン教導傭兵団の悲願とでもいえるべきか」

「悲願……？」

一瞬だけ笑みを消したハイアに、レイフォンは思わず聞き返すと、ハイアは勿体ぶつた口調で口にした。

「そう、廃貴族さ」



・  
・  
・  
・

地獄の鍛錬のない休日。

シャーニツドはセヴアドスに連れられて、貴重な休日に商業区の中を歩いていく。休日ということもあり、シャーニツドもセヴアドスも普段着ている制服ではなく、私服なのだが、二人とも目立つ容姿のため、道歩く女子生徒達から羨望の眼差しを受けている。

シャーニツドも自分自身がモテることは理解していたが、目の前を歩く男はそれを凌駕しているように思えた。

戦闘狂なところさえ直せば、と後輩の残念さに少しの安堵と心配をしているシャーニツドに対し、当のセヴアドスは周りの目を気にすることなく目的地に向かっている。

「はい、着きましたよ」

「着きましたよって、ここケーキ屋じゃねえか」

程なくして、辿り着いた所はシャーニツドも何度か足を運んだことがあるケーキ屋であつた。

今日の目的は小隊員として推薦する人物への顔合わせということになつていたので、思つていたような場所とは違い戸惑うシャーニツドを他所に、セヴァドスは店の扉に手をかける。

「ええ、私の行きつけです。とりあえず中に入りましょうか?」

「はあ、男二人でこんなところに来るとは思つてなかつたぜ」

先に店に入つていくセヴァドスの後ろをシャーニツドは歩いていく。

シャーニツド達を迎えたのは、セヴァドス達の友人であるメイシエンであつた。

メイシエンの制服姿を、凝視していたシャーニツドの隣でセヴァドスが右手を上げる。

「あ、セヴァちゃん……」

「こんにちは、メイさん。ミイさんは?」

店内を見渡すセヴァドスに、メイシエンは店内の奥の方を指さす。

そちらの方からは賑やかな声が聞こえていた。

「ミイならあそこに」

「おお、相変わらず愉快な人ですね。とりあえず、ブルーベリーケーキを一つ、シロップだくだくの、フルーツ多めで。飲み物はとりあえずいつものでお願いします」

「あ、俺はブレンドでいいわ」

「はい、かしこまりました。ごゆっくりどうぞ」

手慣れた様子でメイシエンにメニューを頼んだセヴァドスに倣って、シャーニッドも店内を横断する。

どうやら時間帯が朝ということもあり、店内には客の姿はあまり見受けられなかった。

一番、奥のテーブルにたどり着いたシャーニッド達を迎えたのは、顔見知りの人物であつた。

「いらつしやいませ、ご主人様！ ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ メイドにしますか？」

「ケーキにします」

何故か、メイドの姿をしたミイファイとセヴァドスが、いえーいと互いにハイタッチを言う。

バチバチとお互いの手を重ねあう二人を見て、シャーニッドは羨ましそうに口をす

る。

「楽しそうだな、お前ら」

「紹介します、こちらの五月蠅いメイドがミイさん」

「はい、五月蠅い担当のミイファイです。先輩、おはようございますー」

紹介をされても、何度も顔を会わしているため、名前も知っている。

突然の紹介に戸惑うシャーニツドを他所に、セヴアドスはもう一人の人物の紹介をする。

「で、こつちで恥ずかしそうに顔を隠しているメイドが、お目当ての人物でございます」

「はあ？」

セヴアドスの手の先には、長身の身体を器用に丸めたナルキの姿があった。

彼女も何故か、ミイファイ同様のメイド服であったが、何故かスカートの丈はやけに短かった。

スラツとしたしなやかな足に、シャーニツドが視線を奪われていると、ミイファイがセヴアドスの肩を叩く。

「セヴアちゃん、さつきからナツキが恥ずかしがって動こうとしないんだよ」

「ふむ、ナツキさん、ご主人様が来ましたよー」

両手を上げて、とても良い笑顔を浮かべるセヴアドスに、ナルキは顔を伏せながら声を荒げる。

「誰がご主人様だよっ!! ああああああつ! だから私は賭け事が嫌なんだよっ!!」

「別にお金をかけてないんだからいいじゃん。一位が最下位に命令するだけの簡単なゲームだよ」

「そうですよ、ナツキさん。可愛いですよー」

「あ、レイとん用に写真撮っておこうか?」

「いいですね。カメラは用意してますよ」

「やめろよっ!!」

とても楽しそうな二人に遊ばれる玩具となった後輩に対して、シャーニツドは気の利いた言葉は残せなかった。

「なんていうか、頑張れよ」

「ちよっ!?! 助けてくださいよっ!」

「シャーニツド先輩、他人事のように言ってますけど、彼女はこれから貴方のチームメイトになるんですよ?」

写真を撮り続けるセヴアドスが不思議そうな顔をして言うが、そんなことはシャーニツドも初耳であった。

何より、当のナルキもそんな事実を知っているはずもなく――

「はあ?! どういうことなんだよ!」

「え? ナツキさんに第十七小隊に参加してもらおうと思っ

当たり前のように答えるセヴァドスに、ナルキは額に汗を滲ませながら慌てて嘸みつく。

「いやいや、私は都市警の仕事があるから小隊員なんて無理だし、なりたいたも思っていない。何より私自身の実力が小隊員として伴っていないだろ!」

「大丈夫です、ナツキさんだったら小隊員としてもやっ

ざとなれば私もお手伝いしますから」  
ナルキの拒否にも、セヴァドスは慌てることなく、ニコニコと笑みを浮かべたまま表情を崩すことはしない。

そんなセヴァドスの様子に、ナルキの表情が段々と焦りが見え始める。

シャーニッドはその心境を大いに理解はできる。

セヴァドスの起こした行動には、常に被害者が現れるからだ。

「いや、しかし」

「シフト次第では、都市警の仕事も、小隊員も両立できないことはありませんよ。何より小隊員になれば、ナツキさんのスキルアップにもなります」

否定をしようにも、セヴァドスの口撃から逃れる術をナルキは持ち合わせていない。  
「でも……」

「それに困ったことに第十七小隊は今、人数不足で次の小隊戦に出れない状況なんですよ。私が参加できればよかったです、一応第十四小隊に所属している身ですから」

「う……」

「もしも、第十七小隊に参加してくださるなら、罰ゲームの一日メイドを辞めてもいいですよ？」

段々と押されてきたナルキに対し、セヴァドスは飽とも言える提案を出してくる。

セヴァドスの発言に、ナルキは今の自分の服装を思い出した。

「なっ?! しかし、私の意志はそんなことで……」

「いいのですか? これから十時間以上、ナツキさんはメイドさんにならなくてはいけないですよ? あと何回、ご主人様と呼べばいいんでしょう?」

確実に罠だとしても、意思を曲げることになったとしても、もういいんじゃないか――

ならば、この状況（ふくそう）から逃げ出せればいいのではないか?

そんな諦めが、ナルキの脳裏を過ぎっていた。

「おう……」

「フオーメッドさんから承諾は既に得ています。 ナツキさんには期待しているから頑張ってくれないか、だそうです」

「事後承諾じゃないか……」

上司まで抑えられ、ようやくこの状況下でナルキは自分が完全に嵌められていることに気がついた。

昨日のカードゲームの罰ゲームにしろ、上司への事前連絡にしろ、全てはセヴァドスの掌の上の出来事であった。

こうなればナルキにできることはもう何もなかった。

「やりましたよ、チームメイトゲットですね」

「お、おう」

にこやかな笑みを浮かべるセヴァドスに、シャーニッドは声を詰まらせながら頷く。

涙目のナルキには悪いが、小隊員を増やしたいシャーニッドが彼女を助けることはできなかつた。

ただ、小隊では気遣ってやろうと、セヴァドス被害者の会のメンバーとして同情的な目を向けるしかなかった。

「けど、いいのか？ 嫌がつている相手をどうこうするのは俺の趣味ではないんだが



？」

「ああ、大丈夫ですよ。いつも授業では私とレイフォンが相手していますが、そろそろ次の段階に進んでもいいと思っていたんです。実際、本人は気づいてませんが、当初よりも大きく成長してますよ」

ナルキは確かかの本人の思っている通り、現時点では小隊員としてのレベルには達していないかもしれない。

だが、セヴァドス達に負けないように、と喰い付いてくる意思を持つ数少ない武芸者の一人である。

潜在能力も悪くないことから、恐らく来年には小隊員になることも可能だろう。

ならばこの機会に、小隊員として訓練をしておけば、武芸者としても、夢である警察官になる上でもプラスになることだろう。

セヴァドスの思惑を聞かされたシャーニッドは、感心したように口にする。

「なんて言うか、ちゃんと友人してるじゃねえか？」

「はい、こう見えて友達を大切にする派なんですよ」

ただ純粹に笑みを浮かべるセヴァドスの表情に、シャーニッドは袂を分けた二人の友人を想う。

友人としてできること――

「ああ、そうだな。友達は大切にしないと  
彼らと戦うのは三日後。」

シャーニツドは、あの時の歪みを直そうと決意した。

## 第二十八話

試合が始まる十分前。

ステージへと続く選手通路でレイフォンはシャーニツドに呼び止められた。

いつも以上に真剣に、そして覚悟を決めたかのような眼差しを向けられたレイフォンに、シャーニツドは話を切り出した。

「頼みがある。　デインとシエーナは、俺にやらせてほしい」

「え？」

「会長から話を聞かされた。　デイン達第十小隊員に今回の対抗戦に出れなくなるくれえの怪我を負わせるんだらう？」

「それは……」

シャーニツドの言う通り、レイフォンはカリアンにそのように頼まれている。

先日話した通り、封心突ならば、彼らに大怪我を負わすことなく試合を終わらせることができるかもしれない。

だが、少しでもミスをすれば、彼らへの身体のダメージは計り知れないだろう。

そんなレイフォンの気持ちを感じたのか、シャーニツドは珍しくため息をついてレイ

フオンから視線を反らす。

「命に別状はないって言っても、俺はお前にそういうことをしてもらいたくないと思っている。恐らくニーナがいたら同じことを言って反対するだろう」

確かにシャーニツドの言う通り、ニーナがいたならば、カリアンに直談判してでも取り止めようとするだろう。

何より、ツエルニの仲間を愛するニーナならもつと真つ直ぐにぶつかっていったかもしれない。

「だが、会長さんの言いたいこともわかる。この事実が明るみになれば、武芸科全体へのダメージについてもだ」

同時にカリアンの思惑も理解ができる、とシャーニツドは言う。

違法酒であるデイジーの服用が公になれば、責任として武芸長や生徒会長も解任されるかもしれない。

いや、それだけではない。

この事実が都市連盟にでもバレてしまえば、ツエルニは一卷の終わりだろう。

「それでも、あいつらが救われたい」

ツエルニを守りたい、その気持ちに嘘はないが、同時に親友達を助けたいと思つてしまふのは人としての感情は決して間違いない。

「けど、どうする気なんですか？」

「ああ、とりあえず腹を割って全力でやり合おうと思っている」

シャーニツドにしては、力技すぎると怪しむレイフォンに、シャーニツドは苦笑いを返す。

「お前の親友さんを見てると、悩んでるのが馬鹿らしくなっちゃったんだよ、まあ、あと俺もそろそろ囚われちゃいけねえなって思ってたな、第十七小隊の一員として、な」

そう言って笑うシャーニツドは、レイフォンの胸を拳で叩く。

「だから頼んだぜ、エース」

・  
・  
・  
・

試合開始のサイレンが鳴り響いて程なく。

攻撃側にも関わらず、一向に姿を見せることのない第十七小隊に対し、ダルシエナは司令塔であるデインに視線を向ける。

「デイン、これは？」

「待ちの姿勢だな。向こうは急ごしらえの隊だ。この勢いで取るぞ」

対戦相手である第十七小隊は、隊長であるニーナが不在で、現在は代理でシャーニツドが指揮している。

指揮の慣れていない狙撃手では作戦は立てられない、そう考えたデインは一気に相手の王を取ることにした。

狙撃手のシャーニツドが好みそうなポジションは既に抑えている。

唯一の懸念材料の一年エースは、デイン自身とダルシエナで当たれば時間を稼ぐことも可能だろう。

陣から出ようとするデインに、仲間の小隊員が慌てて止めに入る。

「しかし、向こうがこちらを釣って、その隙に旗を狙うのでは？」

「それはない。奴は絶対に俺達を狙いをつける」

先日、会った時のシャーニツドの目を見れば、そのような策を取るとは到底思えない。逆に第十小隊は攻撃に特化したチームのため、守りに入った方が崩される、そう判断

したデインはすぐさま小隊員に指示を出す。

「シエーナと俺と残り三人で、シャーニツド達を急襲する。アト口はここで念威操者（セレナ）を守れ」

「了解っ!!」

デインの指示に、第十小隊の面々は行動を開始した。

ダルシエナを先頭に、デイン、そしてその二人を守るように三人の小隊員が陣取る。これが第十小隊の必勝戦術である。

木々をすり抜け、念威操者に索敵を任せて、一気に相手の陣営へと踏み込む。

そろそろ仕掛けてくるな——デインがそう思ったその瞬間。

突如として前方に白い煙が舞い上がる。

「なっ?! これは?」

「煙幕………つ来るぞ!!」

デインと声と同時に現れたのは、第十七小隊のレイフォンである。

レイフォンは一番近くの小隊に斬りかかり、第十小隊員の錬金鋼を砕く。

「慌てるな、エゼル、ランセル、マグルス、奴を取り囲めっ!!」

デインの指示に、三人の小隊員はレイフォンに迫るが、卓越された剣技と圧倒的な力量により、完全に圧倒していた。

「三人全員を……」

「つこの化け物め」

圧倒的な才能に、デインは苛立ちを隠せなかったが、冷静に戦況を読む。

恐らく、レイフォンを討ち取ることとはできないだろう。

それはここでデインとダルシエナが加わっても同じである。

「シエーナツ！ シャーニツドを取りに行くぞ!!」

「っ、ああつ!!」

——ならば、三人が時間を稼いでいる間に、自分達が相手に頭を取る、そう考えたデインはダルシエナを連れてこの場から離脱する。

レイフォンからの追撃もなく、他に罠の仕掛けもない。

高原地帯を抜け、再び森林地帯に足を踏み入れようとしたその時——前方から探し人が現れた。

「よっ、どうやらこつちの予定通りだな」

「シャーニツドツ!!」

現れたシャーニツドの手には、狙撃銃の代わりに見慣れない黒い双銃が握られていた。

ゆつくりとこちらに向かって歩いてくるシャーニツドに、デインとダルシエナは戦闘



態勢を取る。

「狙撃手のお前がこうして姿を現しているのは何かの策か？」

「いや、そんなことは考えてねえよ」

シャーニツドは銃口をこちらに向けると、普段通りの不真面目そうな笑みを浮かべた。

「ただ、俺が自分の過去と決着をつけに来た。それだけだ」

・  
・  
・  
・

さてと、どうするか。

レイフォンがきつちりと仕事を果たしたことに感謝しながらシャーニッドはかつてのチームメイトと対峙する。

恐らく、シャーニッドがこうして目の前に現れることを想定していなかったのだらう。

それも無理のない話だ、シャーニッドは狙撃が専門であり、白兵戦は専門外。

公式戦においてシャーニッドが、こうして攻撃手（アタッカー）の目の前に立ちこと自体データになかったはずである。

「舐めるなよっ!! シャーニッドッ!!」

そんなシャーニッドの行動に、真っ先に反応したのがダルシエナである。

彼女は、ランスを構えるとそのまま剄を纏って、目標物を貫かんと踏み出す。

先手を取られることになったシャーニッドは、冷静さを保ち、ダルシエナの動き、そして背後のディーンの動きを観察する。

「なあ?」

「それはこっちのセリフだけ、シエーナ」

そして、ぎりぎりのところまで引き付けて、そのまま前転してダルシエナの横をすり抜けると、そのまま双銃を構える。

「があは……」

「俺は狙撃手だけ。お前らの動きを一番見てきた自負がある」  
ダルシエナの背中に、ありつたけの剽弾をぶち込む。

背中に攻撃を受けたダルシエナの動きが止まったが、彼女の突撃の際に発する背中からの衝剽に威力が緩和される。

できれば、一撃で仕留めておきたかった、思わず舌打ちをつくシャーニツドに背後からワイヤーが降り注ぐ。

「ちっ黙れ!!」

迫りくる攻撃に、シャーニツドの頭の中の仮定が確信へと変わる。

「ああ、やっぱりな」

降り注ぐワイヤーに恐れることなく、シャーニツドは前方へと足を踏み出す。

—— 駆け抜ける。

そして驚愕の表情に歪むデインに迫った。

「馬鹿なっ!?!」

「剽量が増えたかもしれないねえが、全然使いこなせてねえな。自分の力に完全に振り

回されてやがる」

デインは迫りくるシャーニツドに応戦のワイヤーを放つが、それをシャーニツドは横へと飛んで回避する。

「いくら力を得ようとも、それを操る身体がついてこれねえんなら、こうなるわね」  
「ぐっ!!」

シャーニツドは銃をデインに向けると、そのまま再び乱射する。

デインが慌てて、ワイヤーを使つて防御を取るが、シャーニツドの弾丸の方が早く、数はデインの身体を捉えた。

「それにこの距離で俺と戦うことは想定してなかつたろ？」

「シャーニツドっ!!」

よろめくデインに、追撃をしようとしたシャーニツドに、今度は背後からダルシエナが迫る。

ダルシエナの動きは確かに早くなつたかもしれない。

だが、デイン同様に粗さが目立っている。

それに、シャーニツドはこれ以上の速さの攻撃を何度も訓練で味わつたことがある。

振り向きざまに、シャーニツドは銃を撃つが、放たれた弾丸はダルシエナの足元へと着弾する。

「何処を狙っているっ!?!」

「いんや、狙い通りだろ?」

シャーニツドの弾丸に、足運び（ステップ）を乱されたダルシエナの動きが落ちる。

その瞬間をシャーニツドはダルシエナの足元へ滑り込む。

「シエーナの突撃槍は、距離を詰めれば取り回しが遅れる」

「くっ!」

シャーニツドの足払いに、足を取られて転倒としたダルシエナに、銃口を向ける。

だが、シャーニツドの引き金を引く前に、デインの攻撃が迫り、シャーニツドは後方へと飛びながら距離を取る。

「相変わらず絶妙な判断だな」

「黙れっ!!」

距離を取ったシャーニツドに、デインはワイヤーを天に這わせるとそのまま多方向から囲むように放つ。

降り注ぐワイヤーの槍は、地面を抉るほどの威力を誇っていたが、肝心のシャーニツドを捉えることができない。

「だが、威力は上がったかもしれないが、繊細さがかけたな」

再び走り出したシャーニツドは、双銃を構えて、デインとダルシエナに弾丸の雨を降り注ぐ。

その攻撃をダルシエナとデインは、回避することができず、互いに防御態勢のまま耐え忍ぐ。

「っ知ったような口を利くんじやないっ!!」

「知ったように言ってるんじやねえよ。知っているんだよ」

シャーニツドは、肩で息をする二人に銃口を向けながらゆっくりと足を進める。

明らかに身体にまで影響が出ている。

もう時間はあまり残されていない。

故にシャーニツドは決着をつけなければならぬ。

「なあ、覚えているか。昔、俺とお前でどつちが皿に乗った料理を先に空にするかつ

て馬鹿なことしたよな」

それは一年の頃の話だ。

訓練中の動きに、デインから指摘があったときの出来事だ。

あの頃は、まだまだ大人しかったダルシエナを間において、馬鹿みたいな量の料理を

二人で食べた時の思い出。

結果、二人で次の日に仲良く入院したことを今でも思い出せる。

「シェーナ、昔隊長の誕生日にケーキを作るって言って、材料買いに行つたことを憶えているか？」

先代の隊長に何かしようと、二人でパーティーの準備をしていたときのこと。

シャーニツドとデインで、飾り付けをしていると、台所から凄まじい異臭がして、結

果、隊長を喜ばせるどころかドン引きさせたのは、今となってはいい思い出だ。

「三人で連携の練習した時に、俺がデインの頭部に模擬弾を誤射した時は笑えたよな？」

やけに張り切っていたデインの後頭部に、シャーニツドが誤って真つ赤のペイント弾をぶち込んでしまったことがある。

あの時のシェーナの笑った笑みは、今でも鮮明に思い出すことができる。

「さっきから何を言っている?! 昔話でもしに来たのか!」

「ああ、そうだ。俺達は仲間だった、そうだろう?」

確かにシャーニツドとデイン達は仲間だったのだ。

同じ釜の飯を食い、苦楽を共にした戦友。

袂は分けたとはいえ、それだけは絶対に変わることはない事実だった。

「じゃあ、あの時何で隊を離れたんだ?! お前がいれば、デインも……私も」

「わからないのか?」

いや、本当はわかっているのだろう。

シャーニツドは、それが嫌で隊から逃げ出し、二人は気づかないふりをした。

それが本当の間違いだったのかもしれない。

「シェーナッ!! 裏切り者のっ」

「デインは隊長が好きだった」

だからこそ、シャーニツドはもう終わらせることにした。

「そんなデインをシェーナが好きで、俺はシェーナが好きだった……わかるだろ？」

俺達は最初から間違えてたんだよ」

嘘なんてつくべきではなかった。

全員が本当の考えを口にすることができれば、こんなことにはならなかった。

「誓いじゃない。偽ったことが間違いだったんだ」

そうすれば、デイン達とシャーニツドは共に戦うことができたかもしれない。

だが、それは既に叶えることのできない願い。

「っ確かに最初はそうかもしれないが、デインや私はこのツエルニのことを想ってい

る!! お前はそうじゃないのか？」

ダルシエナから、攻撃の意志が消えた。

と同時に、彼女の中で抱えていた感情が噴き出すように、言葉となつて現れた。

その眼には涙が溢れ、その姿にシャーニツドは胸を締め付けられそうになる。

「いや、俺もこのツエルニを守ろうと思っっている」

「……なら、お前は何故俺達の邪魔をするっ!!」

ダルシエナに続くように、今度はデインが胸の内の思いを吐き出す。



そんなデイン達に、シャーニッドはしつかりと前を向いて応えた。

「お前達がやり方を間違えたからだ。違法酒に頼り、越えちやいけねえ一線を越えちまった」

デイン達の感情とは違い、犯した罪は許されることではない。

この都市に住まう全員への裏切り行為だ。

「なあ、デイン、シエーナ。そんなものに頼って勝つても、あの人にちゃんと報告できてるのか？」

報告なんてできるはずがない。

彼女は絶対に悲しむはずだ。

「ツエルニをぎりぎりに追い込んだ俺達を、それでも応援してくれてる奴らに胸を張れるか？」

張れるわけがない。

今にも責任感や罪悪感に押しつぶされそうなデイン達がそんなことをできるはずがない。

デイン達自身がそんな自分を認めることができないうらさう。

「なら……なら、俺達はどうすればよかったんだっ!!!」

それは苦悩の言葉だった。

「デインもダルシエナも真面目で、優しく、そして責任感のある人間。誰かを頼るといふことができなかつた。」

「綺麗事は何とでも言えるっ!! だが次に負ければ、俺達はっ、ツエルニは終わるんだぞっ!!!」

「デインの言うことは正しくもある。」

ツエルニは、今崖っぷちに立たされている。

今年の大会の成績次第では、以前訪れた廃都市のようになるかもしれない。

「それでもお前はそんなことが言えるのかっ!!!」

デインの言葉に、シャーニツドは力の籠った眼で答える。

「言つてやると——」

「お前らは自分の限界を見たことがあるのか? 間違つたやり方の末路を知っているのか? 俺はそんな馬鹿二人を知ってるぜ。自分の限界なんて知らない、ただ純粹に武芸に没頭する馬鹿と自分一人で全部抱えてついに支えきれなくなつた馬鹿を」

それは今年ツエルニに入学した二人の新入生の話。

確かに圧倒的な才能があるだろう、だがそれでも膨大な練習量と日々の弛まぬ努力を重ねて、日々成長していくその姿は、確かに心が惹かれるものがある。

眼の前の仲間を助けようと、汚れ仕事を買つてでも、最後にはその誤つたやり方に

より、名誉と信頼を失い都市を追われた事実を持つ少年の助けになりたいと思つた。才能があつても、成功も失敗もする。

そして、才能があろうとなかろうと、強くなるには努力しなければ強くなれない。そんな当たり前のことだった。

「答なんかねえよ。俺達はこの都市を守るために、仲間達共に戦つていくしかない。

お前は一人で考えすぎなんだよっ!! 仲間を頼れっ、この石頭がっ!!」  
右手の銃を投げ捨てたシャーニツドは拳を握る。

振りかざした拳は、呆然とした様子の親友に向かつて振りぬいた。

・  
・  
・  
・  
・

シャーニッドとデイン達の過去の清算に決着をつけている頃。

試合会場から離れたホテルの周囲を取り囲む集団がいた。

サリンバン教導傭兵団。

その先頭には、目立ちやすい赤髪を、黒いバンダナで巻き付けるようにして隠したハイアがその時を待っていた。

「試合が盛り上がって何よりさー」

遠く離れた試合会場の方角に視線を向けながらハイアは笑みをこぼす。

今頃、ツエルニの目は違法酒の取り締まりと使用者との試合に目が向けられている頃である。

それがハイア達の狙いであった。

「その間にこっちは、例のブツを頂くだけさー」

数名の部下を引き連れ、残りの者にこの建物の周囲を囲むように指示する。

中にいるモノを逃がさないように、外部からの邪魔をやらせないように。

『二人とも試合会場にいるのを確認した』

「それは何より、元天劍授受者様は試合でこっちに来れないと思ってたが、御曹司様も向こうに行ってるのはラッキーさー」

カリアンの目をディジーに向けさせ、都市警察の大部分は会場に詰めかけている。

最大の懸念材料であったグレンダン組の二人も、一人は試合中、もう一人は観戦という確認が取れた。

たとえ、レイフオン達が待ち構えていようとも、ハイア自身は実行させるつもりだったが、消耗はできるだけ避けるべきだというフェルマウス達の助言通りの展開となった。

「団長、周りの目は全て取り除いた」

「警備もザルで、楽な仕事になりそうさー」

団員の一人が、警備に当たっている武芸者を後ろから殴って気絶させる。

気絶させた武芸者達の身体を縛って、建物の陰に放置すると、ハイアを先頭に傭兵団員がホテル内へと侵入していく。

このホテルは老朽化が進み、近くの湖にでも遊びに来ない限り、人が泊まることのないホテルである。

人数も最低限であり、アレを置いておくには適した場所とも言える。

一階の裏手から侵入し、従業員用の階段を音を立てることなく、素早く上へと駆け上がっていく。

周囲にはフェルマウスの念威端子が、探索を行い、目的の場所へと一つまた一つと確

実に近づいていた。

『しかし、まさかこんなところでアレの情報が手に入るとは思ってもいなかったな』

「それもこれも、俺っちの日頃の行いがいいからさー」

「ええー」

ハイアとフェルマウスの会話の掛け合いに割って入るように第三者の声が響く。

ミュンファ・ルフア。

サリンバン教導備兵団に入って七年も経とうとしているが、まだまだ半人前の弓使いである。

幼馴染である彼女の言葉に、ハイアが目を細くさせて睨みを聞かせる。

「何さ、ミュンファ」

「い、いえ何でもありません」

半笑いのミュンファに、これが終わったら説教してやろうと、団長としての責任を感じているハイアは遂に目的の階へと到着した。

フェルマウスの念威にも、不審な点は見当たらず、邪魔者はいない。

飛ぶように上ってきた足並みを、忍び足に切り替えて目的の部屋へと向かう。

『たまたま念威を飛ばしていた時に、たまたま通りかかった人間が、たまたま廃都市に行つた人間で、たまたまその話をしてたというのは、誰かの作為的にも思えてならない

のだが』

「考えすぎさー、フェルマウス。俺っち達の役割を果たせ、そう誰かが言ってるのさー」

不信任感を露わにするフェルマウスだが、既にその件の裏は取っている。

間違いなくあの時間聞いたのは、本当の偶然と言える。

——これはリユホウの置き土産かもしれないさー

先代から聞かされた教導傭兵団の悲願。

グレンダンに連れ帰ることができれば、ハイアが天剣を得ることが出来るかもしれない。い。

それこそ、ハイアの考えうる最高の親孝行であった。

「では運命のご対面さー」

扉を開く。

そこには——廃貴族を宿したニーナが眠りについていた。

中央のベットに横たわるニーナの周りには、監視カメラのようなものが見えたが、既にそれらはフェルマウスの念威により干渉されている。

部屋へ一歩踏み入れたハイアだったが、目の前の光景に違和感を感じた。

眠っているニーナにかけられた白いシートが少しだけこんもりと盛り上がっている。

まるでもう一人誰かがそこにいるような――

「おや、本当に来ましたね」

凜としたその声に、ハイア達傭兵団の目がベットへとくぎ付けとなる。

めくれ上がったスーツから現れたのは、患者服に身を包んだ眠るニーナと完全武装した一人の少年。

「初めまして、サリンバン教導傭兵団の皆さま」

ベットから降りた少年は優雅な一礼をハイア達に向けた。

「セヴァドス・ルツケンスといいます」

こうして、ハイア達は次期天剣候補というツエルニの爆弾と遭遇した。



## 第二十九話

セヴァドスがハイア達サリンバン教導傭兵団との出会った頃。

遠く離れた試合会場で、ミイファイは珍しく額に冷や汗を流しながら、隣の席に視線を向ける。

「あのーゴルネオ先輩?」

「今の俺はセヴァだ」

そう答えたのは、何故か長い銀髪のカツラを被った第五小隊隊長のゴルネオ・ルツケンスであった。

決してその弟であり、ミイファイ達の友人であるセヴァドスでは断じてなかったが、当の本人（ゴルネオ）は自分自身をセヴァドスと言い放った。

ミイファイの隣にいるメイシエンも、セヴァドスが来ると思っていたのにも関わらず、強面の武芸者の登場により完全に身体が固まっていた。

そんな二人を見て、ゴルネオは困惑しているのはこちらだと言いたくなる。

そもそも今回、ゴルネオがこのような茶番に付き合っているのには、セヴァドスからの頼みだからであった。

凄まじく上機嫌のセヴァドスを見て詳しい理由は聞かなかつた（嫌な予感がしたので聞きたくなかつた）が、どうやら今回は会長であるカリアンも絡んでいるようであつた。

——会長も絡んでいることだ、そう大事にならないだろう、いやならないと信じた  
い、信じさせてほしい。

ぶつぶつと呟くゴルネオに、隣のミイファイ達は席を一つ隣へとずらしたのだった。

そんなゴルネオの苦悩を気にすることなく、セヴァドスは笑みを隠すこともせず、目の前の来客者を観察する。

発する劉の流れ、足の動き、視線の先、それらをセヴァドスは一つ一つ確認をしていく。

——間違いなく彼らは戦闘集団。それもグレンダンでも中々いなかつたほどの。期待を裏切らない武芸者達に、セヴァドスの笑みは益々深くなっていく。

「サリンバン教導傭兵団、数多の移動都市を渡く流浪の戦闘集団であり、グレンダンの名を広めた立役者。結成当初の目的は、狂つた都市の電子精霊を捕らえること。つまりは廃貴族を狙う集団というわけですね」

サリンバン教導傭兵団の目的などには、セヴァドスは全くの興味はない。

ただサリンバン教導傭兵団の団長だったものを知っている。  
リュホウ。

レイフォンの武芸の師であるデルクの兄弟子であり、サイハーデン刀争術の担い手である。

そんなリュホウが既に亡くなっていること、そして彼の武芸の血脈は次世代に受け継がれていること、そんな彼が作り出した戦闘集団はまだ健在であることをセヴアドスは知っていた。

グレンダンにいたら出会うことのなかったかもしれない幸運に、この地から遠く離れた場所で日常を謳歌しているだろうアルシエイラに対し、セヴアドスは感謝を込めた。

「ああ、そういえばアンタはルツケンスの人間、俺たち達の事情も少し知ってるわけさー」

目の前の青年の言ったことは、正解でもあり、不正解でもある。

確かにセヴアドスは、ルツケンスの人間であるが、リュホウやサリンバン教導傭兵団のことを教えてくれたのはレイフォンの師であるデルクであり、廃貴族のことは女王陛下であるアルシエイラの口から伝えられていた。

ただそのような事実、今からは始まるだろう闘争からすれば取るに足らない事実である。

『少しよろしいでしょうか?』

「む、かまいませんよ」

興奮の余り、身体中の血が高ぶっていくセヴァドスの頭上に、一枚の念威端子が宙を舞う。

冷静で無機質な、しかし微かな動揺が見られる声にセヴァドスは快く言葉を返す。

『ありがとうございます。貴方はどうやって私の念威から逃れたのですか? 先程、私は貴方が試合会場に入ったのを確認しています』

「なるほど、その件ですか」

疑問を擁す念威端子からの声に、セヴァドスは自らネタ晴らしを行うことにした。

まずセヴァドスは、ここ最近自分自身が誰かに見られている気がしており、最初はその見事な手際からフェリ辺りが自分を監視していると考えた。

しかし、フェリならそのうち何か反応するだろうと思っていたが、待てど待てどフェリからの反応はなかった。

そんなとき、カリアンからの連絡が届き、今回の件の説明を受けたのであった。

「私も会長さんから貴方達のことと、廃貴族を探していることを聞かされました。

レイフォンも、会長もその存在のことを知らなかったようですが、私は一度、廃都市で出会っていましたし、ニーナさんに取りついていることも知っていました」

その偶然が、今回のような幸運を生み出すことになった。

セヴァドスは、すぐにカリアンにニーナをここへ隠すことを進言し、自分は護衛としてここに潜んでいたのである。

自分がここにいれば、サリンバン教導団傭兵団も仕掛けてこないだろう、と言ってカリアンを安心させたが、セヴァドスは、自分の思惑を通すためにある方法を思いついた。

「試合会場には身代わりさんに行って貰い、私はここで潜伏していたというわけです」  
監視ということもあり、念威端子は常にセヴァドスを遠くから観察していたため、セヴァドスの兄であるゴルネオの変装に気づくことはなかった。

念のため友人であるミイフィとメイシエンに変装ゴルネオの脇を固めてもらい、セヴァドスはニーナと同じベットに入るといふ予想外の行動でサリンバン教導団傭兵団の監視から逃れたのである。

『こちらの動きは読まれていたということですか』

「そういうことです。で、これからどうしましょうか?」

こうして彼らの誘拐は頓挫してしまったことになるが、この程度で辞められてしまつてはセヴァドスとしても面白くない。

そんなセヴァドスも思惑を知ってか知らずか、向こう側としてもこれだけで終わらせ

るつもりはないようである。

「アンタが大人しく廃貴族を渡すっていうのはどうさー」

「ふむ、確かに私もグレンダンから頼まれているようなものですね」

誘拐の次は、交渉ということだろう。

確かに彼らの言う通り、セヴァドスはアルシエイラから見つけたら捕まえてくれと頼まれている。

この状況下で廃貴族を宿したニーナを捕まえることは容易だろう。

「そうさー俺たち達がグレンダンに帰ったら陛下にアンタがグレンダンに戻れるように頼んでみるさー。 アンタだってこんな都市にいるのは不本意のはずさー」

「……なるほど、それは魅力的な提案ですな」

「こっちは廃貴族を運べてラツキー、アンタはグレンダンに戻れてラツキーさー」

その提案は、双方に十分の利点のある内容だった。

傭兵団側は、グレンダンに廃貴族を運び、その任を終えることができ、セヴァドスは、楽園であるグレンダンに戻る事ができる。

そうなれば向こうで首を長くして待っているだろうサヴァリスとも戦うことができる。

いつものように他の天劍授受者とも拳を交えることができる。

そんな彼らの提案にセヴァドスは――

「あ、お断りします」

あつさりとお断った。

あまりの返答の軽さに、彼らが固まっているのを他所に、セヴァドスは自分の考えを口にする。

「よく考えてみると、私に全くメリットがないんですよ」

そもそもセヴァドスは、ツエルニに強制的に留学させられたが、レイフォンのように追放されているわけではない。

勿論、一年も経ってないうちに帰ってしまえば、アルシエイラから文句の一つでは言われそうだが、ツエルニへの強制送還はされそうである。

故にハイア達サリンバン教導傭兵団の助力は、セヴァドスにとって全く必要ではないものであった。

「ツエルニの生活も気に入ってますし、何より色々な発見と興味が至るところに溢れています。友人もできましたから、すぐにグレンダンへ帰る気はありません」

確かにグレンダンのように、戦い概のある人間が大勢いるわけもなく、汚染獣も頻繁にやって来ない。

戦うものとして物足りなさがあるのは、決して否定はできない。

しかし、グレンダンにはなかった錬金鋼への新たなアプローチ、様々な食材に研究された料理技術、平和ボケしたかのような娯楽の数々。

それらは十分にセヴァドスの好奇心を擽るものであった。

「もしも、グレンダンに廃貴族を運ぶことになるなら、私がグレンダンに連れていきますよ。もしよろしければその時、陛下にちやんとお伝えいたします。彼ら、サリンバン教導傭兵団の皆様は頑張っていましたよ、と」

こうすれば、貴方達の苦勞も報われますね、というセヴァドスの好意に、目の前の赤毛の少年は大きくため息をつく。

「なるほどさー、噂には聞いていたが、本当にアンタは変わってるさー。つまりは……俺達サリンバン教導傭兵団を舐めているっていうわけだろ？」

「ふふふふふ、別に舐めているわけではないですよ。そもそも私がこのような任を受けたのは貴方達と戦えるからです」

もうこれ以上の会話は必要ないだろう。

これからは待ちに待った楽しい時間。

セヴァドスの我慢は限界まで来ていた。

「さあ、戦いましょうか」



・  
・  
・  
・

「ここでは思う存分戦えませんね」

そう言つて、セヴァドスは眠りにつくニーナを右肩に担ぐと、そのまま左手を窓側に向ける。

セヴァドスの体に青い剄の流れを感じた瞬間、ホテルの壁が吹き飛び、その先に真っ暗なツエルニの夜が映し出される。

「では行きましょうか」

こちらに振り替えることなく、ぽつかりと空いた穴に足をかけると、そのままホテルから飛び降りた。

そんな彼にハイアは冷静に、フェルマウスへと指示を出す。

「後を追うさ、俺達もすぐに追いつく」

フェルマウスの念威を先行させ、セヴァドスに続くようにホテルから飛び降りたハイアは、視界の遠く先にいるセヴァドスに迫らんと一気に駆け出した。

ハイアの後を、ホテル内を囲んでいた団員達が続ぎ、念威を通じて指示を送る。

「俺が追いつくまで手を出すなさー、方角からしてだいたい行きたい場所はわかるさー」

そもそもこの地域一帯は老朽化が進み、人の流れも少ない。

入院患者のニーナをこのようなところに運んだということに、少し違和感を感じていたが、こうしてハイア達とやり合うことを考えれば、この地域一帯は戦場として最適だろう。

恐らく、この状況を作り出したのは、あの胡散臭そうな生徒会長殿だろう。

「つまり、会長さんはアレが俺達に勝てると思っっているわけさー」

舐められている。

未熟者ばかり集まる都市の支配者ごときの人間に。

ハイアは今まで色々な曲者達と渡り合ってきた経験が、幾多の戦場を乗り越え結果を出してきた事実もある。

たとえ、それが天劍授受者の最候補とする天才だろうが、サリンバン教導傭兵団の団

長である自分が負けるわけがない。

ハイアの読み通り、セヴァドスの走力は格段に落ちてきた。

この場で迎え撃つつもりだろう。

「どうしたのさー、逃げるのはもう止めたのか？」

「いえいえ、中々いい場所に辿り着いたと思ひまして」

ひと際高いビルの上に立ったセヴァドスは、周囲を見渡しように傍観している。

そんなセヴァドスに追いついたハイアは、腰元の鋼鉄錬金鋼の刀を抜く。

それを合図として、セヴァドスの周囲を団員達に取り囲む。

総勢15名。

まだ何人かは追いついていなかったり、周囲を警戒させているが、これで十分だろう。

「さて、もう一度聞いておくさー。 廃貴族を渡せ」

「それは難しいご相談ですね。 だって私は戦いたいですから」

その言葉をきっかけに、セヴァドスは頭上へと大きく飛ぶ。

「ではこの人をよろしくお願ひしますね」

セヴァドスは笑みを浮かべたまま、右肩に乗せていたニーナを両手で持つとそのまま放り投げた。

その先には、出遅れたミュンファが虚を突かれたかのように目を丸くさせていた。

「え？ きやつ!!」

「なっ!?!」

ニーナの身体は何とかミュンファが受け止めることができたが、彼女自身も空中にいたため、そのまま落下していく。

突然のセヴァドスの奇行に、ハイアの視線が一瞬、向こうに取られた瞬間——既にカレはそこにいた。

「さて、お互いこれで気にするものではありませんね」

「ちいっ!」

迫る右拳をハイアは何とかかわして避けることができたが、うなりを上げたセヴァドスの剛腕が風を切り裂き、衝撃波がアスファルトを抉る。

躲したとはいえ、ここはセヴァドスの距離。

流れるような動きで、再びハイアに襲い掛かるとするセヴァドスを止めたのは、後方から襲い掛かった団員の斬撃である。

「へえ、今のことについてくるとは、流石サリンバン教導傭兵団、最高ですよ」

「がはっ……」

首を刈り取らんとする一撃は、セヴァドスの残像しか捉えることしかできずに空を斬った。

お返しとばかりに放たれたセヴァドスの右拳が男の脇腹に突き刺さり、苦悶の声を上げる。

軋みと骨が砕かれた乾いた音とともに武器を取り落とした男をセヴァドスは右足を振り抜いて吹き飛ばす。

「この野郎っ！」

「舐めるなよっ!!」

「待てっ！」

ハイアの制止を振り切った二人の団員がセヴァドスに迫るが、目の前の怪物からは笑みが消えることはない。

「やはり、その辺りの武芸者とは違いますね。 グレンダンにいた頃でもそう味わう

ことのない緊張感ですよっ!!」

振り下ろされた剣を、セヴァドスの右腕から放たれた衝剄の刃により砕かれる。

外力系衝剄の変化、風花穿。

セヴァドスの放った衝剄の槍が横腹に突き刺さり、

外力系衝剄の変化、裂空牙。

振り抜いた右足から放たれた鋭利な衝剄の刃が。二人の武芸者を巻き込むような形でビルの上から落下した。

一瞬のうちに三人の団員を倒したセヴァドスの危険性に、ハイアが動いた。内力系活剷の変化、旋剷。

先程のお返しと言わんばかりに、セヴァドスに詰め寄ったハイアの一閃。その一撃を、受け止めたセヴァドスにハイアは二の太刀を放つ。

「っ！ 流石は傭兵団の団長ですね、今の一撃は流石にヒヤリとしました」  
「何を言っているさー、こっちもアンタを甘く見てたさー」

ハイアの一撃は、セヴァドスの右肩に微かな切り傷を残しただけだった。相変わらず楽しそうに笑みを浮かべるセヴァドスに対し、ハイアも軽口を叩きながら他の団員に指示を送る。

目的のモノは既にミュンファが確保し、そのまま停留所に向かっている。フェルマウスの念威からの情報では停留所には人は配置されていない。

つまり、ハイア達の目的は目の前の男を止めれば達成ということになる。

「お前らは撤収準備さー。コイツは俺っちがやる」

「しかし、ハイア……」

『了解した』

セヴァドスの危険性を感じ取った団員達は、不安を隠せない様子でハイアの方に視線を送るが、副団長であるフェルマウスだけはハイアの指示に従った。

団長と副団長の決定により、セヴァドスを取り囲んでいた団員達は次々にビルの上から飛び降りていく。

その様子を、セヴァドスは特に慌てることなく見送っている。

「追わないのさー?」

「ええ、だって貴方がここに残っているじゃないですか?」

ハイアの言葉に、爛々とした眼をしたセヴァドスがワラウ。

その表情に、ハイアは冷や汗を流しながら静かに呼吸を整える。

「アンタは俺たちが斬るさー」

「それは楽しみですね」

迫りくる怪物を斬る。

それがハイアの目的であり、天剣奪取の道であった。

## 第三十話

「ちっ!!」

「ふっ!!」

振り抜いた拳は、相手の刀と交錯し、衝撃波となつて頬を撫でる。

返す形で振るわれた刃を、左拳でかち上げるようにして弾くと、距離を詰める。

「ふふふ、楽しいですね。貴方もそう思いませんか?」

「全然楽しくないさー」

放たれた拳と蹴撃は、後方に飛ぶようにして回避される。

ビルに着地された瞬間、お返しとばかりに剄を全身に流して、

外力系衝剄の変化、針剄。

外力系衝剄の変化、剛昇弾。

放たれた剄の槍は、迎撃により放たれた剄弾により相殺された。

楽しい、そうセヴァドスは素直に感じた。

グレンダンを出て、老生二期という極上の相手と戦うことができたセヴァドスだが、

故郷と違いここは学園都市。



こうして戦いを楽しめる相手というのは、現時点でレイフォンを除けば皆無と言っていい。

だが、目の前にいる武芸者は違う。

明らかにその技は洗練されていた。

「そうですか？ 私には楽しそうに見えますよ」

「それは、アンタを斬って、グレンダンへの土産にできるからさーっ!!」  
内力系活剷の変化、旋剷。

ビルに着地をしたセヴァドスの一瞬の動きの硬直を狙って放たれた刃は、セヴァドスの頬を掠めた。

今のは避けるのが一瞬でも遅れていけば、首半分は切り裂かれていただろう。命を取り合う緊迫した一瞬に、セヴァドスは思わず笑みを零した。

「つなるほど。 ああ、そう言えば、まだお名前をお伺いしていませんね」

「ハイア・サリンバン・ライア。 アンタを斬る男の名前さー」

武芸者——ハイアの年齢は、セヴァドス達とそう変わらないだろう。

だが、その動きはまさに達人級、振るわれる刀技は天劍授受者達に迫るほどのものであった。

「いいですねっ!! では私にぜひ貴方の名前を覚えさせてください」

もつともつと楽しみたい——セヴァドスは自分自身の欲求を満たすために、ハイアへ迫る。

外力系衝剄の変化。裂空牙。

振り抜かれた右足の刃は、屋上の給水タンクを両断するが、そこにハイアの姿はない。研ぎ澄まされた感覚が、首筋に落ちた水滴に反応し、セヴァドスは両手を交差すると「しゃっ！」

頭上に飛んでいたハイアの振り下ろされた刃が、手甲にぶつかり火花を散らせる。

ハイアの一撃を防ぎ切ったセヴァドスは、一瞬の間も置かず右足を蹴り上げるが、既にそこには誰もいない。

セヴァドスの反撃に、素早く反応したハイアは大きく距離を取る。

先程まで息をつく暇もない高速戦闘後との間に起きた小さな静寂。

笑みを浮かべるセヴァドスと同様に、人を子馬鹿にした様子の笑みを浮かべるハイアは、構えをとくと刀の峰を担ぐように肩に乗せる。

「良い反応さー、流石次期天劍授受者様さー」

「いえいえ、ハイアくんこそ、その刀の腕前はまさに達人級。久しぶりに味わいますよ、死の恐怖というものを」

「嘘をつくさー、なら何で笑っているのさ？」

「え？ 普通、笑いませんか？ こう、生きてるって感じがして」

一瞬でも反応が遅れてしまえば致命傷を負ってしまうだろう高速戦闘にすら、何でもないように笑みを浮かべるセヴァドスに、ハイアは眼を細めて小さく息を吐く。

「ああなるほどさー。これが戦闘狂ってやつさー」

「そうですか？ 少なくとも武芸者という生き物は、戦いという業に酔って生きる人種ですよ。私知っている人は皆そうです」

セヴァドスの兄であるサヴァリスを筆頭に、残る天剣授受者、そんな彼らを超越した女王陛下ですら力という業から離れることをできないでいる。

それが武芸者というものなのだ、とセヴァドスはそう思っている。

目の前にいるハイアも、先程から好戦的な笑みを浮かべていた。

「そういうのは化け物ってさっ!!」

「はい、よく言われます」

そう言って仕掛けるのは、サイハーデンの刀であり、待ち受けるのはルツケンスの拳。何度目の衝突に変化をつけてきたのはハイアであった。

振り下ろした刃は、セヴァドスの拳に弾かれると、そのまま流れるように連撃を放つ。その動きにすら反応したセヴァドスだったが、次の一手は読めなかった。

右頭部に衝撃が襲うと、セヴァドスはそのまま体を縦に一回転させて、衝撃を緩和さ

せる。

しかし、その動きに反応した、いや正確には読んでいたのだろうか？ 既に次の刃を振るっていたハイアの姿がセヴァドスの視界に映った。

だが、そこは戦闘狂と言われるセヴァドスである。

異常なまでの危険感知能力と驚異の反射により、前髪を数本犠牲にするだけでその攻勢をやり過ぎした。

今度はセヴァドスが距離を取ったことに対し、ハイアは自信に満ちた表情で見下ろすように口を開く。

「獣如きには読めない剣さー」

「……ああ、本当に愉しくなってきました」

途中、セヴァドスの頭部を襲ったのは、ハイアの蹴りだろう。

通常ならどのような状況でも反応するセヴァドスだったが、先の攻防では完全に意識を刀へと向けて——いや向けられてしまっていた。

あの時、完全にセヴァドスの思考の上をハイアは上回っていたことになる。

そのことが、セヴァドスは本当に愉しくて、嬉しかった。

興奮の余り、身体から余剰な剋が溢れてしまったが、セヴァドスの足は既に動き出していた。

一瞬で、ハイアとの距離を潰したセヴァドスの剛腕が唸りを上げる。当たれば終わりの一撃必倒の拳を、ハイアは少し下がり気味に避けていく。

「ぐっ!! なんて強引な奴っ!!」

「うん、うん、うん!! 良い反応ですよ」

完全に前へ出ることができなくなったハイアは、一瞬の隙を突くためにセヴァドスの攻勢を耐える。

同時に前へと前へと進み続けるセヴァドスの足元は、一步ごとにコンクリートの地面を砕き、拳は、連打に——そして拳とともに余剰な勁が衝勁となって、周囲の建物の壁を削り取っていく。

「どうしました? こんな機会はめったにないのですから楽しみましょうよ」

「調子に乗るなよ、化け物がッ!」

セヴァドスの右拳に合わせるように、ハイアは死地である懐へと歩みを進めた。

振り抜かれる刃に、迎撃するように振り下ろされた左拳。

同時に放たれた両者の一撃は、小さなアクシデントにより、勝敗を決することとなる。ビルの老朽化、そのせいで崩壊した足場にセヴァドスの右足を取られ、バランスが崩れた。

切り裂かれた左腕からは、真っ赤な血が噴き出した。

「俺っちは、リュホウと数十の戦場を駆け抜けてきたさー。 獣如きに止められるはずがないさー」

手首からひじ先まで切り裂かれて血だらけになるセヴアドスに、ハイアは勝利の笑みを浮かべた。

「さて、廃貴族も称号も頂くとするさー」  
もうすぐ決着がつくと確信して。

・  
・  
・  
・  
・

セヴァドスがハイアと戦い始める数時間前のこと。

ツエルニから遠く離れた移動都市、グレンダンの墓地の一角で一組の男女が顔を会わせていた。

「グレアド・ルツケンス殿」

「エアリフォス卿か」

片や女王陛下下の側近中の側近であり、若くして天剣という地位まで辿り着いた女傑カナリス。

片や天剣授受者を二度も輩出し、現天剣授受者サヴァリスの父であり、ルツケンスの当主である男グレアド。

互いに面識はあったが、親しい仲などではなく、言葉も交わしたことはない。

そんな彼らが、他に誰もいない場所で向き合っていた。

「見事の殺到だが、私のような無能には心臓に悪い」

「無能……」冗談を、グレンダンの三大武門を纏め上げる当主ともあろうお方が言うべきことではありません」

カナリスの言う通り、目の前にいるグレアドは今では老いたとはいえ、かつては天剣候補とまで謂われた男である。

彼が天剣になれなかった理由、それは天剣を扱うまでの圧倒的な力がなかっただけで

あり、その武芸の腕は初代ルツケンスにも届くのではないかとも言われている。

だが、当の本人には皮肉しか聞こえなかったようで、現天劍授受者であるカナリスに向ける視線は決して良い感情とは言えなかった。

「ふん、天劍を得た貴女に言われてもどうも思わん。有能な武芸者とは力のある者、卿や息子のサヴァリスのような者だ」

事実、剽量とは時にはそれだけで勝敗を決することになる。

剽の少なかったグレードは、人一倍武芸に打ち込んだが、結果として天劍を得ることはなかったが、奇しくも、グレードの子であるサヴァリスが、父とは違い、膨大な剽に恵まれた。

それほどまでに剽量とは、一流の武芸者になればなるほど大きな差になってしまおうということだった。

「そう思えば、ゴルネオは可愛そうなものよ、兄と比べ続けられるあやつを見ていると昔を思い出す。才能というもののへの妬みを、な」

貴君にはわからんだろうがな——そう言つてその場から立ち去ろうとするグレードを、カナリスは引き留めるような形で本題を切り出した。

「今日は、当主殿にお伺いしたいことがあります」

「ふむ、先に言つておくが、サヴァリスの起こした問題に関与するつもりはない。ア



レもいい歳だ、もう少し落ち着きというものを持って貰いたいものだ」

グレアドの言う通り、カナリスもそろそろいい歳なのだから落ち着きを持って貰いたいというのは、同意見であつたが、今は戦闘狂の話をしに来たわけではない。

「私がお伺いしたいこと、それは貴方の奥方であつたルマリア殿のことです」  
ルマリア・ルッケンス。

サヴァリス達の母であり、グレアドの伴侶であつた彼女は、このグレンダンの多くの人々や武芸者から慕われ、憧れの存在であつた。

圧倒的なまでの剋量に、恵まれた身体を操るセンスを持つルマリアは天剣を与えられるはずであつたが、グレアドと結婚したことにより、第一線から退いてしまつたが、それでもその力に陰りが見えることはなかつた。

昔、カナリスも幼い頃に、ルマリアが天剣授受者であるカルヴァーンと互角の戦いを繰り広げられたのを今でも鮮明に思い出せる。

そんな彼女の話題だからか、先程まで険しい表情しか浮かべていなかったグレアドの表情が緩んだのをカナリスは見逃さなかつた。

「……ルマリアか、懐かしくもあり、愛しくもあり、悲しくもある、我が妻の名だな。あやつはとうの昔に亡くなっているが、卿は彼女の何が知りたい？」

「彼女の死、そして貴方の息子のセヴァドスのことです」

だが、グレアドの表情が緩んだのは一瞬のこと。

次にグレアドの表情に浮かんだのは、無という感情であった。

カナリスは、先程からグレアドと話をしていて気づいたことがある。

先程からグレアドは明らかにもう一人の息子のことを避けていた。

「ルマリア殿は、セヴァドスの生まれた時に亡くなったと聞いています。その後、家

族のみで密葬をしたそうですね？」

「ああ、妻の頼みもあつてな」

「王家から盛大な式を挙げるように言われてたとしても？」

「妻は恥ずかしがり屋でな、死した姿としても他人には見せるつもりはなかつたよう

だ」

セヴァドスの話題が出てからは、サヴァリスの時のような呆れも、ゴルネオに感じた

哀れみ、ルマリアに向けた愛情などの感情も覗かせない。

ただその話題に触れないように避ける拒絶だけであつた。

しかし、カナリスはこれで話を終わらせるつもりはなかつた。

今日の行動は既にアルシェイラからの許可を頂いている。

断片的な事実も、ティグリス達から聞いているが、それでもカナリスは知りたかつた。

自分を慕ってくれる弟分の正体を見極めるために。

「そうですか、ではその時彼女が抱えていた問題もご存知でしたか？」

「さあ、十数年も前のことだ。曖昧な記憶しか持っていないな」

「彼女の最後の望みのことは覚えていたのにですか？」

「何が言いたい？ 王家の命に背いたことがそんなに気に入らないのか？」

「そうですね、確かに王家に仕えるリヴァネスの者として思うことはないとは言えませんが、今私を知りたいことは、あの日に起こったことですよ」

偽ることは許さない。

力の籠るカナリスの視線にすら、グレアドは動じることはなかった。

「何を根拠にそのような妄言を吐くのだ？」

「このグレンダンには全てを見通す眼が存在するのをお忘れですか？」

「ふん、くだらん」

カナリスが半ば脅すような形で頸をぶつけてみても、グレアドの口が開くことはない。  
い。

恐らく女王陛下であるアルシェイラが命令しても、彼はその口を閉ざしてしまおうのではないか？

それは天剣授受者のカナリスには絶対にできないことであった。

「用を思い出した。この辺で失礼する」

話は終わりだと、グレアドは今度こそこの場を後にしようと思いを進める。

その足を止める術を、今のカナリスには持ち合わせていない。

サヴァリスから聞くしかないのか、そう考えたカナリスの視線の先でグレアドが歩みを止めた。

「エアリフオス卿、貴女は一つ勘違いをしている」

そう言って振り返ったグレアドの眼を見て、カナリスは小さく息を呑む。

「私の息子は、サヴァリスとゴルネオの二人だけだ。決してあのような化け物が――

――俺と彼女の子供であるはずがない」

・  
・  
・  
・

「動かない方がいいさー、腕とは言え、深く切り裂いたから血が足りないはずさー」  
勝敗をついた。

目の前のセヴァドスは片膝をつき、左手からは少なくとも出血をしている。

顔を俯いて表情はわからなかったが、それでも戦闘を再開することはできないだろう。

強かった。それがハイアの間違いのような感想である。

最も天剣に近い男と言われ、将来を期待された天才。

そんなセヴァドスに、ハイアは勝った。

これほどまでに感激できることはないだろう。

残るレイフォンには、天剣を得るということで勝つことができ、死んでしまった義父へと弔いになるだろうと、ハイアは感傷に浸っていた。

「では失礼するさー、俺たちは忙しい」

後は、先に逃げたミュンファ達と合流し、廃貴族を乗せてグレンダンに向かえばいい。  
その場から立ち去ろうとするハイアだったが、セヴァドスの口から洩れた音に歩みを止める。

「何か言ったさー?」

「ふふふ……」



まるで早送りをしているみたいに、傷口が再生していくその姿は、人間のそれではない。

—— 化け物。 その事実には、いつの間にか、ハイアの足はソレから距離を取ろうとしていた。

「戦いましょう、お互い、血の一滴まで搾り取るような戦いを」

顔を上げたセヴアドスの瞳は、血のような真っ赤に染まり、絵画のような激情と花のような華やかさを秘めた『笑み』を浮かべた。

ハイアは、このとき漸くある勘違いに気が付いた。

本当の化け物を目覚ましてしまったことを。

## 第三十一話

一通り笑い終えたセヴァドスは、切り裂かれて出血し続ける腕に触れた。

噴き出す血を掌で抑えて傷の触診を行うと、そのまま指先に微量の剝を流す。

外力系衝剝の化鍊変化、粘糸。

傷口を器用に極薄の剝の糸で繋ぎ、細胞同士を引き合わせる。

傷表面には、粘着性のある剝の糸を巻き付けて、完璧に縫合を行い、あとは活剝を応用して細胞の動きを活発化させる。

この技術は、長年に渡り、天劍授受者であるリントンスの観察と医学分野への知識を備え、粘糸という応用の利く剝技を修得しているセヴァドスのみ許された技術である。

傷口がまるで再生されたかのように見える高等技術を難なく行ったセヴァドスは、興奮と呼吸を抑えるために小さく息を吐く。

そして、この戦いをより楽しむために、——構えを取った。

ハイア・サリンバン・ライア、間違いなく彼は最高の獲物であった。

「行きますよ」

血を流したことで、興奮状態から少し冷静さを取り戻したセヴァドスは、流れるよう



な動きでハイアとの距離を詰める。

並みの武芸者ならば、ここでセヴァドスの一撃を喰らってしまうだろうが、流石は戦闘傭兵集団の団長を務める者である。

「つ死にぞこないが」

ハイアは、こちらに迫り来るセヴァドスに向かって、音すら置き去りにするような斬撃を繰り出した。

完全に虚を突いた一撃に、ハイアは今度こそ勝利を確信したのだが、

「よつと」

「え？」

蚊でも叩き落すような手慣れた手つきで必殺の斬撃は弾かれ、

「ぐえあ……」

セヴァドスの右拳が横腹に突き刺さった。

肉を千切り、骨を砕き、内臓に衝撃が襲う。

血反吐を撒き散らし、後退するハイアの目の前には既にセヴァドスの右足が迫っていた。

「どんどんいきますよつ!!」

外力系衝剉の変化、裂空牙。

首筋を切り裂くどころか、首元を一気に刎ねようと云わんばかりのギロチンを、ハイアは傷ついた身体で体勢を崩しながらも回避するが——既に次の一撃が迫っていた。遠心力がたつぷりと乗ったセヴァドスの上段後ろ回し蹴りが、ハイアの身体をくの字に折り曲げる。

「があ」

「それっ!」

再びハイアの横腹に拳を叩きこみ、沈み込んだ頭部をアツパーで打ち抜く。

天に向かって突き上げられた一撃に、ハイアの両足が宙に浮くが、まだセヴァドスの攻勢は終わらない。

そのまま首根っこを掴むように、セヴァドスは宙に浮くハイアを地面に叩きつけるように放り投げた。

ゴロゴロとアスファルトの上を転がるハイアに、セヴァドスは一步一步しつかりとした足取りで近づいていく。

あり得ない——決して認めることのできない事実がハイアの脳裏を駆け巡った。

「何で、何でさつきまでよりも早く動けるっ!」

「さあ? そんなことどうでもいいじゃないですか」

もう両足だけでは立つことのできないハイアは、支え棒の代わりに愛刀を突き刺して

立ち上がる。

その姿に既に闘志はなく、ただ認めることができない感情が、ハイアをその場に立たせた。

だが、対するセヴァドスにはそんなことはどうでもよかった。

ただこの闘争本能を満たすために、強者との死闘に、自分の武芸を試すために、ただそれだけを考えていた。

考えれば考えるほど愉しくなってしまう、思わず笑みが零れてしまったセヴァドスに、ハイアは漸く自分のすべきことに気が付いた。

内力活判の変化、水鏡渡り。

ただこの場から逃げる、それだけを考えなければいけない。

ここにいたら間違いなく死ぬということは痛いほど味わっている。

「え？」

「水鏡渡り、知ってますよ」

ビルから飛び降り、全身の力を走力に変えたハイアの逃走劇は一瞬のうちに幕を下ろすことになる。

「がはっ」

「そおれっ!!」

既に正面に回り込んだセヴァドスの右拳を横腹に喰らったハイアは、そのまま後方の廃ビルの中へと吹き飛ばされた。

瓦礫やガラスなどが全身に突き刺さり、更なる激痛がハイアを襲う。

遠くなる意識の中、ハイアを先程までの戦闘を思い出し、そして気づく。

再び現れたセヴァドスに、ハイアは聞かずにはいられなかった。

「何で、何でルッケンスのお前が……サイハーデンの技が使え……るさ」

自分が血反吐を吐きながら修得したサイハーデンの技を、セヴァドスは間違いなく使って見せた。

それだけじゃない、ハイアの斬撃を弾いたあの動き、アレは間違いなくあの一撃を知っている動きであった。

まるで、未来予知のように、練習のように、導かれるように、当たり前のように知っていた。

そんなハイアの心を砕く疑問に、セヴァドスはそれこそ当たり前のように答えた。

「え？　だってグレンダンには道場があるじゃないですか？」

そう言ったセヴァドスの言葉を、ハイアは理解できなかった。

思考が追いつかないハイアを置いて、セヴァドスは朝食の献立を言うかのようになんてでもないように答えた。

「武芸の本場に生まれて、都市には数多くの流派が存在するんです。普通は色々したいと思いますよね？」

グレンダンは大小合わせれば、数多くの武芸が存在する。

それは昔からある武門も、他所の都市から流れてきた武門もあり、自他ともに認める戦闘狂からすれば最高の遊び場と言っている。

だが、セヴァドスの好奇心は戦うだけでは満足に至らず、戦った相手、尊敬する相手、戦ってみたい相手の生き様とも言える武芸を知りたくなかった。

「天剣授受者や陛下などの圧倒的な存在を見て、教えを乞いたくならないですか？色々知りたくなるのが武芸者というものでは？」

だからセヴァドスは習った。

兄であり、天剣の一人であるサヴァリスにルツケンスを、王族でありながら歴戦の勇士であるティギリスには弓術を。

「何より、サイハーデンは私の永遠の好敵手であるレイフオンの生家。入り浸っていてもおかしくないですよね？ だから——貴方の動きは読めるんですよ」

その言葉を最後にハイアの中にあつた何かが崩れ去ろうとしていた。

だが、それでもハイアは逃げるしかなかった。

這うようにしてでも逃げようとするハイアに、セヴァドスは溜息をつきながら右腕を

振り抜いた。

外力系衝剄の変化、粘糸。

既に巻き付けられていた剄の糸により、ハイアの身体はセヴァドスの足元に引き寄せられた。

「逃げられても面倒なのでつけさせてもらいました」

遂にハイアは逃げることもできなくなった。

戦うことも、逃げることもできなくなったハイアは、訳も分からずに養父から譲り受けた愛刀を握りしめると

「う、うううわあああああああつ!!」

見る影もない哀れな一振りを放った。

そんな一撃をセヴァドスは躲すこともせず、剄を纏った左手刀で真つ二つに切り裂いた。

小さな金属音を立てた刀の末路と同じく、ハイアの腰が砕けるようにその場に伏せた。

「さあ、貴方のサイハーデンは見せていただきました。このギリギリの状況に達した時、貴方はどんな輝きを私に見せてくれるのですか？」

「ひっ」

迫るセヴァドスに、ハイアは逃げることも立ち向かうこともできなかった。そんな彼に救いの手を差し伸べる者達がいた。

「ハイアッ!! 逃げろっ!!」

「ゴッ、俺達がつ!!」

現れたのはハイアとともに幾多の戦場を駆け抜けてきた頼りになる仲間達であった。

団長であるハイアには劣るとはいえ、武芸都市としてグレンダンの名を広めた傭兵集団である。

セヴァドスには、ご馳走にしか思えなかった。

「焦らないでください」

ハイアを庇うように、そしてセヴァドスを囲むように現れた武芸者の数は十。

全員から受ける殺意という熱い眼差しに、セヴァドスは抑えきれずに笑みを浮かべる。

「皆さんで一緒に楽しみましょう」

大地を砕き、一瞬で距離を詰めたセヴァドスの右拳が傭兵団の一人の顔面を捉え、そのまま骨を砕く音を立てながら地面へと叩きつけた。

遅れるように傭兵達も動き出したが、既にセヴァドスは次の動きを完了していた。

外力系衝動の変化、裂空牙。

放たれた衝剄の斬撃は一人の武芸者の右手足を吹き飛ばし、外力系衝剄の変化、衝断爪。

指先から伸びる五本の剄の刃は、目の前の武芸者を剣こと切り裂いた。それは一瞬のことで、三人の武芸者はセヴアドスの前に倒れ伏した。

ようやく状況を飲み込めたサリンバン教導傭兵団の団員だが、動き出そうとした瞬間にセヴアドスが反応し、その拳に沈められる。

「ぐひっ……」

「ひっ!」

「痛え、痛いよ……」

「ぐちゅけっ」

「や、止めてくれっ!! ぐちゅえ」

それは既に戦闘ではなく、蹂躪である。

悲鳴を上げ、助けを求める傭兵団の仲間達に、ハイアは物陰に隠れて必死にその気配を殺す。

耳を塞ぎ、目を瞑る——まるで雷に恐れる幼子のように建物の陰で震えるハイアのできることは、怪物の眼から逃げることしかない。

「おや? いつの間にか、ハイア君がいなくなってますね。かくれんぼでしょうか」



十人の熟練の武芸者を容易に沈めたセヴァドスは、頬についた返り血を拭いていると、ハイアがいなくなったことに気が付いた。

あの傷ならば、遠くには逃げられないだろう。

炙り出すために周囲一帯を吹き飛ばそうと考えたセヴァドスだったが、ようやく自分の任された仕事のことを思い出した。

「そう言えば、鬼ごっこもしてたんですね」

ハイアやサリンバン教導傭兵団達との戦闘は、謂わばおまけみたいなものである。

セヴァドスが、カリアンに頼まれたことは、廃貴族らしきモノを宿したと思える二ノナの護衛であった。

「流石に逃げられたら会長に怒られてしまいますので、本気で追いましょうか」

セヴァドスは、周囲に散らばった傭兵団の面々が動かなくなったのを確認すると、ポケットから白銀の錬金鋼取り出すと、

レストレーション——そう呟いたセヴァドスの身体を覆うように復元された錬金鋼が張り巡らされていく。

その姿は、天劍授受者であり、最強の盾とも呼ばれるリヴァースのような全身鎧のような姿であった。

セヴァドスは少し厚みが薄く、都市外スーツのようにも見えた。

外力系衝剄の化鍊変化及び内力系活剄の変化、雷神蒼々。

セヴァドスの全身に蒼い稲光が舞い、彼は一陣の雷と化す。

轟音とともにビルを倒壊させ、飛び立ったセヴァドスが向かうのは、ハイアの仲間達のいる方向。

その光景をハイアは声を出すことも出来ずに、ただ震える身体を抑えてこれから起ころうであろう惨劇から目を背けた。

・  
・  
・  
・

目的を果たし、この都市から脱出を行うために隠してある傭兵団専用の放浪バスの元へ向かう中、ミュンファはただ一人で足止めを行っている幼馴染の心配をしていた。

「団長は大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だろう、相手は元天劍授受者でもないようだしな」

「もしかしたら、足止めどころか倒してこっちに向かっているかもしれないぞ」  
ミュンファの心配を他所に、周りの団員達はハイアの勝利を疑っていなかった。

まだ十代の若者とは言え、ハイアは前団長であるリユホウの秘蔵っ子であり、その力は団員ならば誰でも認めていた。

副団長であり、唯一団長に苦言を示すことができるフェルマウスですら、ハイアの実力には疑いを持っていない。

何より、ハイアの前に立ちふさがったのは、元天剣授受者であるレイフォンではなく、名門出身のセヴァードスである。

ルッケンスの名は誰もが知っているが、幾多の戦場を駆け抜けてきたハイアが、温室育ちに負けるとは思えなかった。

ならば、あとは他の応援が来る前にここから去ればいい、とハイアの指示に従った団員達は、ようやく自分達の放浪バスの場所へと辿り着いた。

既に放浪バスではフェルマウスが準備をしているはずだ、とミュンファは緊張が切れたのか小さく息を吐いた——瞬間。

『つ!! 全員、ここから離れなさいつ!!』

「はいっ」

突然、念威から聞こえた切羽詰まったフェルマウスの声に、ミュンファは足を止めた——直後、前方に停留していた放浪バスが爆音と共に爆炎を撒き散らした。

轟轟と炎と黒煙を巻き上げるバスの残骸から現れたのは、ここにいるはずのない人物であった。

「ふう、追いつきましたが、やはりこの技はまだまだ改善点がありそうですね」

全身の至る所から血を流しているが、笑みが絶えないセヴァドスが、ミュンファ達の前に現れて、こちらへ何かを放り投げた。

「フェ、フェルマウスさん……………」

そこには身動き一つせず多量の血を流して倒れるフェルマウスの無残な姿だった。

その余りに惨たらしい光景に、ミュンファを含めたその場にいる全員が声を失う。

「とりあえず、相手の逃走手段は奪いましたし、残っている団員も貴方達が最後のようですね」

錬金鋼を還元させて、煤だらけの銀髪を揺らしながら、セヴァドスは笑う。

その笑みを見て、ようやく傭兵団のメンバーは状況を理解する。

「ば、馬鹿な……………なんで奴がここにいる」

「団長、団長はどうしたんだ?!」

セヴァドスがここにいるということ。

それはハイアが足止めに失敗したということである。

ならば、と団員達の脳裏には最悪の結末がはじき出されていた。

「ハイア君なら残念ですが仕留め損ねました。貴方達の反応からするとどうやらこちらには来ていないようですね」

心底残念そうに呟くセヴァドスに、団員の一人が希望を見出す。

ここで自分達が足止めすれば、きつとハイアは来てくれる、と。

ハイアなら、この状況を打破することができる、と。

「っ!! やるぞ、皆っ!!」

「し、しかし、奴は……」

「よく見てみろっ!! 奴も無傷ではない!! 俺達全員でかかればっ!!」

男の檄が言い切る前に、瞬間移動したかのように現れたセヴァドスの右拳が無防備の腹へ突き刺さる。

骨が碎ける音と口から吐き出される血反吐とともに、倒れて動かなくなった男を蹴飛ばしたセヴァドスは笑みを浮かべながら周囲を見渡す。

その姿にミュンファアを含めた団員達は、声を上げることもはおろか、身動きすることができなかった。

「さあ、始めましようか? サリンバン教導傭兵団の皆様」

圧倒的な存在を前に、彼らには逃走は許されなかった。

彼から——セヴァドス・ルツケンスからは誰も逃げられない。

「最終ラウンドです」

こうしてサリンバン教導傭兵団の終焉の日が訪れた。

## 第三十二話

「まあ、こうなるわな」

最後の力まで使い尽くしたシャーニツドは、力尽きたように後ろに倒れると、大きく息を吐き、痛む横腹を抑えた。

ああ、これ完全に折れてるわ、と呟くシャーニツドの目の前では、先程まで戦っていたデインとダルシエナが緊張の糸が切れたかのように尻餅をつく。

同時に、会場には試合終了のサイレンが鳴り響き、第十七小隊の敗北が決まった。

「シャーニツド………」

「そもそも、俺は狙撃手だけ？ 前衛に、二人相手に勝てるわけねえだろ」

セヴァドスによる地獄の特訓を行ってきたとはいえ、ほんの一週間程度の短期間ではツエルニ最高峰の前衛と指揮官を相手に勝てるほど世の中は甘くできていない。

もしも、この程度の努力で勝てるならば、ツエルニはこのような状況までに追い詰められていないだろうし、デイン達も違法酒などには手をつけることはなかっただろう。

それでも、シャーニツドは自分がやるべきことを終えたことに満足感を得ていた。

かけがえない友と再び語り合うことができたのだから。

同時に、デインとダルシエナも先程の戦いで自分達の安易な考えを痛感していた。

デイン達第十小隊に面々は、違法酒により絞り出された多量の剋に振り回されていただけであつた。

二人がシャーニツドに勝つことができたのは、長年培つてきた戦術と連携によるものだつた。

シャーニツドと共に鍛え上げた誇るべき連携攻撃、それがデイン達の本当の強さであつた。

「俺達は……間違つていたのか」

「……だろうな」

デインの問いにシャーニツドは答える。

強くなろうとすることは、間違いではない。

だが、それはあくまで正当な方法で行うからこそ成り立っているのだ。

「実際、立場が逆だったら、俺がお前達の立場だったかもしれないねえ」

「だが、お前はこうして私達の前に立ってくれた」

普段の自信に満ちた表情とは違い、弱弱しさを感じさせるダルシエナに、シャーニツドは当たり前のように答えた。

「それはお前のことが好きだったからじゃねえか？」



「は？ お、お前っ」

突然の告白に狼狽するダルシエナに、シャーニツドは思わず笑みが零れる。

シャーニツドがこうして、二人の前に立ち塞がったのも、本当のところは負い目や責任ではなく、純粋な思いからの行動であった。

愛した人と親友に、もう間違えてほしくないという思い、ただそれだけのことであった。

「順番の問題だろ、まあ、こればかりは仕方ねえよな」

故に、もしも前隊長のことが好きだったのがシャーニツドだったならば、止める立場にあったのはデインとダルシエナの二人だったかもしれない。

考えても意味のない憶測であり、無意味な仮定だ、とシャーニツドは考えるのを止め、ゆっくりと重い体を起こした。

「デイン、シエーナ、後はお前達で考えて、決断しろ。今のお前達なら冷静に判断できらるだろう？」

「いや……………もう答えは出ている」

「……………そうだな」

——もう答えは出ている。

そう言ったデインとダルシエナの眼を見たシャーニツドは、それだけで理解をした。

シャーニッドがようやく本当の意味で第十小隊から抜けることができたのだ。

「……そうか、なら俺はチームメートのところに行つてくるわ、今回かなり無理を言つたしな」

「ああ、俺達もあいつらに話すことがある」

お互いのチームメイトがこちらに向かつて歩いてくる。

ボロボロな姿の第十小隊員や臨時入隊のナルキと違い、レイフォンは遠くから見ても無傷そのものだった。

レイフォンは、シャーニッドとの約束を守つてくれたようだった。

レイフォンにフェリ、そして今回のみ参加してくれたナルキ、そして自分自身の特訓に付き合つてくれたセヴァドス。

彼らがいなければ、シャーニッドはこうしてここにいることができなかつただろう。

こちらに駆け足で向かつてくるレイフォンに手を上げて答えると、隣のダルシエナと目が合った。

「あ、そう言えば、シエーナ。あの裏技は驚いたぜ」

「それはこちらの台詞だ。普段のお前と違い、見違えるような動きだった」

険の取れた視線を向けるダルシエナに、シャーニッドは面白おかしくこう答えた。

「あれは……特訓の成果つてやつだな」

・  
・  
・  
・  
・

ニーナが目を覚ましたのは、ただの偶然であつた。

極度の疲労、そして廃貴族に憑かれたことによる後遺症による深い眠りからようやく目覚めたニーナが目にしたのは、苛烈な戦闘風景であつた。

戦場は圧倒的なまでの戦術差で、数で言えば、二十対一。しかし、どう見ても追い込まれていたのは二十の方であつた。

迫りくる斬撃を紙一重で躲し、返し拳を叩き込む男を、ニーナは知っていた。セヴァアドス・ルツケンス。

ニーナにとって苦い記憶と共に思い出させる人物であった。

そんな彼を囲む武芸者達は、ニーナの顔見知りではないが、ただツエルニの武芸者達よりも圧倒的に上の位置にいる武芸者であるということはニーナでも理解ができた。

だが、そんな武芸者を相手にしてもセヴァアドスの余裕に満ちた笑みは消えることなく、ただこの状況を楽しんでいるように見えた。

悲鳴に何かが潰れる音、辺りには当たり前前のように赤黒い血が至る所に飛び散っている。

ニーナがそんな凄惨な光景に気をとられているうちに、既に戦闘は、殲滅戦に、鬼ごっこへと切り替わっていた。

逃げ惑う武芸者達を、弄ぶかのように追い潰していくセヴァアドス。

その光景は、まるで人類と汚染獣の関係性のように思えた。

数多くの人々から選ばれた武芸者達。

そんな彼らですら、容易に食い散らす汚染獣という化け物。

だが、ニーナは知っていた。

そんな汚染獣たちですら容易に蹴散らすことができる存在を。

レイフォン・アルセイフ、セヴァドス・ルッケンスという存在を。

故に幾ら、この光景が容認できない酷い光景だとしても、ニーナ如きが立ち塞がって止めることができないだろう。

ニーナ・アントークは、レイフォン達のようにはなれない。

故にニーナは――

「つつ!! 待てつつ!!」

ニーナ・アントークを貫くことにした。

ニーナの言葉に、セヴァドスの動きが止まると、辺りに響いていた悲鳴が、呻き声へと切り替わった

ゆつくりとこちらに振り返ったセヴァドスは、拳こそ収めたとはいえ、まだ全身から溢れる膨大な剋と戦意は健在である。

動きの止まった今について動き出すしかない。

「もう決着はついている。そうだろう?」

ニーナの言葉に、セヴァドスは倒れ伏せた者や膝をついた者へと視線を向ける。

セヴァドスの視線に誰もが、その視界から逃れようとする。

既に決着はついた。

「ふむ、確かにそうですね」

あつさりと認めたセヴァドスに、ニーナは思った以上に簡単に話がついたことに安堵の表情を浮かべた。

状況を確認するため、セヴァドスに話しかけようとしたニーナより先に、話しかける者がいた。

「ハイアちゃん……ハイアちゃんは……何処？」

血塗れの男の肩を揺らしながら、心ここにあらずといった風に放心状態の少女に気が付いたセヴァドスは、何でもない様子で答えた。

「そう言えば、何処に行ったのでしょうか？ 色々へし折ってしまいましたけど、止めは刺していませんでしたから、ここにいると思つたのですが」

待つてたらここに来ますかね？、と何でもないように答えたセヴァドスに、少女は小さく震え、右手の錬金鋼を握りしめた。

そして、次の瞬間――

「お前がつ!! ハイアちゃんをつ!! 皆をつ!!」

「つ!! やめろつ!!」

ひび割れた眼鏡の奥先、焦点の合わない眼をセヴァドスに向けた少女は、手に持った錬金鋼を復元させて構える。

引かれた弦とともに向けられた矢の先にはセヴァドスがいた。

そんな少女の凶行に、ニーナは制止の声をかけたが、既に遅かった。

放たれた矢は、セヴアドスの眉間に目掛け飛来し、そして——容易にセヴアドスの右拳により弾かれた。

「なるほど、弓使いですか。では私と弓比べでもしてみましようか」

矢を向けられたことにすら、笑みを浮かべるセヴアドスは両拳の装着した錬金鋼を大弓へと変化させると、引かれた弦に真っ赤に燃える劉の矢を込めた。

その技は、ニーナも見覚えのあるもので、あの都市外戦闘の際に汚染獣に向けられた技であった。

もしも人が喰らえば、怪我どころでは済まないだろう。

矢を向けられた少女は、セヴアドスから発する圧倒的なまでの劉の圧により、腰が砕けたようにその場に座り込んだ。

周りにいた仲間の武芸者達も、必死に頭を庇うように地面に伏せるが、誰一人として少女を助けようとするものはいなかった。

自業自得と言ってもいいだろう、ニーナはふとそう思った。

矛を収めた者へと突然攻撃を仕掛けたのだ、自分自身がその業を負ったとしても仕方のないことだ。

セヴアドスがツエルニでここまで暴れていても誰も止めに入らないということは、彼

らはツエルニと敵対関係にあるのだろう。

恐らく彼らには、セヴァドスと戦うことになった原因があり、この結果はこの弱肉強食の世界では当たり前のことだろう。

故に、助けることが本当に正しいことなのか？

そう考え、ニーナは――

外力系衝剄の変化、鬼火。

放たれた爆炎の矢は、真つ直ぐ少女に迫り――直撃する瞬間、ニーナが少女を抱きかかえるような形で横へと押し倒した。

タイミングは間一髪と言ったところで、ニーナの背中には焼けるような熱が通過したのを感じ、程なくして遠く離れた場所で爆発音が聞こえた。

「馬鹿がっ!! 死にたいのか!？」

放心状態の少女を怒鳴りつけると、辺りの武芸者達を睨み付ける。

ニーナの怒りの声が響き渡り、微かな沈黙の後、少女から離れたニーナは弓を下ろさないセヴァドスに向かって歩き出す。

「弓を下ろせ、決着はついた」

そう言ったニーナの言葉に、絶対的な命令権はない。

寧ろ、先程のことを踏まえても、まだ戦意を切らさないセヴァドスの方がこの状況で



は正しいだろう。

「もう決着はついたんだ、セヴァドス」

矢を下ろさないセヴァドスに、ニーナは近づいていき、そしてその右手を握りしめた。それでも矢を下ろさないセヴァドスだが、周囲に見渡し、最後に目の前のニーナに眼を向けると

「一つだけ、聞かせてください」

と話しかけた。

そんなセヴァドスに応えるように、ニーナは真っ直ぐな視線を向けて頷く。

「なんだ？」

「もう察しはついていると思いますが、彼らは他の都市の武芸者です。同じ都市に所属する私と対峙している状況から、彼らはこのツエルニに害をもたらす存在だとは理解されていますか？」

セヴァドスの問い。

それは彼個人のためではなく、このツエルニに住まう人々へと思いが込められていると感じた。

その言葉に、ニーナは目の前の武芸者は戦うだけではなく、人々のことを想うことも出来る武芸者だと、ようやく自分自身の思い違いに気が付いた。

だからこそ、ニーナの自分の思いを打ち明けることにした。

「ああ。理由はわからない上、状況も把握しきれていない所はある。だが、もう勝敗のついた状況で、同輩が彼らを打ち潰さんとする所は見えてはられない」

「なるほど……武芸者の誇りというわけですね？」

「いや、私の意地であり、願望だ」

それがニーナという人間のあり方であり、願いでもあった。

たとえ、武芸者でなくても、ニーナはこの状況を見過ごすことができなかつただろう。

「ふむ……わかりました。ではニーナさんの判断にお任せしましょう」

「ああ、ありがとうございます」

構えていた弓を下ろし、何故か上機嫌に笑みを浮かべるセヴァドスを見て、ようやくこの場が収まったことにニーナは安堵の表情を浮かべた。

程なくして、カリアンにより派遣された第一小隊を含む小隊員と都市警察の武芸者が現れて、戦意喪失していたサリンバン教導傭兵団を拘束していく。

第十小隊との清算、サリンバン教導傭兵団との対峙、そしてニーナ・アントークの目覚め。

この日、ようやくツエルニの抱えていた問題に決着がつくこととなった。



## 第三十三話

その日は、嫌になるほどの良い天気だった。

使い古したタオルや教科書などをゴミ袋に入れ、極僅かの私物をキャリアケースの中に片づけると、見慣れた自室をもう一度見渡す。

壁に空いた微かな穴は、酔ったシャーニッドとデイン本人が暴れて開けた穴であり、その後ダルシエナに二人して怒られたのをよく覚えている。

部屋の脇にあるボロボロになったソファには、卒業した先輩がよく座っており、いつもデイン達のやり取りを見て笑っていた。

中央の丸いテーブルでは、いつも小隊の仲間達と下らない話などで盛り上がっていた。

そうだ、確かにここには沢山の思い出があったのだ。

しかし、もうここへ戻ることはないだろう。

もう着ることのない制服をキャリアケースに入れて、蓋をしたデイン・デューは四年間暮らしていた部屋をもう一度だけ眺めた。

ありがとう——そして、さよならだ。

最後に感謝の気持ちを込めて部屋に一礼をし、デインは部屋を後にした。

キャリアケースを引いてマンションを出たデインを待っていたのは、デインよりも大きなキャリアバックと鞆を持ったダルシエナである。

「それだけでいいのかわ？」

「ああ、これだけでいい」

俺が持つ、とダルシエナの鞆を担いだデインは、そのまま迷いのない歩みで歩いていくと、その後ろをダルシエナがしつかりとした足取りで後を追う。

授業中のため人通りの少ない昼間の通りをデインはダルシエナとともに歩いていくと、そこには見慣れた男が日差しから隠れるように座り込んでいた。

「よお、デイン」

「ふっ、相変わらず不真面目な奴だ。今は授業中ではないのか？」

眩しそうに眼を細めながら現れたシャーニッドに、デインは呆れたように答える。

そんなデインに、シャーニッドはニヤニヤとした笑みを浮かべて。お決まりの台詞を答えた。

「早退つてやつだ。昨日飲み過ぎて体調が優れないんだよ」

「そうか」

目に微かな隈と青い顔色のシャーニッドに、デインは深く聞くつもりはなく簡単な返

事を返した。

遊び慣れたシャーニツドが、次の日まで酔いを引き摺ることはない。

よほど、酷い飲み方をしなければそうならないことは、デインは長い付き合いから理解していた。

無言のまま歩くデインとシャーニツドの後ろを、口を開くことはなく黙って歩くダルシエナ。

思い入れのある馴染みの店の前を何度も通り抜け、デイン達の足は停留所へと向かっていく。

「本当に行くのか？」

「ああ」

今日、デインとダルシエナはツエルニを後にする。

二人は、もうこの都市の生徒ではなく、この都市の武芸者でもない。

禁忌の手段を用いた結果が、二人の退学処分ということだった。

だが、それでもデインとダルシエナの表情に曇りはなかった。

「だが、何故か妙に清々しい気分だ。漸く荷が下りたという感じだな」

「お前は昔から考えすぎなんだよ。だから頭も禿げるんだ」

「昔から言ってるが、俺はハゲではなく、剃ってるだけだ」

昔のようにシャーニツドと冗談を言い合うデインに、それを見守るダルシエナ。

デイン、ダルシエナの二人は、もうこのツエルニを守ることはできないが、彼らと理想を共にする者は、目の前にも、そしてこの都市の中に数多くいる。

そのことに二人は、遅くなながらもようやく気がつくことができた。

「相変わらずだな、お前達は」

「そういうシエーナもだろ？　なんだよ、その荷物は？」

「女には色々な準備が必要なんだよ」

男のデインと違い、女のダルシエナの荷物は必然的に多くなる。

シャーニツドは、デインからその荷物を受け取ると、そのままゆつくりと歩いていく。

その後ろをデインが、そしてダルシエナが続いていく。

デインもシャーニツドもダルシエナも、誰も口を開くことはない。

そしてついに三人は、路面電車の停留所へと辿り着いた。

この電車の行先は、放浪バスのある最後の停留所。

つまり、シャーニツドとはここで別れることとなる。

だからこそ、ダルシエナはシャーニツドと話さなければならなかった。

「シャーニツド、その、私は……」

「まあ、元気にやれよ。　デインと二人で」

ダルシエナの言葉を遮るように、シャーニツドは言う。

シャーニツドは既にわかっていた

だからこそ、二人には——ダルシエナには幸せになつてもらいたかった。

「……ありがとう」

それをわかつた上で、ダルシエナも涙ながらにそう答えた。

停留所に汽笛が鳴り、電車がホームへと入ってくる。

顔を覆うダルシエナの肩に手をやったデインは、シャーニツドから荷物を手渡される。

「そろそろ時間のようだな」

「ああ、そうだな」

「セヴァのやつから貰つた招待状を見せたら、向こうでもなんとかやつていけるみたいだ」

「そうか、世話になつたと伝えてくれ」

デインとシャーニツドは、最後にお互いの手を合わせると、もう眼を合わせることなかつた。

ダルシエナの肩を持ち、電車に乗り込むデインの背をシャーニツドはただ見送ることしかできない。



振り返らなかつたデインは最後に、わかりきつた願いを口にする。

「シャーニツド、ツエルニを任せた」

「ああ、わかっている」

その願いにシャーニツドは答えて、一言。

「じゃあな、親友」

こうして、第十小隊の短くも長かつた戦いは終わったのだつた。

・  
・  
・  
・

それは突然のニュースであつた。

ツエルニの小隊の一つである、第十小隊が違法酒に手を出して解散するというニュー

スであつた。

武芸大会を直前に控えたこの状況での違反行為は極めて重要と認められ、第十小隊員には重い罰則が科せられた。

特に首謀者であつた隊長であるディンと副隊長のダルシエナには退学処分が下されるものの、それでも都市の中に蔓延した不信感を拭うことができなかった。

そのため代表責任者であつた武芸長のヴァンゼを降格し、新たな武芸長を立てるとともに、小隊システムなどの武芸科の方針を一新させることとなつた。

こうしてツエルニは新たな一步を踏み出すことになる。

「この度、武芸長に就任したゴルネオ・ルツケンズだ」

新たな武芸長となつたゴルネオは全小隊員を集めて就任挨拶のために、壇上へと立つ。

元々次期武芸長とまで云われていたゴルネオに対し、他の小隊員からは不満が上がることはなかつたが、武芸大会を控えたこのタイミングでの総指揮官である武芸長の変更は、武芸科の小隊員だけではなく、ツエルニに住まう人々の不安を煽る結果と成りかねなかつた。

そこで、ゴルネオはカリアンやヴァンゼ達と話し合い、ある方法を取ることにした。

「今回の一件により、ツエルニの生徒からは武芸科への不信感を抱かれたことは間違

いようなない事実であり、我々はこれらの問題の解決、そして来るべき武芸大会での勝利をしなければならぬ。そこで、現在行われている小隊戦を一時中止し、武芸大会に向けた訓練として各小隊同士の連携を高めていくとともに、武芸者個人個人の実力の底上げを行いたいと思う。そこで、皆に紹介しておきたい者がいる。もう既に知っていると思うが――」

「皆様、おはようございます。先程、兄さんからご紹介をいただきました、セヴァードス・ルツケンスです」

ゴルネオの紹介により、壇上へと上がったセヴァードスはにこやかな笑みを浮かべて一礼する。

その姿に、本性を知らない女性武芸者達が微かに頬を赤く染めるが、当のセヴァードスは全くの無関心を貫いていた。

「この者は、俺の弟ではあるが、その実力はツエルニ最高峰と言つていいだろう。そこでセヴァードスを主導としたツエルニの武芸者強化訓練を行いたいと思う」

卓越した武芸者指導の下の強化訓練。

セヴァードスという爆薬を用いたある意味、一種の賭けと言つてもよかつた。

ヴァンゼなどは、この方法への反対意見を述べていたが、新たな武芸長であるゴルネオには勝算があつた。

一見、戦闘狂に見えるセヴァドスだが、天賦の武芸の才に隠れた冷静なまでの戦術眼、そして感覚派の天才肌ではなく、独自の戦闘理論を持つ秀才努力型である。

事実、ゴルネオ達第五小隊は、セヴァドスの過酷な訓練により、何度も病院送りにされそうになったが、結果としてゴルネオはツエルニ最高峰の武芸長であったヴァンゼに勝利し、第五小隊もツエルニ最強の小隊であった第一小隊から勝利を収めることができた。

こうして名実ともに、武芸長の地位を継ぐことができたのは、セヴァドスのおかげと言つていいだろう。

故に、そんなセヴァドスの訓練を小隊員達が受ければ、何かしらの変化が起きるのではないかと期待していた。

「今の話に不満な者はいるか？」

周りを見渡したゴルネオの目には、大きく分けて二つのグループに分かれていた。

賛成派と反対派。もしくは、セヴァドスの被害者かそうでないか、である。

前者は、シャーニッドや第五小隊のような目が死んでいるグループであり、後者は、セヴァドスと交流がなかったという幸運に恵まれたグループである。

故に、彼は自分自身がどれほど危険なことをしているかなど知らなかったのだった。

「第三小隊長ウインスカ」

「この武芸大会はツエルニの今後の命運がかかっている!! そんな重要な任を新入生、しかも転校生如きに任せるわけにはいかない。武芸長の個人的な感情による、身内人事はやめていただきたい」

こうなるわけである。

小隊員は、優れた武芸者を集めた集団と云われているが、実際は飛び抜けた才覚がない限りはその地位に就くことはできない。

したがって、最も鍛錬を行ってきた年長者が小隊員の大勢を占めることとなり、飛び抜けた才を持つ下級生への嫉妬や驕りを向けることとなる。

三年生で小隊長になったニーナ、ツエルニ最高の狙撃者と謳われるシャーニッド、念威操者として圧倒的なまでの才能を持つフェリ、などもそんな視線を受けてきたのだが、今年の新入生は怪物そのものであった。

敵意に満ちた視線を受けても怯むことなく、寧ろ楽し気に笑うセヴァドスはウインズに向かつて歩き出した。

その姿を見て、数少ない小隊員の侮蔑のような視線を見て、ゴルネオはこの判断は正しいと確信した。

今のツエルニに必要なのは、武芸の根本を覆す破壊者、それこそがセヴァドスである、兄であるゴルネオは思っていた。

そんな兄の考えを知ってか知らずか、弟はいつも通りの変わらない笑みを浮かべて答える。

「なるほど、では証明させていただきましようか？」

「何？」

「誇りや責任というのは大いに結構ですが、我々は武芸者です。証明する方法はこ

れしかありませんね」

好戦的な笑みを浮かべるセヴアドスに対し、それを面白く思えないのは最上級生のウインスである。

「ふん、一年が……」

「礼儀というものを教えてやる」と隊列から抜けたウインスに、セヴアドスは、「まあ待つてください」と右手を突き出した。

「なんだ？ 謝罪でもするつもりか？」

ならば条件次第で許してやってもいい、と考えていたウインスの思惑とは逆に、セヴアドスの提案はあまりにも挑発的であった。

「いえ、右ストレートで貴方を倒します」

「っ!! 調子に乗るなよっ!!」

セヴアドスの宣言と共に、ウインスは動き出した。

壇上へと飛び掛かる形で、鍊金鋼を復元させようとウインスだったが、あまりにもその行動は遅すぎた。

「どーん」

「ぶへあらっ?!?!」

気づいた時には既に遅し。

無動作に振り抜かれた右拳は、ウインスの顔面を捉え、そのまま遙か後方へと吹き飛ばされた。

そのままワンバウンドもすることなく、まさしく空を切るウインスの身体はようやく後方の柵により止まることができた。

地面に顔面から着地したウインスは、そのまま一言はおろか、身動き一つすることはなく、そのまま沈黙した。

誰もが言葉を失う中、一番に復帰することができたのは最も耐久性のできてしまったゴルネオであった。

「……手加減とかはしたのか?」

「はいっ!! バッチリです!! ちゃんと生きてますし、宣言通り右拳だけで倒しましたよ」

純真無垢の笑みを浮かべたセヴァードスの頬を微かの返り血が斑点状に付着し、放たれ

た右拳には赤黒い血が地面に滴っていた。

その姿を見なかったことにしたゴルネオは、微かな不安を振り切るように大声を上げる。

「……よしっ!! 他に意見のあるやつはいるか?!

目の前で起きた惨劇に、反対派の武芸者達の勢いが急激に鎮火へと向かう。

誰だつてあの後を追いたくなんてないだろう。

反対派がいなくなったのを確認したゴルネオは、この場の全員に武芸長としての初めての命令を下した。

「では、三日後土曜日から十日間強化合宿を行う!! 各自、用意だけはしておくように

……解散!!」

・  
・  
・  
・  
・



ゴルネオの就任式と同時刻。

ツエルニの最高責任者であるカリアンは、護衛としてヴァンゼを引き連れて、病院の一室を訪れていた。

お見舞いの花束を花瓶に入れ、カリアンは、穢れのない真っ白な部屋の中央のベットに寝転んでいた人物へと話しかける。

「傷の具合はどうか？　ハイア君」

「見りゃわかるさー」

にこやかな笑みを浮かべるカリアンとは対照的に、ハイアの両手両足にはギブスが巻かれており、身動き一つ取れない状態でした。

故に、ハイアの表情からは苛立ち以外の感情はなく、早く出て行けと言わんばかりの眼つきをカリアンに向ける。

ヴァンゼを連れてくるまでもなかったかな——とカリアンはハイアの医療カルテを見ながらそう判断した。

動脈疲労、脊髄損傷、腕や足の筋肉の断裂、体中の骨の骨折及び罅割れ……まさに怪

私のオンパレードと言ったところである。一般人のカリアンがこの傷を負った場合、間違ひなく死亡、奇跡が起こったとしても二度と両足で立つことができないだろう。

そう考えると、武芸者とは人とはかけ離れた存在なのだ、カリアンは改めて考えさせられた。

突然、黙り込んだカリアンを不審げに見守っていたハイアは、一刻も早くこの場から去ってもらおうと、話を促した。

「お忙しい會長様が、俺たち達に何のようさー」

「そう冷たくあしらわれないでくれたまえ。君達、サリンバン教導傭兵団に頼みたいことがあるんだよ」

「俺たち達に頼まなくても、天劍授受者様と化け物に頼めばいいさー」

「ふむ、そのセヴァドス君からの頼みなんだがね、彼は君達サリンバン教導傭兵団の腕を買っているみたいでね、ツエルニの武芸者達の練習相手であり、模範的な解答例になつてほしいそうだ」

そう答えたカリアンは、ハイアがセヴァドスの名を聞いた時に、肩が微かに動き、そして体が震えることに気が付いたが、そのことを微塵も感じさせないようにカリアンにはこやかな笑みを浮かべて答える。

「特に君達の連携には眼を見張るものがあるらしく、その技術は人を相手とする都市

対抗戦にも、もしもの汚染獣襲来の際の対策として役立つはずと言われてね、私も実はその考えには乗り気なんだ。それなりの給与も払おうと思うのだがどうかね？」

セヴァドスとレイフオンという鬼札を手に入れているカリアンだが、手に入れられる戦力を見逃す手はない。

そんなカリアンの思惑は、あつさりと破綻することとなる。

「勿論、お断りさー」

「……理由を聞いても？」

言葉は軽く、あつさりとした拒絶だったが、ハイアの目は真剣そのものだった。

当初の予定が呆気なく覆されることとなったカリアンは、ハイアの心理を読み取ろうと眼を細めた。

「理由は単純、もう俺たち達はあの化け物に関わらないって決めたのさ」

その返答こそ、ハイアの偽りなき本心である。

そして、ハイア達、サリンバン教導傭兵団は既に過去のものとなってしまうていた。

「団員の半数は、あの化け物のおかげで、再起不能の重傷に追い込まれて、残りの半分も武者としては既に使い物にならなくなっているはずさー。サリンバン教導傭兵団はもう終わりさー」

「……まさか、そんな弱気の発言を聞くとは思っていなかったよ」

サリンバン教導傭兵団だけではない、目の前にいる若き団長までもが、既に心が折れていることに、カリアンはようやく気が付いた。

「それはアンタがあいつと対峙したことないからさー。もう俺っちもアレとは戦いたくないね」

「ふむ、確かにセヴァドス君の行動力にはいつも驚かされているが、君とレイフォン君がいれば、彼を抑えることができる」と私は思うのだがね」

カリアンは、そう言ってみたが、自分でもそれは希望的観測であるということに気づいていた。

そうだ——目の前のハイアを見て、武芸者とは人とはかけ離れたものだと思わされた。

ならば、そんなハイアすら武芸者として、あつさり再起不能に追い込んだセヴァドスとは何者なのだ、と。

「つははははははは！俺っち達とレイフォンがいれば大丈夫?! 全く学園都市って奴は本当に甘ちゃんばっかりさー。アンタは、レイフォンとアイツを同格と思っているようだけど、そんな甘い話じゃない」

セヴァドス・ルツケンス。アイツは本当の意味での化け物って奴さ」  
「カリアンはようやく、セヴァドス・ルツケンスという規格外の化け物を認識することができた。」

## 第三十四話

「あの一、何でクオルラフィン卿がいらつしやるのですか？」

遠くの地へと行ってしまった幼馴染、レイフォンに会いに行くために、養父デルクからの預かり物を抱えて放浪バスへ乗り込んだリーリンを待っていたのは、奇人変人の集団で知られグレンダン最強を誇る天劍授受者の一人、サヴァリス・クオルラフィン・ルツケンスである。

リーリンの指定座席の隣に座り、足元には雑誌の山があり、右手には書籍、左手にはサンドイッチと完全にリラックス状態のサヴァリスは爽やかな笑みを浮かべる。

「ああ、気にしなくてもいいよ、僕にも目的があつてね。こうしてグレンダンを出ることになったけど、まあ旅のお供程度に思ってくればいいよ」

「はあ……」

完全にリラックス状態のサヴァリスにリーリンは生返事にしか返すことができない。

そんなリーリンの様子にも全く気にすることのなく、サヴァリスは足元の雑誌の山を片付けて、道を作る。

サヴァリスの前を横切つて席に座つたリーリンに対し、サヴァリスは足元に置いて

あつた鞆の中を漁り始める。

「難しく考える必要はないと思うけど……例えば、僕が君というお姫様を守る騎士様ってというのはどうだろう?」

「あ、はい」

にこりと爽やかな笑みを浮かべたサヴァリスが、鞆の中から取り出した飲み物をリーリンに手渡す。

飲み物を口に含みながら、リーリンは目の前の天劍授受者に視線を向ける。

——マイペースと言ったらいいのか、本当に自由な所は誰かにそっくりである。

そんなサヴァリスを含めた変わり者で知られる天劍授受者の面々に囲まれてレイフォンも苦勞したんだなと考えていたリーリンだったが、よくよく考えてみると、当のレイフォンも変わり者であることに気づき、口を一の字にして黙るしかなかった。

そんなリーリンを見て、サヴァリスは不思議そうに首を傾げる。

「あれ、おかしいな? セヴァから送ってもらった本には、女性なら感激して泣いて喜ぶって書いてあつただけだな」

「人それぞれだと思えます。ところでクオルラフィン卿って」

放つておくと言が進まない、そう思ったリーリンは、サヴァリスが首を傾げている間に、単刀直入に聞き出した。

若干、無礼に当たるかもしれないリーリンに対し、サヴァリスは特に気にした様子もなく、何処かで見慣れたような笑みを浮かべる。

「折角の旅のお供なんだから、名前で呼んでほしいな。あ、ルツケンスはセヴァと一緒だから、セヴァみたいに名前の方でお願いするよ」

それでも会話のペースはあくまでサヴァリスの方にあり、もう若干諦めつつあるリーリンは話を続けることにした。

「……では、サヴァリス様と」

「様もいらさないんだけど、まあそれは今は置いておこうか。で、何か聞きたいことでもあるのかい？」

「その、セヴァって元気にやってるんでしょうか？」

リーリンの聞きたかったこと、それはよく孤児院に遊びに来ていた友人であるセヴァドスのことである。

レイフォンの事件の後、殆ど会うことが無くなり、有名なセヴァドスの行動は逐一リーリンの耳にも入っていたが、何故か知らないがセヴァドスもレイフォンと同じツエルニに転入することになった。

目の前のサヴァリスとセヴァドスは兄弟ということもあり、連絡を取っているのではないかと思っただのである。



「うん、そうだね。病気一つなく、学業にも学園生活にも満喫しているみたいだよ」  
「そう、なんですか？」

「友達もできたみたいで、ゴルネオ——ああ、もう一人の弟とも一緒に遊んだりしてるみたいだよ」

「そうですか、安心しました」

レイフォンと違い、社交的で明るく話し上手のセヴァドスは、友達の一人や二人簡単そうに思えるが、戦闘狂という残念な性質により友達作りの難易度が跳ね上がっている。

実際、リーリンもレイフォンがいなかったら話すこともできなかった存在だろう。

「そういえば、君達のところによくセヴァが遊びに行っていたようだね」

「はい、レイフォンに会いに来てみたいですけど、よく孤児院の皆の遊び相手になってもらいました」

だが、純粋で素直の性格でもあるセヴァドスは、その面さえ除けば頼りになる友人には違いはなかった。

「迷惑はかけていないかい？ セヴァは世間知らずもいいところだからね」

「いいええっ!! 本心に助かってました!! レイフォンってセヴァの前だと呆れたり、怒ったりしてくれました」

今思えば、隠れて賭け試合を行っていた時、レイフォンも何処か元気がなかった。

そんなレイフォンをセヴァドスが元気づけてくれたこともあった——稀に、お互いに暴れ始めて、建物とかを吹き飛ばしていたこともあったが。

友人の少ないレイフォンにとつて、セヴァドスは自分の感情を出すことができる貴重な存在であるということには違いはなかった。

嬉しそうに笑うリーリンを見て、サヴァリスは微笑んで口にする。

「君はレイフォンのことが好きなのかい？」

突然、投下された爆弾発言に、リーリンは右手の飲み物を落とすようになる。

「うえっ!! ちよつ、いきなり何言いだすんですか!!」

「うん、セヴァからの手紙に書いてあったんだ」

「他人の恋愛事情を、手紙なんかで情報共有しないでくださいっ!!」

とりあえず、ツエルニに着いたら、セヴァドスとはじっくりと話しておかなければならないと、リーリンは心に誓った。

「ちなみにセヴァから聞いた話だと最近、レイフォンは小さい女の子に興味があるみたいだよ」

「……詳しく教えてください」

同時にレイフォンにも聞かないといけなことができたリーリンであった。

.....

「っ?」

「はあはあはあはあ……どうした、レイフォン?」

誰かに呼ばれて気がしたレイフォンは後ろに振り返ってみたが、そこにいたのは額に汗を滲ませて肩で息をするシャーニッドしかいなかった。

周りにはレイフォン達だけではなく、他の隊の小隊員がシャーニッドと同じように疲れ果てていたり、既に力尽きたようにグラウンドに倒れている者もいる。

「いえ、何でもありません。ところで、シャーニッド先輩大丈夫ですか?」

「見りゃわかんだろ、全然大丈夫じゃねえよ」

全く呼吸の乱れを見せないレイフォンに対し、先輩の意地なのか足を止めることのないシャーニツドだが、表情にはいつもの余裕はなく、呼吸も乱れていた。

額に滲む汗を拭い、足を止めることなく走り続けるシャーニツドの口からは愚痴が溢れる。

「つか、いつまで走らせるつもりなんだ？ 既に丸一日走りっぱなしで、足元のコンデイションも最悪だろ」

シャーニツドの言う通り、走り始めて時計の時針が3周目に差し掛かろうとしており、空からは真つ赤な太陽がグラウンドを照りつけ、足元はグラウンド中央に設置した櫓に立っているセヴァードスが定期的に水を撒いているせいで、酷く泥濘んでいる。

狙撃手として、時折配置につくために悪路を走ることもあるシャーニツドでも足元の泥に足を取られそうになっていた。

「しかし、分かりきっていることとは言え、お前は全く問題なさそうだな」

「えつと、グレンダンにいた時は、三日間寝ずに汚染獣と戦ったことがありますので」昔、元同僚であったリントンスとサヴァリスと共に、名付きの汚染獣老性六期との死闘を行ったことを思い出す。

あれほどまでに命の危機に晒されたことはなく、少しでも動きが止まってしまえば、汚染獣の攻撃だけではなく、リントンスやサヴァリスという味方の一撃を受けることに

なるかもしれない状況に追い込まれたことがあるレイフォンからすれば、たつたの丸一日走り続けただけで疲れるというのは余りにも温い環境だと思つてしまう。

そんなレイフォンの言葉に、シャーニツドは心底嫌そうな顔で首を横に振る。

「うえー、絶対無理だわ、俺には」

「だが、走っているだけでいいなら幸せだと思つて」

そう言つたのは、シャーニツドを後ろから追い抜いてきたゴルネオであつた。

シャーニツドとは違い、愚痴一つ漏らさずに淡々と走り続けていたゴルネオの表情にはまだ余裕があり、流石はツエルニの武芸長と言つたところだろう。

レイフォンやセヴァドスという存在に比べると、ゴルネオは極一般的な学園都市の武芸者の範疇であつたが、それでも他の小隊員に比べても頭一つ飛び抜けた存在である。

最近では、弟のセヴァドスと訓練を行い始めてから一皮剥けたとも言われており、始めて出会つたときよりも貫禄というものが滲み出ていた。

「ゴルネオの旦那は生真面目だねー」

「ふん、武芸長になつた者がこの程度で音を上げていたらどうする。だが、他のやつらは、既に足が止まっている者もいるようだが……」

立ち止まつたり、歩き始めたりしている小隊員の姿に、先が思いやられるため息をつくゴルネオに、レイフォンもシャーニツドも同意する。

だが、止まっている者の中には疲れているからではなく、練習の意図に納得できないため歩いている者の姿もあった。

「はあーしつかし、いつまで走らせるつもりなんだ？」

「安心しろ、もうすぐ終わる」

グラウンドの中央の櫓に設置された巨大な時計を見たゴルネオが答えると、櫓に登っていたセヴァアドスがサイレンを鳴らす。

「はい、お疲れ様です！ では次の訓練に移る前に休憩を挟みましょう。柔軟は忘れないように！」

そう言つて櫓から飛び降りたセヴァアドスは、何処かに向かつて走り去つてしまう。

そんなセヴァアドスを見ていた小隊員達は、地面に腰を下ろして呼吸を整えていた。

「なんか、すげーぶっ飛んだことされそうに思つてたんだか、思つたよりも普通だな」  
「実際の訓練内容は、武芸者一人一人の質を上げるつもりで訓練は組まれている。

言つてみれば、ツエルニの武芸者はそこから始めないといけないというわけになるのかな」

シャーニツドの言う通り、レイフォンも怪我人続出の過酷な訓練を行われると思つていたが、蓋を開けてみれば極々普通の武芸者の訓練、どちらかと言えばゴルネオの言う通り。武芸者というよりも基礎体力の向上のための訓練と言うべきだろう。

「二人一人の基礎能力を高めることにより、武芸者としての成長、ひいては武芸科全体のレベルの向上となるわけだな。そこまで来て、ようやく戦術や戦略の話になってくるわけだが……」

「武芸大会を目の前にしてそんな呑気にしていいのか？」

「だが、質が揃わぬようでは、どのみち勝つこともできん」

前大会の二の舞いになるだけだ、とゴルネオの言葉に、シャーニツドも顔を顰めはしたものの反論はしなかった。

ニーナもそうであったが、レイフォン達新生よりも、前大会を経験した者の方がその辺りのことはよくわかっていることだろう。

「しかし、エリプトンの言う通り、時間がないことも確かだ。故に今日の夜に中核となる人間だけ集めて、戦略会議を行おうと思っている」

ゴルネオの曰く、戦略会議自体は何度もヴァンゼの時から行っているらしく、大凡の戦略は決まっているようであった。

「戦略会議ねー、それは旦那の弟さんも絡んでんの？」

「ああ、本人曰く人を指揮したことは多くないから、何とも言えないらしいが、戦闘のプロとしての視点は大いに助かっている」

「なるほどね、それならレイフォンも参加した方がいいんじゃないか？ この都市で

唯一、アイツと同格の武芸者だろうしな」

俺達では考えつかないことを思いつきそうだと笑っているシャーニツドの意見を、ゴルネオも賛同したのか小さく頷いてレイフオンに向かって視線を向けた。

「そうだな。アルセイフ、今夜、俺の部屋で今後のツエルニの武芸科の方針を会議を設けている。大会まで残り僅かな時間しか残されていないことを考慮して何度も話し合っている暇はない。俺達とは経験値が違いすぎるお前の視点が必要だ」

「その、僕は……」

ゴルネオの言葉にレイフオンは答えることができない。

確かにレイフオンは、老性体という化け物級の汚染獣を倒してきた経験はあるが、都市同士の戦争、ましてや人を率いて戦ったこともなく、チームとして戦ったのもツエルニに来て、初めてのことである。

レイフオン自身も、そのような会議で自分の経験が活かせるなど思ってもいない。そんなレイフオンを気にすることなく、ゴルネオは隣にいるシャーニツドにも声をかける。

「エリプトン、それにアントークやロスにも参加するように言っておいてくれ」

「俺もかよ……」

「当たり前だ。話し合い次第では、部隊を率いてもらうようになるかもしれん」



ツエルニ随一の狙撃手としての視界の広さ、ツエルニ随一の戦術部隊であった第十大隊員であった経験から、ゴルネオはシャーニツドのことを高く評価していた。

だが、当の本人は突然と提案に動揺を隠しきれないでいた。

「いやいや、それは俺のキャラじゃねえっていうか」

「ただの兵と指揮官では、負うことになる責任が違うだろう。だが同時に与えられる権限も変わることになる。友やお前自身の約束を果たすためには、どのような力も持つておいたほうがいい」

「ダンナ……」

「ふ、まあ、お前が選ばれるかに関しては、何とも言えないがな」

冗談混じりの、それでいて何処か温かみのある笑みを浮かべたゴルネオは、力強い歩みで背を向けて去っていった。

そんなゴルネオの姿に、シャーニツドは感心したのか、目を細めて小さく頷く。

「なんつうか、ゴルネオのダンナ、昔よりも余裕というか自信っていうか、なんか逞しくなったよな」

「そう……ですね」

「まあ、これもセヴァの奴に扱かれているからか」

俺のときも苦労したわ、とシャーニツドもしっかりとした足取りで前を向いて歩いて

いく。

シャーニツド、ゴルネオ、そしてセヴァドスの姿を思い出し、レイフォンは知らず知らずのうちに溜息をついていた。

「……本当に、凄いな」

武芸を辞めると決めたのにもかかわらず、惰性のように武芸をしている自分と思うがままに自分を高めていくセヴァドス。

そんな彼と通じること、ツエルニの人間が吹っ切れて、成長していくその姿を見せつけられることとなったレイフォンは、セヴァドス・ルツケンスという存在を初めて羨ましく思った。

## 第三十五話

「やっと……休める」

交通都市ヨルテムの宿の一室で、リーリンは力尽きたようにベッドの上に倒れ込んだ。

疲れていることもあり、頬に当たるシーツの肌触りはとても柔らかく、何とも言えない弾力が眠気を増幅させるが、明日の用意などができていなかった。

ベッドからの誘惑から逃れるように体を起こしたリーリンは、ベッドの脇にあるサイドテーブルにバス停で貰った放浪バスの行路図と時刻表を取り出して、明かりの下で開く。

「やっと半分つてところかな？」

グレンダンからツエルニに向けての旅の中間地点であるヨルテムに辿り着くことができたことに思わず溜息をつく。

初めて都市外に出てわかったことだが、この世界はとても広い。

故郷から出ていくともう戻ってこれないと錯覚しそうになってしまうほどに。

その事実がリーリンには重く、同時にもう少しでレイフォンに会えるという事実が嬉

しい。

だが、同時にサヴァリスとの二人旅はまだ折り返し地点という事実から目を反らしたくなる。

サヴァリスとの旅、それを言葉にするならば、波乱に満ちた旅路と言えるだろう。

共に街へ繰り出せば、何故か犯罪組織と対峙することとなり、何度も組織に属する武芸者達から命を狙われたことや、その都市に所属する武芸者に喧嘩を売って乱闘騒ぎを起こして酷く怒られたり、とごく普通の一般人であるリーリンからしてみれば命が幾つあつても足りないほどである。

そんな状況下でも、サヴァリスはリーリンに傷一つつけないことなく守り切っているのは流石は天剣授受者と感謝したくなるが、元々の原因がサヴァリスの方にあることを考えるとその有り難みも薄れてくる。

だが、サヴァリスという凄腕の武芸者が隣にいることは、リーリンの危険な旅の負担を和らげていることには間違いない。

そんなところはセヴァに似てるかな？

自由奔放で、悪気のない行動は、友人のセヴァドスによく似ており、時々話が通じなくなるころは瓜二つである。

流石は兄弟だ、とリーリンが納得していると、扉からノックの音が聞こえた。

「どなたでしょうか？」

「僕ですよ、リーリンさん」

夜遅くリーリンの部屋に訪ねてきたのは、先程までリーリンの頭を悩ませていた張本人であるサヴァリスだった。

時計の針を見てみると、眠るには早い時間かもしれないが、それでもサヴァリスがこんな時間に訪ねてきたことは一度もない。

何か緊急のようかもしれない。

不用心かも知れないが、それなりに信頼していたサヴァリスの来訪に、リーリンは部屋の入り口まで足を運ぶと、そのまま扉を開く。

「どうかしましたか？」

「いえ、寝るには早いので少し話でもしようと思つてね」

扉の前に立っていたサヴァリスは、リーリンに白い袋を手渡す。

その中には飲み物や食べ物などが入っており、リーリンは扉の鍵を開けてサヴァリスを招き入れた。

「珍しいですね、普段は酒場やバーなどに行かれていますようでしたけど」

「うん、実は出禁を喰らってしまったてね、話し相手を探していたところなんだ」

何でもないように語って、ソファの上に座るサヴァリスに、リーリンは溜息をつくこ

としかできない。

呼吸をするかの如く、問題を起こし続けるサヴァリスに矯正の余地はないだろう。ならば、リーリンは友人であるセヴァドスがこんな風にならないように祈るのみである。

「しかし、ヨルテムだったね。ここはとても豊かなところだね」

「はい、そうですね。都市の端から端まで設備が整っていて、街灯なども至るところに設置されて治安も良さそうですね」

都市を見回る武芸者達もグレンダンほどではないが、今までの渡ってきた都市の中でも優れているとサヴァリスは言っていた。

リーリンも、ヨルテムの街を見て廻り、この都市の豊かさに微かな嫉妬を覚えていた。こんなところに住んでいたら、レイフォンもあのようなことにはならなかったのではないかと。

「グレンダンとは違い、食料も溢れかえっているから飢える心配はなさそうですね」

「そう、ですね……」

人間というものは、生きていくためには食べ物が必要である。

そういう意味では、リーリン達もまた幸運に恵まれていた。

サヴァリスは、名家の生まれからして食べることには困ったことはないだろうし、

リーリンもレイフォンが身を削ってまで稼いでくれたお陰で飢えることはなかった。

それでも、以前食料難に陥った際には、数多くの孤児達が餓えて亡くなっていることをリーリンは知っていた。

事実、リーリンの孤児院でも餓死はいなかったが、多額のお金がいることで病院に行けなかった孤児の友人が病死したこともあり、貧困が人を殺すということは痛いほど理解できた。

「けど、武芸者としてはやっぱりグレンダンが一番いいかな」

そんなリーリンの考えとは違い、サヴァリスの考えはまるで逆のことを考えていた。

「どうしてですか？」

「ん？ だって汚染獣とも頻繁に戦うことができるし、そのおかげで残っている武芸者達の質も高い。その中でも天劍授受者や女王様という最高の存在もいるんだ。

あれ以上の環境はないとは僕は思うね」

実際、リントンスさんもグレンダンに行き着いてしまったしね、というサヴァリスの言った通り、グレンダンには故郷を捨ててまでこの地に移住してきた者も存在する。

天劍授受者で言うならば、最強の天劍と名高いリントンスやカウンティアとリヴァースのコンビもそうであった。

彼ら以外にも他都市の武芸の流派をグレンダンで開く者達もいることから、サヴァリ

スの言っていることは強ち間違いででもなかった。

ならば、レイフォンはどうだったのだろうか？

「だから、思うんだよ。レイフォンにとつてツエルニの生活は楽しくないんじゃないかな」

いかってね」

「それは……レイフォンも武芸者、だからですか？」

レイフォン・アルセイフ。

リーリンと同じ孤児院で育ち、共に苦楽を共にした親友でもあり、兄であり弟でもある。

同時に、リーリンの想い人でもある彼は、グレンダン屈指の武芸者である天劍授受者の一人であった。

サヴァリスが認めるほどの才を持ったレイフォンは、間違いなく武芸の天才であり、紛れもない武芸者であった。

「そうだね。正確に言うるとレイフォンは武芸者以外になれない、ってことさ」

「それは……それは決めつけなんじゃないですか?! 人には努力次第では何でもなれると……」

「なれないよ。少なくとも天劍授受者になるほどの人間には、武芸者にしかなれない」



サヴァリスの言葉は、何処か確信めいた台詞に、リーリンは言葉を発することができなかつた。

リンテンス達はまだいい。

彼らは故郷を捨てたとはいえ、グレンダンという居場所にたどり着くことができたのだから。

セヴァドスは問題ないだろう。

セヴァドスはただの留学であり、何れグレンダンに帰ってくることになる。

ならば、レイフォンはどうなるのか？

レイフォンの故郷はグレンダンであり、同時に追放されたため、帰ってくることはできない。

だからこそ、レイフォンは新たな場所で、新たなことをするためにツエルニへと飛び立ったのだ。

そこで、何も見つけることができなかつたら、居場所も作ることができなかつたら、レイフォンはどうなるのだろうか？

リーリンの脳裏に最悪の結末が思い浮かぶ。

言葉を失い、顔を青白くさせたリーリンに、サヴァリスは尋ねる。

「リーリンさんは、レイフォンにどうなつてほしいんですか？」

サヴァリスからの間に、リーリンは一瞬呼吸が止まった気がした。  
レイフオンの望みではなく、リーリンの願い。

それはレイフオンにあんな思いまでした武芸の道に戻ってほしいのか？

それとも、新たな可能性を信じて道を切り開いてほしいのか？

少なくともリーリンがレイフオンに望むことはただ一つであった。

・  
・  
・  
・

レイフオンは、ただその場で置物のように座っているだけでしかなかった。  
それとは対照的に、目の前で雄弁な口調で語るのはセヴァドスである。

「以上で私からの話は終了とさせていただきます。何か質問のある方は？」

この場に集まった20人の中心で、セヴァドスは気負うことなく、怯むことなく、平常心で冷静な口調で周囲を見渡す。

その姿を見て、誰もがこの年に入学した一年生だとは誰も思わないだろう。

「うむ……確かにそうなれば、いいと思うのだが、本当に上手いくのか？」

「上手いくのか、ではありません。上手いかなせることこそその戦略であり、戦術です。そして大切なのは迷いを捨てることです。少しでも判断を誤れば、それこそ戦略が崩れてくることになるでしょう」

指揮は今まで取ったことはない、と言っていたセヴァドスの言葉は、最初は皆半信半疑で聞いていたが、現実味があり、戦略性のある手法に、誰もが話に引き込まれていた。

「しかし、全体指揮もそうだが前線指揮はどうするのですか？ 各小隊長に任せるのか？」

「いや、この合宿を機に最適な人材を見極めるつもりだ。実際、小隊を指揮するのと、今回の部隊を運用するのでは適正がまるで違ってくる」

「まあ、二ーナみたいなイノシシが、指揮官になって、ひたすら突っ込んでいても困るわな」

「ぐふつ……いい、言うじやないか、シャーニツド」

楽しげに笑うシャーニツドに、何処か吹っ切れたようなニーナ。

彼らが思い悩む問題の解決に、セヴァドスの一手があつたらしいということに後から聞かされた。

同じ小隊の仲間でなかつたセヴァドスが解決していた時、レイフォンはそのことにすら気づいてなかつた。

「実際、ニーナは少し熱くなる傾向にあるからな。引つ掛ければ、簡単に釣れる」

「シ、シン先輩まで」

ニーナは、ハイア率いるサリンバン教導傭兵団によつて、連れ去られようとしていたのを、助けたのもセヴァドスであつた。

レイフォンがもし、あの夜にハイアを倒すことができれば、ニーナにそのような負担をかけることもなかつた。

「とりあえず、そこは矯正していくしかありませんね。とりあえず、医者からは練習

許可も貰つてきましたから、明日からビシバシいきますよ」

「望むところだつ!!」

「そういうところを修正すべきなのだが……」

「兄さんも、ビシバシいかせてもらいますよ。武芸長になつたんです、並の武芸者で

も負けないように鍛えて差し上げますよ」

「……本番前だ。頼むから空気読んでくれよ」

「ウインスの奴はどうする?」

「今回の都市対抗戦はツエルニの命運がかかっている。奴個人のプライド等に構っ

ている暇はない」

ツエルニの武芸者達が段々と一つになっていく。

その中心には、セヴァドスがいて、レイフォンは遠くでそれを見ているだけしかできなかつた。

入学式の日、レイフォンはカリアンに呼び出されて、強引とも言える手段で武芸科へと編入した。

都市対抗戦に勝つために、レイフォンの力が必要だと。

だが、今のツエルニにレイフォンの力は必要なのだろうか?

セヴァドス・ルツケンスという本当の天才の前に、武芸者としての自分に疑問を持つレイフォン・アルセイフが勝てるものなどあるのだろうか?

「フォンフォン」

「え?」

突然、聞こえたフェリの言葉に、レイフォンは目覚めるように重い瞼を開いた。

目の前で椅子に座っているフェリに視線を向けると、相変わらずの無表情で口を開く。

「会議は終わりましたよ」

「あつ」

会議室にはシャーニッドやニーナ、ゴルネオ達の姿は見えなくなっており、フェリとレイフオンの二人だけが残っていた。

レイフオンが一言も言葉を発することなく、会議は終わってしまった。

「調子が悪いなら病院に行ったほうがいいですよ」

「いえ、大丈夫です」

こちらを気遣ってくるフェリに、レイフオンは心配かけないように笑ってみせた。

だが、表情は強張り、上手く笑うことのできないレイフオンに、フェリは身を乗り出した。

「フォンフォン？」

「ほら、セヴァみたいに戦略を考えてたんですけど、その何も浮かばなくて……必死に考えたんですけど、やっぱりそういうのは得意じゃなくて、頭だけ痛くなってきました」  
そんなフェリから逃れるようにレイフオンは後ろへ一歩下がった。

レイフオンは、今自分が考えていることを誰にも知られたくなかった。

それはとても醜い感情だと知っていたからだ。

昔、数多くの武芸者達がレイフオン本人に向けていた感情。

「寝たらきつと治ると思います。だからフェリ先輩、おやすみなさい」

逃げるようにして部屋を後にしたレイフオンは、自分に充てられた大部屋に向かって歩き出す。

右腰の剣帯に刺さった錬金鋼は、レイフオンには重い十字架のように思えた。

## 第三十六話

昼間は、小隊員達の声が響いていたグラウンドは、既に静まり返っており空からは月明かりが辺りを照らしていた。

疲れのため、多くの小隊員達が床についているその中で、セヴァドスは一人グラウンドに佇み、日々の日課をこなそうとしていた。

劉息から始まり、足捌きなどの歩法から始まり、突きや蹴りの基本動作を丁寧かつ慎重に行っていく。

自分の感覚を確かめるように、そして自分自身のイメージと体の動きの誤差を生じないようにするために、セヴァドスは日課の鍛錬には必ず行っていることだ。

その様子を兄ゴルネオは邪魔にならないように遠くから見守っていた。

グレンダンでも天才と称されたセヴァドスだが、奔放な性格とは裏腹に、武芸に関して基本を遵守し、毎日休むことなくそれらを行っており、日々のブレない訓練で培った下地に天才的までの応用力が積み重なり、セヴァドスの武芸を支えていると、ゴルネオは最近になって気がついた。

天才という存在に挟まれるように生まれたゴルネオは、兄と弟に対し嫉妬や羨望の目



しか向けてはいなかったが、セヴァドスとの日々の訓練を通じて、思ったことがある。

この世には絶対的な才能があるのは確かで、サヴァリスやセヴァドスは間違いなく才能というものを有する者であることには間違いない。

だが、彼らを天才とまで称されるようになったのは、その才を磨き続けた積み重ねた鍛錬があつてこそと言える。

それに気が付かなかったゴルネオは二人と見比べるのを恐れ、グレンダンを飛び出した。

結果としてツエルニに辿り着いたのだが、ゴルネオはそのことに気づくのが遅すぎた。

もしも、グレンダンを出た時にそのことに気がついていれば、ツエルニをここまでの危機的状況に追い込まれることはなかったのではないかと。

「兄さん、どうかしましたか？」

一通りの鍛錬を終えたのだから額に滲ませた汗を拭うセヴァドスに、ゴルネオは鞆から取り出したドリリンクを投げ渡した。

「毎日、精が出るな」

「そうですか？」

「ああ、まだ続けるのか？」

明日も合宿は続き、セヴアドスには訓練メニューや対人訓練を行ってもらう予定だったため、早めに休んで貰おうとしたゴルネオの心配とは裏腹に、セヴアドスは疲れ知らずの満面の笑みで汗を拭ったタオルを首にかけた。

「はい、少し確かめたいことがありまして」

「確かめたいこと？」

ゴルネオの言葉に、セヴアドスは「はい」と一言告げると、腰に刺さっていた錬金鋼を取り出す。

一つはセヴアドスが普段から利用している白金錬金鋼であったが、もう一つは様々な色が混ざりあつた物であった。

見慣れない錬金鋼を見ていたゴルネオに、セヴアドスは得意げに説明をし始めた。

「以前、レイフォンが複合錬金鋼というものを作つて貰つてたみたいで、私も欲しかったのでハーレイさん達に無理を言つて作つてもらいました」

レストレーション、と復元された複合錬金鋼は、セヴアドスの全身を覆うように装着された。

鎧型の錬金鋼、それを見てゴルネオが思い出すのは、天剣授受者の一人であるリヴァースの姿によく似ていた。

関節部分は動かしやすいように鋼ではなく、伸縮性のある布のような物で覆われてい

た。

唯一、リヴァースと違い、セヴァドスの鎧には兜がなく、セヴァドスの嬉しそうな笑みがゴルネオの目に映る。

「この前、初めて実践投入した剋技なんですけど、化鍊變化した電撃を纏って動きなどを高速化というものなんですけど、こちらに對する負荷も高くて、普通の白金鍊金鋼だったらずぐに壊れてしまうんですよ。そこでこちらの複合鍊金鋼なのですが、強度面は向上により体への負荷の軽減には一応成果がでているみたいですが、やはり重量面のバランスに難があるところと、剋の出力による回路部の焼き切れの改善をハーレイさん達と考えているところなんです」

新しい玩具が手に入った小さな子供のようなキラキラとした目で話すセヴァドスに對し、ゴルネオは笑みを向け返す。

そんなセヴァドスを見て、ゴルネオは一度聞いてみたいことがあった。

「セヴァは、このツエルニに来てよかったか？」

一見、ツエルニでの生活を楽しんでいるようにも見えるセヴァドスだが、その本質はあくまで武芸者であり、兄であるサヴァリス同様に故郷のグレンダンでは戦闘狂とまで呼ばれるようになっていた。

そんなセヴァドスが最近まで平和ボケをしていた学園都市に来て、満足しているのだ

ろうか？

兄として、そしてツエルニに住まうものとして聞いておきたかったゴルネオに対し、セヴァドスは普段通りの緩い口調で答える。

「そうですねー。確かにグレンダンみたいに汚染獣と頻繁に戦うことができないですし、兄上やカナリスさん達みたいに遊んだりする人もいません」

確かにその通りだ、と肩を落とすゴルネオに、セヴァドスは「ですが——」と続けた。

——来て良かったと思いますよ。

その言葉にはセヴァドスの真摯さが伝わっていた。

そんな真つ直ぐな目をしたセヴァドスは、目を丸くさせたゴルネオに、セヴァドスはいつもの表情を浮かべた。

「腑抜けていた兄さんをビシバシ鍛えることができずし、他にも鍛えがいがありそうな人も何人かはいました。グレンダンと違って色々な勉強ができるのは助かりますね。あと食べ物も美味しいですし、愉快的友人達もできましたから」

本当に楽しそうに笑うセヴァドスに、ゴルネオは少しだけ肩の荷が降りた気がした。

「そうか……」

「あ、でもレイフォンと一度戦ってみたいですわね。ここに来る目的の一つでもあり

ましたし、ここ二年ほどはレイフォンと刃を交えたことはないんですよね」

「そうか……ならセヴァ、明日やってもらいたいことがあるのだが、構わないか？」

セヴァドスの望みを聞かされたゴルネオは、努力家であり、可愛い弟の努力を報うべく動き出した。

・  
・  
・  
・  
・

ツエルニ武芸大会特別合同合宿二日目。

第十小隊の解体と違法、そして武芸長ヴァンゼの解任という突然の凶報にツエルニに住まう人々は、不満や苛立ち、そして大きな不安を覚えていた。

その都市中に漂う空気に危機感を覚えたカリアンは、新しくなった武芸科のアピールのために、週刊ルツクンへ取材を依頼したのである。

新武芸長の就任、そして来たるべき武芸大会に向けての大規模合同合宿の様子を取材をしに来たのは、一年でありながら大役を任されることとなったミイファイは、友人であるナルキとメイシエンの二人を連れて合宿が行われている練武館横のグラウンドへと向かった。

「しかし、ミイがこんなことを任されるようになっていたとはな」

「まあねー。これもお偉いさんが私の才覚を認めてくれたってことかな？」

「ず、凄いね」

道中、自分自身が褒められたことにミイファイは胸を張って答えるのを見て、ナルキは感心したように頷き、メイシエンは羨望の眼差しを向ける。

「まあ、実際はレイとんやセヴァちゃんと仲が良いからだと思うけどどね」

「え……」

すぐに種をバラしてニヤリと笑みを浮かべるミイファイに、メイシエンは一瞬でかける言葉を見失う。

もしもミイファイの言っている通りだったら、この仕事はミイファイの努力や素質を認められたわけではなく、単に良いように使われているだけではないか、と思ったからだ。

メイシエンが考えたことをナルキも考えていたようで、こちらは特に気にした様子もなく、首を傾げて疑問を口にする。

「しかし、それだけでミイが選ばれるものなのか？ それなら武芸長になったゴルネオ先輩に親しい記者の人でもよかったんじゃないか？」

それならば、強いとは言え一年生であるレイフォンやセヴァドスよりも、新しく武芸長になったゴルネオの方が現在のツエルニの中の注目度が高いだろう。

そんなナルキの考えに、ミイフィは少し考える素振りを見せるが、すぐに首を横へと振る。

「うーん、でも武芸長と仲のいい人に良いように書いても貰っても意味なんてないよ。今回の取材目的は、先輩の武芸長としての資質を問うための取材でもあるわけだし」

「それなら、レイとんとセヴァと仲が良いミイちゃんも駄目じゃないや……？」

「そこは大丈夫なんじゃない？ 二人共要職にはついてないし、一年生だしね」

ここ最近の話題として、ツエルニ最強のアタッカーとまで称されるレイフォン達はまだまだ新人であり、一小隊員である。

どちらかと言えば、兩名が所属する小隊の隊長であるニーナやシンのように地位があるわけではなかった。

「それに」とミイフィは続けてこう言った。

「レイとんもセヴァちゃんも、滅茶苦茶強くて一年生でイケメンの小隊員じゃん？ そんな二人にも取材できたら、週刊ルックンの増刊間違いなしってわけ」

ニヤニヤと笑みを浮かべるミイファイの言葉が全てを台無しにした。

つまりは、そういう狙いがルツクン側にはあり、それをミイファイも理解していた。そんな親友の姿に、ナルキも苦笑いを浮かべるしかない。

「何というか、ちやつかりしてるな」

「まあねー。それに、メイつちの恋愛の応援もしたいしね？」

「え、ええっ!?!」

突然、自分に対しての話題、しかも恋愛話となり、メイシエンは思わず似合わないほどの大声を上げる。

顔を真っ赤にさせ、オロオロとするメイシエンに構うことなく、ミイファイは踏み込んでいく。

「だって最近、レイとんと話してないんでしょ？」

ミイファイの言葉に、メイシエンも黙って頷くしかない。

確かにここ最近、レイフォンと話したこともないし、放課後共に行動を共にしたことはない。

代わりにセヴァドスが付き合ってくることが増え、そういう意味ではメイシエンはようやくセヴァドスとともに話をするができるようになっていた。

「確かに最近のレイとんは何か思い詰めた様だったしな。セヴァと何かあったよう



な感じだけだ」

「うーん、でもセヴァちんって根が真面目というか、空気読めないけど、純粋で可愛いところあるし、空気読めないけど、不用意に人を傷つけるようなことはないと思うんだけどね」

「まあ、初日の訓練の時の惨劇を見たときは頭のネジが飛んだやつだ、と思ったけど、一緒にいたら普通に良い奴だしな。時折空気が読めてないが」

「うん、そうだね」

褒めているのか貶しているのか、ただミイファイやナルキの表情を見る限りでは大切な友人を心配しているように見えて、メイシエンは微笑みながら二人の意見に同意した。

「となれば、時間をとって二人に話を聞いてみるのもいいかもしれないな——おっと、見えてきたな」

話をしているうちに目的地に辿り着いたナルキ達は裏門を潜って、グラウンドの方へと歩き出す。

途中、見覚えのある姿に、三人は立ち止まり声をかけた。

「エリプトン先輩？」

「ん？ おお、レイフォンに何か用事か？」

そこにいたのは、首にタオルをかけて粗い呼吸をしながら日陰に座り込むシャーニツ

ドの姿であった。

額の汗を拭きながら呼吸を整えるシャーニツドに、「ご、ご苦勞様です」とメイシエンが鞆から飲み物を取り出して手渡した。

それを受け取るシャーニツドに、ナルキが答える。

「いえ、レイフォンにも用事はあるのですが、今日はミイフィの付き添いでして」

「そうなんですよ、週刊ルックンの取材も兼ねてるんです」

「おつ、なら格好良く撮ってくれよ」

首に下げたカメラを手に取り、ポーズを決めるミイフィに向かって、シャーニツドも決め顔でポーズを取るが本当に疲れているのか明らかに顔が引きつっていた。

「任せてください!! とところで先輩は休日なのに訓練ご苦勞様ですー」

「まあ、状況が状況だしな………柄にもないことをしているとは思っているんだが」

と言つても今は隠れてサボってるんだけどな、とニヤリと笑みを浮かべるシャーニツドの額には汗が滲み、肩で大きく呼吸を整える姿から、先程まで訓練を行っていたことが窺えた。

そんな姿を見て、同じ武芸者として何もしていない自分に罪悪感を覚えたナルキは、視線をグラウンドへと移す。

「私も参加した方がいいですよね?」

確かにナルキは小隊員ではないが、それでも一度代理という形で小隊に入ったことがある。

その時、小隊員と対峙した際に小隊員との実力差を感じてしまった。

ナルキ自身、自分自身が小隊員と戦って勝てると思うほど甘い考えは持っておらず、都市警察の仕事をやリながらでは恐らく勤務に影響を及ぼすことも目に見えていた。

だが、こうして都市が一つになつて武芸大会に向けて訓練している中、能天気にもその光景を見ているほど危機感を覚えないほど馬鹿ではない。

そんな風に考えているナルキに対し、シャーニツドは気にした様子もなく気軽に答えた。

「んや？ あんまり参加はお勧めしないけどな、小隊員でもついでいけていけない奴が出るくらいいの訓練だ、都市警察の仕事をやリながらだと身体が持たねえぞ？」

「しかし……」

「まあ、そう慌てんなよ。ゴルネオの旦那が近いうち小隊員以外にも訓練するみたいだしな。それを楽しみに待つてればいいじゃねえか？」

目に見えて焦っているナルキの姿を何処かシャーニツドは嬉しそうに見ていた。

昔、自分もこんな風に先輩達に言われたことがあった、と笑い、共に同じ道を歩いていた友との思い出を懐かしんでいると、隣にいたミイファイがそわそわと辺りを見渡し始

めた。

「ところで、レイとんとセヴァちゃんは何処にいるんですか?」

「あー、レイフォンは確か、昼飯の準備とか言つて厨房に行つたはずだが、セヴァはあそこにいるぞ」

そう言つてシャーニツドが指差した先には、ツエルニ最強の両翼の一人が笑い声を上げていた。

地面のグラウンドには放水による泥濘のせいで、思うように足が動かないはずなのに、セヴァドスはまるで足に羽が生えたかのように軽やかな動きで縦横無尽に駆け抜けていく。

「シン隊長、一撃一撃に集中してください。本命が簡単に見極められますよ」

最初に仕掛けたのは、セヴァドスの所属する第十三小隊長のシンである。

先手必勝とばかりに、得意の刺突を見せたシンの一撃を、セヴァドスは軽やかに避けて、そのまま足払いでシンを地面に転がす。

受け身が取れずに悶えるシンを尻目に、セヴァドスの頭上にニーナが大きく跳躍して鉄鞭を振るう。

「ニーナさんはもう少し頭を使つてください。折角の二刀流なんですから、その特徴を生かして」

だがしかし、セヴァドスには最小限の動きで回避され、そのままニーナはセヴァドスに服の裾を掴まれて遠くへと投げ飛ばされた。

しかし、その投げ技の硬直のタイミングを狙い、今度は気合に満ちた一撃でヴァンゼがセヴァドスの背後から迫る。

間違いなく捉えた、そう考えるほどの手応えを感じたヴァンゼの一撃は、振り向き様にセヴァドスの裏拳により弾かれた。

今度はセヴァドスがヴァンゼの間隙について、右拳を叩きこむと、そのままヴァンゼはその場に崩れ落ちた。

「ヴァンゼさん、良い踏み込みですが、相手との間合いを考えてください。距離を詰められた時のこともよく考えてください」

その隙に、再びニーナとシンが迫るが、二人とも同時にセヴァドスにより投げ飛ばされ、仲良く泥濘の上にダイブする。

そんな二人の姿を見て、警戒しすぎて出遅れたゴルネオの前に一瞬のうちにセヴァドスが現れた。

だが、そこは一番抜かれているせいか、反応というよりも反射の域で放った右拳はセヴァドスに打ち払われ、そのまま伸びきった腕を戻すことができず、セヴァドスに掴まれると、そのまま背中に背負られるような形で地面に向かって投げ飛ばされた。

地面に叩きつけられた痛みにより、一瞬呼吸を止めたゴルネオの視線の先には既に寸止め状態のセヴァドスの右拳が置かれていた。

「兄さんは、少し警戒しすぎて踏み込みが甘くなっています。それでは相手に隙を与えられるだけですよ」

四人の隊長格をまるで子ども扱いするように、グラウンドに転がしたセヴァドスは余裕に満ちた表情で嬉しそうに笑っていた。

顔や体に泥をつけたゴルネオ達にセヴァドスは右手を差し出して、一人一人引つ張り上げていく。

その姿に、ミイファイ達は一言も言葉を発することなく、セヴァドスの動きに魅入られてしまっていた。

「凄い……」

中でも同じ武者者であるナルキには衝撃と言ってもいい。

誰もがこう動いたら、こんな風になれたら、そう思える理想の姿が目の前に存在した。

「すげえだろ、さつきから休みなしで相手してるんだが、息一つ乱れやしねえんだわ」「やっぱり、セヴァちゃんって凄いんだね……」

「うん……」

ナルキ同様に、ミイファイもメイシエンもセヴァドスの普段と違う姿に、思わず息を吞

んだ。

そんな三人に動物的な勘で気が付いたのか、こちらへ振り返ったセヴアドスが満面の笑みを浮かべて、大きく手を上げた。

「おお、ミイファイさん!! ミイファイさんじゃないですか!?!」

軽やかな足取りで此方へ走ってくるセヴアドスに、ミイファイいつものノリを取り戻し、笑みを浮かべ返すとセヴアドス同様に右手を上げた。

「そういう君はセヴア君じゃないか!?!」

お互い相手に向かって走り出し、軽やかな動きでハイタッチを行う。

そんな一連の流れを行っているうちに、ナルキやメイシエン、シャーニッドが歩いてきた。

ナルキとメイシエンに、セヴアドスはミイファイ同様満面の笑みで出迎えて歓迎する。

「ナルキさん、どうです、混ざっていきませんか?」

「いや、私なんか邪魔になるだろう?」

「いえいえ、全然問題ないですよ、武芸科一人一人のレベルアップが求められているんですから、ねえ兄さん?」

「ああ、そうだな」

セヴアドスの言葉に、顔や服を泥塗れになりながらも立ち上がったゴルネオが同意し

た。

そんなゴルネオの姿を見て、シャーニツドは手に持ったタオルをゴルネオに投げ渡す。

「しかし、派手にやられたな旦那達」

「まだマシな方だ、少し前なら病院送りにされている」

「自慢ではないですが、手加減というものを覚えましたが」

「本当に自慢じゃねえな」

汚れを拭き取るゴルネオの隣で、自信満々でドヤツとしたり顔のセヴアドスにシャーニツドは呆れながらもゴルネオと同様にタオルを手渡す。

汚れを取り終わったゴルネオは首にタオルをかけると、表情を強張らせているナルキに声をかける。

「だが、少し待ってくれるか。小隊員以外の訓練も別に考えている」

「は、はい。わかりました」

安堵と物足りなさを感じているナルキに対し、セヴアドスがいい汗かいたと言わんばかりの爽やかな笑みを浮かべる。

「ふむ、じゃあ見学していつてください。ところでメイさん、レイフォンは台所です

よっ」



「ほう、流石はセヴァちゃん、察しがいいね」

ニヤリと笑うセヴァアドスに対し、ミイファイも同じ種類の笑みを返す。

「任せてください。愛憎トライアングル・リローデットを昨日読んだばかりです」

「お、お前っ!? まだその碌でもない小説、読んでいたのか!?」

セヴァアドスの言葉に、答えたのはミイファイではなくナルキである。

同時にあのドロドロの作品に続編があることにナルキは戦慄を覚えた。

「はい、故郷の兄上にも送らせていただいたくらいです」

「兄上にもか?!」

「他にも、陛下とカナリスさん、トロイアットさんに、あとクララにも送りましたね」  
良い仕事をしましたと晴れやかな笑みを浮かべるセヴァアドスを見て、ゴルネオは何も言う気が無くなった。

ただグレンダンに戻りたくない理由が増えたと思っている、と。

「あれ? メイシエン?」

昼食の用意をしていたレイフォンが現れた。

突然現れたレイフォンに、メイシエンが軽くパニックを起こしている隣で、セヴァアドスとミイファイが笑う。

その光景を見ていたレイフォンが表情を強張らせたことに、偶然一番近くにいた

シャーニツドと冷静さを取り戻していたゴルネオ、そして遠くから様子を見ていたフェリである。

シャーニツドは、レイフォンの表情が以前のニーナに似ていることに気づき、ゴルネオはレイフォンが弟に向ける視線の色が変わっていることに、そしてフェリは以前からレイフォンがおかしいことに気づいていた。

「レイとん、今昼食を作ってるんだよね？　ならメイつちを貸してあげるよ」

「ちよ、ミイちゃん!?!」

ミイフィに肩を押されたことにより、レイフォンの前で顔を真っ赤にさせたメイシエンに、レイフォンはぎこちない笑みを浮かべた。

「なら、お願いしようかな?」

メイシエンの手を取り、足早に立ち去るレイフォンは、一度もセヴアドスと視線を合わすことなく、その場を後にした。

## 第三十七話

レイフォンに連れられて、厨房に立ったメイシエンの目の前には、ジャガイモの形を歪に整えているフェリがいた。

ピーラーで懸命にジャガイモの皮を剥いているようだが、その両手はプルプルと震え、明らかに慣れていないことは明白だった。

——レイとんがいるから、かな？

前々からフェリのレイフォンの見る目が気になっていたメイシエンがそう思ってもおかしくない。

事実、フェリの中ではレイフォンという存在が特別ということ間違っていないかった。

「……………何ですか？」

「い、いえ！ 何でも、何でもありません!!」

自分よりも下の目線から放たれた氷のような視線に、メイシエンは思わず謝ってしま  
う。

フェリもフェリも突然謝られたことにより戸惑っていると、両手で食材の入った段

ボールを持ったレイフォンが現れました。

「どうしたの、メイシエン？ フェリ、先輩も」

「何でもないのっ」

とりあえず料理を作ることに集中しようとするメイシエンは包丁を片手に、段ボールから野菜などを取り出していくレイフォンの横に立ち、渡された野菜の皮を剥いていく。

逆側の方では、フェリがピーラーを片手に、恐る恐るジャガイモを握りしめる。

「メイシエンってやっぱり上手だね」

「え、ええ!?!」

突然、レイフォンから褒められてメイシエンは包丁を落としそうになったが、それでも巧みに包丁を操り、次々に野菜の皮を剥いていく。

隣のレイフォンは、メイシエンから渡された野菜を均等に切り、フェリの剥いたジャガイモを形を均一に切りそろえて、鍋の中に投入していく。

その一連の動作は手慣れているように見えて、メイシエンは真つ赤な顔でレイフォンの姿を見る。

「レ、レイとんも上手だね」

「そう？ 故郷にいた時、手伝ったりしてたからかな？」

そう言つて笑うレイフォンに、メイシエンもつられて笑う。

最近、元気のなかつたレイフォンがこうして笑つてくれることがメイシエンは何よりも嬉しかった。

その隣で凄まじい目つきをしたフェリがいなければ、尚良かったのだが。

「いちやついてないで、さつさと手を動かしてください」

「は、はい!!」

「そうですね、先輩。次はニンジンを剥いてくれませんか?」

剥くときは、ニンジンを固定してピーラー動かしてください、とフェリにアドバイスを送るレイフォンは手際よく野菜の皮を剥いていき、メイシエンは鍋のジャガイモの確認をする。

恐らく潰してサラダにするのだろう、メイシエンは棚からボールとすり鉢を用意し、備えられた食器の確認をする。

「そういえば、メイシエンやナルキ達つて幼馴染なんだよね?」

「うん、そうだよ」

フェリが眼の前のニンジンに集中している間に、レイフォンがサラダに使うだろうレタスを水に晒して、食べやすいサイズに千切っていく。

「じゃあ、メイシエンが二人に料理をしてあげてたの?」

「うん、そうだね。　　ミイちゃんは全然ダメみたいで、ナツキは下拵えは手伝ってくれるんだ」

そんな二人に料理を作ることは、メイシエンにとつてとても楽しいことで嬉しいことでもあった。

行動力もあり、いつも引つ張ってくれるミイフィに、冷静にそして優しく見守ってくれるナルキからこうして頼ってくれることが自分に自信を持たないメイシエンには有り難かった。

だからこそ、そんな二人が後押ししてくれるメイシエンの初恋に、メイシエン本人も一歩前へと踏み出していく。

「レイとんも、さつき故郷で料理を作ってたつて言ってたけど、誰に作っていたの？」  
レイフォンのことをもつと知るために、もつとレイフォンのことを好きになるために。

メイシエンは一歩一歩と足を踏み出していく。

「前に話したことがあったかもしれないけど、僕って孤児院に住んでたから、その兄弟に作ってあげてたかな？　まあ、実際はリーリン、あ、僕の……幼馴染になるのかな？　彼女の手伝いつて感じが多かつたな」

「そ、そうなんだ」

突ついたら蛇が出てきた。

もしくは、一步踏み出したら落とし穴に落ちた気分である。

好きな人の近くには、女性がいたことにメイシエンが軽いショックを受けた。

そして、恐らくその人はレイフオンに対し好意を抱いているということは、レイフオンの顔を見れば簡単にわかってしまった。

どうにか、話を変えたい。

そう考えたメイシエンは、もう一人の幼馴染であろう男の名前を口にした。

「そういえば、セヴァちゃんにも作ってあげてたんだよね？」

セヴァちゃんがそう嬉しそうに言つてたよ、と続けようとしたメイシエンの口が止まる。

これ以上言えなかった。

目の前のレイフオンの表情を見てしまったから。

「———そうだね、セヴァにもよく作ってあげたね」

浮かべた表情は明らかにな作り笑い。

メイシエンが初めて見たレイフオンのもう一つの顔。

それは天劍授受者として君臨していたレイフオンの笑みによく似つていた。

「セヴァって本当に何でもできるんだけど、料理は実家の料理人がいたみたいだから

作ったことがないみたいだね」

でも、レイフォンは誰もいない空間を見て口にする。

「やれば、僕なんかよりもずっと上手なんだろうけどね」

メイシエンは忘れていた。

ここ最近のレイフォンがおかしかった理由を。

メイシエンは気が付いてしまった。

レイフォンが見るセヴァドスに向けた視線の感情の名を。

それは、この都市の武芸者達がレイフォンに向けた視線。

それは、同じ隊員である後輩に向けたニーナの視線。

「本当に凄いよ、セヴァドスは、ね」

これがレイフォンの変調。

レイフォン・アルセイフは、セヴァドス・ルツケンスに嫉妬している。

「何をやってるんですっかつ」

「痛った!？」

フェリの右蹴りは、レイフォンの脛を捉える。

念威操者とは思えない見事な一撃に、流石のレイフォンも悶絶するしかない。

脛を抑えるレイフォンに、見事な仁王立ちのまま見下ろすフェリは、どんつとテーブル



ルにピーラーを置く。

「こっちは、お腹がすいているんです。 さつさと用意してください」

「は、はい」

「あと、食材足りないので、さつさと補充してください」

「はい？ えつとさつきいっぱい持ってきましたよね」

レイフォンの言う通り、人数が人数だけに先に用意をしていた。

段ボールを積んでいた場所を見ると、爆発音と共に黒煙が上がる。

「爆発しました」

「は？！」

「段ボールごと爆発しました」

「え、こ、これって明らかに念威ば」

「さつさで行ってきてください」

「は、はい!!」

さつきまでの暗い表情から一変、焦りながらもいつもの様子に戻ったレイフォンは、そのままの姿でキッチンを後にする。

レイフォンがいなくなったことで、二人だけになったキッチンで、フェリは怒りに似た感情を込めた視線をメイシエンへと向ける。

「余計なことをしないでください」

そう言つてレイフォンの後を追つたのだろう。

キツチンから立ち去るフェリの後姿を見ながら、メイシエンは自分自身の失言に泣き  
たくなつた。

・  
・  
・  
・

程なくして午前の訓練が終了したことにより、各自昼休憩を取ることになつた生徒達  
は食堂へと現れた。

そこで思い思いに席に座ることになつたのだが、レイフォンの隣にはフェリと、そし

てニーナが座っており、向かい側にはシャーニツド、鍊金鋼のメンテナンスに来ていたハーレイとキリクでテーブルを囲っていた。

メイシエンはというと、ナルキとミイファイに挟まれて少し離れたテーブルに申しわけなさそうに座っていた。

明らかに気落ちしているメイシエンに、ミイファイとナルキが話しかけようとしたその時――

「どうしたのですか、メイさん？ レイフォンと同じ席に座らないのですか？」  
空気を読まないことで有名なセヴァドスさんが、何でもないように声をかけた。

隣では空気を読んでしまうことで気苦労が絶えないゴルネオが、口に含んだ水を嘔き出していたが、当のメイシエンは肩を落としたままである。

「メイっち、もしかして何かあった？」

ミイファイの問いかけにメイシエンは身体を一度振るわせてそのまま黙秘を続けたが、それが正解と言っているようなもので、そんな素直なメイシエンに、友人として助けようとしたセヴァドスが席を立つ。

「わかりました、私が軽く声掛けをっ「だ、駄目っ!!」

立ち上がるうとしたセヴァドスを慌てて取り押さえようとしたナルキよりも先に、突然立ち上がったメイシエンの声が食堂内に響き渡る。

普段は大人しいメイシエンの大声に、食堂内の視線が当人に集まるが――

「これはうまいぞっ!!」

同じ席にいたゴルネオが突然立ち上がった。カレーを口へとかきこむと、そのまま席を立つて食堂中央に陣取る寸胴へと向かう。

そんなゴルネオに釣られ、同じ席で食事していたシャンテが続くと、他の者も寸胴の前に集まり始める。

視線が外れたことにより、硬直から溶けたメイシエンが力なく席に座ると、セヴァドスも首を傾げながらも席に座る。

それでも気落ちしているメイシエンに対し、ミイファイは一度手を鳴らす。

「今はご飯を食べようか?」

ミイファイの提案にナルキが頷き、メイシエンは顔を伏せたままで、セヴァドスは首を傾げて理解ができないものの賛同した。

そして特に会話をすることもなく、食事を続け、いつの間にか食堂にはミイファイ達三人しかいなかった。

「セヴァちゃんはいない方がよかったですよね?」

ミイファイの言葉にメイシエンが小さく頷いた。

あの時、メイシエンが声を上げたのはレイフォンに声をかけることではなく、セヴァ

ドスがレイフォンに声をかけるのが不味いということだった。

何となくそのことを理解したミイファイとナルキは、同じ席で食事を続けていたゴルネオにお願いし、セヴァドスをここから連れ出してもらった。

セヴァドスもレイフォンもない今なら話ができる、そう考えたミイファイ達は話を切り出した。

「メイ、何があつたんだ？」

ナルキの言葉に、メイシエンは恐る恐ると言つた様子で今日見たレイフォンのことを話す。

明らかに正常ではないレイフォンのセヴァドスを見る目を。

「どうしよう、レイとんとセヴァちゃんが喧嘩でもしたら……」

メイシエンが心配だったのは、自分がレイフォンに嫌われることではなかった。

セヴァドスとレイフォンという自分の貴重な友人同士が仲違いすることを恐れたのである。

「だって、セヴァちゃんって本当にレイとんのこと嬉しそうに話してたからっ」

レイフォンはメイシエンが好きになった大切な人。

セヴァドスはメイシエンが信頼できる大切な友人である。

そして、セヴァドスがよくメイシエンにレイフォンのことを話してくれた。

天賦の才を持つが同時に努力家であり、家族思いで孤児院の仲間を大切にしていたところ、馬鹿正直で最終的には割を食うお人よしなどと、とても楽しそうにレイフォンとの思い出を語っていたセヴァドスに、メイシエンは友人として信頼と好意を寄せていた。

そんな彼らが争うことをメイシエンは我慢できなかった。

言葉が出てこなくなり、涙しかでなくなったメイシエンをナルキとミイファイは力強く抱きしめた。

二人ともメイシエンと同じ気持ちであった。

ツエルニという遠い地で出会った気の合う友人同士が争う姿を見たくなかった。

同時にどうすればいいのかわからないことでもある。

当人同士に話しても上手くいくとは思えず、誰かを間に挟んで話し合いをするという方法も不可能だろう。

そもそも話し合いで済むような状態ではないだろう、となればどうすればいい？

思い悩む三人に、ゆっくりと食堂の扉が開く。

「お、ゴルネオの旦那の言った通りだな」

現れたのは第十七小隊の狙撃手、レイフォンのチームメイトのシャーニッドである。

いつもの飄々とした様子で現れたシャーニッドは、ミイファイ達とほど近い椅子を引

く。

「セヴァドスはゴルネオの旦那と訓練中だし、レイフォンはニーナが足止めしているから大丈夫だぜ」

普段から空気が読めることを豪語し、それ故に以前の小隊を離れたシャーニツドにも大体のことは理解できていた。

この光景は、以前の自分達の姿である、と。

「はつきり言って、あまりいい状態ではなさそうだな。それに時間が迫っていると  
いうこともある」

「時間、ですか？」

「ああ、我慢できる時間ってのもそうだが、そんなことを言っている時期でもないだろうって話だ」

シャーニツドのいう時間とは、レイフォンの状態を顧みての我慢の時間であり、そして都市対抗戦までの時間を指す。

今回の件の二人は、ツエルニ最高戦力の両翼であり、どん底状態にいるツエルニの救世主である。

そんな二人が潰し合ってしまったえば、二人はおろか、ツエルニ全体の問題になるとシャーニツドは考えていた。

「冷てえ話だが、それほど重要な位置にいるってわけだ、あの二人は」

「それは理解できましたが……」

結局打つ手なしというわけではないか？

そう考えたナルキに対しシャーニツドは小さく頷き返した。

「まあ、そうだろうよ。だからこそ実際賭けだな」

シャーニツドはゴルネオから聞いていた午後からの予定を説明した。

レイフオン・アルセイフとセヴアドス・ルッケンスの模擬戦ということ。



## 第三十八話

「ねえ、カナリス。 アンタはセヴァドスとレイフォン、どっちが天剣に相応しかったと思う？」

突然、そう言ったのは、目の前の書類の山と格闘するグレンダンの女王様、アルシエイラ・アルモニスである。

そんな彼女の隣で甲斐甲斐しく処理した書類を纏めるのは、側近であり、天剣授受者の一人であるカナリス・エアリフォス・リヴィン。

仕事を開始してまだ数分で、完全に飽きてきているアルシエイラに、カナリスは苦言を呈しながらもその補助へと回る。

「陛下、処理していただきたい書類がまだまだ残っているのですが」

「いいじゃない。 こうして真面目にしているんだから話し相手くらい、ね？」

ここには、アルシエイラに物申すことができる同じく天剣授受者であり、王族でもあるティグリス・ノイエラン・ロンスマイアと、グレンダンで随一の念威操者であり同じく天剣授受者のデルボネ・キュアンティス・ミューラの年長組がいれば、アルシエイラも真面目に職務に取り組むことをするかもしれないが、ここにはカナリスとアルシエイ

ラの二人しかいない。

ここで、アルシエイラの機嫌を損ねて、脱走でもされた方が支障をきたす——そう考えたカナリスはアルシエイラの雑談に合わせることにした。

「……はあ、どちらが強いか、ということですよね」

「そうね。結果としてはあの時はレイフォンに軍配が上がったけど」

「セヴァが勝つてもおかしくなかった、ですか」

そうね、と楽しそうに笑うアルシエイラに、カナリスはその時の様子を思い出す。

当時、片や大きな剣を引き摺るようにして現れたレイフォンと、対照的に小奇麗な服装にブカブカのガントレットをしたセヴァドスが闘技場に立った時の呆気にとられた観客に、対しカナリス達は思わず身を乗り出してしまうほどに食い入るように見てしまった。

その時の互いの戦いぶりは、まさしく天劍争奪戦に相応しいほどの戦いぶりであり、過去を含めてあれ程の苛烈な戦いになった天劍争奪戦は他にはないと言えるほどであった。

三時間の激闘の末、僅差で勝利したのがレイフォンであり、こうして最少年天劍授受者は最後の天劍授受者の席に座ることとなった。

もしも、天劍がもう一本余っていたとしたら、セヴァドスも天劍授受者の仲間入りと

なっていたらう。

そんなことを思い出しながらカナリスは、アルシエイラの間に答える。

「そうですね……私はレイフォンとは戦ったことにはないですが、セヴァとは何度も模擬戦をしたことはありますが、正直なところ、彼が天剣を持っていても不思議ではない、そう思っています」

「わお、高評価。流石はカナリスお姉さんね」

「ぶっ！ し、知ってたんですか？」

ニヤニヤと笑うアルシエイラを前にして、不敬にもカナリスは陛下の御前で吹き出すという彼女らしからぬ失態を仕出かすが、当のアルシエイラは気にした様子もなくニヤニヤと楽しげに笑みを浮かべながら答える。

「グレンダンのことで私が知らないことはないわ」

「デルボネ様をこんなことで起こさないでください」

実際のところデルボネ本人がノリノリでアルシエイラと一緒に見ていたのは、カナリスは知らない。

同時にカナリスが、セヴァドスに姉と呼ばれて嬉しそうにニヤニヤしていたのもバレている。

「で、そんなお姉さんから見て、二人が戦ったらどうなると思う？」

「そうですね、私は……」

答えるカナリスの表情は、姉と呼ばれた時の優しい表情ではなく、戦闘のプロとしての天剣授受者としてであり、その答えにアルシェイラは特に驚くことはなかった。

「お前はどつちが強いと思う、ニーナ」

午後の訓練が始まろうとしたその時、ゴルネオの提案により、セヴァドスとレイフォングが戦うこととなった。

今年圧倒的なまでの武芸の腕を持つ二人が現れたことにより、武芸者内ではどちらが強いか話し合ったことがよくあった。

ニーナもその話は聞いたことがあったし、武芸者として全く気にならないと言えは嘘になるだろう。

事実、急遽作られた闘技場に現れた二人から離れるようにして陣取る武芸者達の目は強い興味を秘めていた。

「……わからない」

「……そうか。お前のことだから、レイフォンっていうと思ったぜ」

シャーニッドに言われた通り、同じ隊の仲間であるレイフォンを応援するつもりであ

るが、どちらが強いかと言われれば、まるでわからないというのが答えとして正しい。

ツエルニ最大の危機である千の幼性体を屠ったレイフォンに対し、セヴァドスは百戦錬磨の武芸者集団サリンバン教導傭兵団を圧倒した。

その実績から見て、ニーナから言えるとしたら、二人共がこのツエルニの武芸者達とかけ離れた実力を秘めていると言うことである。

そんなニーナの意見に同調するように、シャーニッドも神妙な面持ちで頷く。

「同じ小隊の仲間としてレイフォンの方が強いと私は思っている。ただ……」  
セヴァドスの戦っている姿をニーナは見た。

暴力的で倫理の欠片もない力を振るう様は、ニーナには許容できないものであったはずだ。

だが、とても楽しそうに、自由に力を振るい、舞うように戦う姿をニーナは羨ましく思ってしまった。

品行方正であり、人類が生きるために授けられた尊い力を振るう者こそ武芸者と信じていたニーナだったが、セヴァドスの戦う姿を見て、それもまた武芸者だと感じてしまった。

「結局、戦って見ないとわからねえてことだな」

「でも、私は反対です」

二人を見守ろうとするシャーニツドの隣では、腰の剣帯から鍊金鋼を抜いたナルキがいた。

険しい表情を浮かべて、今にも駆け出しそうなナルキは、ニーナ達に向かって助勢を乞う。

「先輩、今からでも遅くありません。二人の戦いを止めるべきです」

ナルキからしてみれば、あの不安定な様子のレイフォンとセヴァドスをぶつけるのは危険すぎると感じていた。

二人の友人として傷つけ合う姿を見たくないという気持ちと、ナルキの親友の気持ちを考えれば何があっても止めに入るべきだと思っていた。

そんなナルキの親友であるメイシエンも同じ気持ちであった。

「私も……二人に傷ついてほしくないです」

メイシエンの眼差しには、自分に危険が及ぼうとも、想い人と大切な友人の間に割って入ろうと思っていた。

そして残るミイファイの答えは。

「私はセヴァちゃんとレイとんは戦ったほうが良いと思う」

「ミイっ!?!」

唯一、戦闘を肯定したミイファイにも、二人と同様の思いがあっただろう。

だが、それでもミイファイは思う。

「セヴァちんつて自由気ままだし、本能のままに行動している感はあるけどさ、友達想いなんだよね」

初日、大暴れをし、完全に孤立してしまったセヴァドス。

そんな彼に話しかけたは、好奇心であった。

レイフオンの友人ということもあり、話しかけてみると、セヴァドスがとても愉快な人物であり、実にミイファイ好みの人間であった。

そして、思うほど暴力的ではなかった——正確には、威圧的ではないが、戦闘狂であったのだが。

そんなセヴァドスだが、友人付き合いしてみると、思いの外マトモであり、何度も遊んでいるうちに、メイシエンやナルキ、ミイファイのことを大切に思っていることをわかってしまった。

「その中でもレイとんは特別で、そんなセヴァちんだからこそ、レイとんのことも」手を伸ばせるんじゃないのかな？

ミイファイの言葉に、ナルキとメイシエンの表情に迷いが生じる。

だが、それでも二人の意思は固く、ミイファイも説得できるとは思っていなかった。

しかし時は遅く、件の二人は既に刃を交えていた。

?

こうしてお互いに対峙したのはいつだっただろうか？

セヴァドス——彼とは何度も手合せしたことはあつたが負けたことはなかつた。

だが、同時に勝つたとも思えなかつたというのがレイフオンの正直な感想である。

本当の意味で対峙したのは、あの時以来なのかもしれない。

「こうして立っているととても懐かしい気分になりますね」

饒舌に喋り笑みを浮かべるセヴァドスに対し、レイフオンは無言を貫いたまま右手に握りしめた錬金鋼を復元させる。

その錬金鋼はグレンダンの天剣ではなく、ただの青石錬金鋼である。

その当たり前の事実がこんなにもレイフオンを不安にさせるとは思っていなかつた。



そんなレイフォンの心境を知らないセヴァドスの言葉は段々と熱が籠もっていく。

「このツエルニに来て、楽しいことの連続でした。新たな友人に出会うことができ、グレンダンでは触れることができなかつた知識や娯楽を得て、兄さんとも話がすることができました」

そう考えるとツエルニに来たのも悪くない。

そう言ったセヴァドスの表情を見て、レイフォンは一つ嘘を見抜いた。いや、正確には嘘と言うよりも、不満というのが正しいだろう。

「けれど、物足りない、と言いたいんでしょ」

「あ、わかりますか？」

その瞬間、セヴァドスから発する闘気が、レイフォンの肌に突き刺さり、背筋を震わせる。

「武芸者として、強い者と戦いたい。それは当たり前前の欲求ですよ」

本当に楽しそうに笑うセヴァドスを見て、レイフォンも思うことがある。

「僕は貴方と違って、そんな欲求を覚えはありません」

ただ、と言葉をレイフォンは繋げた。

「負ける気はサラサラない」

「そうですね……ならば、闘いましょう、心ゆくまでじっくりと、ね」

こうして二人の武芸者は互いに刃を向けた。

最初に動いたのは意外にもレイフォンの方だった。

一瞬で、セヴァドスとの距離を詰めると、そのまま流れるような一振りをレイフォンは放つ。

セヴァドスは慌てることなく、バックステップで難なく回避すると、続けざまに放つレイフォンの二連撃も、ガントレットで弾き落とす。

一瞬の硬直に、今度は距離を詰めたセヴァドスの左拳が唸りを上げるが、レイフォンは体を捻るようにして回避する。

一撃を避けたとは言え、ここは完全にセヴァドスの距離である。

既に放たれていた右拳がレイフォンの横腹を抉ろうとしていたが、そこは元天劍授受者である。

剣を振り抜いて、今度はセヴァドスの右拳を弾くと、レイフォンは左手に剄を込める。外力系衝剄の変化、九乃。

振り抜かれた左手から放たれる剄の弾幕に、ようやく後退したセヴァドスは、大きく右足を振り上げる。

外力系衝剄の変化、裂空牙。

振り抜かれた右足から放たれる剄の斬撃を、レイフオンは一刀で断ち切った。

「その程度ですか？」

「いえ、ここからが本番ですよ」

切り裂かれた剄の斬撃は、周りの砂利を巻き込むようにして砂埃によりレイフオンの視界を奪う。

そのことにレイフオンが気がついた時には、既にセヴァドスの右拳が撃ち抜かれた。活剄衝剄混合変化、金剛剄。

しかし、セヴァドスの拳は何かとしてつもないほどの硬いものを殴ったように弾かれた。

体勢を崩したセヴァドスに、今度はレイフオンの一撃が迫る。

外力系衝剄の針剄。

活剄衝剄金剛変化、廻世界。

放たれた剄の槍は、セヴァドスの体を捉えることなく、そのまま遙か後方の宿舎の壁をぶち抜くだけとなった。

「まさか、金剛剄ですか？ 忘れてましたよ、貴方がとても器用だということを」

「それはこちらの台詞ですよ。初めて見る技でしたが、貴方のオリジナルですか？」  
天劍授受者の一人であるリヴァースの代名詞とも言える金剛剄を扱うことができる

レイフオンに対し、自分の知識と能力を活かして次々に新たな剋技を生み出すセヴァドス。

彼らのどちらが器用なのかはさておき、両者ともに天才と言える存在であることは確かだ。

口から流れた血を拭き取るレイフオンに、再び攻守を逆転するかのようにはセヴァドスが迫る。

内力系活剋の変化、旋剋。

再び距離を詰めたセヴァドスの右拳には、溢れんばかりの剋が纏わり付いていた。

圧倒的な暴威へ対したレイフオンは、右手の剣を巧みに振るい、セヴァドスの一撃を逸らす。

そのまま左手に剋を巡らせたレイフオンは、衝剋を放ってセヴァドスを後方に吹き飛ばした。

「はっははっ!! 流石ですね、レイフオンッ!!」

「よく笑っていられますね」

外力系衝剋の変化、針剋。

外力系衝剋の化鍊変化、蛇流。

振り抜かれた剣は、セヴァドスがいつの間にかつけていた剋の糸を伝った拳打の衝撃

により、狙いが逸れる。

先程弾いた時につけられたか、レイフォンがそのことに気づいた時には、拳による衝撃が一度だけに留まることなく、ほぼ同時に十発分着弾する。

衝撃によりレイフォンの手から抜けた青石錬金鋼の剣は、空高々に宙を舞い、後方へと弾かれた。

無手のレイフォンに対し、セヴァドスは圧倒的なまでの走力で懐に迫ると、拳を振るう。

格闘戦では、圧倒的に不利なレイフォンだったが、致命傷を避けるようにセヴァドスの拳を流すように受け流す。

しかし、それも一瞬であった。

「せいっ!!」

「がっああ」

セヴァドスの右回し蹴りが、レイフォンの鳩尾を捉える。

骨が軋む音を聞きながら、レイフォンは弾かれたように後方へと吹き飛ぶ。

常人なら即死であろう手応えに、セヴァドスは思わず笑みを零す。

「金剛剋は間に合わなかつたみたいですが、どうやら後方に飛んで威力を殺したみたいですね。流石です、レイフォン」

笑みを零すセヴァドスに、レイフォンは予備の簡易型複合錬金鋼を復元して劍帯から抜くと、その場で劍を一閃した。

そして同時に、セヴァドスの右肩が切り裂かれた。

笑みが驚きの表情へと変わり、鮮血を顔に浴びたセヴァドスへと、レイフォンは暗い視線を向ける。

「忘れてましたか？ 僕は金剛剱だけでなく、貴方の剱技を使えるんですよ」

片膝をつくセヴァドスを見下ろすのは、元、天劍授受者であり、武芸の天才であるレイフォン・アルセイフであった。

## 第三十九話

吹き出した血を見ても、セヴアドスは笑みを浮かべるのを止めなかった。

ああ、そうだ。

これがレイフォン・アルセイフなのだと言字通り全身で実感した。

セヴアドスの友であり、好敵手であり、そして敬意に値する武芸者の一人であり、あの意味では兄であるサヴァリスに近い存在である。

武芸を覚えてくれたのはサヴァリスだが、それを熱意に変えてくれたのは目の前にいるレイフォンであり、そのレイフォンに勝つことこそ、セヴアドスが掲げた目標の一つだった。

外力系衝剄の化鍊変化、粘糸。

傷口を塞ぐと、セヴアドスは一步足を踏み出した。

「やっぱり、この程度では沈まないですよね？」

外力系衝剄の変化、針剄。

追撃とばかりに放たれた衝剄の槍が、セヴアドスの横腹を掠める。

再び鮮血が飛び交うが、先ほどとは違い、セヴアドスの拳は放たれていた。

外力系衝剄の変化、点破。

方向性を保ち、収束された衝剄は、レイフォンの左肩を撃ち抜く。

肩を撃ち抜かれた衝撃で、一瞬バランスを崩したレイフォンだが、コンマ数秒で体勢を整えたが、それだけの時間があれば十分であった。

内力系活剄の変化、水鏡渡り。

一瞬のうちに背後に回ったセヴァドスが放つ拳がレイフォンの背骨を軋ませる。

「がつ!?!」

「知ってましたか？ 私もサイハーデン刀争術も少しは使えるんですよ」

三連打。

金剛剄を使わせる暇を与えず、放ったセヴァドスの必殺の連撃は確実にレイフォンを捉えた。

吹き飛ばすレイフォンを、セヴァドスは追いかけずに自分の右腕を振り上げる。

「捕まえましたよ」

外力系衝剄の化鍊変化、粘糸。

まるでゴムのように引つ張られるレイフォンに向けて、セヴァドスは拳を振り抜く。

横腹を打ち抜き、左頬を捉えた拳に、レイフォンは再び弾き飛ばされるが、粘糸の特性により、再びセヴァドスの元へと返ってくる。



活剄衝剄複合変化、金剛剄。

しかしその反動を活かしたのは、攻撃を喰らっていたレイフォンであり、金剛剄と同じ時に放たれた頭突きをセヴァドスの額に捉えた。

「がはっ!?!」

「お返しだ」

今度はセヴァドスが吹き飛ばされると、その間にレイフォンは見えざる化鍊剄の糸に刃を振り下ろす。

だが、その一撃では糸を切り裂くことができず、刃が糸に食い込むだけで終わる。しかし、レイフォンは刃を回しながら、千切るように糸を斬ると、セヴァドスからの追撃を防いだ。

「ふむ、そういう破り方があるんですね。勉強になりました」

「そっちこそ、いつの間にモノマネが得意になったんですか?」

額から血を流すも特に動じることのないセヴァドスに対し、レイフォンは乱れた呼吸を整えつつ、口元から溢れる血を拭う。

骨が折れたか、自身の体のダメージを考えながらレイフォンは、悟られないように静かに相手の様子を見る。

「ふふふ、モノマネではありませんよ。ちゃんと道場に通って教えていただきました

たから」

「へえ、でもいつまでも二番煎じが通用すると思っっているんですか？」

外力系衝剄の化鍊変化、蛇流。

互いに同じ剄技を放ち、二人の中間地点では、斬撃と拳撃がぶつかり合う。

その衝撃により、お互いに引っ付いていた剄の糸は完全に切れることとなった。

「私にも同じ手は通用しませんよ」

「そのよう、ですなっ!!」

内力系活剄の変化、旋剄。

踏み込みと同時に振り抜かれた斬撃は、セヴァドスの右拳に打ち払われた。

お返しとばかりに放たれた左拳は、レイフォンの剣の腹により受け流された。

互いに放った蹴りは交差するように、辺りの地面を衝撃で吹き飛ばした。

そして競り勝ったのは、格闘戦に優れたセヴァドスである。

後方へと弾き飛ばされたレイフォンに向けて、衝剄を放つ。

外力系衝剄の変化、剛昇弾。

先程の一撃で、足が痺れていたレイフォンは回避が不可能と判断したと同時に、左足

を軸に刃を振るう。

外力系衝剄の変化、閃断。

放たれた衝剄の斬撃により、剛昇弾を真つ二つにしたレイフオンを待ち受けていたのは、弓を構えていたセヴアドスである。

「さあ、どんどん行きますよ！」

外力系衝剄の化鍊変化、鬼火。

息をつく暇もなく、放たれた爆炎の矢は、レイフオンを飲み込むと同時に辺りを吹き飛ばした。

・  
・  
・

「あいつ、やっぱり馬鹿なんじゃねえのか!？」

突然の爆発により。舞い上がった大量の砂埃を浴びたシャーニッドは珍しく大声を上げて抗議した。

その隣では、ニーナとナルキが非戦闘員であるメイシエンとミイファイを守っていた。「というよりもレイフォンもだな。セヴァドスが塞がなければ、観客を巻き込んでいたぞ」

「ミイにメイ。二人共大丈夫か?」

瞬間的に衝動を放ち、飛来する石礫を砕いたニーナの背後で、二人に覆いかぶさるように入ったナルキが、メイシエンとミイファイに手を差し出す。

「あ、ありがとうナツキ」

「いやー凄い迫力だね。写真に納めればなお良かったんだけど、ね」

突然の衝撃的な光景に、顔を青くさせたメイシエンとこの日のために奮発し新調させていた相棒の哀れな姿に少しでも涙目のミイファイが口を開く。

「どっちに請求したらいいんだろうね?」

「そんなこと言ってる場合かつ!! 早く二人を止めないとっ!」

「二人を止める、か」

輕口を叩くミイファイの隣で、ナルキは二人を止めるべく立ち上がるうとしたその時、ニーナが冷静な眼つきで二人の姿を捉えると口を開く。

「どうやって止めるんだ？」

「っそれは……」

ニーナの問いかけに、ナルキは言葉を詰まらせた。

この状況下で二人を止めるということは、二人の間に入るということだ。

そのような死地に飛び込んでいくならば、まだ幼性体の群れに突っ込んでいった方がまだマシと言えるだろう。

「我々、いやここにいる全員で二人を抑えようとしても、それは不可能なことだ」

「お、ゴルネオのダンナも無事だったみてえだな」

現れたゴルネオは傷らしい傷はなかったが、全身に砂塗れになっていた。

しかし当人は動じることなく、ニーナ達に視線を向けた後、周囲の様子を見渡す。

「怪我人らしきものはいないようだ。まあ、周辺の建物には修繕が必要だがな」

とは言え、いくら掛かるかわからんがな、とカリアンが頭を抱えるだろう光景を想像しながら、ゴルネオは溜息をついた。

そんなゴルネオに、ナルキが大腿で近づく。

「ゴルネオ武芸長!! 指示をください!! 二人を止める指示を!!」

「ゲルニ、先程アントークも言ったと思うが、セヴァとレイフオンの戦いを止めるのは不可能だ。それは意思や思いでどうにかできるものではない」

ゴルネオやニーナの言う通り、これはツエルニの武芸者で止めることが困難だということ、ナルキも理解していた。

ただそれでも、二人が血を流して戦っているのを黙ってみているわけにはいかなかった。

「しかしっ!!」

「まあ、言いたいことはわかるけどな。けど、俺はもう少しだけでも見ていたい」

「私もだ」

「隊長っ!?!」

ナルキを引き留めるように肩を叩くシャーニツドの隣では、真っ直ぐ二人の戦いを見つめるニーナの言葉に、静観していたフェリも驚きの声を上げる。

「私は武芸とは人々を守る高潔なものだと思っていた。だが、レイフオンのように手段として選んだものやセヴァドスのように戦うことに楽しむためのものとして考えているやつもいた。正直言って私はその二人の考えを好ましいと思わなかった」

だが、この数か月、色々なことがあった。

幼性体の襲来、老生体との戦闘、廃都市での決闘、サリンバン教導傭兵団の襲撃。

その中で、ニーナは様々な感情を覚える中で純粹に感じたことがある。

「だが、それでも凄いと思った。こうして見ていると体の中の何かが沸き立つような感じがしたんだ」

それもまた武芸の形の一つではないのかと、ニーナは感じた。

その思いは、ニーナだけではなく、他の武芸者にも伝播しつつあった。

「決着を見届けよう。二人の決着は二人が決めることだ」

・  
・  
・

強い——体中が千切れそうになる痛みを抑えながら、レイフォンは静かに立ち上がった。

爆炎との間に衝刺の壁を作って直撃を免れたレイフォンだったが、それでも被害は甚大であり、特に背中が焼け付くような痛みを発している。

だがそれでも立ち上がったレイフォンの脳裏には、セヴァドスとの戦闘についてだ。セヴァドスが生家であるルツケンスの武芸以外にも、色々な流派を習っていたことは知っていたが、まさかサイハーデン刀争術まで覚えてくるとは思っていなかった。

最近、刃を交えることとなったサリンバン教導傭兵団の団長であるハイアもサイハーデンの技は使っていたが、セヴァドスの動きは正しくそれと同等以上の出来であった。そしてハイアと違い、セヴァドスにはレイフォンと同等の膨大な剋量を兼ね備えている。

戦闘技術もずば抜けており、対人戦闘で言えば、レイフォン以上の怪物であるということ。

そして何より、セヴァドス自身の自由すぎる発想がその才能の神髄である。

レイフォンが、他の武芸者の武芸をコピーするのが得意とする模倣の天才だとしたら、セヴァドスは一から新たな武芸を生み出すことができる発想の天才である。

「お、流星はレイフォンですね。確実に捉えたと思ったのですが」



「こんな大技を使って、周りの被害を考えたことはないんですか？」  
焼け焦げた服や煤に塗れた頬を手で拭いながら、レイフォンは思わず憎み口を叩いてしまう。

そんなレイフォンの心情を知ってか知らずか、セヴァドスはいつも通りの笑みを浮かべる。

「ああ、大丈夫ですよ。私は手加減というものを覚えませんでしたから」

再び、セヴァドスは舞のような鮮やかな足捌きで、距離を詰めるとその拳を振り下ろす。

その一撃を転がるようにして回避したレイフォンは剣を一閃させる。

振り抜かれた一撃をセヴァドスは慌てることなく、後方に飛ぶと同時に衝撃波が地面を削り取る。

外力系衝剄の変化、裂空牙。

外力系衝剄の変化、渦剄。

互いに放った一撃は、二人を分かつかのよう中間地点でぶつかり合う。

そして二人は、示し合わせたかのように距離を詰めて、拳と刃を交え合う。

「は、ははははは!! やっぱり貴方は最高ですよ!! レイフォンッ!!!」

全身で喜びを表現するかなのような膨大な剄を垂れ流すセヴァドスに、レイフォンはひ

たすらその動きを見逃さないように剄を全身に張り巡らせる。

両手、両足がまるで全てを切り裂くような名刀であり、全てを打ち砕くような鈍器と化したセヴァドスに対し、レイフォンは全身の神経を尖らせて、その全ての動きに対応しようとする。

踏み出したセヴァドスの一撃は、レイフォンの刃とぶつかり合う。

「こうして、再び戦うことができただけでも、ここまで来た甲斐があります!! さあさあ、もつと楽しみましょうか!!」

「ぐっ!!」

セヴァドスの剛拳に、レイフォンはじりじりと後退を余儀なくされる。

苦し紛れに放った一撃も、セヴァドスを捉えることができず、代わりにと横腹に拳を突き立てられた。

「ぐぎっ!!」

「金剛剄ですかっ?! 素晴らしい反応ですね!!」

そう言つて、セヴァドスは褒めるが、当のレイフォンは金剛剄すら突き抜けた衝撃に呼吸が止まりそうになる。

しかし、たった一呼吸の隙すらセヴァドスは与えてくれない。

並みの武芸者ならば、一撃で卒倒するであろう無数の乱撃をレイフォンに叩き付け

る。

「ぐっ、そっ!!」

相討ち覚悟で放った衝剄は、軽やかなセヴァドスの足捌きにより、捉えることはできなかった。

しかし、セヴァドスが後方に飛んだことにより、再び距離ができた瞬間、レイフオンは剣を持っていない左手に剄を溜める。

外力系衝剄の変化、九乃。

放たれた弾幕に、セヴァドスは慌てることなく両手で叩き落した。

その隙に、レイフオンは錬金鋼を形状変化させる。

「レストレーション02」

使い慣れた長剣から、余りに強力なため小隊戦には使えなかった鋼糸へと変化させる。

レイフオンが右手を振り抜くと、上下左右から無数の鋼糸の刃がセヴァドスに襲い掛かる。

内力系活剄の変化、水鏡渡り。

後方に下がるセヴァドスに対し、レイフオンの鋼糸は、着実にその逃げ場を塞いでいく。

「はははははははっ!! 流石はレイフォン!! あのリンテンスさんが唯一教えたその絶技を使うことができるとはっ!!」

「これで、終わりです!!」

鋼系の網からは逃れることができない。

その絶対包囲を前にしても、セヴァドスの笑みは崩れない。

「じゃ、こちらもそろそろ行きますよ」

外力系衝剄の化鍊変化及び内力系活剄の変化、雷神蒼々、改。

その瞬間、セヴァドスはレイフォンの視界から消えた。

そして気づいた瞬間には、張り巡らされた鋼系は焼き切れたように千切られ、レイ

フォンの左側頭部に衝撃が走った。

そこでレイフォンは、初めてセヴァドスの一撃を喰らったことを認識し、焼き切れた

鋼系の残骸が宙を舞っていることに気づいた。

見えなかった——その剄技はレイフォンにすら理解ができなかった。

この技こそ、セヴァドスが打倒天劍授受者、そしてレイフォンに勝つために作り出した奥義。

雷速化したセヴァドスは、レイフォンの眼ですら捉えることができなかった。

衝撃と痛みにより、意識を失いそうになるレイフォンは死に体の身体で悟る。

レイフオン・アルセイフは、セヴアドス・ルツケンスには勝てないということ。放たれた右拳はレイフオンの顎を捉えて、身体は宙を舞う。そして、レイフオンは意識を失った。

「……………あれ？」

## 第四十話

それは、ずっと言えなかったことだ。

初めて彼と会ったのは、レイフォンが十の時の天劍争奪戦でだった。

孤児院を救うための唯一の方法として、天劍授受者になることを決意したレイフォンには、立ち塞がる敵はいなかった。

自分よりも倍以上の身長と年齢の武芸者相手でも、レイフォンは一片の負ける気すらなかった。

数度の戦鬪で、観客から歓声が上がる中、あっさりと決勝の舞台に立ったレイフォンの前に立ち塞がったのは、小奇麗な服に身を包んだ自分と同じくらいの少年であった。

肉つきや肌艶も良く、ほつれの見当たらない戦うには不向きな服、清潔な髪や全く曇ることのない笑顔を見て、レイフォンは正直羨ましさと苛立ちを感じた。

自分達とは違う恵まれた存在に苛立ちをぶつけるように、レイフォンは戦った。

だが、その少年は強かった。

師であるデルクを除けば、レイフォンが戦った中で一番の強敵であり、唯一勝てないかもしれない、とそう思ってしまったほどだ。

しかし、結果としてレイフォンは、その少年に何とか勝つことができた。その時の勝敗を分けたのかは未だに解らない。

ただ覚えているのは、その少年の眼がキラキラと輝かせてこちらを見ていたことだった。

それが、セヴァドス・ルッケンスとの出会いだった。

次に会ったのは二日目の孤児院の玄関口であった。

体に包帯を巻いたまま、笑みを浮かべたセヴァドスに、酷く困惑したことを覚えてい

る。レイフォンに敗れた者は、悔しそうにそして恨み籠った眼で睨み付けるしかなかったが、その点セヴァドスといったら、悔しいよりも嬉しい、レイフォンが放った技などに興味を持ち、こと細かく自分が負けた相手に質問を繰り返していた。

そんなセヴァドスの行動を、レイフォンは理解できなかったが、何故か敗北感を覚え

た。もしも、自分がその立場だったら、セヴァドスのような行動は取れたのか？と。

その後、リーリンとその日のうちに仲良くなり、次の日には孤児院の皆と遊んでいる姿を見て、自分にはないセヴァドスの魅力に初めて嫉妬した。

そして、そこからセヴァドスとの付き合いは続いていく。

レイフオンが、何故かリンテンスに技を教えてもらうことになった時も、セヴァドスは鍊金鋼を復元したままその光景を楽しそうに眺めていたり、

リヴァースと食事をしていたらいつの間にか隣でご飯を食べていたり、カナリスの説教を受けてるときは、何故か優雅に足を組んで椅子に座ったまま、おやつを食べていたり、

クラリーベルとセヴァドスの悪戯に、何故かレイフオンも巻き込まれて、ティグリスから逃げたこともある。

そして、レイフオンの違法賭け試合の参加にも、セヴァドスは恐らく気づいていたのだろう。

だが、それでも何も言わない彼の姿にレイフオンは救われた気がした。

もしも、あの時セヴァドスに助けを求めたら、あの間違いは起こらなかつたかもしれない。ない。

しかし、レイフオンとセヴァドスの関係は変わっていただろう。

頼ってしまえば、レイフオンの中で何かが崩れる気がした。

彼のように裕福な家に生まれていたら、皆をもっと簡単に助けられたかもしれない。

彼のように明るい性格ならば、養父や皆に苦勞をかけなかつたかもしれない。

彼のように才能に恵まれていたら、もっと上手くできたかもしれない。



レイフオンにはずっと言えなかったことがある。

レイフオンにとって、セヴァドスは、友人であり、好敵手であり、悪友であり、恩人であり、憧れであり、好意的な存在であり、

最も憎<sup>うらやましい</sup>い存在であつた。

・  
・  
・

「うっ」

「レイフォンッ!!」

誰かに呼ばれた気がして、目が覚めるとそこは知らない天井と見慣れた顔が見えた。レイフォンの顔を覗き込んでいたのは、心配そうな目でこちらを見つめるフェリであり、レイフォンと目が合うとゆっくりと顔を離していく。

少し頬を赤く染めたフェリに、レイフォンはこうして見下ろされるのは新鮮な気がした。

「大丈夫ですか？ 何処か痛い所はないですか？」

「えつと……大丈夫ですよ？」

そう言ってみるも、思った以上に声が掠れて力が籠らない。

何より全身から発する痛みは、全然大丈夫ではなかった。

身体を起こそうにも力が入らないため、レイフォンはベットに身体を沈めたまま、

フェリの方に視線を向ける。

ようやく普段の調子を取り戻したフェリは、一度喉を鳴らすと普段よりもやわらかい表情で口を開く。

「どうやら状況を把握できていないようなので、説明させていただきませんが、貴方は重度の剽脈疲労と全身の筋肉疲労、そして骨折や鱗、裂傷などで一週間寝ていました」

「二週間も、ですか？」

驚いた拍子に身体を起こした時、全身から鋭い痛みが走る。

再び、ベットに崩れ落ちたレイフォンに、フェリは慌てて顔を寄せてきた。

そんなフェリの姿は新鮮であったが、それ以上に自分自身がここまでの怪我を負ったのはいつ以来だろうと、痛みからか眼を細めた。

入院しているという事実は理解できたが、何故レイフォンはここに運ばれたのか思いつけなかった。

その様子を、観察するように眺めていたフェリが、先に口を開く。

「ゆっくり休んでください。頭を強く打っていますから、まだ最低でも二週間ほど検査入院することになると思います」

「そうですか……」

さらに二週間もこのままなのか、と入院費の心配をし始めたレイフォンだったが、ど

うやらカリアンがその辺りを上手くしてくれるみたいで如何にか助かったと肩の力を抜く。

その後、フェリが呼んでいた主治医の先生の話を聞いたりしている内に、見舞いだと、ニーナやシャーニッド、メイシエン達、ゴルネオ達が病室を訪れた。

流石に、起きてすぐということもあり、皆、簡単に話をするだけで、そのままレイフォンに負担がないようにと長居をせずに病室を退室していった。

そうして残っていたのは、いつの間にか戻ってきていたフェリとレイフォンの二人つきりになっていた。

「そろそろ、休んだ方がいいと思います」

「そう……ですわね」

少し話疲れてしまったのだろう、先程まで寝ていたのにも関わらず、全身の痛みと酷い眠気により、レイフォンはそのままベットに沈める。

「おやすみなさい、レイフォン」

「ええ、おやすみなさい、フェリ」

起きた時と同様に、フェリに見つめられながら瞼を閉じたレイフォンはそのまま意識を手放した。

フェリは、眠りについたレイフォンの手を握り締めると、ゆつくりと音を立てないように椅子から立ち上がる。

同時に銀色の髪が、淡い光を纏い、花びらが窓から通り抜けるようにしてフェリの右肩に止まる。

そしてフェリはゆつくりとレイフォンの病室を出ると、その足で屋上へと続く階段を昇っていく。

階段を上り切り扉を開くと、フェリは無表情の眼を微かに釣り上げる。

「私を呼びつけるとはいいい度胸ですな」

珍しく怒りを露わにするフェリに対し、屋上のフェンスに腰かけていたセヴァドスは景色を眺めるようにして眼を合わせることをしなかった。

「で、どうですかレイフォンの様子は？」

あまりのセヴァドスの態度に、フェリは念威爆雷をぶち込んでやろうか、と考えてしまったが、さつさと用事を済ませたいのはフェリも同じであった。

「無事、とは言えませんね。全身至る所に傷などのダメージがあり、極度の疲労もあるようで、すぐに眠ってしまいました」

しかし、命には別条もなく、何か障害が残るといふこともないそうだが、という事実はフエリを安心させた。

だが、一つ気になっていることがある。

「しかし、少し混乱しているようで、まるで自分が何故ここにいるのか理解ができないようにも見えました」

だからなのか、ここ最近気を病んでいたレイフオンの表情ではなく、少し気の緩んだ表情を見せていた。

——まるで時間が遡ったかのように。

「そうですか」

しかし、目の前の男はそれにすら反応しない。

いや、そもそも目の前の男は何者なのだ？

あのどんな時でも浮かべていた憎たらしいほどの笑みはなく、無表情に近い表情を浮かべるのは誰か。

その場にいるだけで、胸が締め潰されそうな威圧感を纏い、誰でも話しかけやすかったあの気軽な雰囲気は、見る影もなく、鋭利な剣をこちらに向けられているように感じた。

「それはよかったです。もうレイフオンが剣を握る必要はないでしょうから」

話は終わりと、そのまま屋上から飛び出そうとしたセヴァドスは「そういえば……」とふと思いついたのか、フェリに向かって振り返った。

「どうやら始まるようですよ。都市対抗戦が」

それだけ言い残し、セヴァドスはフェリの視界から消え、念威探索圏内からも消失した。

セヴァドスがなくなった屋上で、フェリは両足の力が抜けたかのように尻餅をつく。

同時にフェリはようやく思い出した。

あの時、レイフォンが執着していたと思っていたが、そもそも前提が間違っていた。本当に執着していたのはセヴァドスの方であったということ。

セヴァドス・ルッケンスこそ、本当の化け物である。

この言葉は、逃げるようにツエルニから去っていったハイアが残した言葉である。

これを兄であるカリアンから聞かされた時、単純にその武芸者の力量のことを指しているのだと思っていた。

だが、先程セヴァドスの眼を見た時に気づいてしまった。

その言葉は、文字通りの言葉であったということ。

・  
・  
・  
・

遠く離れた地、グレンダンにて。

薄暗い部屋の隅で、男が一枚の写真を取り出した。

そこに映っているのは、今は亡き最愛の妻の笑顔である。

男にとって、彼女と過ごした日々は忘れることのできない大切なものであり、眼を瞑れば未だに彼女のことを鮮明に思い出すことができる。

しかし、もう彼女と会うことはできない。

だからこそ、彼女の最後が目に焼き付いて離れなかった。

その光景が、長年に渡って男を苦しめることとなった。

彼女との思い出は忘れることができない、つまりあの時の悪夢も未だに思い出してし



まう。

だからこそ、男は思った。

あの存在が許容できないと。

一番姿形が彼女に似て、奔放な性格も瓜二つ。

だからこそ、その姿を見るだけで怒りがこみ上げてくるのだ。

故に男は決意した。

その存在を消し去ってみせる、と。

グレンダンにいた時には行動に移すことはできなかつたが、遠く離れた場所ならば事を起こすことができる。

妄執と化したその願いを叶えるため、男はゆっくりと歩き出した。

## 第四十一話

日は夕暮れ。

地響きと共に離れていく移動都市を、会長室から眺めていたカリアンは微かな安堵とともに重い腰を下ろした。

数時間前まで行われていた学園都市による都市対抗戦は、ツエルニの圧勝により幕を閉じた。

先程の戦いだけを見れば、今年の対抗戦でツエルニが負けることはないだろう、と武芸者でもないカリアンでも容易に理解することができた。

誰よりも勝利を願っていたカリアンは、生徒会長としてできることをやってきたつもりである。

故にその勝利に安堵したことは嘘ではなかったが、だがそれでも思い描いていた勝利ではなかった。

勝因はたった一人の武芸者がいたこと。

その事実がツエルニに勝利を齎し、武芸科の存在意義を破壊した。

「私は、ツエルニの長として勝たなければいけなかった。私が愛したツエルニを守

るために」

崖つぶちのツエルニを、彼女が愛したツエルニを守りたかった。

その思いはカリアンだけではなく、都市に住まう多くの住民が願ったことだろう。

「結果、私がしたことは都市の延命だけであり、一人の前途ある青年の在り方を歪め、学園都市という存在を汚しただけなのかもしれない」

君はどう思う、とカリアンに問いに、椅子に重く腰かけたヴァンゼが口を開く。

「俺に、結果を出すことができなかつた俺には、お前を責めることができん」

ここまで都市を追い込むことをしてしまつたのは、ヴァンゼ達武芸科であり、結果としてその打開策としてカリアンが外来の武芸者を確保する行動に移つた。

その行動が勝利に繋がつたことは間違いではなかつた、とヴァンゼは何も文句をつけるつもりはなかつた。

だが、ヴァンゼもカリアンも、二人の武芸者の存在を読み間違えたことこそがこのよ  
うな結果に繋がつたのだと思ひ知つた。

「すまなかつたね、ゴルネオ君」

カリアンの謝罪は、ヴァンゼの向かい側で肩を落としたゴルネオに向けられた。

謝罪を受けたゴルネオは、顔を上げることも出来ず、ただ小さく肩を震わせた。

「いえ、間違えたのは俺でした。俺が、アイツに、セヴァに全てを押し付けてしまつ

た」

それはゴルネオの懺悔であった。

他にもやりようはあったのだ。

ゴルネオは、セヴァドスのレイフォンへの執着を知っていた。

レイフォンの異常の報告を受けていた。

セヴァドスならば、何とかできるのではないかと思ってしまった。

だからこそ忘れてしまっていた。

兄である自分より遙かに強いセヴァドスも、まだ16の子供であったということ。

「気づくべきでした」

セヴァドスは、ツエルニに来て色々なことに興味を惹かれていた。

ゴルネオは、それを良いことだと思い、武芸以外のことも学んでほしいと思っていた。

本人もそう思っているのだと、額面通りに考えてしまったが、実際は戦えない不満から逃れるために、違うモノに興味を持っていたのだ。

毎日、心ゆくまで戦うことができたグレンダンとは違い、ツエルニではセヴァドスともともに戦うことができるのはレイフォンだけである。

途中、ハイアという達人と戦うことで、満足したかに思えたセヴァドスだが、アレはレイフォンという存在がまだ残っていたから満足しただけである。

そして何より、そのレイフォンという存在は、セヴァドスにとって特別なものだった。「止めるべきでした」

レイフォンと戦い、勝利したことによりセヴァドスは、何かに気づき、おかしくなっていました。

その様子には誰もが気づいていたのにも関わらず、誰も止めることができなかった。

「俺は武芸長としても、兄としても失格です」

ゴルネオの懺悔を聞いて、二人は何も口にすることができなかつた。

気づいた時には、既にもう動き始めていたのだから。

「今日の試合、私一人でやらせてくれませんか？」

待ちに待った都市対抗戦のその当日。

最後の作戦の打ち合わせに集まったカリアンやゴルネオ達部隊長の前で、セヴァドスは唐突に口を開いた。

先日、レイフォンと戦って以来、笑うことが殆どなくなったセヴァドスの言葉に、その場にいた全員が一瞬呆然とし、反論をしようと口を開いたが、誰一人声を上げることができなかつた

此方を見回すセヴァドスの眼を見るだけで、全身に震えが奔り、口を上手く動かすことができない。

ゴルネオも、ヴァンゼも、シンも、その場に在る武芸者達が金縛りにあつたように動けなくなる中、椅子に腰かけたカリアンだけが口を開くことができた。

「この一戦は、ツエルニの命運をかけることになるだろう。この場において、そのよう……」

「勝利を、間違いない完全な勝利を提供しましょう」

カリアンの強い口調を遮るように、セヴァドスは何でもないうちに口にした。

その言葉は、カリアンにとって最も必要な言葉であつた。

思わず、口を閉じるカリアンを見て、セヴァドスは少しだけ口元を緩めると、カリア

ンの目の前に立った。

「勝つことが、このツエルニを救うことだと聞いています、それ以外は全て二の次ではないのですか？」

敗北は許されない。

その言葉は、セヴァドス以上に、この場にいる全員が思っていたことであり、その肩に重く押し掛かった。

そんな彼らの姿を見て、セヴァドスは久しぶりに笑みを零した。

「ご心配なく、何も本当に私一人でするわけではありませんよ。あくまで攻め手は私一人で、時間は、そうですね……30分ほどいただければ問題ありません」

そう言ったセヴァドスの言葉は、その場にいる武芸者達に逃げ場を作った。

「それに私一人が攻めれば、自然に向こうの眼は私に集中します。そこでツエルニの武芸者面々で攻め込めば、完全な虚をつくことができますよ」

セヴァドスにそう言われ、その場にいた武芸者達の頭には、以前話し合っていた作戦を思い出す。

囷となる突出した部隊を展開し、相手の戦力を集中、引き寄せることで、後方に控えた主力にて刈り取るという釣り作戦だが、突出した部隊をセヴァドスと置き換えると十

分作戦として成り立っている。

守備主体の作戦も、既に話し合っていることもあり、展開する部隊の配置は容易にすることができると。

そもそも、セヴァドスは圧倒的な実力のため、何処かの部隊に組み込んだとしても浮いた戦力となり、最終防衛の戦力として遊軍とされていた。

故に、セヴァドスの提案に乗ったとしても、戦略戦術に大きな変更はなく、セヴァドスを囷として使うのならば、間違いなく相手の注目は完全に一身に受けることとなるだろう。

大きな反対はなく、消極的な賛成となる空気の中、ゴルネオとカリアン、ヴァンゼは微かな不安を覚えた。

先程まで語った戦術は、あくまでセヴァドスが——正常だった時の話である。

しかし、セヴァドスは先のレイフォンとの決着の後から人が変わったように物静かになつてしまった。

実際、兄であるゴルネオも、殆どセヴァドスと話すことができずにこの日を迎えてしまっている。

セヴァドスの変貌を見て、ゴルネオは武芸長としてその意見を却下しようとしたその時。



「わかった。許可しよう」

「っ!? 会長!？」

カリアンが、セヴァドスの提案を許可した。

その言葉に、その場にいたゴルネオ達が驚愕している中、セヴァドスだけが動じることなく前だけを向いていた。

「ただし、時間の設定は設けない。こちらが動くべきと判断したら、速やかに武芸長の指示に従う。例えそれが30分経っていなかったとしても、だ」

それが最大限の譲歩だ、と言ったカリアンに、セヴァドスは笑みを消して、カリアンの眼を見据える。

「十分です。約束は必ず守らせていただきます」

しっかりと頷いたセヴァドスは、要件は終わったとばかりに振り返ると、そのまま誰とも眼を合わせることなく扉を開いて退出していく。

扉が閉まってしばらくして、ゴルネオがセヴァドスの後を追うように執務室から退出していった。

その光景を見ていたカリアン達は、今年 of 対抗戦は違う意味で荒れるかもしれないと云いようもない不安に襲われた。

・  
・  
・  
・  
・

学園都市マイアス所属のロイ・エントリオは、思わず首を傾げてしまった。

試合開始のサイレンが鳴り響き、いよいよ都市対抗戦が始まると思いきや、向こう側から現れたのはたった一人の武芸者であった。

ゆっくりとした足取りは、まるで散歩をしているようで、まるで戦意というものを感

じられなかった。

「一人なのか？」

「いや、何かの作戦なのかもしれない」

ロイ以外のその場にいた部隊長も困惑のあまり思わず首を傾げていると、それは突然始まった。

外力系衝動の変化、風花穿。

ロイが気が付いた時には、既に見慣れた右腕は面白いほどの折れ曲がっていた。

折れ曲がった骨が腕から突き破っているのだろう噴き出す血を見ながら、ロイはようやく状況を理解した。

「う、うわあ……っべ!？」

叫び声すら上げられないまま、ロイは二撃目の攻撃を顎に喰らい、そのまま地面に膝をつける。

指先一つ動かせないまま、ロイは朦朧とする意識の中、自分の部下や同僚が破壊されていく光景を見る。

ああ、多分これは夢だ。

余りに現実離れた光景に、ロイは自ら夢から覚めるべく、ゆっくりと瞼を閉じた。

外力系衝剄の変化、裂空牙。

放たれた一撃は、数人の武芸者を巻き込みながら遙か後方へと吹き飛ばしていく。

噴き出した血が、まるで霧のように飛ぶのを見ながら、セヴァドスは、背後から迫る

二人の武芸者の頭部を掴む。

鍛え上げた握力で、そのまま二人の武芸者を持ち上げると、そのまま地面に叩き付け、

迫り来る集団に衝剄を使って吹き飛ばす。

外力系衝剄の変化、剛昇弾。

衝剄で完全に体勢を崩された武芸者達をまるでボーリングのごとく、衝剄の球で巻き

込んでいく。

その一瞬について、建物の上に潜んでいた狙撃手達の剄弾の雨が、セヴァドスに向

かって放たれる。

凡そ200程の剄弾に、セヴァドスは慌てることなく歩みを進める。

活剄衝剄金剛変化、廻世界。

セヴァドスが誇る最高の防御剄技。

迫る弾丸は、セヴァドスの周囲を纏うように発せられた剄の層により、推進力を奪わ

れると同時に高速回転しながら放たれた衝劄により、そのまま持ち主の元へと帰る。

まさか自分が放つた弾丸が帰ってくるとは思わなかったのだろう、多くの狙撃手が身体を打ち抜かれて悲鳴を上げる中、セヴァドスは周囲に転がっていた武芸者に手を添える。

外力系衝劄の化鍊変化、粘糸。

伸縮性のある糸をくつつけられた武芸者を、セヴァドスのそのまま振り回して、周囲で警戒していた武芸者達を薙ぎ倒す。

鉄球代わりに使われた武芸者がボロボロになると、新しい武芸者にくつつけて再び同じ要領で部隊を薙ぎ払っていく。

そうしているうちにほんの数秒ほどで、その場で立っている武芸者がセヴァドス一人となると、逃げる数人の頭部を建物の壁に叩き付けて、周囲の気配を探る。

その場にいる敵が全滅したことを確認すると、セヴァドスは新たな狩場を目指して動き出す。

活劄衝劄化鍊混合変化、雷神蒼々。

稲妻と化したセヴァドスは、そのまま建物の壁を蹴り上り、上空に躍り出ると、そのまま武芸者が一番多く集まっている主力部隊に向かって飛雷する。

その速度は、並みの念威操者では感知できず、気づいた時には既に遅かった。

着地と同時に放たれた衝剄は、推進力も合わさり凄まじい衝撃波となって、マイアスの武芸者達を吹き飛ばした。

ほぼ一撃で七割の武芸者の戦闘力を奪ったセヴァドスは、そのまま向こうの武芸長に当たると、大男を一撃で仕留めると、目にも止まらぬ速さで周りの者達を屠つていく。

活剄衝剄混合変化、千人衝。

時には、自身の分身すら現わせて、人数差を引つ繰り返し、

外力系衝剄の変化、咆剄殺。

時には、進行に邪魔な建物を吹き飛ばし、

サイハーデン刀争術、水鏡渡り。

逃げる武芸者すらも確実に潰していく、

傷一つつかないのにも関わらず、セヴァドスの腕や服、足などには少なくない返り血がついていく。

笑み一つ、言葉一つ、発しないセヴァドスの姿に、マイアスの武芸者は戦うことを諦めて、ある者は絶対に見つかからないように建物の地下に息を潜め、ある者は逃亡を図ろうと都市外縁部まで逃げていく。

その光景を見て、セヴァドスはぼつりと言葉を漏らす。

「弱い、弱すぎる」

自身を恐れるように見る目。

命乞いをするかの如く媚びる目。

平常を装っているのにも、視線が合うこともない目。

同じ道を歩いてきたのに、自分を化け物のように見る目。

友だと思っていた者からの、自分を化け物のように見る目。

「私が間違っていたのですか？」

セヴァドスは、ただ強くなろうとしただけだ。

誰よりも理解をしてくれた尊敬できる兄に追いつくために。

誰よりも強く、誰よりも自由な陛下に憧れたために。

誰よりも格好良く、確固たる存在の天剣授受者達と肩を並べるために。

そして何よりも、武芸者としての姿を見せられた友と歩いていくために、セヴァドスは強くなりたかった。

「もう帰ろう」

「もう帰ろう」

だからこそ、セヴァドスにできることはもう何もなかった。

この地、ツエルニですべきことはもうない。

後何戦あるかわからない都市対抗戦を全勝して、義理を果たしてこの地を去ろう。

それがセヴァドスの最後にできる仕事であつた。



## 第四十二話

決着は呆気ないものであった。

たった一人の武芸者により、都市の武芸者達を潰された学園都市マイアスの人々の表情は暗い。

この一戦ですべてのセルニウム鉱山が奪われたわけではなかったが、今回の敗北は正しく致命傷と言っていいほどの敗北である。

万全の準備と万全の人を揃えた状態で、たった一人の武芸者に敗北した。

死人こそ出てはいないが、身体共に再起不能となった人間は多く、何かしらのダメージを全員に与えられてしまった。

恐らくマイアスは、近い将来滅ぶことになるだろう。

それは、都市対抗戦の敗北による緩やかな死か、それとも汚染獣による壊滅という突然死か。

どちらにせよ、それ程のダメージを受けたマイアスの街では誰もが下を向き、これからの未来を悲観していた。

そう、ただ一人を除いて。

先程の戦いを見て、笑いが止まらなくなってしまった人物がいる。

サヴァリス・クオルラフィン・ルツケンス。

現天劍授受者の一人であり、名門ルツケンスの長兄、そしてグレンダンが誇る戦闘狂の一人である。

そんな彼が鼻息荒く、興奮を抑えることができないと言わんばかりに、饒舌な独り言を呟く。

「まさか、こんなところでこんな気分を味わえるなんてね」

サヴァリスの視線の先にいる人物は、自身の弟であるセヴァドスである。

言うまでもないが、サヴァリスはセヴァドスの技量、資質など武芸者のあらゆる面で高い評価をしていた。

それは兄弟という情などは一切省き、客観的な観測である。

次兄であるゴルネオとは違い、セヴァドスはサヴァリスがやり合うことができる天劍授受者と女王を含めても数少ない人物である。

そんなセヴァドスがツエルニに行かされたことは、サヴァリスからしても、とても退屈なことで衝撃的なことだった。

毎日遊ぶことができたセヴァドスと違い、天劍授受者や女王陛下もサヴァリスの遊びに付き合ってくれることはなく、少し戦闘狂気質のあるクラリーベルとも戦ってみた

が、やはり物足りないというのが正直な感想である。

そのため、女王陛下の命というのはまさしく渡りの船というもので、ツエルニに來た理由の半分以上は、セヴァドスの様子を見に來ることであつた。

サヴァリスの予想では、勤勉で真面目なセヴァドスでもこのような劣悪環境に置かれてしまつたら、腕が鈍つてしまうのではないかと危惧していたが、それは無用な心配であつたようだ。

セヴァドスは全くの鈍りすら感じることなく、確実に成長、いや進化をしていた。

その中でも特に心を奪われたのは、グレンダンにいた時には使つていなかったセヴァドスの未知の劉技である。

その新技の劉技は、サヴァリスの眼でも読み取ることができず、あの圧倒的な速度は、遠く離れた場所から觀察していたサヴァリスから見ても、視界に留めるのは難しかった。

対峙した相手から見れば、間違ひなく消えたように錯覺して見えるだろう、とサヴァリスは興奮を抑えることができなかった。

セヴァドスの進化は、新技だけに留まらず、一つ一つの動作や動きのキレなども、間違ひなく一段階磨きがかかつており、その動きはまさに天劍授受者級に匹敵するだろう、と言うのがサヴァリスの正直な感想であり、その姿を見て称賛の声を上げた。

「逆にこういう地に来て、学ぶことでもあるのかな？」

もしそうならば、一度何処かの学園都市に入学してみようか、と考えたサヴァリスは、後でセヴァドスに相談しようと考えていると、二つの移動都市が動き始めた。

同行者であるリーリンは、既にツエルニに渡っており、護衛の任も終わりである。

サヴァリスは退屈だった放浪バス生活の鬱憤を晴らすべく、ツエルニの地に降り立った。

・  
・  
・  
・  
・

都市の威信を懸けた戦いを、病院の屋上から見ていたレイフオンは、何とも言えない気分を襲われていた。

ここまでの傷を負ったことは、グレンダンでもなかったため、こうして何もできず戦いを眺めるというのも居心地が悪く、かと言って元々武芸を辞めるつもりだったのだから、これでいいのだと納得する自分もいるのは確かだ。

フェリに頼んで、戦いの様子を念威により見せてもらっていたが、セヴァドスの強さはまさに圧倒的であった。

その強さは、学園都市の武芸者というよりも、並みの武芸者でも束になっても勝つことができないほどであり、一時期グレンダンで最高位の武芸者になったレイフオンでも勝てないと断言できるほどであった。

事実、レイフオンは覚えていないが、レイフオンが入院することになったのは、セヴァドスと戦ったためということを聞かされていたため、その予想は間違いなく事実なのだろう。

先程、カリアンがこの病院に訪れて、レイフオンに武芸科から普通科に戻っても構わないという有り難いお言葉も頂いた。

同席したニーナとシャーニッドは憤慨していたが、レイフオンは自分が用済みなのだ

ろう、と思い、何も反論を口にすることもできなかつた。

奨学金も武芸科にいてもいなくても、同じ額の金額を支払うということもあり、ツエルニに入学した時よりはいい状態となっている。

これまで武芸に割いていた時間も、全て新しいことに挑戦することや、これから将来について考えることができる。

それなのに、何かが抜け落ちたような消失感がレイフオンを襲っていた。

「何を黄昏ているのですか？」

「フェリ、先輩……」

一種の燃え尽き症候群となつたレイフオンは、いつの間にか横にいたフェリに顔を向ける。

見舞い品が入っているのか、色々な雑誌が入った袋を、フェリはレイフオンに投げ渡した。

雑誌は、レイフオンもお世話になつた就労やアルバイト募集のチラシに、特に見たこともないファッション誌などが入っていた。

「聞きました、兄からお達しがあつたようですね」

「はい……」

ファッション誌を開いて、そのままベンチに腰掛けたフェリは、ニーナ達と違い、特

に話に憤慨するわけでもなく、冷静な口調で答える。

「よかつたんじゃないですか、ようやく武芸から離れて、新しいことに挑戦することができるんですよ」

羨ましいです、と言ったフェリは、レイフォンからの視線を向けられると、冗談です、と答えると、少しだけ羨ましそうな眼をこちらに向けた。

レイフォンと同様に武芸を捨てるつもりだったフェリの前では、少しだけレイフォンも気を使ってしまいが、それは余計のお世話というものだった。

「ですが、私はフォンフォンに、武芸以外の新しい道を見つけてもらいたいです。今まで頑張って戦ってきた貴方のことだから、もう戦わなくてすむように」

「フェリ……」

その言葉は、フェリからの本心だった。

いつも傷つき、それも当たり前のように戦うレイフォンが、怖かった。

いつか死んでしまうのではないか、それを当たり前のように受け入れるレイフォンが嫌だった。

——私が彼を殺しました。

そう言ったのは、彼の友人であり、先に進んで行った者の言葉である。

レイフォン・アルセイフという武芸者は、一年前のグレンダンで死んでしまった。

今いるのは、あの時死に損なつた天劍授受者という光の残照だ。  
その意見はフェリには癪に障るが、恐らく正しいのだろう。  
何より、その思いはフェリと同じだと思つた。

「フォンフォン、お疲れさまでした」

・  
・  
・  
・  
・



圧倒的な勝利に、ツエル二中が歓喜に沸くはずだった。

だが、それは対抗戦の中継を見ることで、歓喜が恐怖に変わることとなる。

たった一人で都市対抗戦に勝利を収めたセヴァドス。

彼の噂などは、都市内で浸透していたが、それでも常識的な範囲での話だった。

だが、その評価はマイアスとの戦いで変わった。

何者も寄せ付けない強さ、それは今回のように敵に振るわれたからこそだが、もしも何かの拍子にそれがこちら側に向けられてしまったら？ ツエル二は彼一人の手で滅ぼすことも出来るのではないかと誰もが理解してしまった。

それは、絶対的な支配者が現れたことを意味し、その存在の前では武芸長も生徒会長もまるで無力と化すだろう。

つまりは、セヴァドスには誰も意見を言えないようになってしまった。

そんな彼に怯えるのは、一般生徒から武芸科の生徒もいもおかしくないだろう。

殺伐とした空気の中、居心地悪そうにため息をつくミイフィは、目の前のパスタをフォークでくるくると巻く。

以前、この店を訪れた時は、セヴァドスと一緒に来て、二人でパスタの味を絶賛したのを今でも覚えている。

が、口に運んだパスタはそうでもなく、半分以上残した状態でフォークを皿に置く。

「ミイちゃん、食べないの?」

「あ、うーん。あんまり食欲ないかな?」

そう言ったメイシエンもあまり食が進まないのか、先程からサラダの量が減っていかかった。

思わず、ため息を二人でついていると、店の扉が開いた。

「悪い、遅れた」

現れたのは、訓練帰りのナルキであり、珍しく呼吸が乱れたまま席に着くと、そのままテーブルに置かれていた水を一気に飲みます。

まさしく流し込むという豪快なナルキに、メイシエンは心配そうな表情でタオルを手渡した。

「お疲れのようだね」

「まあ、な。仕事帰りに小隊での訓練は中々慣れないな」

ようやく椅子に座ったナルキの表情は、肉体的にも精神的にも疲れ切っていた。それも無理もない話である。

先日の都市対抗戦は、いい意味でも悪い意味でもツエルニに衝撃を与えた。

圧倒的なまでの勝利は、崖っぷちだったツエルニに希望を齎すものに違いはなかった。

だが、たった一人の武芸者が戦い、都市に勝利するという想像もできなかった事実を叩きつけられたことにより、一つの危険性を生み出すことになった。

セヴァドス・ルツケンスがその気になれば、このツエルニを救うことも滅ぼすことも出来る。

彼の前では、抑止力となる武芸科では相手にならず、同格といわれたレイフオンですら、その力の前ではどうすることも出来なかった。

ツエルニに住まう人々は忘れていたのかもしれない。

武芸者とは、簡単に人を殺せる人間なのだ。

故に、今ツエルニの武芸者は日夜訓練に明け暮れている。

それは、セヴァドスを止めるためでも、都市対抗戦に勝つためでもなく、最低限の抑止力を働かせるために。

しかし、本日二つのビツクニュースがミイファイの耳に飛び込んできた。

先の戦闘と最大功労者であるセヴァドスの第十四小隊脱退、及び、特務小隊長の就任。

最大戦力の二翼の一人であったレイフオンの武芸科から普通科の転科である。

セヴァドスの特務小隊とは、たった一人の小隊であり、完全なる遊軍であり、武芸長であるゴルネオの指揮下から外れ、実質、命令を下せるのは生徒会長であるカリアンだ

けという完全なる孤立した小隊である。

つまり、これからの都市対抗戦もセヴァドスだけが突撃し、敵を殲滅し、旗をへし折るだけの作業となることを指していた。

何より三人が驚いたのは、レイフォンの武芸科からのクビ宣告である。

セヴァドスの力は疑うまでもないが、それでもレイフォンが都市ナンバー2の実力者であることも間違いではない。

そんな戦力を切ったことは、普通の者なら理解に苦しむが、こちらは完全に生徒会長であるカリアンの独断で決められた。

所属小隊の隊長であるニーナは、怒り狂って生徒会長室に乗り込んでいったが、その指示が覆ることはなかった。

そのおかげと言っていいのか、レイフォンの代わりにナルキが第十七小隊員に抜擢されるということになってしまった。

ナルキも断るかと思っていたが、武芸者であり、二人の友人であるためなのか、小隊に加入に関しては何も文句を口にすることなかった。

「だが、一番の問題はあの空気だな。フェリ先輩は基本何処かに出掛けているし、シャーニッド先輩は一人で射撃訓練に没頭しているし、残っているのは私とニーナ隊長だ」

「そ、それはご愁傷様です」

その場の空気を想像しながらミイファイはそんな他人事の返事しかできない。というよりも、この状況でフェリが全く普段通りなのが未恐ろしい。

「まあ、ニーナ先輩も私の前ではちゃんとしてくれるのだが、一人でいるときは、誰も近づけないな」

幼馴染であるハーレイ先輩も完全にビビってるしな、と遠い目でナルキは、前途多難な様子を口にした。

疲れ切ったナルキを甲斐甲斐しくメイシエンを見て、ミイファイは思わずため息をついてしまう。

そこで、ミイファイはふと思った。

セヴァドスが元通りになれば、この状況も悪くならないのでは、と。

「そう、そうだったんだ」

「ミイファイ？」

考えれば悪くない考えである。

そもそもセヴァドスの様子が変わらば、助けてあげるのが友人なのではないか？

場の空気に流され、話しかけれなかったミイファイは、ようやくセヴァドスの笑顔を思い出す。

セヴァドスは、やり過ぎなところはあがあるが、友人思いのとてもいい子である。

セヴァドスがいつもの調子を取り戻せば、このツエルニの空気を変えることができるし、レイフォン関係も片が付く、そして何よりまたここでおいしいパスタを食べることができる。

セヴァドスの笑みは、それ程までに魅力的なのだ。

「よっしゃ!! そうと決まれば行動あるのみ!!」

方針さえ決まれば後は進むだけ。

それが自分らしさというものである、とミイフィはその場で立ち尽くす二人を放つて店を飛び出した。

## 第四十三話

倒壊した建物が至る所に散らばった人の気配が全く感じさせない其処は、以前セヴァドスがサリンバン教導傭兵団と戦った場所だ。

その時の戦闘の余波により、至る所に破壊痕が残るその場は、今、一人でいたい気分  
のセヴァドスにとつて有り難く、居心地のいい場所だった。

あの日、ハイアと戦った時は本当に楽しかった。

卓越した武芸者であり、そしてレイフォンと同門であるサイハーデンの使い手は、  
うそういるモノではない。

故に戦うことは楽しく、そしてレイフォンと戦った時のことを想像して、より楽しむ  
ことができた。

だが、あの日、レイフォンと戦って全てが潰された気がした。

その日から、ツエルニの日々が全て色が無くなってしまった。

あんなに楽しんでいた小説も何が楽しいのか解らなくなり、何を食べても感動的な美  
味しさを感じる事ができない。

最後に、試しに戦ってみた都市対抗戦もただの苦痛な作業であり、凡そツエルニで

楽しめることはもうないのだということを思い知らされた。

拳を振るう、剄を全身へと流していく。

こうして、一人で日々の日課の鍛錬を行うことだけは、そうしている間は、ただ純粹にそのことを考えることができる。

回し蹴りを振り抜く。

ミリ単位で調整された精密機械のごとく回し蹴りは、ブレー一つなく、イメージ通りの軌道を描く。

戦いたい。

闘いたい。

心ゆくまで、血を一滴まで絞ったような全力でタタカイタイ。

グレンダンにいた時は、闘う相手に困らなかつたことを懐かしむセヴァードスだったが、ふと懐かしい気配を感じた。

念威操者ではないセヴァードスでも、近くにいればわかると言えるほど、覚えのある気配。

だが、それはこのツエルニでは出会うことはない人物のものだった。

「ええ？」



軽やかな足取りで宙を舞い、鮮やかな着地をして現れたのは、セヴァドスにとつて掛け替えのない存在だった。

「やあ、久しぶりだね、セヴァ。元気にやっつてるようだね」

にこやかな笑みを浮かべ、こちらに手を上げて挨拶をするのは、セヴァドスの兄であるサヴァリス・ルツケンス。

天剣授受者『クオルラフィン』の担い手であり、遠く離れた故郷で別れたもう一人の兄であった。

そんな兄サヴァリスを見て、セヴァドスは思わず笑みを零してしまふ。

先程まで悩んでいたのが、馬鹿みたいに、一気に悩みが吹き飛んだ気がした。

「お久しぶりです、兄上。お元気そうで何よりです」

そう言ってセヴァドスは、満面の笑みを浮かべた。

何時ものごとく、一人病室で手持ち無沙汰となつてゐるレイフオンの前に思つてもいない人物が現れた。

「リ、リーリン?」

「ええ、久しぶり……レイフオン」

突然現れた幼馴染に、レイフオンは困惑の声を上げてしまふが、当のリーリンの表情は優しく、レイフオンの覚えてゐるままのリーリンであつた。

懐かしいと思つてしまった反面、まだツエルニに来て半年ほどだということに気づき、それでももう会えないかもしれないと思つていた幼馴染に会えたことをレイフオンは嬉しかった。

「いつ、ここにいついたの? というより、どうしてリーリンがここに?」

「着いたのは一昨日よ、手続きとかそういうので手間取っちゃって。何故、ツエルニ  
について聞かれると、何か私に来てほしくないって言ってるような気がするんだけど」

「そ、そんなことはないけど」

レイフオンの言い方が気に入らなかったのか、頬を膨らまして不機嫌な表情を作る  
リーリンに、レイフオンは慌ててその事実を否定した。

慌て過ぎて挙動不審気味のレイフオンに、リーリンは不機嫌な表情を一変、嬉しそう  
に笑みを浮かべた。

「……冗談よ。来た理由は、そのレイフオンに渡したいものがあつたから」

「渡したい物?」

「うん、大切なものよ。多分、レイフオンも喜んでくれると思うよ」

そう言われて、レイフオンは考えてみるが特に思い当たるものはなかった。

必要なものはツエルニに来た時に忘れないように持ちこんでおり、元々物自体を持つ  
ていなかったため、不要なものは処分したり、院の誰かにあげるためリーリンに渡して  
おいた。

そのため、レイフオンには何かが見当もつかなかったが、リーリンの表情から見てそ  
う悪くないものではないことは確実である。

「で、もう一つは私がレイフオンに会いたかったから」

そう言って笑ったリーリンの表情は、レイフォンの知らない表情だ。

正確にいうと、あの時の表情に似ているのかもしれない。

ツエルニを旅立つ日、リーリンと別れたあの時——そこまで思い出して、レイフォンはその後のことを思い出して、思わずリーリンから眼を反らす。

「レイフォン?」

「そ、そうなんだ。 えっとここまで放浪バスで大変でしょ? だから、その、大丈夫かなーと」

「ああ、全然大丈夫じゃないけど……まあ大丈夫だったわ」

「そ、そう?」

突然遠くを見るような眼をしたリーリンに、レイフォンは気を使って何も言わないことにした。

気を取り直して、と表情が戻ったリーリンが話を続ける。

「それより、グレンダンから初めて出てきたけど、やっぱり他の都市はどこも遠いね」「そう、だね。 とても遠いところだね」

グレンダンから出ることがなかった二人からすれば、このツエルニという土地は遠く離れた場所、そう簡単に往復できるものではなかった。

実際、生まれた移動都市から死ぬまで離れない人が大勢で、もしも都市から出ていく

ものがいれば、もう二度と会えなくてもおかしくないのが、この世界である。

「あんなに近くで汚染獣を見たのは初めてだったわ。気づかれてないようだったけど、いつこつちに気が付くのか、って。グレンダンではレイフォン達が守ってくれたから」

「リーリン、その、僕は……」

リーリンの言葉に、レイフォンは返す言葉が見つからなかった。

確かにレイフォンは武芸者として都市を守っていたかもしれないが、最後はあの結末であり、リーリンを含む多くの人に迷惑をかけ、結果として武芸と故郷を捨てる形になってしまった。

そんなレイフォンの心情を察してか、リーリンは話を変えることにした。

「ところでレイフォン、無茶はもうしないよーとか、もう武芸を辞めるーとか言ってたのに。何故入院？ グレンダンにいた時でもこんなに重症を負ったことはなかったはずだけど」

それはリーリンの今一番疑問であった。

レイフォンを探そうと学園の管理事務所に問い合わせた際に、レイフォンが入院していると聞かされた。

そうして、病室に来てみればギブスや包帯に覆われたレイフォンがいた。

変わらず無茶をするレイフォンを怒鳴ってやろうかと考えたが、久しぶりの再会でそれはどうかと考えたリーリンからしてみればようやく話が本題に入ったことになる。

長年の経験からか、対応を間違えば怒られると感じ取ったレイフォンは、ありのままの事実を説明した。

「はあ……なるほどね。セヴァと喧嘩して、ねえ」

「喧嘩って……」

「貴方達二人が争ったなら喧嘩でしょ？ お互い加減知らずによくやるわ」

リーリンの喧嘩の一言で済まされるのは、色々と考えて苦悩したレイフォンからしてみれば納得いかなかったが、二人の関係を見てきた幼馴染からすればそういうことになった。

「で、レイフォン。セヴァには謝ったの？ いくらセヴァが空気読めなくて常識外れなところがあっても、良い所もいっぱいあるでしょ？ お互い謝って仲直り、それが親友でしょ？」

「仲直りって……それに僕とセヴァって親友なの？」

リーリンの親友発言は、簡単に同意できないものである。

どちらかというと、友人の分類に入るかもしれないが、親友とまではいかないと思う、と考えていたレイフォンに対し、リーリンは不思議そうに首を傾げる。

「親友っていうか、レイフォン、友達他にいないでしょ？」

「ひどっ！ 友達くらい他にもいるから」

「イージナス卿は、友達っていうわりには歳が離れてるでしょ？ 他にいるの？」

「いるよっ！ こっちに來て何人も作ったよ」

最も信頼する家族からの辛辣な発言に衝撃を受けたレイフォンだが、それでも確実に友人と言るのが三人、小隊の仲間を含めても二桁いかなことが何とも悲しい。

だが、それでも、リーリンからすれば驚きの結果である。

「それって本当にいるのよね？ 貴方の妄想とかじゃないわよね？」

「流石に僕の頭はそこまでおかしくないから!!」

心配そうにレイフォンの頭部の包帯に視線を移すリーリンに、レイフォンは慌てて否定する。

そして、レイフォンも、リーリンも、こうして馬鹿話ができることが嬉しく思った。

「でも、リーリンが元気そうでよかったよ」

「私も……レイフォンが元気そうでよかった」

思わず目が合うと、互いに笑みを零してしまふ。

そうだった、とレイフォンはようやくリーリンという存在の有り難みに気が付いた。どんな時も味方でいてくれたリーリン、いつも一緒に過ごしてきたリーリン。

彼女は、レイフォンにとって当たり前のように傍にいてくれた存在であった。だが、レイフォンの安らぎのひと時はそう長く続かないようだ。

「何、病室でいちやついてるんですか」

突然現れた来訪者により、部屋の空気は一瞬のうちに殺伐なモノと化した。

「フ、フェリ先輩？」

「人が訓練抜け出してわざわざ見舞いに来てみれば、女を連れ込んで良い御身分ですね」

「え、その」

そこまで訓練熱心じゃないでしょ、なんて突っ込みが入れられそうもないほどの威圧感を発するフェリに、レイフォンは言葉を失い、額に汗を滲ませる。

「リーリン・マーフェスです。レイフォンとは小さい頃から同じ家で暮らしてました」

まず、先制のジャブを放ったのは、幼馴染であるリーリンである。

その姿は正しく、本妻と言えると、もし近くにセヴァドスがいたらそう言うほどの圧倒的な貫録を見せた。

「フェリ・ロスです。レイフォンとは名前呼び合うほどの親密な仲です」

しかし微塵の動揺も見せないフェリは、珍しいほどに好戦的な視線を向ける。



その姿は正しく、現地妻と言えると、もし近くにミイファイがいたらそう言うほどの鋭い眼光を秘めていた。

そんな二人に挟まれ、背筋が凍り、汗が止まらなくなるレイフォンの姿を、扉の前まで来ていたハーレイが静かに帰るほど哀れな姿であった。

しかし対峙する二人にはそんなことは関係ない。

「聞いてますよ。何故か突然、脛を蹴ってくるですつて」

リーリンの返しに、フェリは眼の前のレイフォンを睨み付けるが、二人の視線が合うことはない。

滝のような汗を流すレイフォンを見ると、フェリの脳裏に悪魔的な発想が思いついた。

レイフォンの座るベットの脇に近づいたフェリは、そのまま小動物的なジャンプをしてレイフォンに抱き着いた。

「ちよつ!?!」

「私とレイフォンはこういう関係なんですよ」

レイフォンの首筋に顔を近づけ、魔性の女のごとく不敵な微笑みを見せるフェリに、リーリンの表情が死んだ。

あ、完全に不味い顔だ、と一瞬で判断できたのは、長年傍にいたレイフォンだからこ

そだろう。

——だからこそ時すでに遅いということも理解していた。

「…………どういふこと？」

「いや、あの、その…………」

発言した内容で、レイフォンの命運が決まる。

——その時、レイフォンの頭の中は尋常なまでに回転——「あとレイフォンに抱きしめられたこともあります」——フェリの燃料投下により終了した。

「へえー」

「ちよつ!？」

嘘だつ!!と大声を上げて否定しようとしたレイフォンだが、あまりにも堂々としたフェリの物言いに自分の行動に責任を持ってなくなってしまった。

確かに、ここ最近フェリとの距離が近かった気がするし、心配されてた気がする、それにフェリから発する女性的な香りにドギマギしていたのは事実だ、と軽い現実逃避を行うレイフォンを見て、リーリンは眼を細めて不満げに鼻を鳴らした。

「ふーん」

「り、リーリン?」

無表情のまま立ち上がったリーリンは、鞆を肩にかけるとそのままフェリやレイフォ

ンに眼を合わせることなく、病室の扉に手をかけた。

「レイフォン、明日も来るから」

間違いなく怒っているだろうリーリンの無感情な声が病室に響き、扉の閉まる音が聞こえた。

「勝ちました」

何処が自慢げに頷くフェリの隣で、レイフォンはそのままベットに潜り、現実から夢の世界に行こうと眠りについた。

後日、怒るリーリンに対しての言い訳も考えておかなければならないと、レイフォンは明日の自分に向かって、無理難題を託した。

## 第四十四話

戦鬪。

それはセヴァドスにとって捨てることのできない感情の発露である。

「はっはははははっ!! 楽しいですね、兄上!!」

「そうだねっ!! セヴァツ!!」

互いの拳と拳がぶつかり合い、衝刺は放射されたかの如く、辺りのアスファルトをけり、細かい土砂が宙を舞う。

耳の中の鼓膜が震える感覚に浸りながら、セヴァドスの頬を拳が掠すめていく。

当たれば、自身の顔も陥没する恐怖を楽しみながら、ただ只管に目の前の兄を見据える。

サヴァリスの眼は自分の姿から逸らされることはない。

ただそれだけのことが嬉しく思えた。

こうして兄弟水入らずの再会は、1時間ほどで周囲の廃墟を更地にすることができた。

一通り暴れた二人は、手頃な瓦礫に腰を下ろした。

「ありきたりな言葉だけど、セヴァ、強くなったね」

「兄上こそ、やはり貴方は私の目標です」

サヴァリスからの称賛の声は正しく本心であった。

セヴァドスの資質や才能を認めていたサヴァリスだが、学園都市という微温湯に入れられることで、その腕が錆びついてしまうのではないかと心配していた。

だが、それは無用な心配であった。

セヴァドスがグレンダンにいた時よりも、さらに強くなっていた。

その力は、間違いなくサヴァリスだけではなく、他の天剣授受者や女王陛下も認めることになるだろう。

そんなことを考えるサヴァリスの目の前で、セヴァドスは久しぶりに全力で戦えたことに満足し、ここ最近浮かべることがなかった笑顔で、頬についた血を腕で拭う。

「しかし、こうなるとあの話は決まりと見ていいかな?」

「あの話、ですか?」

妙に嬉しそうに、そして納得するように頷くサヴァリスに、セヴァドスは首を傾げる。そんなセヴァドスを見て、サヴァリスは何でもないように話を続ける。

「ああ、まだ陛下から聞かされただけで、知ってるのは僕と陛下とリンテンスさんくらいじゃないかな?」

そう前置き、サヴァリスは真つ直ぐな眼でセヴァドスを見た。

「セヴァ、君は天劍授受者になるんだ」

「え？」

その言葉に、セヴァドスは全身の血が止まった気がした。

何処か他人事のように聞こえた事實は、セヴァドスが目標としてきたものであった。

「セヴァドス・ヴォルフシュテン・ルツケンスとなり、最後の一席が埋まることになる」

『ヴォルフシュテン』それはレイフォンの持つていた最後の天劍である。

その称号をセヴァドスが得るといふ、現実味がない話だった。

「私が天劍を？」

「うん、そういうことだね。元々、レイフォンが退任した時点で話には出てたらし

い。他にクラリーベル様が候補として拳がったみたいだけど、天劍を掴むほどの力

はない。それに対しセヴァ、君の実力を疑う者は天劍授受者を含めて、グレンダンには

いないだろう」

天劍を得る。

それはセヴァドスにとって悲願とも言える大切な目標であった。

兄であるサヴァリスは、こういう冗談を言わない、そして女王陛下も天劍については

冗談にしない。

つまりは、ほぼ確定事項と言ってもいいだろう。

だが、それでもセヴアードスの中では、歓喜という感情が沸き立つことはなく、ただ戸惑いと何か風穴があいたような空虚な何とも言えない感情があつた。

「私が……天剣を」

「弟が天剣授受者になることは、兄として嬉しいものだね。そうしたら、もつとお互いに全力で戦うことができるよ」

本当に嬉しそうに笑う兄の姿に、セヴアードスも——笑つた。

「そうですね。私もそうなればいいと思います、兄上」

・  
・  
・  
・

レイフオンのお見舞いの帰り道、リーリンはグレンダンから付き合いのある、もう一人の友人にばったりと出会った。

「セヴァア!!」

「リーリンさん?」

リーリンが声をかけたのは、幼馴染のレイフオンの後を追うように、このツエルニに入学したセヴァアドスである。

こうして会うのは、レイフオンと同じく久しぶりなはずなのだが、レイフオンよりも遙かに筆まめなことで気安い内容の手紙のせいか、あまり新鮮な気分はない。

ほんの数日しか会っていないような感覚を覚えたリーリンに対し、セヴァアドスは不思議そうに首を傾げた。

「はあはあはあ……疲れた。セヴァア、やっと会えたよ」

「あれ、リーリンさんはどうしてここに?」

グレンダンにいたのでは? というセヴァアドスの疑問は尤もなことだろう。

リーリンもこうして、遠いツエルニに来るとは思ってもいなかった。

勿論、来たくなかったと言えば、間違いなく嘘であるが。

「えっと、レイフオンに届け物、かな? ここまでは貴方のお兄さんに連れてきても



らったの」

「ああ、なるほど。兄上が言ってた仕事ってそのことですか？」

疑問が解けましたと頷くセヴァードスを見て、既にサヴァリスと出会ったことにリーリンは気が付いた。

「お兄さんには、もう会ったの？」

「ええ、先程まで一緒に遊んでました」

そう言つて嬉しそうに笑うセヴァードスを見て、リーリンも思わず笑みを零す。

「あー、なんていうか、セヴァは変わらないね」

セヴァードスはグレンダンにいる頃から変わつてなかつた。

人懐っこい笑みも、真つ直ぐにピンと立った背筋も、そして――

「あれ？ 何か……」

「どうしましたか？」

微かに感じた違和感は、気のせいとしたリーリンは何でもない様子でセヴァードスを見る。

やはり、そこにいたのは変わり映えのないセヴァードスである。

「……ううん、なんでもないよ。ところで、セヴァは学校には慣れた？」

「そうですね……友人もできましたし、そう悪いところではなかつたですね」

「そうなんだ。セヴァは勘違いされやすいけど、凄くいい子で、特に心配してなかったけど、友達ができてよかったよ」

「ありがとうございます、リーさん」

笑みを浮かべて、満足げに頷くセヴァアドスを見て、リーリンは、自分が抱いていた不安が杞憂だったことに安心した。

レイフォンのような根暗でない分、初対面の印象は良いが、グレンダンにいた時の弾けようから、一般的な都市の人間には理解はされないのではないか、と思っていたが、どうやら取り越し苦労だったらしい。

よく考えると、レイフォンでも友人ができたのだから、同じようにセヴァアドスもできるだろうと、リーリンは一人で納得した。

故にリーリンは例の件を聞くことにした。

「ところでさ、レイフォンとのことなんだけど、さ」

「ああ、そのことでしたら大丈夫です。全て解決しました」

あつさりとは何でもないように答えるセヴァアドスに、一瞬リーリンは違和感を感じた。

しかし、先日この地に来たリーリンにとって、二人の喧嘩がそれ程重大なことになっていると思わず、グレンダン時代にも似たようなことがあったので特に気にしていなかった。

「そうなの？ でもそれならよかった。男の子同士だから、喧嘩とかあると思うけど、やり過ぎは駄目だよ」

「そうですね。今後はこのようなことが絶対に起こらないことを約束しますよ」  
口頭での簡単な注意を行ったリーリンに、セヴァドスが頭を下げてみると、

「セヴァちゃん!!」

聞きなれた声がセヴァドスと呼んでいた。

声の方を振り返ると、小走りで此方に手を振りながら近づく女性を見つけた。

そんな彼女を見てセヴァドスも嬉しそうに手を振り返す。

「おや、その声はミイファイさんではないですか？」

「そう、ミイファイさんです！ ってあれ、もしかして邪魔しちゃった？」

元氣そうにびよこびよこ跳ねるように現れたミイファイは、セヴァドスとハイタッチを  
行くと、リーリンの方に視線を向けた。

「うん？ ああ、そういえば初対面でしたね。リーさん、紹介します。彼女はミイ  
ファイさん、賑やかし担当の友人です」

「ミイファイ・ロツテンです！ 賑やかしなら任せてください！」

明らかにそのままの説明をするセヴァドスと、そのノリについていくミイファイに、  
リーリンは少しだけ圧倒されながらも頷き返す。

「そしてミイファイさん、紹介します。彼女は故郷からの友人でリーさんです。簡単に説明すると、メイさんと同じ思いを持つ者です」

「それ、どういう説明？ えっと、リーリン・マーフェスです。セヴァとはグレンダン時代からの友人です」

意味不明なセヴァドスの紹介を見て、リーリンは呆れながらも自己紹介をした。しかし、意味が解らなかつたのはリーリンだけだつたようで、ミイファイは眼を見開いて驚いた表情でリーリンを二度見する。

「メイつちと一緒？ つまり、それってまさか……」

「はい、修羅場襲来です」

二人でひゃーと声を上げる姿を見て、少しだけ疲れが溜まってきたリーリンは大きくため息をつく。

「あー、何となくミイファイさんのことがわかつたわ」

「あ、ミイファイでもいいですよ、えっと……」

「私もリーリンでいいよ」

こうして自己紹介を終えた二人だが、リーリンは先程の会話で聞き逃せなかつたことをセヴァドスに確認した。

「ところで、メイ、さん？ その子ってまさか……」

「はい、あとフェリさんって方もいますよ」

「そのひときのうあいました」

「既に修羅場ってる?!」

それだけで全てを理解した。

思わず怒りの波動に目覚め、片言になるリーリン対し、ミイファイは大声を上げるが、その顔はとて嬉しそうである。

というより、レイフォンは女友達ばかり作ってどういうつもりなのだろうか？ と先日  
の怒りが再熱する。

この分だと他にもいるかもしれないと、負の思考に入るリーリンの横で、セヴァドス  
が口を開く。

「ところでミイファイさん、もしかして何か私に用でもあるんですか？」

「おっと、忘れるところだったよ」

衝撃的な出会いがあったので忘れてた、と呟き、ミイファイは満面の笑みを浮かべてこ  
う言った。

「私とデートをしよう！」

「……………はい？」

その言葉に本人であるセヴァドスと隣で急展開な場面を目撃したリーリンが漏れた

言葉である。